THE CENTRAL REVIEW

中央公論

1-1914

八月號

308

第三百八號　第廿九年第九號

煩悶ある人は來れ

▲人は始終幸福とばかり一緒に歩む事は出來ぬ。不時の災難、事業の失敗、家事の煩累、學業の不成績、失戀、精神や身體の過勞等の事が兎角起つて來る。

▲但し幸にして人には通有の忘却性がある。親や子に別れた深い悲哀さへも時と共に次第に薄らいで行く。憤怒や侮辱等の劇しい感じでさへ、其劇しさを其儘に何時迄も感じては居らぬ。段々と弱められ、稀薄になり、遂には其感じは全然消えて終ふ。

▲之は人間に通有の誠に有難い忘却性である。若し人間に此通有性が無く、何時迄も何時迄も、其時の強い劇しい感じから離れられなかつたら、人は兎ても壽命を全うする事は出來ぬ。

▲此人間の忘却性の恵に浴し得ぬ人が即ち煩悶する人である。斯う言ふと稍輕々しく聞えるかも知れぬが、煩悶ある人は先づ熟考すべきである。『斯迄自分が煩はされ悶えさせるのは、其煩悶の原因たる事柄が強いのか、其事に臨む自分が弱いのでは無からうか、精神や身體が病的なのではあるまいか？』と。

▲斯う考へると能く分る。精神的に言へば心に少しも沈着が無い。物事に少しも興味がない。實に些細な事が氣に懸る。疑ふ餘地の無い事を疑ふ。書物等の一行一節を何度繰返して讀んでも意味が朦朧して纏まつた思考力が無い。

▲今度は之を肉體の方面から見ると、兎角頭痛勝で又頭が重い。食氣が無い。活氣が無い。體を動かすのも面倒臭い、便通が惡く、逆上、眩暈、耳鳴抔を感じ、不眠に陷り惡夢に襲はれる。

▲斯く精神と肉體の方面から見て今言つた徴候があるなら全く煩悶の結果腦又は神經に故障を起したものである。捨て置けば大事に立到る。而して煩悶は永遠に救はれる期がない。

▲煩悶ある人には健腦丸を用ゐるのが第一の救濟法である。何故といへば健腦丸は腦の故障を快くするのに最も有効である上に前言つた煩悶者、即ち神經の平衡を失つた人に用ひて、神經を鎭むるの効が著しいからである。

▲斯くて健腦丸を用ひて腦の故障を治し神經の平靜を得たなら、既に煩悶から斬脱ける根本の準備が出來たのである。其明快な頭腦と健全な神經とを以て事に方れば、好い解決を得るに庶幾い。

▲健腦丸は世に信用厚き大阪丹平商會藥房の製で、島村醫學博士は其有効を證明されてゐる。藥價は三日分廿錢、七日分四十五錢から五週間分二圓迄あつて全國到る處の信用ある藥店に販賣せり。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

再版

メレジユコーフスキー著　文學士森田草平　文學士安倍能成共譯

人及藝術家としてのトルストイ

人としての部――森田譯
藝術家としての部――安倍譯

總クロース製美本
肖像三葉入
全一冊
正價壹圓五十錢
小包內地十二錢

譯者森田草平先生序云『嘗て自分が文科大學に居た頃、此書を英譯で讀んだ。讀んで面白いと思つた。自分が西洋の小説を讀んで面白いと思つたのは、ドオデエのサッフオーである。論文では即ち此書である。其後サッフオーよりも面白い小説にはいくらも出會つた、が、メレジユコーフスキーの此書よりも面白い論文は一度も見たことがない。』又云『著者の人生に對する批判もさる事ながら、藝術鑑賞の上に於ける洞察力に至つては寧ろ怖しいものがある。若し未だ此書を讀まざる人にして此書を讀んだとすれば、必ずや其人の批評眼を一變したてあらう。』

中村不折　小鹿青雲共著　▼不折畫伯裝釘意匠

支那繪畫史

菊判上製美本
全一冊
價壹圓五拾錢
郵稅十二錢

●時事新報評は『吾人は本書を目して本邦唯一の支那繪畫史として深く推賞する者也』

再版

下山京子女史著

一葉草紙（ひとはさうし）

▲コロタイプ版及邦助畫伯
▲挿畫五葉入極美本

總クロース　全一冊　正價九十錢　稅十錢

四版

田岡嶺雲著

數奇傳

▼雪嶺博士外十五名氏序文
▼挿畫、未醒、芋錢、月村

總クロース美本全一冊　正價九十錢　郵稅十錢

版元　東京神田區雉子町　玄黃社
電話本局二〇九番
振替東京七九九五番
●全國書店賣捌

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

瑞典ストリンドベルヒ氏著

好評湧くが如し

結婚生活

讀め

文學士水上齋譯

「北歐の鬼才ストリンドベルヒの傑作『結婚生活』は日本の社會に提供せられたり!! 本書は結婚したる男女が裏面の生活に最痛烈最深刻なる如實的描寫を與へて瑞典の華飾的因襲に爆裂彈を投じたるもの、本書一度出て、如何に社會の耳目を震駭せしめたるかはその內容詳に之を語る既に結婚したる或は將に結婚せんとする我紳士淑女諸君は將に本書を繙いて此の作者が結婚について教ゆる所に聽かざるべからず

東京市神田區表猿樂町貳番地　一橋堂書店

少額資本 實業成功法

●本社が東京四大新聞に廣告し懸賞を以て少資本成功の考案を募集せし結果本書を出版せしに空前の大好評を博し忽ちにして五十餘版を出すに至れり、本書は五圓以上百圓以下の少資本にて容易に成功し得べき左の職業を撰定し其營業法に至るまで詳細に記述し、一讀直に實行し得べきを期したり。

▲人の氣づかぬ新職業十八種▲高尙にして利益ある營業十三種

▲外見惡しくも大利ある職業九種▲地方田舍の有望事業二十種

本書に記せる職業にて成功せし者甚だ多く、讀者よりの禮狀亦續續として來る眞に一字千金の良書なり何參考として●何故に東京に出でゝ失敗するか●驚くべき計算表●資本金を得る法●借金償却法●不景氣利用法●四種の商略●最有望なる實業學校●日本財產家一覽表等を揭ぐ實業界に大成功を得んとする者は速に本書を讀め、一册送料共金三十四錢、振替送金一錢增、切手代用三十八錢送れ

東京神田錦町三ノ二　振替東京一六一八番　學友社

金もうけ

不景氣だの、生活難だの、就職難などゝいふ人は自分の職業が惡いからである。如何に世の中が不景氣であらうが、生活難であらうが自分の職業さへ非常に利益のある業であれば、必ず一家の富を作る事が出來る。其れから又副業や內職も本業以外に豫算以上の收入を得、之を蓄積せば實に莫大の金高となるべし。若し其良副業を知らずして困しむ人は實地專門家の執筆せられたる本會發行●●●●

致富講義錄

を見られよ、若し熱心に此講義錄を讀み且つ之を實行せば最早生活難に苦しむ事なく優に數萬の資產を作る事を得べし、講義錄は全八册にて千〇廿四頁に達し少資本にて大成功を得べき良職業數十種、及び高尙にして利益多き內職副業數十種を懇切に敎授し、且會員の爲めに質問調査、就職紹介、資金貸與等の規定を設く、本會は山師的、詐僞的のものにあらず、郵券二錢封入申越あれば會則及說明書進呈す殊に至急入會者には特に有利なる大特典を提供す、至急申込あれ

東京神田表神保町　電話本局四五六七　帝國富强會

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

八月號の偉容

太陽

■國防問題の根本的解決……浮田博士

■政界時評……淺田江村

■支那漫遊所觀……澁澤男爵

■遊說今昔感……尾崎行雄　島田三郎

■日米交渉顛末を讀む
▽添田博士、目賀田男、江原素六、其他諸家

■新大學令案及新學位令案評論
▽織田博士、鎌田榮吉、成瀨仁藏、其他諸家

■似而非社會主義政策……堀江博士

◎各鎮守及長官……治溟漁史

◎伯爵界の小壯政治家……西湖漁郎

◎黨首月旦 加藤高明男……前田蓮山

◎裁判官の獨立を認めし憲法上の理由……清水博士

◎藝苑時論……石井柏亭

■書齋の窓より　內田魯庵

■獨語と對話　上田博士

■山と川の印象　烏水　花袋

■老僧の戀（長篇小說）　長田幹彥

◎貴族院の態度を論ず……副島博士

◎墺匈國の人種問題……立博士

◎東北振興策と甜菜糖業

◎最近の墨西哥形勢……米田實

◎墨國の白狼ザパタ……橫山博士

正價卅錢　郵稅三錢
▷前金郵稅共 十六册四圓六十八錢

東京市本町
博文館

(廣付の三)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新福音書

松本雲舟
原正男
先生共譯

最新刊
好評嘖々

ルソーの眞髓

近代主義の親ルソーの想、燃えては革命の火柱となり凝つては現代の凱旋門となる。彼は哲學文學宗教政治等一切の現代思想を包容し、我等は彼の氣息の中に呼吸せり。彼は實に彼自身の所謂「倫見と權威と必然と模範と總ての社會的傳襲」より放たれたる最初の近代人なり**新思想の巨人**なり豫言者なり。而してその「懺悔錄」「エミール」「民約論」等部分的の名著の飜譯ありと雖も、未だ彼の全體を覗ふべき大作の紹介を見ず、即ちルソーに心醉せる譯者等大に之を遺憾としその眞髓を譯了せり乞ふ**深遠熱烈**なる彼の精神に接せよ

定價金壹圓
小包送料八錢

四六判箱入頗美本

新青年道

早稻田大學教授
永井柳太郎先生著

殘飯

青年諸君に頒つ

少壯隈伯の聲に聞け。今や時運一轉大正の新政は世界的偉人大隈首相によりて始められんとす。而して小隈伯を以て稱せらるゝ著者亦野に在りて新生活の爲め諤々の論愈盛なり。著者夙に歐米に社會政策の學を修め、歸來早大の教室とその主宰する雜誌「新日本」とに氣を吐く數年今や**新時代の修養**に關する蘊蓄を傾けて本書を公にせり、宗教、政治、社會、婦人其他百般に亘り刻下の問題を捉へて嚴正なる解說と切なる批判とを下し**端正快活**を極むる新青年道を鼓吹せるもの即ち本書也

定價金壹圓
小包送料八錢

發行所 東京牛込 振替東京一九四番 株式會社 南北社

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第廿九年八月號目次

▼公論

▼說苑



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



EUGÈNE LAERMANS



The Drunkard

中央公論



八月號
第二十九年第九號
第三百八號

亞細亞民族の覺悟を促がす

(一)

歐洲の白皙人種が亞細亞民族を恐怖するや蓋し一朝一夕の故にあらず、其初めて匈奴(ハン族)の侵入に遭ひ歐洲中原を蹂躪せられ、絶大の屈辱を受け永久拔くべからざる恐怖に打たれしは實に西暦第五世紀の中央に在り、是より先き匈奴は夙に支那帝國の强敵たり、秦の始皇帝が將軍蒙恬等をして萬里の長城を築かしめしも實に匈奴の邊寇を防がんとするに在りき、降りて漢代に入れは漢の高祖は其即位七年(西暦前一九八年)匈奴の首長冐頓單于を防がんとして北邊に出陣し却て彼が精兵四十萬人に圍まれ、僅かに寵姬閼氏に贈賄して死地を免れしは有名なる話なり、其後武帝に至り頻りに名將を擧用し、大將軍

衛青、驃騎將軍霍去病等大に匈奴を攻めて功ありしも、將軍廣利大軍を率ゐて深く漢地に入り敗れて匈奴に降りし以來、兵力を以て匈奴の强勢を破滅するの困難益々明白となり、是より後支那歴代の政策は懐柔を主とし、冒頓單于の下に統一されたる匈奴の勢力が其凡庸子孫の代に入りて漸く傾かんとするや或は西方の月氏を引き又は東方の鮮卑と結び、更に匈奴直隷の或る部族を誘ふては地を北邊に給して屯田防備の任に當らしめたり、此間婚姻政略も亦頗る功を奏し、帝室の公主若しくは公主と稱するものを降嫁して是等蠻族會長の妃たらしめ、同時に絹絮米糵を贈りて蠻民を誘ふて文明化するの法を採れり、而して照帝元始三年(紀元前八十七年)には匈奴爭位の事ありて同族間に一大分裂を生じ、其多くは漢の正朔を奉じ軟化し了せり、此間に於て獨り慓悍、勇武、同族の意氣地なきを慷慨するの一部あり、奮然去りて活路を西方に求めカスピヤン海の沿岸に到りて部落を定めて牧畜に從事せり、其南方にあるは黑匈奴と云ひ其北方にあるを白匈奴と云へり、是れ匈奴民族が歐洲に接近するの始めなり、此事果して何時の頃にありしやは記錄の徵すべきなきを以て知るべからざるも、彼等は絕へず支那北方よりする同族の來投するあり且つ地味膏腴なる無涯の平原に棲息したるが爲め紀元第五世紀に至れは彼等は既てに一大民族となり、其首長アチルラの統率の下に今の露國は素より獨逸の一半を征服し、其支配の及ぶ所北は波羅的海より南はダニウブ河に至り、匈奴の馬蹄の進む所草木も靡かざるなく、東羅馬帝と巴爾幹半島に戰ひ屈辱的平和條約を訂せしめ、更に西轉して騎兵六十萬を率ひ萊因河を渡り、佛國の中央市府たるオルリアーン城を包圍せしが玆に初めて有力の抵抗に遭ひシャーロンの大會戰に敗れて止むなく西方に

退却せしも、幾許くもなく北伊太利に現はれ飽まで其市都を荒らし暴威を逞ふしたる後、アッチラはダニウブ河北の都に於て急病を以て死し(紀元四五三年)、而して首長を失へる匈奴の統制は乍ちにして消滅せり、茲に於て歐洲の各民族も始めて惡夢より醒めたるの感あり、抑もアッチラ及び其同族は容貌著るしく周圍の白人種と異なり、双肩廣くして隆起し鼻は低くして平たく、爛々たる眼は小にして黑く、且つ顏面に髭を缺きしを以て、頗る醜惡なりとして嫌はれ、殊に其動作聲音亦た一として奇々怪々ならざるはなく、恐怖に滿てる獨逸民族等は之を視ること宛も天魔の襲來を視るが如く、其侵略に遭ふや神の刑罰に遭ふものと觀念せり、是れ實に千三百年以前の事に係る、匈奴亦た歐洲の中原に於て異彩を放てりと謂ふべし。

降りて紀元七百三十二年には佛國ツール及ポイチールの中間にてアブダル、ラーマンの帥ゆるサラセン回教軍は佛國の執權チャールス、マルテルの爲めに敗られ、歐洲諸國は爲めに回教徒の侵略を免れしと雖も、北部阿弗利加は疾に彼等の有に歸し西班牙亦た其勢圏に入り、既でに佛國の中央にまで侵來せしことなれば、戰勝の歡喜の大なりしか如く戰前の狼狽亦た最も甚だしきものありしは想像するに足れり。

更に降りて十三世紀に入れば蒙古帝成吉思汗の子孫は中央亞細亞より進んて露西亞を略しポーランド、匈牙利國を殉へ、クラカウを燒けり、而して一四五三年には君須丹丁堡遂に土耳古人の有に歸し、亞細亞に對する歐洲第一の關門は爲めに失はれたり、是より百有餘年、土耳古人は東歐及び地中海に跋

扈跳梁し、匈牙利は其附庸たり、歐洲第一の帝都たるヴィエナは回回異教徒の包圍する處となれり、當時歐洲宗教革命の結果、内亂頻りに起り勢力を統合して大敵に當ること能はず、東歐の危機は幾回かヴィエナ朝廷をして震動せしめたりき。

（二）

斯くて歐亞民族の衝突は初め千有餘年間に在りては亞細亞人毎に攻侵の態度を執り痛く歐洲人を惱ませしが、歐洲歷史の近代期に入ると共に形勢一變し、爾來五百年間歐洲の白皙人種は世界航路の發見に次ぐに學問技藝の進歩を以てし、此の新勢力を利用して、南北亞米利加の殖民を行ひ、印度を征服し、阿弗利加を分割し、濠洲及び南洋を勢圏内に收めたり、此に於て歐亞各民族は全く攻守其位地を顚倒して、近年我日本が遂に三百年鎖國の夢より醒め、泰西の學術を學び、國家を改造するや、眼を放つて大和民族發展の餘地を求むれば到る處、入國禁制の高札を見ざるはなく、宛も六十年前歐米人の我邦に來りて切支丹邪宗門の禁制に驚きしが如く、今や北米に、濠洲に又は南阿に亞細亞人入國禁制の嚴重なるに喫驚せざる能はず。

抑々歐洲人は基督教徒たるを以て誇り、民族平等主義を標榜するものなり、彼等は復た博愛の大訓を奉し德を以て怨に報ひんとするものなり、故に中古時代一千年間痛く亞細亞民族の侵迫に苦しみたればとて今日に舊讎を報ひんと欲するる心あるべからず、又た容貌の醜美を論じ色相の黑白を說いて社交上の差別を爲さゞるべき筈なれども、實際は大に然らず、基督教傳道と泰西學術の普及に努力する一方面

にては稍々基督教國の面目を發揮し得たりと云ふべきも、貿易上に阿片を强賣し、狡猾なる策を弄し又は兵力を用ゐて人の國を奪ひし跡に就て見れば感服すべからざるもの頗る多し、蓋し吾人が之を云ふは强ゐて歐人を咎めんとして云ふに非ず、歐米人も亦た亞細亞人と同じく人なり、其文化の程度頗る高しと雖も、博愛仁義の理想に照らさば其及ばざること甚だ遠き亦た止むを得ざるなり、双方の民族互に其未だ理想に及ばざるを指摘して咎立てするも亦詮なきことならずや、故に吾人は歐米人の異人種虐對に關し、殊に咎め立てを爲さんとするに非ざるも實際の事實は事實として之を明かにせざるべからず、更に語を換へて之を云へば歐洲人の亞細亞人に對するや初めより感心すべき點と感心すべからざる點とあり、而して近來に至り一般に漸く改善の傾向あるを認むべく、例せば英國か支那に對し阿片貿易を禁ずべき決意を示せるが如き、又は印度人民に對する同國政府の態度漸く寛大ならんとするの傾ある、聊か人意を强ふするに足れりと雖も、歐米人は尙ほ異人種を一切平等視するを肯せざるなり、是れ近來の大平洋沿岸到る處相期するが如く亞細亞人排斥を企てつゝあるを以て知るべきなり。

蓋し歐米人が從來印度支那日本に於て宗敎を傳へ、慈善事業を營み、又は學術の普及に努力したるも是れ彼等が亞細亞民族が竟に彼等の指導に由り彼等と同等もしくは同等以上の才能を發揮し得べしと豫期したるが故にありとす、殊に學術を應用し、軍事に工業に歐洲諸國と優に競爭し得べしとは豫想せざりしなり、而して是れ必ずしも不當の豫想に非ず、歐亞人民の智識には三百年間科學進步の距離あり、亞細亞民族が先進國か三百年の研究により達せし程度の智識に迄達する時には歐米は既に更に大なる進

歩を爲し居るべきことを想像すべく、假令一歩を讓り我々亞細亞人は日に百歩を進め彼れ歐米人は日に五十歩を進め、何の日にか多年進歩の距離に打勝つことあるべしとするも、是れ決して五十年や百年の後に見得べきの事實には非ずと思惟せしものゝ如し、是れ日淸日露の兩戰役の結果を見て歐米の人心が一時愕然たらざるを得ざりし所以なり、日淸役の初に當り平壤を陷落するや、倫敦スペクテーターは其紙上論じて曰く、

英國の公衆は未だ今次韓國に於ける日本の戰勝が亞細亞に對する我儕の思想及政策を根本より覆へしたることを自覺せざるなるなり、從來の歐洲人の亞細亞に對する根本思想は鼠色の人種、黃色の人種は進歩を停止せるものと云ふにありて、彼等は一種不可思議の精神的麻痺症に罹り、今後幾百年尙ほ今日の狀態を持續すべしと思惟されたり、從つて今日も尙ほ進歩向上中に在る歐洲人は其思ひ通り勝手次第に亞細亞人を取扱ひ、彼等の通商を規定し、彼等が歐洲の公法に違反するを懲罰し、且若しも大なる必要に迫らるゝか、又は激しき發展慾に誘惑せらるゝことあらんには之を征服し其國を奪ふを得べしと思惟せられたり、即ち英國の印度に於ける、露國の北方亞細亞に於ける、佛國の印度支那地方に於けるが如き孰れも此の思想を實現するものに非ざるはなし、然れば今より僅かに數年を經過し**一二回の遠征軍の派遣あり、二三新條約の締結あらば亞細亞全體は直に歐洲の足下に平伏すべしと豫**期せられたりき、斯の如きは宛も天帝の攝理に由り確定せる事實として請取られ、或る思慮ある人々の間に於てさへ英露協商して亞細亞洲を兩分すべしと提議したるものあるに至れり、然れども今や突

如として從來の思想は根本に打破せられ、而して此思想に基づきて立てられたる有らゆる政策の危險なるか左もなくば無價値なることと明白となれり。

右に引用する處は今より二十年以前の舊聞に屬するも歐洲の對亞態度の一轉機を示すが故に譯載して讀者の一考を煩はすものなり、是より八年にして日英同盟の締結あり更に二年にして日露開戰となり、武力の證明により白人種ならざる我日本も茲に初めて世界一流國の間に伍するを得るに至れり、即ち知る歐洲人は中古千年間には亞細亞人を畏慴し、最近五百年間は漸く之を輕侮し、更に近來に至り頓に之を恐怖せんとするに至れるか如くなるも、是より再び輕侮するに至るべきか、將た更に大に恐怖するに至るべきか、其孰れの傾向に確定すべき乎は一に係りて我大和民族の決心奈何に在り。

（三）

世界の一等國と爲り文明國の白人と同等の待遇を受くべく豫期したる我々日本人は最も荒らくしく空想の夢を破られたり、而して此夢を破りし國は曾て矛を交へたる國にもあらず、黃禍の圖を畫きて歐洲を警戒せし皇帝の支配せらるゝ國にもあらず、却て國初以來人道を標榜し我邦に對しては開國當時より最も深厚の友誼ありと思惟せられたる北米合衆國なりしかば我邦人は宛も親友に離反されしの感ありて轉々失望の念を深ふせざるを得ざるなり、曩に桑港學童問題起るや時の大統領ルーズヴエルト氏は正義を持して國論を鞭韃し幸にして平穩の解決を見るを得たるも、今次の加州土地問題起るや此日本人排斥案の通過に努めたるものは多く加州政界に多數を占むる進步派に屬してルーズヴエルト氏の部下たり

知事ジョンソン氏の如き曾てル氏の下に副大統領候補に推選されし人、從つてルーズヴェルト氏の正議呼はりも前年ほどに囂清からず、現大統領ウィルソン氏國務卿ブライアン氏も、土地案の通過前に在りては其握潰しの爲めに頗る努むる處ありしも、最近に發表されし彼我往復の文書に就て見れば我主張に對し彼が答辯する處、三百的法律論多く毫も大本に貫徹せず、畢竟するに前年支那人排斥法案を通過したる米國人民は更に日本人の排斥を企てざるを得ざるべく、支那人は西洋文明に同化せず賃銀低卑にして白人勞働者の妨害者たりと云ふに在るも、我日本人に對しては其異人種たるが上に能く文明の利器を使用し得るが故に白人發展の邪魔物たりと云ふにあり、我邦勞働者は支那人の如く舊慣を墨守せず比較的に米國の習俗に移り易し、且地主として農業に從事するものゝ如き多くは新知識の徒にして、米國人が匙を投げたる不毛の地も彼等の經營の下に乍ち有利の耕地と化すること稀ならず、此れ米人の嫉視を惹起する所にして、而して在外邦人が偶々愛國心に富み容易に本國を忘れ能はざるは以て一派の有識者をして米國の前途に對し杞憂を懷かしむる所以なる乎、斯くて邦人は米國に於て排斥せられ、一時は日米新協約に由り姑息の解決を期したるも米國の輿論は容易に我邦の面目を維持し得べきが如きの解決を許さず、この協約案さへ加藤外相に由り撤回されしを以て日米懸案の解決さるべきは果して何日ぞ、殆んど無期延期の狀態に在りと云ふを至當となさん、此際米國宗教家中には人道の脚地より解決法を講ずるあり、又一部識者中にも世論の指導に努むるものあるが如きも、是れ僅かに荒れ野に叫べる豫言者の哀れなる聲のみ、北米の天地は滔々として排日論の漲ぎるに委せられんとするは眞に世界平和の爲めに

慨歎せざるを得ず、而して排日の氣勢は加奈多に於ても亦甚だ盛にして、濠洲及ニウジーランド島の如き日に月に排日論の高調するを見る、同時に近來に至り一種の興味ある問題は同じく大英帝國の一部に屬する南阿、加奈多に於ける印度人排斥より惹起せる問題にして、大英帝皇帝の忠良の臣民が帝國の一部より他に移住するを禁ぜらるべき理由なしと唱ふるに對し、加奈多の高等法院は大英帝國に臣籍を有すればとて必ずしも帝國一般に居住の自由を有せずと判決せることは必ずや一大驚愕を以て印度三億萬人に迎へらるべく、而して南阿に於て印度人の虐待され、濠洲に於て排斥せらるゝ亦た是れ深き不平怨嗟の種子たらずとせず、支那人は目下内治問題に齷齪し、其移民の排斥より蒙る侮辱と不利を感ずること切ならずと雖も、一たび之を自覺するに至らば其憤慨の激烈なる決して日印諸國民に讓らざるべきは察するに餘あり、試みに思へ米國、加奈多、濠洲、南阿は何の理由に基き亞細亞人を排斥せんとするや果して亞細亞勞働者の必要なしと云ふに在る乎、曰く大に然らず必要は大に有り、廣漠の地域は有餘るも必要の勞働者なきが爲め遺利の拾はざるもの多きは該國人等の常に歎息する處なり、然らば何故に排斥する乎、其異人種なると其有爲にして白人と競爭して遜色なきとの理由に外ならず、然れども斯の如きを以て理由とするが如きは僻見私曲の最も甚だしきものと謂はざるべからず、抑も歐米人の初めて東洋に來り門戶開放を迫まるや、彼等は說て曰く有無相通じ東西相交はるは同く地球上に國を立つるもの相互の義務なり、自尊他卑、鎖國して歐米の交通を排拒するは人道の敵なりと云へり、此人道の敵に向つては兵力を以て開港を迫まるも可なりとして盛に威迫せり、然るに今や彼等は一種の鎖國を行はんと

す、即ち先以て有色人種の既に占守せる地域を南阿に、濠洲に、北米に奪略し、之を將來白人移殖の爲めに保留すと唱へて黃色人鼠色人の入國を拒絶せんとす、嗚呼何等の矛盾ぞや、何等の暴狀ぞや、更に之を計數に就て論ぜんに、日本、印度、支那は人口の多きに苦しむもの、即ち一哩四方に於ける人口の平均口數は日本は三三六、支那は二六六、印度は一八八、以て如何に衆多なるを知るべし、之に反し加奈多、合衆國、濠洲、南阿は如何、加奈多は一・六三、合衆國は三〇・九、濠洲は一・五、南阿は一七・八にして、合衆國と南阿を除きて他は或る開けたる少部分以外に在りては殆んど無人の境域を餘すと云ふも不當ならず、有無相通じ東西相交るを以て天地の大道となさば何が故に亞細亞人を迎へて之に發展の自由を與へざる、之を與へざるは一大僻見一大私曲にあらずや、或は云はん白晳人種は地球上の選民なり、上帝が之を各民族中より選拔して文明向上の先達たらしむるもの、故に其自衞を策するは自ら天職を果すの基礎たり、白南阿、白濠洲、白北米の理由亦た玆にありと、詩人ルディヤート、キプリンク氏の如き實に此の理想の代表者にして、其『白人の負擔』を歌へるは即ち此主張を高調せるなり、吾人を以て之を觀る、白人が今日世界最高の文明に達せるは概して之を許すべし、然れども是れ現實を見て云ふのみ、前途永久必す白人が常に文明の先達たるべしとは推理の許さゞる處なり、寧ろ往古に在りて文明の先鞭を著けたる東洋民族亦た大に今後の文明の發展に貢すべきことを思はずんばあらず、往昔猶太人は自ら神の選民を以て居り傲慢強項遂に民族の敗亡を招けり、驕るもの毎に久しからず、白晳人種たるもの亦少しく自反せざるべからず。

(四)

然りと雖も翻つて之を思ふ、我日本人其他印度人支那人の各方面に排斥せらるゝは異人種として白人に嫌はるゝが故のみにあらず、寧ろ其競爭力の旺盛なるを恐怖せらるゝに因ること多きが如きは却て聊か人意を強ふするに足れり、此事殊に我邦人に就て然るを見る、即ち大和民族が既に軍事に於て毫も歐洲民族に劣らざる才能を發揮せるが如く、是より實業に於ても、文學美術其他精神上の事に於ても歐洲民族に劣らざる元氣を以て大に進歩向上せんことは單に吾人の希望なる耳ならず亦た實に吾人の一大決斷たらずんばあらず、近來種々なる社會事情の影響として一般に消極的感念に襲はるゝに至れるは皮相の觀を以てすれば稍々心細き感なきに非ざれども、吾人は寧ろ之を以て我國民が一大自覺に達すべき止むを得ざる徑路なりと見做すを至當なりとなす、我大和民族は決して一場の悲觀を以て閉息するが如き小膽卑怯の民族に非ず、明治維新前後の改革に際し西洋の富强文明に對し彼我相距ること彼が如く遠かりしと雖も、一躍して追隨し遂に之を凌駕せんことを期圖し、而して大體に於て大に成功し全世界を驚倒せしめたるが如く、是より後所謂大正維新の鴻業を成さんとするに於て更に前年と同一の奮發を爲すに至らんことは吾人の豫期する處、今日の悲觀は即ち此奮發、この一大自覺に達すべき當然の順序を踏めるものに非ざるなきを得んや、而して支那印度の如き亦た決して今日の悲慘なる狀態を以て終るべきものに非ず、其過去の偉大なる成功は前途の光榮ある再生復活を保證すと謂ふべきに非ずや、但し支印兩國とも世界第一の舊國にして其國民の心は由來種々雜多の情實に纏綿せられて多年其進歩を中止せるの

み、今や歐米の壓迫は各種の情弊を打破し内憂外患は大に先覺者の自省を促がしつゝあり、歐洲人が巨大の資本を投じて利益を壟斷せんとするが如き、誰か知らん偶々東洋開發の端緒となり、遂に東洋諸國の經濟的自立を馴致するに至らんことを、日本帝國の勃興は決して空しからず、必ずや支那の勃興となり印度の覺醒となり、終に必ず八億の亞細亞民族起つて其正當の權利を宇内に向つて主張するの時あるべし、吾人は此時の必ず來るべきを信じ、其比較的に早く來るべきを信じて疑はざるなり。

吾人は斯の如き信念と期待を以て現在の局面に對するものなり、故に或る意味より云へば白人壓迫の尙ほ一層熾ならんことを歡迎せんと欲す、如何となれば亞細亞民族の自覺は其壓迫の爲め益々促進せらるべければなり、從つて日米問題の如き大事の前に於ける一小事のみ、今日如何に之を爭ひたればとて理屈感情を以て到底解決し得べきものに非ず、排日の根據とする所既に白人の僻見と私曲に在るが故に實力を以て之を排掃せざる以上理論感情の力を以て奈何ともすべからざればなり、但し歐米民族の立脚地より遠見大觀すれば今日の壓迫又は排斥を遂行せんことは決して彼等の眞の利益にあらず、何となれば是れ偶々東洋の三大民族を驅りて益々利害の一致を覺知せしめ遂に相抱合して歐米に抵抗するの決心を爲さしむべければなり、然れども遠見大觀は衆愚の解せざる所なり、歐米識者少なからずと雖も遂に群衆の要求に強ゐられ、知らず識らず民族衝突の慘劇を演ずるに至るの途を進むより外あらざるべきか然りと雖も前途に横はりたる歐亞各民族の大衝突は必ずしも慘憺たる兵火の戰爭を意味せず、此れ或は遂に止むを得ざるに至らんも知るべからずと雖も、之に至らずして解決の途に達せんも亦た知るべから

ず、例せば印度三億萬人の極端なる不平怨嗟は英國人をして痛く統治の困難を感ぜしめ、殖民地の英人も亦た遂に形勢の急を察し其固陋の見を撤回するに至らんも知るべからず、是れ亦た一種實力の威迫なり、孰れにして實力の威迫を借るに至らざれば白人の僻見私曲は到底一掃すべからず、我れ衝突を好むに非ざるも彼れ我等亞細亞民族を興起せしむ、我等は玆に亞細亞民族の運命を覺悟し、世界歷史上大轉換の機會に接するを思ひ、今より後ち臥薪嘗膽して以て大に實力の涵養蓄積に努めずんばあらず。

大隈內閣の難關

大隈伯が七十七の頹齡を以て國政の衝に當り東奔西馳寢食を忘るゝの概あるは吾人の感謝して措かざる所、然れども大隈內閣の前途は愈々多望なりや其基礎は益々堅固なりやと云はゞ、吾人は之に對して然りと答ふる能はざるを遺憾とす、此の炎暑燒くが如く例年ならば多くは沈滯がちなる政界に向つて每に盛に人氣取を策し世間を賑はすが如きは如何にも大隈伯の特長にして、亦是れ多しとすべきに似たれども、元來政治は一種の興行に非ずして國政の料理なり、大隈首相は果して現內閣を磐石の上に置くべき十分の確信ありや、又は財政、國防、外交に對し多年の懸案を解決して上下の信賴に酬ゆべき經綸ありや否や、是れ獨り老首相が其晩節を全ふし得るや否の問題なる耳ならず、實に國家の一大休戚に係れり、吾人は寧ろ現內閣が頻りに人氣取りの策を講じて能事了れりと爲すが如きを見て之を戒め、又た

世間が猥りに耳目の新たなるを喜びて拍手喝采して或は憂國の誠意を缺くの嫌あるを見て、大に之を警醒する所あらんと欲す。

最近の滿鐵正副總裁交迭の如き仙石總裁の處分頗る妥當を缺けるは天下萬人の認むる處なり、若しも後任者の人選を誤るが如きことありたらんには累を內閣に及ぼすべきは識者の憂へたる處なりしも、幸に天下の視て以て異議なしとする中村前製鐵所總裁を羅し來りて野村總裁に代らしめしを以て功罪相償ふを得たるの觀あり、然れども吾人を以て之を觀れば是れ寧ろ一種の怪我の高名に過ぎずして、若しも仙石氏にして其處置を誤り天下非議の焦點たることなかりせば之を償はんと欲して中村氏を羅し來らず寧ろ同志會員或は同志會系人物を以て新總裁たらしめたらんこと察するに餘あり、兎に角吾人は滿鐵が良總裁を得たるを祝す、然れども之が爲めに仙石氏の責任を消殺せりと云ふを得ず、伊藤副總裁の人物に對し世人の非難あるは然ることなれど、法規を無視し常識を無視し、頗る苦しき理屈を製造して正副總裁を解職したる一事は正に行政權の一大濫用にして、必ずや議會の問題たらずして止まざるべし。

現內閣の閣僚の多數が在野時に既に唱へて早くも閣議に因て決定せしは文官任用令改正なり、山本內閣の該令を改正して次官、警視總監、法制局長官等を特別任用の範圍に入れしは政務と行政を混同するの弊ありとなし、總て之を舊令の如くに改め、別に參政官、參與官を置き政府と議會との交渉に任せしめんとするは新改正案の骨子なるが如し、世間傳ふる所に由れば樞密院の議も大略內定し不日に確定すべく、改正令の發表せらるゝ遠きに非ざるべし、則ち新令に從ひ參政官參與官として黨界の人物續々任命

せられ、亦是れ多少耳目一新の種子となるべし、然れども政務官と事務官と双々大臣の下に立つに當り果して其執務の區別は混同を免るべきか、例せば從來の政府委員なるものは今尙ほ依然として議會に向ひ政府を代表すべきか、若しも政府委員ありて從來の如く辯明に努むることあるに於て參政官參與官は拱手傍觀に了らざるを得べきか、若し政府委員を斷然廢すとせんか、新參の政務官なるもの果して能く從來の政府委員に代り辯明の任を全ふするを得べき乎、苟も我邦現在の議會の事情に通ずるものは、此等の點に就き大に疑なきを得ざるべし、若しも政務行政の關係圓滿なるを得、又對議交涉の方法完全なるを得ば隈閣の任用令改正も自ら意義徹底すべきも、左もなくて萬一にも其實行難澁ならんには、隈閣は山本內閣の改正案を未だ一年ならずして改正し以て法規を翻弄したるの責任を免るべからず。又た新官職を利用して黨界の人心を釣らんとするの目的も果して希望の如く達し得らるべきや否、一部の得意者を得る代りに他の幾多の失意者を生ずべく、餘りに策の多きは却て無策の完全なるに如かずと知らずや。

疑もなく大隈內閣の最大難關は廢稅問題に在らん、通行稅、織物稅の廢止は當分見合はすとするも、現閣の黨與として唯一の賴みとする同志會は第二臨時議會後に宣言して營業稅廢止と地租五厘減を主張し、且現閣の必ず之を斷行すべきを裏書して自ら退引ならぬ脚地を作れり、若槻藏相の如き調査中と云ふを盾に未だ廢稅に關し具體的の言質を與へざるも、時に同志會員を安心せしむべきが如きの言語を弄せしこと無きに非ず、然るに最近に至り大隈首相は大阪に於て演說して、現內閣は同志會內閣にあらず

大隈内閣なり、大隈は曾て廢税に付て言質を與へしことなしと云ひ、廢税の實行すべからざるを暗示せり、反對黨の新聞のみならず朝日新聞の如きも伯の演說を報道して營業税廢止は斷じて行はぬと云へりと云ひしも、後に政府筋より之を打消し調査中なるが故に何とも斷言し得ぬと云し迄に過ぎずと辯明するを以て暫く所謂正誤を眞なりとするも、首相が廢税を不可能とするの意中は想像するに餘あり、尾崎法相の如きは若しも『廢税の實行不可能に終らんか現内閣としては致命傷たるべきも予は廢減税實は行し得らるべしと信ず』と言明するも、廢税の實行亦た現内閣に取りて致命傷たるなきを得る乎、僅かに世間の一方より外觀察するの明なき尾崎氏は現内閣の背後に長閥軍人政事家の据へ居ることを知らざるものの如し、彼等は大正四年度に二個師團増加案を提議し更に機會を伺ふて四個師團の増加を企圖せり防務會議の決定は未だ知るべからざるも、少なくとも二師團増加は疑ふの餘地あらず、故に廢税は陸海軍に取り禁物なり、山縣公一派を後援とし其命に背く可らざるの義理に絡まれたる大隈若槻加藤大浦諸氏が初めより廢税案に對し煮へ切らざる態度に出でしは財政上の困難あるに由るの外、長閥の意向に氣兼ねしたる結果に非ざるなきか、故に廢税せんか同志會其他の黨與を喜ばすべきも長閥は怒りて裏面に内閣の顚覆を謀らん、廢税せざらんか同志會中正會は背かざるを得ず、大隈首相亦た進退茲に谷まらずや、然れども上院に否決さるるを見越して無理遣りに廢税案を提出せんも亦知るべからず、何れより見るも廢税は現内閣の大難關なり、但し老伯の周圍には權謀の士少しとせず、吾人は刮目彼等が如何にして此大關門を切拔けんとするかを見んと欲す。(七月十九日稿)

公論

議會見聞の一二

竹越與三郎

此一年有餘の間、政海の波浪頗る高く、尋常の船てありせば覆沒を免かれぬ勢てあつたが、政友會が之を免れたといふことは、其艦體が頗る大なるが爲に過ぎなかつたのてある、而して今猶其風波高くして容易に收らぬ、而して大隈伯は此間に新に起つて政權を把持し、夫と同時に一方には新聞雜誌及び民間の政客にして政友會に屬せざる者の多くは之を扶けて以て政友會を攻めるといふ勢てある、大隈伯は所謂天下の人望なるものが頗る厚い、此聲望を負ひ、此權力を以て議會に臨む、而して其人たる頗る權變術數に富んだ人物てあるから、必ずや相當の事をするてあらう、といふことは萬衆の皆期待する所てあつた、故に政友會も議院に於て彼等と始めて相見たる時は、頗る注意を要するものと思つた、然るに議會に於て彼と相見てみれば這は案外なるかな、我等が天下の盛名を負ふと思つて居つた大隈は虛名を負ふものに過ぎなかつたといふことを發見し、機略縱橫てあらうと思つた大隈は氣力萎微、老耄に近いものてあるといふことを發見した、即ち本年の臨時議會に於ては二つの結果があつた。一は立法的結果て、海軍追加豫算六百萬圓を可決し三隻の大艦を造ることを續行せしむるといふことを認め、他の結果は政治的てあつて、それは政友會が危惧の念を去

つて昂々然として自信力を生じたといふ一事である、

僞禪問答の滑稽

我々が少年の頃より落語家より聞きたる話に蒟蒻屋六兵衛と云ふのがある。是は蒟蒻屋の六兵衛なる者が亡命して或禪寺の主人となつて寺を守つて居ると。一人の雲水坊主が來て問答を始めた。雲水は此禪寺に入るや否や、兩手の指を合せて圓形を造つて、心の由來を問ふの意を示した。然るに蒟蒻屋六兵衛の變身たる庵主は此雲水の描きたる圓形を以て己れの前身たる蒟蒻屋の蒟蒻の小なるを嘲けるの意味であると解して、兩手を以て大圓形を描いた、而して我蒟蒻は斯の如く大きかりしと答ふるの意を寓した。雲水は此答を以て蒟蒻の大小に關することとは思はず、禪機頗る鋭き僧であると驚いて引返したといふ噺がある。議會に於て多くの議員が質問したが大隈伯の答は頗る外れて居つて山と言へば川と答へずして弓矢と返答するやうで殆ど問答となつて居らぬ、始めは皆大隈伯の聲名に衒惑して居つたものであるから、其内には何等かの意味があるのであらう、何等かの抱負があるのであらうと思つて居つたが、漸々煎じ詰めて行くと老人頗る疲勞し頗る時代に遲れ頗る老耄し、山と言へば川と答ふる氣力がないといふことに歸着するといふことを發見した。之より議場は唯氣樂にして愉快氣なる笑聲を以て之を迎へ之を送つたのである、或者は大隈伯が口を開く時は浪花節が始まると稱へ、或者は禪宗の喝が始まつたと唱へて何人も眞面目に聽く者はないといふ有樣であつた、而して彼は動もすれば高尚なる理想或は遠大なる理想といふやうな文字を諸所に挾んで其貧弱なる議論を飾り頗る得意氣になつた所は痴心愛すべき所が見へた。

草莽の微臣如何にして天皇の信任を得たるか

單り大隈伯のみならず尾崎氏も亦頗る窮窘した位置に立つた、尾崎氏は昨年の議會に於て海軍擴張に反對した人である、反對した理由は左の三點であつた、即ち第一は海軍擴張を外交上軍事上より見て無用のもの

てあるといふ絶對反對論て、第二は不信認の内閣なるが故に海軍擴張は反對なりと言ひ、第三は元來繼續費てあれば繼續した財源を示さなければならぬ、財源を示さずして六百萬圓を要求した、夫を懲しめる爲に否決すべしといふのてあつた、本年の議會に於て何人も此點に對する尾崎氏の說明を頗る興味を以て聽かんとした者てあつた、而して先づ其第一の攻撃は國民黨の代議士鈴木梅四郎君に依つて開始された、昨年尾崎君は海軍擴張に就いて政府案を非難する時、政府案に幾分の賛成した國民黨を攻撃した、當時國民黨は尾崎君の屬する中正會と友情ある黨派てあつたに拘らず、此點に就て意見を異にするといふのて、尾崎君の側より第一に攻撃の聲を放つたものてある、而して今や奈何と言へば昨年と同一の海軍擴張案を出した、而して之を出した所の内閣は誰れてあるかといふと海軍無用論の大隈伯、海軍無用論の尾崎君てある、之等が所謂『運命の冷笑』ともいふべきものて、人其本心に背いて恣りに大言する時は將來必ず困窮の地位に起つものてあるといふ其も有益なる教訓てあつたと思ふ。鈴木君の議論は頗る明快てあつて、同君の議論中最も聽くべきものてある。而して尾崎君は之に對し何と答へたかと言へば、昨年海軍擴張に反對したが、貴族院が之を否決する爲に院議尊重論が起つて自分は院議尊重論に賛成した、自分の海軍擴張反對論は此時に消滅してゐる、といふ說明てあつたが、之は憲法上の爭議と政策上の議論を混亂したものてあつて、如何なる場合に院議を尊重したといふことも、其院議を尊重したといふことは、其人が海軍擴張論に就いて平生有してゐる所の政治論の實質を破壞すべき性質を少しも持つて居らぬ。譬へば外國と事の起きた時に、平生藩閥を攻撃して居る者ても一時之を緩める。然し乍ら事終れば又藩閥政治を攻撃する。之は寧ろ當然のことてあつて、攻撃すべき議論を變化すべき理由は少しも無い。之れと同じく貴族院に當る時は院議尊重論も宜かつたが、併し事終つた時には平生抱く所の主張が之が爲に中斷さるべきものては無い。況や大隈内閣新に起つて平生主

張する議論を實際に行ひ得る機會である、此機會に際して平生の議論を行ふことが出來ず、院議尊重の一論に逃げ込まんとするに至つては眞面目なる考でありしや否やを疑はざるを得ざる程の滑稽なる狀態であつた而して更に蛇足ともいふべきは、自分は議員として述べた議論を大臣として答へる必要は無いと答へた一事であつた。凡そ立憲國に於て草莽の一政治家が君主の親任を受けるといふのは、即ち其平素述べた所の議論が國民の或ものを動かして、其信用を得たといふことが、即ち天子の信任を得る基である、然らば大臣となりたる者は、平生の議論に基いたといふことでなければならぬ、然るに平生の議論に基いて大臣になつた者が平生の議論に對しては責任が無いといふに至つては立憲政治家として頗る理義を輕ずるものである。官僚政治は元來國民の信頼を問はないものであるが、立憲政治家は國民の信頼といふことを主なる要素として起つて居るものであるから、其信頼を來す基たる平生の議論に對しては責任が無いと言ふに至つては、官僚政治家よりも、更に劣等なる變節と言はねばならぬ。予は此點に於て尾崎君の十分なる辯解を得ざりしを悲しむのである。

出鱈目首相の出鱈目答辯

斯の如く議場に於ける政府の足並はしどろもどろであつた。予は議會に居ること既に十餘年であるが、偶然の事情より未だ曾て豫算委員になつたことが一度も無い。故に、本年は豫算委員になつて見たいと自ら進んで豫算委員となつて、少しく大隈伯を揶揄して見たいと思つた。予は第一に本議會に於て大隈伯の言論の頗る出鱈目で無責任極まるものであるといふことを認めたるが故に、此意味を彼に感ぜしめたいと思つて、第一に首相の議論は出鱈目である、尾崎君の出鱈目は頗る精製した出鱈目であるが、首相の出鱈目は粗製亂造である、併し出鱈目といふことは同じことであるが故に、出鱈目の首相から其言葉質を執らんとするが如き野暮なことは考へて居らぬ、元來出鱈目の首相は三十年間長閥の政府を攻撃して居た人である、然るに自

ら長閥の軍門に降つて政權を得て恬然として喜んて居る人てあるが故に、斯の如き人の議論が出鱈目てあることは敢えて疑ふに足らぬ。首相は政友會に對し近來諸所て攻擊されて居るそうだが是亦予は意に介して居らぬ、といふのは何れ其内に政友會を讃美する時が來るてあらうからといふて、兎に角議場は出鱈目と感じて居るといふことを彼に感ぜしめやうと思つた。予は之を冒頭として彼が明治の初年に耶蘇教退治を標榜して明治政府に仕へしが如く政黨退治を標榜して山縣公に阿附し決して政黨内閣の形を示めさゞるべしと約束したるを知るが故に此内閣の基礎は何にあるかと質問し彼が議會新聞に對しては政黨内閣らしく見せ藩閥に向つては非政黨内閣らしく見せんとする虛詐を追窮せんと質問したれども彼の狸狡狐猾遂に答辯を濁し去つた。

然し乍ら彼の狡猾なるや此議場は豫算委員會てあるから豫算に關係無き議論は避けたいといふ言葉を以て予に答へた、予は更に追窮して凡そ此議場に於て政府を中心として有ゆる議論をすることは議會の典例てある。大隈伯は久しく政權に離れて居つたので、自身で豫算委員會に出て辯明することは、始めてゞあるから御承知はあるまいが今後は總て此通りてあるからお心得なさるべしと告げた、予は當時心に期して居つた、大隈伯は出鱈目てあると言へば必ずや失言とかいつて騷ぐ連中があるてあらうから、其時は予は大隈伯の出鱈目なる所以、而して彼が大臣として最も失態てあつた出鱈目の事例を舉げて之に答へる心算てあつたが不幸にして失言呼はりをする者が無つたので、予が秘して居つた所の出鱈目を例として揭げることが出來ずして終つたのてある。

惡意はない

予に次いて吉植庄一郎氏が大隈伯の著書を引いて、元老無用論を書いたに拘らず、元老の世話になつたのは如何なる理由てあるかと問ひ、海軍は無用であると論じた人が海軍擴張論をするのは何ういふ譯てあるかと難詰したが、彼の答へは實に賤しむべき、笑ふべき

寧ろ悲しむべきものであつた。彼は**「予は當時政友會の内閣に對して些か平で無かつた爲に、夫等の議論を述べたが、別に惡意はなかつたのである」**と答へて之を逃れやうとした。惡意の有無は問ふ所にあらず。**議會の問はんとする所は、平生無用なりと論ずる艦隊を、何故に造らんとするのであるかといふ一事である。元老國政を弄ぶを不可なりと唱へたものが、何故に元老の世話になつたかといふのである。**彼は唯民間の劣丈夫が人を傷けて、予に惡意が無つたのであるから赦して呉れといふが如き口調を以て遁れんとするのである。是が果して大宰相の爲すべきことであらうか。

之に次いで小山完吾氏は防務會議の憲法上の位置を質問したが、彼の答は曖昧にして決定機關でも無ければ諮問機關でも無いといふことでお茶を濁したのである、お茶は濁すも決定機關でなき事だけを明言せしめたるは小山氏の成功である、世間彼を以て老猾なりと言ふも議場に於て親しく接見した予は老猾なるにあらず、寧ろ老耄にして信ずる所が無いものと斷定したのである。予等は屢々政變の有ることを希ふものではない。如何なる政府と雖も一二年仕事をさせねば國勢を振はすことは出來ないのであるから、借すに歳月を以てし、**愈々赦す可からざる大過失を起した時は、一擧して之を取るといふことをせねばならぬ、唯徒に事を好んで反對内閣を破壊することは我等の希望する所でないが故に、我等は唯議會に於て我等の信ずる所と、**彼等の天下を欺いて居る所を述べて、些か敵と偵察戰をなさんとするに過ぎなかつたので、我等の言論は玆に終つた。

大石氏は何故に信任投票を出さざるか

本會議に於ては、大岡育造氏が政友會を代表して大隈内閣に警告を與へた。大岡氏の演説に予が議會に於て聽きし同氏の演説中最も成功したものであつた、中々光焔もあり、理義もあつた、唯憲法上の疑義ありといふ一點は言はずもがなであらうと思ふ、果せるかな反對黨の島田三郎氏は之を提へ、憲法上の疑義があれ

ば何故に爭はぬかといふた。之は敵黨としては無かる可からざる駁論である。唯島田氏の議論中、斯の如く大岡氏が政府を信認せざるならば、何故に不信認の投票をせぬかといふ說があつたが、當時予は島田氏に反問して、左樣に信認論を好まるゝならば、世間で言ふ大石正巳氏をして何故に政府信認の動議を提出せしめざるかと反問せんと欲したのであるが、併し乍ら斯の如き口先の爭ひのみを繰返すは本意で無いと思ひたるが故に、予は發言權を取消して議事を速かに結了することに努めたのである。

政友陸軍に薄からず

玆に一言せねばならぬことは、尾崎氏を始め此內閣の人々は政友會が海軍に重きを置いて、陸軍を輕ずるといふことを、平生言つてゐるのであるが、政友會は決して海軍に偏して居るのではない。尾崎氏等は日露戰爭當時は十三師團であつたものが、十九團にしかなつて居らぬ。即ち六師團しか殖えて居らぬ、然るに海軍は倍になつて居ると言つてゐるが、少しく軍政を論ずる位の人たらば斯の如き妄言は言はぬ筈である。即ち日露戰爭前に在つては兵士は三年兵役十二年勤務であつた。然るに日露戰爭以後は之が二年兵役十七年勤務となつた。假に一萬人の兵を募集するとすれば、日露戰爭前の制度に據れば一年に三千三百三十人宛召集して、之を十二年間すれば四萬人となる。然るに二年兵役となると、每年召集する人員は五千人であるが、服役年限が延びて十七年間となる。即ち每年五千人宛十七年間召集すると八萬五千人となるのである。故に今日我國の師團は名は十三師團より、十九師團に增加したに過ぎないけれども、實際に於ては平時は五割、戰時は一倍以上を增してゐる。故に今日の十九師團は之を日露戰爭前の師團の方法で勘定すれば、二十八師團半に當つてゐる譯である。即ち殆ど二倍になつて居る。然るに單に師團の數が少ないとか多いとか言つて其組織方法を知らず之を論ずるが爲に、政友會は陸軍に輕くして、海軍に厚いといふことを云ふのである。陸軍に政友會は薄いといふが、其薄いといふ陸軍を十

三師團より十九師團にしたのは誰てあるか。政友會がしたのである。陸軍軍人等は政友會が之が爲に天下の攻撃を受けたことを忘却して、政友會は海軍に厚くして、陸軍に薄しといふことを唱へるのは、咽喉元過ぎて著さを忘れるの輩てある。

無識無策の海軍大臣

予は之と同時に八代海軍大臣に一言せんとするものてある。八代氏は予が議會に於て從來の戰艦政策に就て、頗る不滿の意を示し、後來如何なる軍艦を造る心算てあるかといふことを質問した時に、八代氏は何れ防務會議に於て、と逃げたのてある。防務會議は單に海軍が提出したる所の案に就いて、政治的の裁量を施す所てあつて、如何なる船を造るかといふことは、海軍自らがやらなければならぬことてある。然るに彼等は戰艦政策すらも防務會議に被せんとするは無識にあらずんば、即ち狡猾と言はねばならぬ。元來今日問題となつた川崎、吳、長崎て製造しつゝある三艦、即ち之が爲に議會を召集した其船は、如何なるものてあるかといふと。議會に要求する所ては十四吋の大砲を搭せるといふのてあるが、十四吋砲は最早や過去の事て今日に於ては十六吋を要する時代となつて居る。元來我海軍は秘密を貴んて、陸軍と同じく、門外漢には嘴を容るゝ智識が無いと考へて居るが、之が抑も海軍の進まざる所以てある。譬へば今日のドレッドノートの造艦は何時始まつたかといふと、明治卅六年伊太利の軍政家キュニベルチが『英國の爲に戰艦』といふ論文を著したのが基てあつて、英國は此論文を研究して明治卅八年にドレッドノートを造り出したのてある。然るに我海軍は此論文を見たか見ぬか、同じく卅八年に英國のロードネルソン型の軍艦を折衷改造して今の薩摩を造つた。同年に着手したが、英國のドレッドノートは一年十ケ月て出來、我薩摩は四年半掛つた。我薩摩の出來た時は、英國がドレッドノートを出してから既に三年を經たのてあるから、更に製艦方法が一變した後に出たのて、着手した時既に遲れ、出來た時更に後れたのて、即ち我薩摩は生れ乍ら白髮の老人となつて居

たのである。憐れむべき我海軍は、大に驚いてドレッドノート型を拵へた。所が我海軍が之を造へて居る間に西洋各國は超ドレッドノート型の軍艦を造へた時である。之ではならぬと我海軍が超ドレッドノート型を造へた時は、英國は更に超々ドレッドノート型、即ちハイパア、スーパードレットノート型のクイーンエリサベスを進水したのである。エリザベスは如何なる船であるかといふと、排水噸數二萬七千五百噸、十五吋砲八門、六吋砲十六門を備ふ。十五吋砲一發の彈藥は一、九五〇斤であるが故に、八門を合すれば一五、六〇〇斤となり、十二吋砲十八門の彈藥と略相當るのである。我河内の大砲は十二吋砲八門で、其砲力はエリサベスの半にも達せない。然かも其價と云へば。略相同じである。而して速力はエリサベスは廿五海哩である。恁ういふ譯である我國は着々として軍艦に於て世界の形勢に遅れて行く。

天上、理想軍艦の姿見ゆ

此儘で進み行けば　如何に我國が力を盡した所が、歐洲各國と同一なる戰鬪力を持つことは出來ない、玆に於てか、我國は大に考へなければならぬ。世界の思ひ及ばざる新らしき軍艦、二年も三年も後の事を考へて進まなければ到底世界の人後に墜ちなければならぬ。幸なるかな、今や世界の戰艦家の頭腦に在るものが、一つある。即ち最早や大艦巨舶はいけない、殊に飛行機が出てからは世界の形勢は一變して居る。此時に當つて徒に大艦巨舶の跡を逐ふものは、先年佛國ツーリンに於ける演習及、昨年我内海に於ける演習の二つに依つて飛行機が軍艦より放されて、海波の影に居る敵艦の所在を發見して本艦隊に報告し、其報告に依つて水雷を發射するまでには、僅か一時間あれば足るといふことが經驗された。殊に昔は二三千米突より効力が無かつた水雷が、今は一萬米突の外に効力を有するといふのであるから、大艦巨舶は殆ど効が無い有様となつた。故に我國が徒に大艦巨舶を造らんとするのは愚策である。而して今や世界戰艦家の考へは大艦巨船を捨てゝ、大さ一萬二三千噸位の軍艦に、十六吋砲を

搭せ、己れの裝甲は非常に厚くして、如何なる大砲と雖も穿つ能はざるほどのものとして、自ら水雷を所持し、敵艦と砲火を交へつゝ進んで、愈々接近した時に水雷を以て攻擊する。水雷戰艦ともいふべきもので、其速力も早きが故に、水雷砲艦と、戰鬪艦と、巡洋艦とを兼ねたもので、之が世界の理想の軍艦である。一名之を接戰軍船といふことも出來る。而して此理想の軍艦を運轉する兵士は、非常に勇猛なる精神を持たなければならぬ。何故と言へば接戰軍艦なるが故である然るに我國は金は無いけれども、接戰に貴ぶ所の勇氣を持つて居る人民が居る。故に我國は世界に先つて此理想の軍艦を造るべきて一萬二三千噸の軍艦が、一隻千二百萬圓内外て、八隻の艦隊を組織するとすれば、一億萬圓ほどで悉く斬新なる艦隊を有することが出來る。予は海軍當局が之等の形勢には不適てはあるまいと思ふが故に、些か諷喩を試みたのてあるが、海軍傳來の己惚根情に富みたる海軍大臣は、何れ防務會議と逃げて、予の誠意ある質問に對しては、何等の答を與へなかつに至つては、頗る海軍の爲に悲しむべきことである。

要するに本年の議會は、議會としては極めて價の小さいものであつたが、政友會としては自信力を出すことが出來たといふ一事に於ても、頗る有益なる議會てあつた。而して大隈伯の耄老し、官僚の閣臣と、政黨出身の閣臣との間に、頗る深い溝のあるを發見した、此發見は政治上の發見としては斬新のものではないが頗る面白き發見であらうと思ふ、若し本年の議會が僅に三日間に止らずして、通常議會の如く豫算委員會に於て三週間も續けるといふことてあつたならば、此發見や更に大なるものてあらうと思ふたが、何れ冬の議會に於ては、更に面白き現象が、國民の前に開展するてあらうと思ふ。(完)

切捨御免の經濟制度

安部磯雄

△失業者問題

尾崎司法大臣が某處に於ける演說で日本人は久しき間禽獸の取扱を受けて居たといふたので、是れは日本人を侮辱したものだと多少騷いだ人があると聞いたが隨分可笑な話だと私は思ふた。武士といふ階級のみが跋扈して切捨御免といふ亂暴なる權力が彼等に與へられて居た封建時代に於て、國民の多數が禽獸扱をされて居たといふとは少しも過言ではない。私共は過去を顧みて、よくも斯の如き壓制が行はれたものだと驚くのみである。其當時の人々がこれを見て普通の事だと考へて居たのを思へば、習慣の力といふものは實に恐るべきものである。今日は法律の力により生命や財産の安全が保障されて居るから、私共は如何にも文明人だといふ自惚があるけれども、今日の經濟界で見ればとても文明どころの話ではない。東京の砲兵工廠で一時に二千人以上の職工を解雇するといふことは慥に世人の耳目を聳動した。これは實に顯著なる出來事であるから、新聞紙も比較的詳細にこれを報導したけれども、十人二十人の解雇は全國至る所常に行はれて居る。勞働者に取りては勞働時間の長きことも賃銀の少きことも大なる苦痛である。然し彼等にとりて失業程恐るべきものはない。彼等が何等かの働きを爲しつゝある間は兎や角生命を維持してゆくことが出來るけれども、一朝職を失へば彼等は忽ち路頭に迷はねばならぬ。解雇されたる者は何等かの仕事を見出すことが出來るから、絕望するにも及ばぬと考ふる人があるかも知れないが、普通の勞働者にとりては數日若くは數週の失

業も大なる苦痛であるといふことを忘れてはならぬ。全體失業者といふことは決して永久的失業者を意味するものではない。失業とは部分的失業で、或者は一年の中一ヶ月、或者は二ヶ月、或者は三ヶ月といふが如くに失業するのである。平常多少の貯蓄ある者が一二ヶ月失業することは比較的氣樂であるけれども、勞働者にとりては一二週の失業も實に死活問題である。彼等は直に餓死することはないかも知れぬ。然し營養不足が遠因となりて彼等は慥に生命を短縮して居るのである。失業は勞働者にとりて死の宣告であるといふも決して過言ではない。寧ろ死の宣告を受けて一思ひに死ぬることが出來れば、勞働者のためには却て仕合であるかも知れぬ。妻子の餓に泣くを見ながら、空しく鐵腕を撫でて失業を嘆じて居る勞働者の心中は如何に悲慘なるものであらう。然も今日の經濟制度は勞働者の生命ともいふべき職業の安固といふ保障を與へて居ない。資本家は工場の都合により何時にても勞働者を解雇することが出來る。市場の景氣が宜しければ多くの勞働者を雇入れ、時には夜業をもさせるといふ有樣である。然し一朝不景氣が襲ひ來れば、今まで工場の爲に努力して呉れた勞働者を惜氣もなく解雇する。恰も大根や蕪を切るが如くに不用なる勞働者を切捨てるのである。斯る殘酷なる行爲に對して政府も人民も批評し、抵抗し、禁止することが出來ない。資本家が勞働者を雇入るゝも、これを解雇するも自由契約であるから、何人もこれに干渉することが出來ぬといふのが國家の普通用ゆる辯護論である。私共は自由契約といふ美名の下に切捨御免の行はれて居ることを記憶せねばならぬ。個人經營の工場に於て切捨御免の是認せられて居るさへ不都合であるのに、砲兵工廠の如きが一時に二千餘人を切捨てにして少しも怪まないに至つては實に驚くべきことではないかと思ふ。私が切捨御免といふ言葉を用ひたのを穩當でないと反對する人があるかも知れんから、私は今一層詳細に私の立場を明にしたい。今日の文明國は何れも生命と財産の安全に對して十分の保障を與へて居る。これは我文明をして今日

の如く進歩せしめたる大なる要素であると思ふ。然し文明國は今一段高き所に立つて觀察せねばならぬ場合に達して居る。卽ち生命と財產の安全を保障するには今一步進んで職業の安全を保障せねばならぬといふことである。產業の幼稚なる時代に於ては生命と財產の保障があれば充分であつた。然し現今の如き經濟組織に於ては勞働の大部分は資本に使役せらるゝことになつて居るから、勞働者の位地といふものが非常に不安になつて來た。恰も魚の水を離れたるが如く勞働も資本を離れては生存することが出來なくなつた。從て私共は生命と財產の保障といふことよりも、其基礎となるべき職業の安全といふことを考ふる樣になつた。如何に生命や財產を保護する法律があつても、職業を保護する途がなければ何の役にも立たない。各人が職業を有して居ればこそ生命を保持し、財產を蓄積することが出來るてはないか。一たび職業を失へば財產を蓄積するは愚か、生命を保持することも出來ない。故に生命と財產の保護のみを說いて職業の保障を說かないのは極めて不徹底の議論である。世には怠惰、橫着、無能の爲に失業して居る者が少なくない。社會が此等の失業者を如何に處分すべきかは此處に論ずる遑がないけれども、私は充分に働く意志を有しながら不幸にして失業せる勞働者に對し國家は何等かの救濟法を講ずる責任があることを信ずる。今日の如く資本家の都合により忠實なる勞働者をドシ〳〵切捨にすることは正しく生命と財產を大なる不安の情態に陷いるゝものである。現代の人々が失業問題を斯程に重大視して居ないのは、恰も封建時代の人々が切捨御免といふことを普通の事と考へて居たと同じく、全くこれを習慣の力に歸せねばならぬ。

△失業は如何にして起るか

前に陳べたる如く失業は部分的であつて、一年立て續けに失業するといふが如きことは殆んどない。從つて精細なる統計表を得ることは困難である。然し泰西諸國に於ては此方面の研究が漸次進んで來たから、遠

からずして完全なる統計が出來るだらうと思ふ。米國の如き天產物の豐富にして資本の夥多なる所に於てすら、一年五百萬人の失業者があると政府が報告して居る。英國に於ても三四百萬の失業者があるだらうと考へられる。これに據りて見れば失業の原因が天產物や資本の缺乏、若くは人口の過多にないといふことが分る。米國の統計に據れば失業の原因中五割內至七割は職業不足といふことであるから、怠惰、横着、疾病、老衰等の理由により失業して居るものは比較的に少い。然らば失業といふものは如何にして起るのであらうか。職業不足の原因は何處にあるのであるか。經濟學者はこれに對して種々なる說明を試みて居るのであるが、其中で私が最も正當であると信じて居るものを陳べて見よう。昔し經濟の範圍が一村とか一町とかに限られて居た時には、如何なる生產者も容易に其社會に於ける需要高を豫想することが出來たから、丁度其に應ずるだけのものを生產するのであつた。然るに經濟の領域が漸次擴張せられ、一國といふ境界をも超越して世界全體を相手とする樣になりては、生產者と消費者との距離が遠くなり、從つて需要を豫想することが出來なくなつた。其の大規模の生產を行ふ同業者が此處彼處に起つて競爭する樣になつたから、需要に應じて生產額を決定することが出來ぬ樣になつた。是に於て同業者はなるべく多く生產して、一時も早くこれを市場に賣出すことゝなる。別言すれば盲目的に生產を行ふ結果貨物は市場に停滯して玆に不景氣といふ現象が生じて來る。所謂一波萬波を生ずるの勢で產業界の全部は不景氣の影響を受くる。勿論生產者は此上にも尙ほ生產を繼續することが出來ないから、生產の一部を減ずるか。若くは工場を閉鎖せねばならぬことになる。斯の如くして勞働者は續々工場より投出されるのである。需要と供給が恰も符節を合する樣に相一致するの制度が行はれさへすれば、失業問題の起るべき理由がない。今より二百年前の經濟制度に失業者といふものがなかつたのは全く需要と供給が一致して居たからである。今日でも一家の需要に應ずるだけの生產

をして居る場合には決して生產超過といふが如き不自然なる問題は起らない。農家が家族用の爲めに野菜や果實を生產する時には必ず家族に入用だけの物を栽培する。故に生產超過の起る筈がない。然るに今日は交換の爲に生產して、消費の爲に生產して居るのではない。よし人々の爲には如何に必要なる貨物であつても生產費を取返すだけの直段でこれを賣ることが出來なければ、何人もこれを生產しないのである。一方には紡績絲の必要を感じて居る貧民が多數であるに拘はらず、一方には紡績絲の生產過多のため工場を閉鎖するものがある。斯く觀察し來れば失業なるものは現經濟組織の缺陷より必然に生ずる所の弊害であるといふことが出來る。されば資本家が自分の都合によりドシ〳〵勞働者を解雇するのは、これを彼等の責任といふよりも寧ろ社會の共同責任といふのが適當であらうと思ふ。私は勞働問題の內にても失業問題を最も重大なるものと認めて居る。何となれば切捨御免は啻に重大なる勞働問題なるのみならず、私共の看過すべからざる人道問題であるからである。

△失業問題の解決法

失業が現經濟組織の缺陷より生ずる弊害であるとすれば、國家は勿論これに對して相當の救濟法を講ぜねばならぬ。殊に國家が直接經營せる事業に於て多くの勞働者を解雇するが如きは大に愼むべきである。國家はすべての點に於て個人的事業の模範とならねばならぬ。例せば勞働時間短縮の如き、賃銀增加の如き、先づこれを實行して其利益を個人に示すべきである。此意味に於て私は砲兵工廠が一度に二千人以上の勞働者を解雇せんとするのを頗る殘念に思ふ。全體國家は各種の事業に於て多數の勞働者を使役して居る。若し勞働者の配置といふことに充分留意するならば、一方に不用なる勞働者を他の官業に移轉せしむることも決して六ケ敷ことではないと思ふ。且つ砲兵工廠が一時に二千以上の勞働者を解雇することも得策でない。當局者は餘程以前より今日あることを知つて居たに相違な

いから、百人乃至二百人宛位少しづゝこれを解雇するといふ方針を採つて居たならば、勞働者に苦痛を與ふることも比較的少かつたであらう。砲兵工廠が一時に多數勞働者を解雇するの報傳はりたるため、東京市の工場全體にも少からぬ影響を及ぼした樣である。從つて勞働者全體は不安を感ぜねばならぬことになつた。政府は今後此の如き過失を繰返さぬ樣注意することが必要である。政府は又建築や土木のために少からぬ金錢を費して居るのであるから、其内最も急を要するものは別として、比較的不急なる事業はそれを繰延べ、民間の事業不景氣を告げたる時これを行ふこととすれば、これによりて勞働者に對する需給の情態を調節することが出來る。

更に一歩を進めて言へば國家が勞働者の失業に對し保障を與ふることである。勞働保險と言へば普通勞働者の疾病、負傷、老廢に對して保險することを意味するのであるが、近年に至りて失業保險といふことも實行せらるゝ樣になつた。英國の國家保險法は此點に於て獨逸國家保險よりも一歩を進めて居る。然し失業保險は何れの國に於ても尙ほ試驗中であるから、英國の如きもこれを採用するに當りて少からぬ注意を拂ふて居る。即ちこれを建築業者と器械工とに適用するとゝした。若し好結果を得ることが出來れば必ず其適用範圍を擴張するに相違ない。失業保險は必ずしも中央政府の手を借るには及ばない。白耳義のガン市が行ひつゝある失業保險は模範的として頗る有名である。卽ち同市に在る勞働組合が失業保險制度を設けてこれを市に屆け出づれば、市は充分に其組織を調査する。市にしてこれを是認すれば、市は失業保險に對して會員が拂ふ所の掛金に等しき金額を補助することになつて居る

以上記したる所は未だ充分なる解決法と言ふことは出來ないけれども、泰西諸國が鋭意此問題の爲に盡しつゝあることは明である。失業問題は實にスフィンクスが文明諸國の前に提出したる謎である。若しこれに解答を與ふることが出來なければ、今日の文明は或はスフィンクスの爲に皆殺されたかも知れぬと私は考へて居

る。

△君主專制的なる經濟組織

失業といふことは勞働者のみに限つたことではない。苟くも雇人たる者には何人にも來る不安である、危險である。獨立の經營を爲せる人には失業といふ恐がないけれども、其他の人は其官吏たると會社員たるとを問はず、職業といふことに對して保障を有して居ない。我國に於て職業の安全を保障されて居るものは司法官位のものであらう。故に失業といふことは之を廣く適用することが出來るけれども、勞働者の失業が最も悲慘であることは言ふまでもない。私は此失業問題を解決する前に更に他の方面より現在の經濟組織を批評したいと思ふ。私は便宜のためイーリー教授が政治組織と經濟組織とを比較したる一節を紹介して、更に私の意見を加へて見たい。政治に於て君主專制といふのは一人の君主が全權を握りて、人民には何等の參政權をも與へないのである。經濟組織に於ても資本家のみが經營の全權を有して、勞働者には何等の權利をも與へぬといふ方法がある。然るに專制政治が進んで立憲政治となり、人民にも參政權を與ふるに至りたるが如く、經濟組織も進んで勞働者に會社の株を所有することを許し、從つて會社の經營にも多少の權利を與ふるといふことが漸次行はるゝ樣になつて來た。これは歐米諸國に於ける近代的傾向であつて、これを經濟界に於ける立憲制度といふも過言ではあるまい。然し經濟組織の發達は茲に止まらない。今や勞働者は一切資本家の力を借らずして自ら資本金を醵出し、生產事業を營む樣になつた。別言すれば彼等は勞働者にして同時に資本家であり主權者である。此の如き制度は正に共和政治に比すべきものである。以上は即ちイーリー教授の説く所であるが、私はこれに據りて我國の政治と經濟が竝行して居ないといふ事實を認むることが出來る。私共は既に立憲政治を行ふて參政權を得て居るに拘はらず、經濟制度に於ては依然たる專制政治を是認して居る。今日尙ほ經濟界に於て切捨御免の是認せられて居

るのは怪むに足らないことである。斯の如き專制制度が經濟界に行はれて居ることは果して喜ぶべきことであらうか。私は斷じて否と答へたい。專制といふことは最早文明國に於て一刻も許すべきことでないから、私共は政治界からも經濟界からもこれを驅逐せねばならぬ。然らざれば失業問題の如きストライキ問題の如き困難なる問題を解決することは到底望むべからざることである。

然らば如何なる方法を以て資本家は勞働者に參政權を與ふべきか。最も普通に行はれて居る方法は利益分配制度及びコーパートナーシップと稱するものである。我國に於てこれを實行して居るもの二三あることを聞いて居るけれども、未だ廣く人々に知られて居ない樣だ。私は將來我經濟界が此處まで進んで來るもの、且つ進まねばならぬものと信じて居るから、此制度に就き少しく說明することにする。利益分配制度(Profit Sharing)とは資本金に對して相當の利子を仕拂ひ、勞働者の賃銀、租稅、減損補塡金、積立金、其他必要なる事業費を引去り、尙ほ餘剩あれば、これを資本家のみの所得とせずして、彼と――勞働者との間に分配するを言ふのである。分配の割合は勿論一定して居ない。或資本家は純益の一割、或資本家は二割といふ樣な割合で分配して居る。中には勞働者が一年間に受くる賃銀額を資本金と合計し、これに對して純益を按分比例的に分配して居る。或は純益を資本家と勞働者との間に等分して居るのもある。此等の分配法は資本と勞働とを同等の位地に置き同等の取扱をして居るのであるから極めて立憲的である。單に利益の一部を割いて勞働者に與ふるといふことであれば、賞與金と何の異なる所がない樣であるけれども、其實は決して左樣でない。賞與金は全く資本家の好意より出るものであるから、其金額の決定は勿論、賞與金を與ふると否とに雇主の考へによりて定まるのである。從つて雇人は幾何の利益があつたかを知ることも出來ず、亦雇主に對してこれを質問する譯にも行かぬ。雇人は依然として資本家專制の下に働いて居るのである。然るに雇主が

今後純益の幾分を勞働者に分配すべしといふことを公にすれば、これは恰も憲法の發布と同樣勞働者に一部の權利を約束することになる。多少の例外はあるが、一般に雇主は勞働者に對して其帳簿を公開する。甚しきに至れば勞働者は專門の會計士に依賴して其帳簿を調査せしむることも出來るのである。斯樣に資本家の所得、事業費の明細なる勘定、純益高等が勞働者に公開せらるゝことゝなれば、彼等は啻に其職務に忠實となるのみならず、雇主と雇人との間に感情の衝突を來すが如きことなく、雇人は監督者なくとも各自相戒めて勉勵し、器械を大切にし、原料を浪費するが如き弊に陷ることがない。殊に勞働者の移動劇しければ熟練なる勞働者を失ふことになれども、利益分配制度は勞働者引止策としても大なる効能がある。

約束によりて勞働者が得べき利益金は如何に彼等の間に分配せらるゝかといに、勤續年限を標準とするもの、若くは功勞によるものあれども、普通は賃銀額に應じて分配せらるゝのである。分配金は往々現金にて渡すこともあれども、多くの場合に於てはこれを雇主に於て積立て、退職の際現金にて支拂ひ、若くは年金として每年若干金を與ふることゝなつて居る。殊に私が陳べたいと思ふのは、雇主が雇人をして其積立金を以て其會社の株を買はしむるといふ方法である。雇人は其受けたる利益分配金を强制的に積立て、其を以て株を買ふのであるから、分配に與る雇人は早晩株主となることが出來るといふ仕組である。斯の如くして彼等は勞働者たると共に一部の資本家となるのであるから雇主と同樣其株に對して規定の利子を受くるのみならず、會社の經營に對して幾分の權利を有することゝなる。此方法を稱してコーパートナーシップ(Co-Partnership)といふのである。これを譯すれば雇主が雇人と同じ仲間の人となるといふ意味である。經濟組織も此處まで進み來れば立憲的精神を實現したものと言ふことが出來る。數年前我國に來たピーボデー博士の如きはコーパートナーシップを以て勞働問題解決の最良法だと言ふて居る。若し專制政治より立憲政治に進むこと

が社會進化の順序であるとすれば、經濟界に於て殆んど同一のことを豫期するのは蓋し當然のことであらうと思ふ。今や泰西諸國に於てコーパートナーシップの精神は勃然として起つて來た。私はコーパートナーシップが果してストライキを全く未萌に防ぐことが出來るや否やを知らない。然しこれによりて著しくストライキを減少し失業を豫防することの出來るといふことは更に疑がないのである。

我國の前途には慥に勞働問題てふ暗礁が横はつて居る。今日の勞働者は無學無識にして何等の氣慨もない様であるけれども、失業者が相次で起れば、終に如何なる態度を採るに至るか、殆んど豫想することが出來ない。私は我國家が此暗礁を巧に避けんことを切望するのであるから、我資本家に對し、專制君主の態度を改めて速に立憲制度を採用するに至らんことを勸告するのである。

廢減税論

松山忠二郎

租税の減廢と云ふことは、大隈内閣に取つては或は其死活問題かとも思はるゝ大問題であるが、之が實行は餘程困難と思ふ。此點に就ては寧ろ大隈内閣に同情を禁じ得ない。若槻藏相が減税と云うて廢税と云はなかつたから、營業税全廢の意志なしと云うて攻撃する如きは、之は愚論である。之は若槻の云ふ通り減税の中に廢税も含まれて居るのである。租税を一くるるめに總計して、其租税を減ずるのであるから、減税に違ひない。そして其中に廢税も含まれるかも知れないのである。

又大隈伯が大阪で營業税全廢は斷じてしないと云つたと稱して攻撃するものがあるが、之も多分聞いた人の誤りであらう。大隈伯が之れ丈けの大問題を閣員にも計らず、私の會で斷言する筈はないのである。然し同志會が要求するやうな租税の減廢は、今の内閣に取つて餘程困難である。同志會員の中に脱黨を賭してまで廢減税の言明を迫つたに拘らず、閣員として臨時議會に言明しなかつたのは之は當然である。勿論大隈内閣は財源さへあれば之を遣り度いに相違ない。從つて目下財源を熱心に漁りつゝあることは事實である。が其財源を絞り出す爲めには餘程思ひ切つた行政整理をしなければ出來ないのである。そして就任以來二ヶ月乃至三ヶ月にして之れ丈けの大整理は六づかしいから臨時議會に其言明の出來なかつたのは無理はないのである。そして大隈内閣が果して同志會の要求する丈けの租税減廢を實行したなれば大手柄である。そりや大いに褒めて差支ないと思ふ。

然らば何故それが六づかしいかと云ふのに、今年の春、山本内閣の時に相當の行政整理をして、そして剰まし得た財源を減税に充てたのである。今日では減税の餘地と云ふものは何にもないのである。只四年度の歳入から生ずる自然增收と、行政整理の結果絞り出すより外ないのである。然るに大隈内閣は就任早々思ひ切つた宣言をした。それは外でもない。非募債方針の言明である。之れが爲めに、出來るべき減税も餘程出來なくなつたのである。就任後一ヶ月にして大隈内閣が斯かる大膽なる言明をしたのは背水の陣を布いたものと云うて差支ない。然らば何故非募債方針が背水の陣であるかと云ふのに、之は先づ山本内閣の財政計畫に於てどれ丈けの公債支辨の事業があつたかを調査しなくてはならぬ。之に據ると、三年度の豫算に於て、臺灣の爲めに百五十五萬圓、朝鮮の爲めに九百四十四萬圓、鐵道院の爲めに二千四百六十萬圓、治水事業の爲めに百八十五萬圓(概算)合計三千七百四十餘萬圓の公債を募集しなくてはならぬ事になつて居つた。之れ丈け公債を募集しなければ歳出入は償はない事になつ

て居つたのである。然るに大隈内閣は此公債募集をしないと決めた。勿論減債基金の中から二千萬圓を持つて來ることにしたが、尙差引一千七八百萬圓と云ふものは公債募集をしない事にした。然らば之をどうするかと云へば、之れ丈け整理して歲出を減らすより外ないのである。即ち公債の代りに租税で支辨する事にしたのである。山本内閣の時に借金を以て支辨する筈の奴を、大隈内閣は租税で支辨することにしたのであるそこで此千七八百萬圓と云ふものは、減税に向けるべき財源を公債支辨の事業の方に向けたのである。之れ丈け減税を非募債主義の犧牲にしたのである。

然るに其外に、同志會の要求によれば、營業税二千萬圓と地租六百萬圓を減廢しようと云ふ。さうすれば大隈内閣は前後合計四千三百萬圓の財源を作り出さなくてはならぬ。三年度の豫算に於てあらはれてゐない恒久的財源を四千三百萬圓丈け捻出しなくてはならない。之はなか／＼大事業である。

勿論四年度の自然增收も幾分かあるに相違ないが、主として行政整理で捻出しなくてはならぬのである。之れ丈けの行政整理を就任後二三ヶ月の間に爲て、そして臨時議會に減税の言明をしろと云ふ事はそも／＼無理な註文である。敵から斯う云ふ註文が出るなら仕方がないが、味方の中から斯んな註文が出て内部が動搖するに至つては、總理たる加藤男に向つて氣の毒と思ふと同時に、同志會の如何にも不統一な事が分かるそれは兎に角、大隈内閣が之れ丈けの要求を實行したなれば大手柄として褒めてよからうと思ふ。

同志會の決議となり、且つ又世間の問題となつて居るのは、營業税全廢と地租五厘減である。處で、地租は戰爭後に已に二度も輕減したのである。今五厘減をやる必要はなからうと思ふ。租税は輕いのがよいのは云ふまでもないから、輕減は結構であるが、地租を輕減する財源があるなれば、モット外に急いで輕減すべきものがある。鹽税とか醬油税とか日用生活の必需品に向つて課したる重い税を先づ以て輕減すべきである特に外國米輸入税若くは小麥粉の輸入税などは第一に

輕減しなくてはならぬものである。いろ〳〵惡税の話があるが、租税の性質から云うて、外國米及び小麥粉の輸入に對して税を課するが如きは最も惡税である。先づ第一に此税から減廢すべき筈である。然し今日の議會では此論は到底も行はれないのである。斯様な大膽な議論は同志會でも政友會でも、實行は扨て置き、之を唱ふることも出來ないのである。政治家と云ふものは誠に弱いものであつて、人氣に逆らうやうな事はようやらないのである。恰度此點に於ては人氣を生命とする藝人と同じ事である。今云うたやうな議論を唱へたなれば、地主の多數の選擧權に對しては人望を一度に失墜して了ふ。だからして此議論については反對することも出來ないに拘らず、彼等は表面よう唱へないのである。そこで此點から云うて私は選擧法の改正は最も必要だと思ふ。今のやうな地主全盛の選擧法では地主に氣に入らないやうな事は如何なる政治家も唱へ出さないのである。唱ふれば失敗を招ぐのである。そこで衆議院の各政黨は何れも地主の鼻息ばかり窺つて、租税を増課する時には成るべく地租を避けるやうにし、又財政に餘裕が出來て、租税を輕減する時には第一に地租を輕減しようとかゝるのである。從つて租税は益々不公平となるばかりである。日露戰爭後度々税制整理と云ふ事が企てられたが、其結果は何時も、我國の租税は益々不公平となるのである。之は財政上から遺憾とすべき事と思ふ。

次に營業税全廢については互に相反する二個の異論がある。其第一は矢張り地主の鼻息を窺はんとする一派の議論である。營業税を全廢する丈けの財源があれば地租を今少し下げろ、五厘では足らない、一分以上を下げろと云ふ説がある。之は元、政友會によつて唱へられる――否、政友會は同志會の減税論の裏を掻かんが爲めに地方で此説を以て地主を煽動しつゝある。然るに他の方面から營業税全廢に反對する一派がある之は主もに學者側である。營業税を全廢する位なれば消費税の輕減を先にせなければならぬ、斯う云ふ議論である。そこで第一の異論と第二の異論とは性質に於

て全然相反するが、其説の何れがよいかと云へば無論第二の説がよいのである。今日の場合、財政に餘裕が出來れば、先づ消費税より輕減したい、就中前記の外國米及び小麥粉の輸入税を先きに廢したい。之は私も同意する所であるが、然し先に云つた如く、此説は到底も行はれないのである。强いて此説を主張して營業税全廢の氣勢を殺げば、其財源は反對の方の地主に取らるゝことになる。地租輕減となる。そして學者側の希望は丸つきり齟齬して、我國の租税は益々不公平となるばかりである。

故に私は寧ろ同志會の主張する營業税全廢に贊成して、此目的を達せさせたいと思ふ。然らざれば虻取蜂らずになる。且つ又營業税は、直接税とはいひながら多少間接税の性質を有つて、貧民に轉嫁されるものである。又租税としても納税者と收税吏の間に最も悶着の生じ易い惡税である。故に同志會が今日の如く熱心に營業税全廢を主張する時には、私は此勢を利用して營業税全廢の目的を達しさせたいと思ふ。そして此目的が達した上で、更に、餘程實行は困難であるが、外國米輸入税、小麥粉輸入税などの全廢を主張したいと思ふ。今日は兎に角、出來るか出來ないか分らないが稍出來さうな營業税全廢を助けてやらせるのが一番の得策と思ふ。

我が司法部の根本的謬見

小川平吉

此頃誤判問題がなか〳〵矢釜しくなつて、誤判に對する賠償問題なども論議せられて居る。一體裁判と云ふものは餘程六づかしいもので、決して間違がないと斷定することが容易に出來るものでない。それて更正

いふともあり、再審と云ふこともあり、又裁判に不滿なものに對しては控訴、上告の途も開けて居る。然し誤判と云ふことが、人權に對して非常なる毀損を與ふるものであることは疑ない事實であるからして、之が救濟の方法を講ずることは勿論必要である。今日歐洲文明國の法制を見るに、惡意に由る所の誤判は固より其當局を罰し、故意又は重大なる過失による誤判は、裁判官自らをして賠償せしめ、又時として國家が其賠償の責に任ずることもあると云ふ風になつて居る。人間の能力では到底防ぐことの出來なかつた所の誤判丈けは、之を奈何ともすることが出來ないが、重大なる過失故意若くは惡意による誤判に對しては大抵賠償の規定があるのである。然るに日本の現在に於ては、惡意の誤判は勿論之を罰するけれども、其他の場合に對しては明瞭な規定がない。之は是非早晩改正しなくてはならぬと思ふ。

然し此誤判問題などは我司法制度の不完全なる、只僅かの一例に過ぎないのであつて、私の觀る所によれば、我が司法部の諸種の弊害は、皆其根本に存する一大謬見から出て居るものと思ふ。依つて私は其根本的謬見を指摘し、司法部内及部外の一般人と共に、之を矯正するのが、我が司法革正の最大急務であると信ずる。

我が司法部について全國一般の非難する點は何であるかと云ふに、其第一は檢擧が峻烈であつて且つ不條理であると云ふ事である。其第二は裁判が嚴酷であつて非常識であると云ふ事である。

然らば何故、檢擧も裁判も、峻烈嚴酷であつて、且つ非常識不條理であるかと云ふに、之は犯罪を容赦なく檢擧裁判し、之に嚴刑酷罰を科すると云ふと、社會の道德が進むと云ふ、非常に間違つた考が本になつて居る。之は西洋でも支那でもさう云ふ事を考へた政治家が古來澤山あつたので、刑罰を以て一國の道德を高めやうとしたのは、決して現今の我司法部の新發見でない。然し歷史を通觀するに、此思想は何時も失敗に歸したのであつて、斯くの如き事を行つた結果は、只

人民の思想が險惡になつて、そして只法律と云ふもの國家と云ふものを畏怖するの念慮しかなくなり、犯罪に對しては論語に所謂免れて恥なしと云ふ事になつて了ふ。從つて國家を愛するとか、社會生活を樂むとか云ふ思想が甚しく乏しくなり其結果國家を崩壞せしめ、若くは社會の風紀を紊亂するに至つたことは歷史の明かに立證する所である。一體刑政の學と云ふものは、古くより最も進步したる學問であつて、其名稱細目に多少の變化こそあれ、其實質大綱に至つては、古も今も殆んど差異はないのである。さればこそ賢明にして達識ある政治家は、刑罰を只藥として用ふるに止めたもので、甚しきを罰して、其他を戒飭し、國民道德の皷舞作興は之を敎育とか禮樂とかの力によつてやつたのである。樂を以て道德を進めやうとしたのなどは餘程私は面白いと思つてゐる。

然るに我が司法當局の一部の人は、此古來失敗し來つた、又賢明なる政治家の總て排斥し來つた、間違つた思想手段を以て國民道德を維持せんとして居る。彼等は嚴刑酷罰を科すれば、商業道德も勃興するだらうし、敎育界の腐敗も矯正されようし、官界民界總てに通じて、道德觀念が高まるだらうと考へて居る。然し私は之は根本的謬見と思ふのである。

それから、もう一つ日本の司法部にはわるい缺點がある。それは檢事が司法省の要部を占めて居ると云ふ事である。顯官も亦檢事に多くして、檢事が最も部內に勢力あると云ふ事である。檢事と云ふものは如何に公平ならんとしても職掌柄どうしても其思想が苛察嚴酷に流るゝものである。それに前に云つたやうな、刑罰を以て道德を維持しやうと云ふ考が部內に漲つて居るからして、ドシ／＼嚴刑酷罰を科する者の方が周圍の氣受けもよく、從つて榮達もする。之に反するものは榮達しないと云ふ譯合になる。之は裁判官でも同じ事であつて、嚴刑酷罰主義の人の方が評判がよい。

そこに持つて來て、時恰かも刑法が改正されて、刑の適用の範圍が非常に廣くなつて來た。適用の範圍が廣い所に、例の嚴刑酷罰主義を振り廻はすんだからし

て、適用さるゝ方の迷惑は此上もない次第である。

それから今一つの弊害は、司法部の人は只司法部の事のみに沒頭して、犯罪や刑罰の事の外は何にも知らず、殊に其犯罪や刑罰が社會の他の各方面と如何なる關係を惹き起すかについて全く考へないと云ふ事てある。尤も之は司法部のみに限らず、日本の各方面にも通有の弊害てあるが、司法部にはそれが一層甚しいやうてある。社會の狀態が複雜に赴き、學問並びに業務が分化した場合には止むを得ぬ事てあるが、我が司法部は餘り分化に過ぎて、社會の綜合統一との調和が全く缺けて居るのは遺憾てある。即ち自分は只犯罪を檢擧し、刑罰を科する一種の器械の如くなつて了つて、其檢擧刑罰の結果が、有形上無形上社會にどんな影響を及ぼすかは全く考へてゐない。故に刑事の裁判官の如き、被告人に刑罰を言ひ渡すと、其當人の刑罰を科せられた心理狀態、生活狀態又其家族親戚郷黨等に及ぼす關係等を注意して居る人は恐らくなからうと思ふ又注意とか調査とかする機會もなく手續もない。全く只技師が技術を應用する如く、器械が自分の運轉能力を發揮して自ら運轉する如き有樣てあるから、法律の眞の目的を達する事に甚だ遠いのてあつて、日本の現代の思想と相容れぬ非常識な考が、獨り司法部にのみ瀰つて居るのは抑々其故てあらうと思ふ。それて一般國民から見れば驚くやうな檢擧や裁判があるのてある。

それて昨年以來矢釜しい宇都宮に於ける凌虐事件、水戸に於ける事件、又名古屋事件の如き、何れも檢事が三十時間も四十時間も休ませず被告人を拷問した――之は所謂精神上の拷問であつて、精神上の拷問は一番重い拷問であると云ふ事は大審院の横田君なども認めて居る――然るに段々調べて見ると、それは無罪てあつたと云ふ。之は僅かに一端があらはれたのてあつて、之に類した事は全國に澤山あらうと思ふ。殊に名古屋事件の如きは、日本社會に最も重きをなして居る貴族院議員もあれば、多額納稅者もあり、又官吏や法學士などもいろ／＼ある。其關係者の或者の如きは嘆息して云ふのに、斯くの如く苛酷なる檢擧や峻烈な

る捜査などを沒常識にやつて底止する所を知らぬやうなら、國家とか法律とか云ふものが寧ろ無い方が増しだと云ふ非國家的思想が湧くと云つた。私は之か聞いて戰慄するを禁じ得なかつた。古來行政官の不當については之を矯正するの途もあり、又人民が反抗する途もある。詰り此方には彈力が強いから、無政府主義とか非國家的思想とかを起さずして濟むが、裁判權の濫用と其不公平に對しては訴ふるに途なく、救濟に其方法がないから、却つて危險思想を誘致勃發せしむるの惧が多い。

今日我日本は立派な立憲國法治國となつて、憲法や法律によつて人民の權利が保障されて居るのに、我が司法部の人が、人民に對する態度を觀れば、全く憲法及び法律の精神を無視し、殊に日本國民はすべて陛下の赤子である、自分等は陛下の赤子を檢擧し裁判するのであると云ふ觀念が全く缺如して居る如く思はるゝ此根本觀念が缺如して居る爲めに彼等が職務に熱すれば熱する程益々邪徑に陷り益々人權蹂躙を敢てし、結局法律の目的と相反することをなすに至ると思ふ。此點は我が司法部の人に向て吳々も其反省を促がすと同時に、我が國民も常に司法制度に向て心を用ひ、現在の如き、誤謬と不完全とを矯正しなくてはなるまいと考へる。

氷を嚼んで大暑の人を觀る

福本日南

史記の天官であつたか、「東有ニ木星一。曰ニ狼一。狼角變色。多ニ盜賊一。」と云ふ事が見える。こやつ、東に木星有りと云ふのは、少々可笑しいやうだが、兎に角二千年前に在つて、狼星を認めたのはエライといはねばならぬ

人類の考ふる所は西も東も大概同じものと見えて、羅甸語には之を Sirius といひ、英語には Dog Star といひ、更に佛語には Canicule といふ。此 Sirius も dog も canicule も共に狼の御親類であるから、詰り狼星を意味するのである。我々天文學者でないから其命意が何處から來たかは知らねど、兎にも角にも此星は行星中で最もよく光る奴である。夏の宵になると、ピカリ〳〵と凄い眼を光らせて見せる。そこで狼星と云ふ名を附けたのであらう、かとも思はるゝ。太陽が此星座の纏度に當たる頃が恰度七月二十四日から八月二十四日前後までゝある。そこで此期間を英語には dog days といひ、佛語には jour caniculaire といふ。即ち狼星期と云ふのである。我國の所謂三伏も正さに此期中にある。我々は今此狼星期の下に呻吟する。何人の顏を見ても、誰の挨拶を聞いても、暑い〳〵と云ふの外はない。

如何にも暑さは非常に暑い。然しながら同じ暑さの中にも涼味を帶びて居るものと、丸で焦熱地獄に墮ちて居るものとの別がある。茲に到ると、露西亞の哲人トルストイの宗敎觀を想起せざるを得ぬのである。彼が嚴酷なる希臘敎の下にあつて、自由なる宗敎觀を專らにしたので、其首長にポピエドノスチエフを戴いてゐた聖スノードでは、彼に破門を喰らはした事がある。其際彼は之に對して抗議書を提出した。其言草が非常に氣に入つて未だに忘れないのである。今其大意を云へば斯樣である。

「自分は諸君と同じく宇宙主宰の神を信ずる。又過去現在未來あることをも信ずる。並びに地獄極樂をも信ずる。さりながら諸君と異るのは、敎會で製造し上げた皇天上帝、過去現在未來及び地獄極樂を信ぜぬと云ふ迄である。何となれば敎會の說に聞けば吾人は此一生を神の御心に從つて行動すれば、其左右に召され永久に其お側に置かれると云ふ事である。自分が知つて居る皇天上帝は左樣自由を知らぬ窮屈な神ではない。善行を積んだからとて、神意に從つたからとて、年百年中永久に亘つて神の側に引つけ

られて堪るものか。次には此上帝の意に逆らつて行動すれば未來永劫地獄に墮されて諸ろ〳〵の苦楚を嘗めさせられると云ふ。之も實に可笑しいのである。自分が信ずる上帝は、左程無慈悲な、殘酷な、道理の分らぬ神ではない。罪惡を犯せるが故に責罰を下さるゝ。改心すれば其れ丈けの寛恕を與へらるゝ。それでこそ神である。それから其次に諸君の所謂地獄極樂である。諸君に聞けば此二つは何れも未來にありと云へど、自分の信ずる所によれば、地獄も極樂も過去にもあれば現在にもある。並びに又未來にもある。論より證據を御覧に入れやう。現に此世に於て、世界六分の一の廣土を有し、大皇帝を以て居らるゝ尊貴がある。領分を云へば如何にも廣大であるが、其廣大な領分の中に居て其尊貴は安穩に身の置所が無いてはないか。金城鐵壁の中に隱れて居られても、何日何時其地の下から爆裂彈が發するか。何時左右の壁間から彈丸が飛び來るか、匕首が飛び來るか、それこそ食しても食を甘んぜず、寢ても眠りを安んじ得ざる狀態である。生きながら地獄に墮ちて居るに非ずして何ぞやと云ふべきである。之に反して此トルストイなどはヤスナヤポリヤナの茅屋に居て、心も廣く體も胖かに、一家團欒の樂を享ける。自分では現世の極樂に居る積りである。それて之は三世に亘る。決して〳〵未來に限られたものではない。それて教會製造の敎義敎旨を信ぜぬと云ふ丈けてある」

倚樣な事を云つて居る。如何にも達人の見であると思はる。

此眼から現日本社會を御覧なさい。同じ大暑の下に居ても、清涼を感ずるものと、一分の涼味もなく、眞に焦熱地獄に墮ちて叫喚して居るものがある。車夫や馬丁や土方の徒は、打ち見た所では如何にも暑さうてあるが、あれても終日營々として額の汗によつて賃錢を取り、家に歸れば晩涼を追うて一杯遣らうと考ふる所に無限の凉味を有して居る。之に反して大廈高樓の中に居て、高嶺の凉風も坐上に通へば、煽風器も左右

に備へ附ける先生にして、内から燃え出す炎熱に黒焦げにならうとして御坐る方々が随分澤山あるではないか。死屍に鞭つは自分の忍びざる所、それは言はぬ。然し死屍の親族で今尚大將なり元帥なりと威張つて居らるゝ連中で、昨今夜の眼も眠られぬ人々は尚澤山あるではないか。甚しきに至ては、其中から燃え出す炎熱に抵抗し得ずして、三つ道具で自殺を企てた先生さへある。随分御念の入つた話である。日本流に自殺しようと思へば短刀一本あれば澤山である。支那的自殺なら鴆毒を仰ぐべしだ。西洋流ならピストルもよからう。本當に死ぬ氣なら此等の一つがあれば澤山であるが、其和漢洋三つ道具の三つまで併用して、それでも死に切れず暑がつて居るとは、之が苦熱の極點であらう。

之に反して形は如何に忙しくとも、心的凉味を有して居りさうに見える政治家も少くない。大隈伯の如き其一人と思はるゝ。七十七歳の高齢を以て炎天の下に南征北伐して居らるゝ所を見れば、如何にも暑さうであれど、成ると成らぬとは別として、彼は前途に凉しき政治を實現して見たいと云ふ理想の下に働いて居らるゝらしい。そこが彼の苦熱に堪えらるゝ所であらう。又近く政友會の總裁になつた原敬の如き、之も暑中に多少の凉氣を迎えて居るものであらうと思ふ。今日こそ政權に離れて一寸失意の體に見ゆれども、之れまでの政爭で大概老物を振り切つた。今の政敵たる大隈伯の如き、老人は老人に相違ない。さりながら伯自身が自身の事を「ワカハイ」と云ふやうに、あれは若い意味の老人である。由來の元老を振り切つて出て來た若的老人である。それで今後あの老人にして一度退けば、之に代るものは誰れであるか。「若白髪の拙者でゴワセウ」と云ふより外はないではないか。一度想うて其邊に到つたなら、兩腋の下がスウ〳〵するであらう。

それで此等の諸君は何れも地獄に墮ちぬ政治家である。處がそれ以外を見ると、地獄の釜中から手を出して救うて呉れと云ふやうな政治家が、そんぢよそこらに其數を知らぬ。ちと罪言は知れぬが後藤男の如きも

其お一人ては御坐らぬか。桂と組んだら、其遺意を受けて、桂の餘黨と何處までも行動を共にし來られたなら今日の煩悶はなかつたらう。然し已に一度反旗を飜された今日てあるから、覆水盆に復へらうとしても盆の方で受け附け兼ねる。さらば政友會に走らんとしても、此方ても二つ返事て歡迎しさうにも思はれぬ。若からざらんと欲すと雖も得んやてある。又犬養君の如きも、今年は殊に暑さ以外の暑さを感ぜぬてあらうか

それから同じ政友會の中にあつても、原君と其意見を同じうする領袖諸君は別として、大臣になることなら柄に合はうが合ふまいが、文教大臣てもよろしいと受け込んだ大岡君の如き、之も昨今苦熱中の一人てあらうと思ふ。思ひは同じ前滿鐵副總裁の伊藤君や、未だに其頭は着いて居れど、一日に三遍位頸のあたりを撫て廻してゐる圖體の大きい野田君や、すべて此等の人々は同じ地獄黨中の人と思はるゝ。

更らに財界の巨頭に觀ても、富は萬々を擁し、前後左右から美人が煽ぎ立てれば、岡目には涼しさうな三井の重役などの中には、まア一段落着いてよかつたと云ふやうなものゝ、それでも門前に荷車が一つガチャ〳〵と云つても、そら火の車が御出なさつたかと吃驚する人もあらう。其外已に正面からの熱烈は避け得た前宮相や宮内省あたりの故大官は今尚餘熱を身邊に留めて天邊の熱と戰はざるを得ないものがあらう。

そこで分り切つた話てはあるが、政權を取るもよし、金を儲けるもよし。要するに其下に一味の涼味丈けは存して置きたいものである。料理をするのに近頃は味の素と云ふものが製出された。それの何て作られたかは知らぬが、人生に於ける涼味の素と云ふものが別にある筈だ。其要素は何てもない「正義の觀念」と云ふの外はない。此正義觀念を土臺として其收め得た權力な用ひ、如何に國政を推進しよう。如何に社會を融化しようと云ふので活動して御覽なさい。之ほど適當な日射病除けの藥はなからう。東坡の句中に「人苦二炎熱。我愛二夏日長。薫風來レ自レ南。殿閣生二微涼。」と云ふのがある。右の要素を挾めば、殿閣は扨置き、炭塗の中に坐して居ても一分の涼味は通ひませう。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新刊

福本日南先生新著

石臼のへそ

美本 壹圓貳拾錢

東京牛込 東亞堂（振替東京一七一番）

讀んで宵越しの飯粒を噴き出す人もあるべく、書かれて何處やらのこそばゆき名士もあるべし。いづれは其場其場の臍次第、何寸下れば丹田となり、幾寸上れば方寸天地、など丶野暮な詮議はズント禁物、理窟を放れて、大道に合す先生獨得の筆加減は、流石の書肆も何と說明の致しやうなきをかしな本、唯だ讀者は、此摩訶不可思議な臍殿に睨まれて、御自分の臍の宿替せぬやう、御用心肝要と申す。

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載を謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

靈界未曾有の珍書

新神秘主義觀自在生る!!! 現代の新思想と共鳴するイマジネエシヨン

一度基督教を信じて基督教を出て更に佛教に歸依して復佛教を脱し
婦人問題の世界的解決者を以て自任し夙に新眞婦人會の頭目となり。
觀自在宗祖木村秀雄氏と共にイマジネーシヨン新神秘主義を唱へ、
口に筆に其の新主義を鼓吹し法術を以て惡癖疾病を救治しつゝある

觀自在術宣傳者 **木村駒子女史新著**



自叙傳 觀自在術

心的生活の新光明

四六版 四百頁 裝釘優麗 寫眞數葉入 定價壹圓廿錢 郵税金八錢

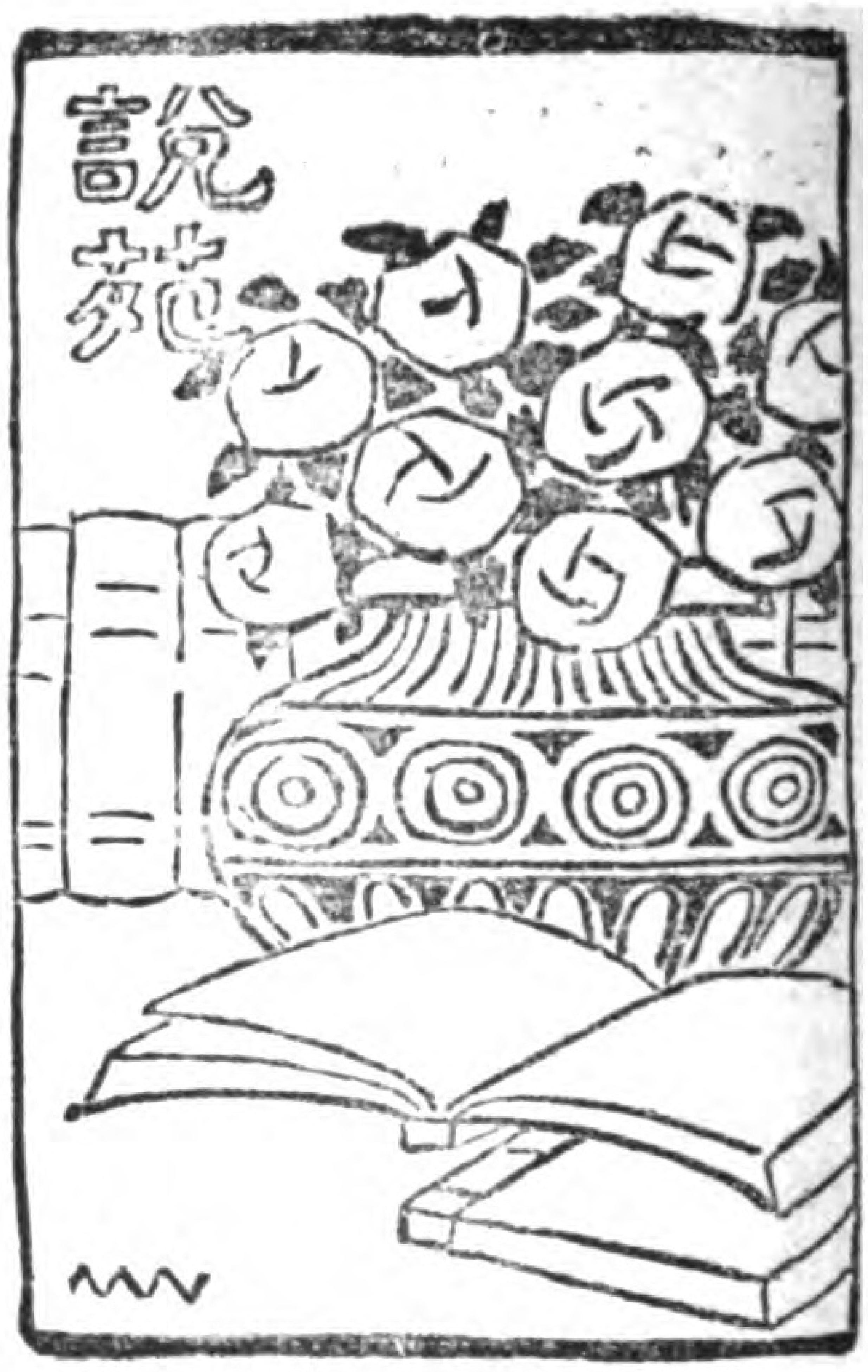
本書力めて抽象的説述の法を避け具體的に實驗の由來を細叙し。
現代思想と共鳴する新神秘主義を仄かし觀自在術・修得法を力説せり。
本書は實に一種の宗教哲學書にして兼て又一種不思議の法術書なり。
一面運命數奇なる女子夫妻の自叙傳にして兼て閨秀神秘家たる女史の神秘觀なり。

告白大膽!!筆路奔放!!藝術的氣品全紙に漾ふ!!

(中付一の三)

發兌 東京市本郷區森川町一番地 株式會社 育成會 電話下谷二四一一 振替口座東京四九三〇八番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す



續亡命行

亡命客の一人

西洋料理屋　長崎でも有名なのですと、横田さんが復た言つた。

空洞な、かなりに濶い其の球戯室が　階下の殆ど全部のやうな風に建てられてゐた。長い靜かな廊下に延亘してゐる古い絨氈を蹈むで三人は一時間ばかしして球戯室から出てきた。氷に入れたウイスキーに、ほてる頰撫でながら、横田さんは『宿にかへりますか』とたづねた。

『えゝ』と梁は不得要領な答を後に流して、先に歩いて行つた。

昇つてみると其の家の二階も相當に濶いものであつた。最も濶いホールの眉間に、孫逸仙さんが國賓として來た時分の紀念寫眞が掲げられてゐた。中央の前席に厚い黑い外套にくるまつて、淺黑い二重瞼の嚴めしい孫氏を三人は仰いだ。彼が亡命の船中を、博愛、博愛とばかし揮毫してゐたといふ新聞記事を私は思出した。此のときつい此の長崎に留學してゐる醫學生の耿君に思ひついた。横田さんに訊ねてみると、

『知つてます。極く親しくして居るんです。家も知つてゐます』と誇るやうに眼を輝かして答へた。

梁は其處を出ると別れて、獨りて宿に歸つた。

横田さんと私は、大通りの明るい下駄の響を聞きながら、耿の下宿をたづねた。

耿は愕きと懐しさとに妙に顰むだ滿面の表情を見せて、私の手を引上げるやうにして迎へて吳れた。彼に依つて長崎に蟄伏してゐる同志の消息を更に詳にした。彼は横田さんを信じてゐた。そして時々日本語を使ひながら秘密に渉る談片を話すことを憚らなかつた。

私は同志のうちの分けて親しい二三の友と此の長崎の夕を過したかつた。相談の結果、三人は更に友のHの宅を訪れた。

勾配の長い石路を登つて、猶一人のNと總じて五人が或る名號は忘れた料理屋の二階に胡坐をかいた。私は横田さんに賴むで、梁に電話をかけてもらつた。緣には簾が下された。

梁が黑眼鏡を架けて日本服でやつて來た。Hと吳淞砲臺で識つてゐるといふ彼は、Hを見ると其の横に坐つて顏を突合して話した。皆が餘り支那語でばかり話すので横田さんには氣の毒に思はれた。私は、彼と耿とには日本語で話しあつた。

やがて空が全く暗くなつた。若い藝者達がとり〳〵に現れた。

甘い日本料理の中でも、蕎麥がうまかつた。私達はたゞ興じあつた。此の開港場の空氣はまた私達を所謂支那人としては扱はなかつた。耿の三味線に揃へて歌謠には驚かされたし、梁が無暗に喋つたのも意外だつた。浴衣をのみ輕く著てゐた素面の藝者が怜悧さうに立廻つてゐた。長崎の女の言葉は耳に潔く響いてゐた私も少し醉つた。

『先刻ですね。私が忘れものをして宿に歸つた時にてすね』と梁が横田さんに言ひかけた。彼は、宿に殘つてゐた二人の新聞記者が電報用紙に何か書いてゐたのを見た。リンコといふ片假名をも見た。若し其の二人の新聞に出て、貴方の新聞に缺けてゐたのでは氣の毒だから、最う二人が電報を打つた以上、貴方も構はず御書きなさい、と言ふ意味を横田さんに言つた。

『何てすつて、失敬なことを言ふ』と横田さんは梁の言葉を聞いて、此のとき悖然と憤つた。

『僕は苟くもそんな人間ぢや無い。僕の精神を君は未だ知らん、失敬な。あいつ等と僕とは違ふんだ』と横田さんは兩方の腕を捲つて、爛々とした眸を見据えだした。

『あいつ等は之だ。君も失敬な、失敬な』と向側の梁を睨むで、腕を張つて拳を作つた。

梁は笑ひだした、

『是は困つた』と言ひながら、横にゐる耿にもつと精細な日本語で説明してくれと言つた。

私達は皆笑つた。三味線を置いてしまつた女達はたゞ平氣な面をして、梁と横田さんを見てゐた。

『どうも此處らの女は氣性が勁烈らしい』とHが言つてゐた。

耿は横田さんの後に立つて行つて、梁の言葉の意味を懇切に熱心に說きあかした。横田さんは眼を輝々させて、時々梁の方を瞻ながら、うん、うんと大きく言ひながら、首肯いて聽いてゐた。

して横田さんは突然梁の傍に蹌踉と步いて行つた。彼は梁の手を堅く握りしめながら、

『僕の精神を知つてくれたまへ。僕は僕だ』と言ひだした。非常に感激したらしく呶々と辯じ、また烈しく叫むでゐた。梁は笑ひながら覺束ない日本語で共に同意してゐた。『信じてゐるから電話を聞いて、夜路を一人て來たありませんか』などと言つて、横田さんが納得してゐた。

赭黑い枯れた横田さんの頰が叫びながら急激に運動してゐるのを眺めてゐるうちに、此の醉つた好漢に少しばかし私は惚れたやうに思ふ。

藝妓は更にわからぬ歌をうたつた。そうして斯うした日本の女の晴々した匂の各自の前身について、妙に私は想像に凝つてみるのがをもろしかつた。

やがて皆は立上つた。梁と耿とは別に歸つた。横田さんも帽を深く冠つて出て去つた。

私はHの宅に行つて、長く話した。矢張り所謂亡命

の一人たる彼はしら〳〵と時々笑つてゐた。

十一時すぎて福島屋に歸つて來た。未だ起きてゐた梁は、横田さんが又來て、非常に醉つて日本式の痛快を發揮して、今去つた所だと笑つてゐた。

茶を入れに來た女中が、上海土産を下さいなどゝ甘へるやうに請求して去つた。

綴つてある種々の新聞を借りて讀むでみた。亡命、亡命、亡命、長崎特電報、門司特電には亡命が附帶してゐるやうなのに忸怩とした。また交戰中の電報欄には隨分勢力が有るやうに思はれてゐる新聞にも、隨所に無稽な虛電が少くなかつたのには驚かされたし滑稽にも思はれた。

梨子をたべて、二人は狹い室に電燈の下で、床に入つて暫く話しあつた。

二日航程の對岸にある故國と、斯うした此國での初夜、——其の對照が端を引いて、彼や是や考へさせられた。そして苦笑したまゝ睡つてしまつた。苦笑した寢顏を昨今は幾人も此の長崎で畫いたことであらうと思つて一層深く苦笑した。

苦笑の睡眠が解けてみると、晴れた晚夏の海岸の空氣は、鮮かに窓外の遠近を分けてゐた。八時をすぎてゐた。

二人は入浴をして、出發を協議した。どうせ其の時の氣分次第といふことに定めて、上つて來ると、船で同室の三井さんが二階から降りて來た。彼は只だ輕く笑つて行つた。

其日の新聞には二人の名が一字づゝ違へて出てゐた近々來朝の噂ある何海鳴或は林虎兩氏の中ならんと一時は中々の騷ぎなりき。と自分で騷いでゐて書いてあつた。

「名を一字ぐらゐ別にしてもすぐ分る。こむな秘密があるものか」と梁が言つた。

宿屋の主人が出て來た。隱かに老人らしく平伏した彼に

「大變飯が旨いです」と梁が言ふと

「昨日も然う申してゐたのですが、家の御飯でも此の

暫くは初めておいしく上つたらうと申しましてね。隨分御苦勞なさいましたから』と彼が言つた。

其のしみ〳〵とした老人の口調が、私の胸に浸みた。別に言はれるほど大した苦勞もしたのでは無かつたのが、何だか面白半分に騷いでゐたやうにも見られてゐるらしい是までのうちに、斯の日本語の集句が妙にきわだつて聽き取られた。

『えつ、なあに』と私は言つた。然うして主人が取出した帙の中に字を書かされた。其には何れも變名であるのが、隨分日本では喧ましく見物の的にされてゐた連中が、思ひ〳〵に塗つてゐた。中に衰華選のもあつた。

『衰華選は中途から怪しいですね。あれなどが來たら是てやるつて皆が決定してゐるんです。ほんとです』と甲板で本山さんが拳を揮つてゐたのを思出した。横田さんの社の新聞綴を繰つてみると、一段ばかし衰華選の所謂首鼠兩端が僅かに幷べられてゐた。文章を善く觀ると果して横田さんが書いたのらしかつた。

また其には私達二人の亡命云々に就ては一字も載せて無かつたのに、昨夜の横田さんの顏が思出されてをかしくなつた。梁は大きな紙に、反覆亡命革王命と正しく書いてゐた。

遲い朝飯を終つて憩むでゐると、耿が入つて來た。

そして急に十一時の汽車で二人は出發することに極めてしまつた。其は二つめの『道の尾』で下車して、更に夕方の急行列車に『道の尾』から乘らうといふのであつた。

奇襲をうけたやうに三人は興じあつて匆々に仕度した。

しかし發車には二分ばかし遲れた。停車場に長留さんが立つてゐたが、挨拶する暇も無かつた。愈々遲れてしまつた時に、彼は

『少し誤解が有るやうですから』と近づいて來た。

その緊張したやうな顏が、私には何となく氣の毒な思がした。

『何でも無いんです。そんな事は決して無い』と私は

强いて彼の次の言葉を制した。
『え、然し』と彼は言つてゐた。
また實際私達二人は決して記者諸兄に何等の介意をも有つてゐなかつた。猶同業者の私としても兄等によつて誌された記事が穩當なものと承認してゐた。
三人は俥を備つて一列になつて北に行つた。
晩夏の眞晝に展開せられた此國の田舍路を見ることだけはたゞ珍しかつた。しかし其等の掩はれた緑に勝つた象景は、自分等の國と宛然酷肖して、たゞ其處らに水牛の居ないと老媼の影の少いばかりが差異てあつた。私は人よりも寧ろ其の田舍の自然景の親しい眸を知つた。
若い娘達が背に餘る籠を負ふて、淺黒い脛に跣で歩いて來た。
『藝妓の前身だ』と後から耿が聲をかけた。昨夜の想像を此處に具象したやうに思はれて、私は下を行く娘達の顏を手拭の影に瞰た。
車夫が『路が昇り路て』と言ふので、中途の小さな茶店で暫く降りた。
光のしたに靜寂な自然に包まれて、何等の葛藤も識ること無しに育てられてきたのらしい白い老翁が茶を汲むて來た。然し彼の腰が一室より有たぬ奥に隱れると、すぐ何か呶々と爭つてゐるらしかつた。そうして其につれて若い女の聲が、彼の枯れた呟きに縺れて聞えてゐた。
汗を拭きながら車夫は各自に私達を眺めてゐた。然し其等は隔ての無い眸ばかしを幷べてゐるのだつた。
長崎は港としては却て氣持の好い住民地なのではあるまいか。
一時間たらずして、私達は新しい玄関の蹈石を瞰た。
奥の廣間に通つて、障子ガラスを透してみた周圍は如何にも沈著した低く展がつた畑ばかしてあつた。萬象閣といふのださうな。
鼻の赭い肥つた主人が現はれた。彼は先日胡適さんも御泊りに成りましたと言つて、御悠久りと稍禿げかゝつた半白の頭を見せて去つた。

三人は心のどかに脚を伸ばして、四邊を見まわした。貲が眞底からうまく吸へた。

　溫泉といつても、石で疊むで普通の風呂場に、清澄な藥湯が湛へられてあるだけであつた。其の溫泉も是が一軒に過ぎぬといつたのが、私達の其の折の氣持に何となく相應して悅しかつた。梁は湯に潰りながら詩を歌つたりした。親しい仲が湯の滴さへ響くやうな靜かな潤い浴場で思ひ〳〵に手械を弄びながら、存分に話しつづけた。

「亡命も惡くは無いぢやないか」と耿が言つた。

「何も皆忘れてしまふんだ」と梁が言つた。

　輕い浴衣を著て、漸く出てきた三人は復たスキヤキを食べた。

　そこに女中が二枚の名刺を持つて來た。其は長留さんと、本山さんのだつた。

「二階に上つてゐられます」と女中が言つてゐた。

「僕が會つて來やう。話が面倒だつたら來てくれるんだぜ」と梁が言つて女中と出て行つた。私は膳を後から作らせて持たせてやつた。

　一時間もして笑つてゐる梁が還つて來た。

　二人は「僕達は喰つてゐるんぢや無い」と言つて箸をつけなかつた。拍文蔚氏の在所を知してくれと賴むだし、昨夜の宴會に横田さんと行つたのが公明正大で無いとも言つた。また何か梁の話に感心をして梁を政治家だとか讃めた。そうして五十步百步といふのと新聞の材料(たね)、もつと上(かみ)に御坐り下さい等といふ日本語を敎へられた。二人は愉快に歸つた。と梁が話して

「面白かつた」と笑つてゐた。

　さて私は更にくつろいだ。拳銃も鞄に入れた。梁も悠々と盃に親しんだ。

　夕暮までの無爲の時間は、其時の氣分に恰適した長さを保つてくれた。夕餐を更に暖く喫して、やゝ肩にうつすりと冷氣を感じだした三人は、ドテラを纏つて庭に卸りた。少女の薄い灯を先にして、後の小高い公園に昇つて行つた。夕――夜の氣配を此時ほど微妙に納受したことは無かつた。堅い下駄を黑い坂に引摺り

ながら誰も默つて、曲折した綠の下道を辿つて行つた。昇りつめた山の中腹には大きな臺石と小さな亭とが据えられてゐた。一面に柔い芝生のうへに纔に淡綠な光が薄く漂つてゐた。高い松の幹と其頂きとを私は仰いだ。長崎の方にちら／＼する燈を眺めた。

すべて忘れてしまいたい心に、多くが思出された。『すべて忘れないやうに』甲板で手を握つた未成さんの言葉をも思出した。

梁は臺石に、耿と私は亭の椅子に腰を卸して、マッチを摩つた。少女は灯を裾の邊に垂れて海の方を見てゐた。

『血も熱も劍も何處かへ去つてしまつた。』梁が斯う私に言つて短く笑つた。

『然うかい。僕は今九江の掠略を思つてゐる』と私が言つた。

『なぜ、あの時に軍艦奪略をやらなかつた。あんなに詳しく計畫したぢやないか。圖まで寫しとつて』と彼は煙を徐かに吐いた。

そして彼は、私が手飼の部下約六十名を四艘の小船に分乘させて、各自に拳銃と爆烈彈とを用意させ、豫定の如く午前一時半から、二つの敵艦の上流に浮び出たものだと確信してゐた。と言ひつづけた。

彼は宿の二階の窓に顏を出して、碇泊する軍艦の燈と時計とを見比べながら、何回か煙草を吸ひかへて待ちあぐんでゐた。劉も龐も其處に來てゐた。龐は私が失敗したならば射擊や爆烈彈の響が烈しくするに違ひないから私を收容の爲に出て行かなければ成らぬ。成功したときには軍艦は概ね曉ちかく機關の響を起てるに定まつてゐるから祝盃を上げなければならぬと言つて、梁と肩を合はせて一しよに甲板の燈を瞶めてゐた

二艘は然し依然として流し燈を離してゐるばかりてあつた。午前三時ちかくなつた。劉は床のうへに仰臥して輕い鼾をたてゝゐた。

何名づゝを各艙口に分つて、上つてくる敵の總てを脅かすべく、是が二三名は殪さなければなるまい。一部は是と同時以上迅速に小銃架を押收して已むを得なけ

れば流に拋棄せなければならぬ。幹部は先に艫の艦長室副艦長室等を襲ふて少くとも是を檻禁せねばなるまい。歩哨は何としても第一著の犠牲に供へなければならず。喇叭手や警鐘や警笛には特に擔任を定めて其の吹奏や打擊を中止させねばいかぬ。下流のものが開始するに先立つた上流から著手しなければ二艦とも共に成功することは覺束ない其他云々といふ龐は自分の計畫を梁に話して、二人は時計を出しては焦躁してゐた。

突然、燈が烈しく明滅した。

『人影が亂れてゐるのだ』と龐が言つた。

『何も音がしない。うまく言つたな』と梁が言つた。

燈は猶ちら／＼と短く明滅することを止めなかつた。

二人は斷續する多くの燈光に、瞳を暗い中で凝らしてゐた。

一聲の喇叭が高く響いて、二人の胸は見あはせた。

梁は劉を起した。

「此の家の門を開くやうに仕て置かなければ」と龐が言つた。

「何しろ未だ」と梁が言つた。

喇叭は最う響かなかつた。靜かに晨になり初めた。

橋の先端が薄く見えてきた。

「何うしたのだらう」龐が言つた。

「も少し見なければ」梁が言つた。

「斯んな靜かなわけが無い」と龐は梁を見た。

雞が遠くて鳴いた。

「やらなかつたんだよ、君」と劉が睡さうに巻に火をつけた。

舷のいろが見えた。其附近の光景は平常の晨を示してゐた。

三人は路から顏を見られるのを氣にして、中に入つて、暫く煙草を吸つた。

「をかしいね」

「然し何うしたらう」

三人が私の行くへを心配しきつた——

と、梁は煙草一本を吸ひきらぬうちに喋りつづけて「なぜ、やらなかつた」と改めてたづねた。

私は大いにをかしかつた。妙な芝居の話を聞いてゐるやうな氣が仕て笑はずにゐられなかつた。

「あれは武器を楊が呉れなかつたからだ」と答へる他に何も言ふことは無かつた。

「ふう―」と梁が煙草を棄てゝ蹈むだ。

耿が笑つて聞いてゐた。私も復た笑つた。

話は其時の前後にわたつて、きれ〳〵の思出が二人を包むでしまつた。新聞にばかし氣を腐らしてゐたと言ふ耿も耳を澄ましてゐた。

私は梁と劉と龐と四人で一番小さい民船を無理に出させた夜のことを思つて話しだした。

其は私の擔任すべき軍艦奪略が、ふとした武器の手違から不能になつた所に、李烈鈞君が上海から湖口に降りたといふので、四人が午後の十一時すぎに九江から下つて行つた七月八日の夜であつた。

其夜は風も强かつたし、雲も低くかつた。星も無かつた。「すぐ其處までだから」と寢てゐた船頭を賺かして、中流に出た。下流から吹き荒む風は高い浪を舳に衝いて、四人が辛うじて坐ることの出來るだけの小舟は悉く搖れた。

一枚の白毛布を引張りあひながら皆が飛沫を防いでゐた。龐は直ぐ暈つて靴を枕に仰いてゐた。そして時も起上つては舷に取りついて吐いてゐた。

「弱いね、君は實際弱いね」と私が言つた。

「舟には負ける。こんな船頭の櫓で舟が行くのか知らん」と龐が苦しさうに言つて寢た。

梁と私とは留學時分に聞き覺えた日本の詩吟をやつて船頭を驚かした。

「やれ、やれ」と劉が叫むでゐた。

すると突然、淘然と劉が河の暗い中に墜ちた。

「あ」と私と梁とが叫むで援へやうとしたときに、彼が舷に掛けた掌と首だけが仄白く見られた。龐は同時に起上つて。

「危い、何だ、危い」と叫むだ。

「大丈夫だ」　劉は徐かに言つて、漸く上つて來た。

「成つてないね。すつかり濡れた―」と劉は上衣を脱ぎ

だした。

三人が笑つた。

「おや、拳銃を落してしまつたぜ」劉は腰革を探りながら言つてゐた。

「身代りだから好いさ」と龐が言つた。

船頭の眞黑な姿が動きながらこちらを瞰てゐた。

「長江に墜ちて助かつたのは僕だけだらう」と劉が顏を拭いてゐた。三人は複た笑つた。

船夫は最う是からは行けぬと言ひだした。亞細亞石油會社のタンクが薄白く見えてゐた。

「それなら拳銃でやらせろ」と私が日本語で言つた。賃銀を五倍にするからと言ふ條件の下に船頭は櫓を繰つた。更闌けて風は異常に私達を邀へた。

「岸に沿ふて行かねば浪が高くて行けません」と船夫がまた言つた。

「何でも好いから中流からやれ」と梁が言つた。

帆船や民船の多くが繋つてゐる岸を行くのは、私達にとつては猶更に危かつた。

「砲臺だよ。靜かに〳〵」と劉が日本語で言つた。

金雞坡砲臺は陳廷訓の爲に、明かに敵のものであつた。

やがて其の前を下つて行つた。四人は砲臺の方角を暗中に瞶めてゐた。

暗い空と暗い浪の裡に、私は測りがたい前途を想つて、胸が明るくなつたり暗くなつたりした。

「こゝで暫く憩まして下さい。もう三時間あまり漕ぎました」と船夫の土語が何と言つてもきかなかつた。また彼は激しい黑い浪と戰つて確實に疲れてゐた。

そこには澤山の船が密集して眠つてゐた。二三の灯が其の間から洩れてゐた。

「盜賊がゐるかも知れない。斯ういふ所にはよく居るものだから」と劉が日本語で言つた。

「此の奴、其の連類ぢや有るまい」と梁も日本語で言つて、「早く出させやう」と支那語で言ひ足した。

「誰か來たぜ。此方を見てゐるやうだ。一發喰つたら舟ではしまいだ」劉が言つて暗を透かしてゐた。

起き上つてきた龐が拳銃を取出して、

「暗いね。安全瓣は何處だ。よし、々々、斯うして置けば大丈夫」と言つてゐるうちに、船夫が櫂を執つた

九日の朝に私達は漸く湖口の岸に著いた。

十一日の夜に李氏は討袁軍の獨立を宣言した。其時來あわせた未成さんが彼の新聞に電報を打つた。

「其を僕が見たんだ」と耿が言つた。

少女は一つ所に立つたまゝ動くこと無く、同じ姿勢で灯を提げてゐた。

三人は漸く腰をあげた。室に還つてみると二階で日本人が騒いでゐた。

私達は復た入浴した。隣りの湯槽では女達が何か靜かに話してゐた。

荷物は宿屋のものに事づけて、三人は灯に送られながら停車場に來た。切符と寢臺券とを買ふのに、二十分あまりも費した。梁は其の慢々的を嗤つてゐた。

耿は彼側のフォームに立つて、燈の下で笑つてゐた

上下の汽車が一分々前後して着發した。後に立つて私達二人を先刻から眺めてゐる日本人がゐた。

「警察だね。きつと」と梁が私に囁いた。

列車の窓から耿と別れた。彼は烈しく首肯いてゐた。

車童に又例の心得たやうな顏を見た。彼は寢臺を造りつけながら、私達の方を見ては時に笑つてゐた。

室には八つの日本人が何れも腰を架けてゐた。一つの白人が隅て寢てゐた。鼻の上に英譯のモーパッサンの小さい短篇集が乘つてゐた。

「一等に乘つて寢臺に寢る支那人も居るからね」と一人が言つたのを、傍から一人が制してゐたのが聞えて、服を脱ぎながら私はそゞろに笑つた。

梁は上に私は下に寢た。

「門司では林虎が來たといふので、新聞記者が二十人も來てゐたさうだ」と梁が言つてゐた。

「誰が言つたのだ」

「今日來た新聞記者の一人が」

「誰が林虎が來たと言つた」

「僕が長崎で言つた。然うしないと彼は出て來ること

が出來ない」
林君は此時實際は湖南省の長沙府に獨り最後まで殘つてゐたのだつた。そして其方面に對する警戒は日に嚴重を極めてきたので――皆が多く湖南の洞庭湖方面から下江して來たから――最後の林君に就いては一同が配慮してゐた。從つて記者諸兄によつて、彼が既に所謂來朝したと書いて貰ひたかつたのは、梁一人ばかしては無かつた。昨夜横田さんが嚇怒した梁の言葉の裡には斯うした希望も實は含まれてゐたのだつた。私達は其處に記者諸兄を欺いた苦しさを、其の同情に依つて許容せられんことを茲に願ひ且つ詫びる。

列車は私達を運むで行つた。

門司に着いた時には最う日が山を離れかけてゐた。

何回か既に通過してゐても、停車場から波埠場までの坦かな白い街のほかに、門司といふ市に就いて私は知つて居なかつたゞけ、いつも下の關海峽を九州――山陽線の直通に依つて運ばれて去くべきが、普通のやうに私自身に思はれてゐた。其の朝は然し著車と發船との間に五十分ばかし餘裕が有るやうに鐵道院の旅行案内の數字に誌されてゐるのを、車中で豫め知つてゐたのと、猶殊に其邊ての新聞記者の關門が忌避と言ふのでは無しに、單純に淡い感傷をたゞ齎してゐたので、荷物はボーイに札を結ばせて任せきつたうへ二人は改札口を斜に出ると直ぐ傍の俥にいきなり腰を上げて直ぐ舵棒を擧げさせてしまつた。

正服の巡査が始めから二人の顏を若干の距離を置いて瞶めてゐた。そして車夫の頭を小聲と共に何か囁いてゐた。

二臺の俥は理由も知らずに、たゞ梁のステッキが指すまゝを馳せて行つた。梁は右、左と言ひながら無暗に奔らせてゐた。其のクラヴネットに半ば匿れた耳朶を後から眺めながら私は輕い興味を、朝の空氣の中に覺えて微笑して見てゐた。車は路を拔けたり切れたりして町の餘ほど奧の方に軋つて行つた。ステッキが軍刀でも有るかのやうに梁が肩の上に其の石突を現はして膝の上に其を突き樹てゝ居るらしかつた。疎らに路

行く人は梁の斯うした姿態を遠くから覗戌つて嗤つたり怪しむだり仕てゐた。高聲をあげて振回りながら喝采して行く小僧もゐた。「速く、車さん、早く、々々」と梁は沈むだ聲をしてステッキを揺つてゐた。門さきを掃いてゐた中老の下婢らしい婦人の、腰を伸ばして私を瞻あげてゐた眸が、朝の光をうけてゐた。

だゞ素通りに斯うした風に驅け巡つて行つた門司の街頭は、忙がしい私の眦に新しい街の氣を其ても遺憾なく殘して行つた。老舗や、藏並や、古い瓦と、古い樹に乏しいと言ふ以外に、たゞ活々とした若さが街を圍つて、そこに動搖して湧きあがるやうな氣脈が底に籠つてむら〳〵仕て居る樣にもうけとられた。また其が晨の晴れた雰圍氣に包まれながら、沈著した慌たゞしさに馳せ抜けて行つたのに、自然催した氣心が、主觀的に門司を抱擁したからと言ふのでも無かつたやうに思ふ。

俥は絶大の速力を梁にそゝり出されて居るかのやうに思はれたほど迅く奔つてゐた。

十數分をすぎて、梁は左側の、青い硝子を穿めた兩方の扉に、西洋料理屋と小さくゴチック字を黑く印けてゐる閾の前て、車を止めた。

水に濡れて光つてゐる坦かな敷石のうへに、二人の俥さんは汗に塗れながら、紙幣を掌に載せて、息を噴いてゐた。

二人は閾を押して素迅く入つてみた。まだ薄暗い狹い右手の空の中は、卓掛も花瓶も造作なく卓の片隅に圍まつてゐた。低い天井に一面に塗られた胡粉の白い色合を仰ぎながら私は、すべてを右脇に並むでゐる梁に任せきつて立つてゐた。

彼は閾の動搖を押へながら、

「未だ出來ませんか」と聲をかけた。

森閑とした濕つぽい空氣が依然と二人を圍むでゐるばかしてあつた。

「很好（ヘンハオ）」と梁は短切に言ひきつて閾を猛烈に突いた。

外の敷石の横に白い洋犬が老耄した顏をして、睡つてゐたらしい眼を私達に示してゐた。

二人は大跨に舊の方向に暫く引き復した。直ぐ横町を發見するやうに思はれてゐたのが三分ばかしも同じ路を默つて歩いた。そして四角のポストの線を右に折れた。狹い靜かな町が二人の前に延びた。二人は其處に第一の横町を復び曲つた。最後に梁は一つの見すぼらしい西洋料理屋を發見した。扉の把手をひいて胸に衝き當るやうな荒削りの階段を二人は昇つて行つた。

「何しろ腹がすいたね」と梁はクラヴネットを脱いで黑い折釘に掛けながら言つた。私は渴きを覺えてゐたので、其のまゝ腰を卸して取りあへず燐火をすつた。漸く悠るく煙を味ひながら、凡てが壓へつけられて居るやうな室内の光景を瞻てゐた。戸外に何か小供が喋りあつて行つた。磨硝子の低い窓が光を浸み込ませて鐵格子の影を太く映してゐた。

「をい、何うした。最う新聞記者も警察も大丈夫だらう」梁は後て帽を掛けてゐるらしかつた。

「警察は世界第一だつて言ふぜ」と私は冷やかしてやるつもりて言つた。

「ふん」と彼は言つて私の前に廻つて來た。腰を架けて頰杖をつくと、まぢ〳〵と私を反對に冷評するやうな眼をして眺めだした。

そこに給仕女が現はれて來た。極めて圓い瞳と濃い睫毛とに、いそ〳〵した力を有つてゐる總體に薄紅い婉曲な顏が、肉つきの好い稍低い體格と善く調和してゐた。全く無造作に「いらつしやい」と輕く言ひながら、人を包みこむやうにして接近してきた。私は洋妾といふ字面を思浮べて其の女の膨れた胸の邊の圓みを瞻てゐた。彼女は

「なぜ、黑眼鏡などを掛けるの、衞生？」と卓の端に凭れると私に言つた。そして

「何に仕ませう。隨分早く來てね」と二人を交る〳〵瞻ながら、私達を了得してゐるやうに、また全く沒交渉のやうに唇を動かした。門司て、斯うした私の聞き慣れてきた東京言葉を聞くのは意外てあつた。同時に「此の女」といふ興味が持上つてきた。彼女は私の帽子をも脫がせた。且つ眼鏡を脫つて見せてくれと言つた

り仕た。梁は此女が出現すると復た豫想の如く沈默して、冷やかに濟まさうと仕てゐるらしかつた。談判は當然お前の仕事だよと謂つた風の面をして、頰杖をついたまゝ私を眺めてゐた。女には一瞥をも惜しいと言つてゐる面も現はれてゐた。

　私は時計を見た。

「此處から波止場まで何分かゝるだらう」と私は細心の注意を拂つたアクセントを有たして、女と視あつた。女は瞳を上に逸らすと

「十分か二十分くらいかゝるんでせう」と、宛も熟考し得た眞面目な結論を發表するやうに言つて、復た私を瞰た。

「何うしたら十分で、何うしたら二十分だね」と私は襟をかき合せて顎て押へてゐる女の、豐かな腮の肉片を見た。私は此女に時間の許す限り物を言はしてみたかつた。

「隨分面倒くさいことを言ふのね。貴方」と言つて女は嘲るやうに笑つた。復た梁の方を見て

「ねえ、貴方」と言つた。

「ふん、ふん」と梁がたゞ首肯いてゐた。

「此の人はね。八年ばかし佛蘭西に行つて勉强して歸つて來たのだから、餘程日本語がまづく成つたんだ。最う日本語を話すのが面倒くさいんださうだ」

と私は女と正面に向いて煙を吐き出してやつた。

「あら、然う、おや〳〵」と女が言つた。そして

「ステキねエ」と大きく長く冷淡に言つた。女の齒並が稍錯雜して右の犬齒が薄黑く引込むでゐるのを見上げながら私は女の言葉に流し出されてゐるやうな氣がした。

「何、スキヤキか」と梁が獨言のやうに言つた。

そして彼が私に一切を任してゐるのが會得せられた。

　女は忍笑をしてゐた。

　連絡船の發するまでには二十分も餘つてゐなかつた。

私は立つて行つて梁のクラヴネットの右衣嚢から旅行案內を出してきた。未成さんが素破らしく大きく造ら

せたらしい其の衣嚢には、梁が拳銃も手帛も手袋も新聞も手帳も錢も突込むでゐた。

しかし連絡列車が下の關を出るまでには、猶四十分餘りもあるやうに誌されてゐた。

「お互の時計は鐵道のと同じかい」と支那語で梁にたづねてみた。

「さつきは三十二分僕の進むでゐたよ」と彼は漸く頬杖を脱して、私の煙草入を引寄せた。

「其れがフランス語？」と默つて笑つてゐた女が突然言つて、短く笑聲を迸らせた。

二人の時計はいつも合つてゐるのが例に成つて來たので、私は乗船にも乗車にも快い餘裕を覺えた。

三四品の料理が運ばれた。併しパンは堅く汁は薄く肉は乾いて凡てが朝鮮のやうな味がした。二人が何れも中止して仕まつた。反抗的な光が女の瞳に浮いてゐた。

「廣島て牡蠣を食はうね」と私が言つた。

「うむ」梁は壁に下げてある郵船會社の廣告を見てゐた。美女が美欄に椅つて出航の煙を見送つてゐる色彩が窓越しの明るい午前の光に漂つてゐた。

バナヽと梨子とを二人とも意外に多くむいてしまつた。

書簡紙と封筒とを買はして、私は未成さんに可なり長い手紙を認めた。

「面白くもあり、つまらなくもあり、たゞ莫迦々々しくもあり、即いても居り、離れてもをり、行くとして可ならざるなく、不可ならざるは無し、亡命なるものも亦――」まで書いてみて、何だか彼に見透かされるやうな氣がするのが、擽つたいやうに思はれたので、其の一枚を破つてしまつた。また日本文を舊い留學時代を思出しながら綴つて行くのが、すぐ鈍い倦厭をも思はせたので、出放題に華日同盟文を例に依つて塗りたてゝしまつた。最後に「何て間がいゝんてせう」と附加へて、暫く通信を中止して放浪するのだとか言つて悦むでゐた彼の近い前途を祝福した。

「己も書いてやらう」と眺めてゐた梁が手を延ばして

何か二三行を直ぐ書いてしまつた。

見ると

「日本も未だ駄目だ。僕は焦げつきかけるスキヤキを何邊も急いで食べなければ成らぬ。そうして何んな味がしたか分らなかつた」と字が斜めに躍つてゐた。

「スキヤキが大分出てくるね」と私は言はずに居られなかつた。

「だつて君はスキヤキばかし食はせるぢやないか」と彼は萬年筆を僕に渡した。彼が勝手にスキヤキを食つてきたのを私が恩に着なければならぬやうに思つてゐるらしい口調と面を更にして暫く微笑してゐた。彼は復た。

「最うスキヤキは嫌だ」と言つた。

「自由に食つてゐたらしいぜ」

「食ふのは自由だけれども、食はせる者がゐたから食つた道理ぢや無いか」

「えらく理屈を言ひだしたね、其から」と私は彼が斯んな事を言ふ珍らしさに向つて少からぬ興味に乗つてきた。

「理屈ぢや無い。スキヤキは嫌になつた。そこらスキヤキだらけだ。君も日本に來てみると、何だか從來からスキヤキ臭かつたんだ」と彼は未だ封のせぬ手紙を投げ出して言つた。

「それて君にスキヤキばかし御馳走したと言ふのかい」と私は言つて、始めて長崎以來の彼の裏面が展かれたやうな氣がした。

「然うさ。君は餘程僕よりスキヤキが眞に好きだ。君自身が大分スキヤキの臭がするぜ」と彼は徐かに言つて、諷ふやうな「其見ろ」と言ふたやうな眼を仕た。

彼が杖を揮りまわして、しきりなしに早く々々等と俥夫に言つてゐたも此のスキヤキの臭からきて居たのらしい。

「成る程」と私が言ふと、

「それみろ」と彼が説破し得た誇を具へて言ひすてたので、私は思はず噴きだした。彼も直ぐ哄笑した。

滓の多い珈琲をあてがわれて、唇を著けた梁は碗の

底を輕く瞰下しながら、辛うじて其の一くちを噉みこんだらしかつた。彼の横に佇むてゐた女がをかしさうに梁の横顔を客觀してゐた。梁はちらと女の顏を瞻て、また私を視た。そして彼は直ぐ上衣の衣嚢から五圓紙幣を摘みだした。洗ひざらした卓掛のうへに其を置き捨てたまゝ、私を眺め續けてゐた。スキヤキが未だ顏に殘積してゐるやうな彼の其の面つきが眞面に笑止に思はれた。彼は柔かに苦笑した。椅子を離れてクラツネツトと帽を手ばやく著けて、私の兩肩を壓へた。

「さア去かう。廣島の牡蠣を食ひに」と言つて輕く私を捺つた。私も漸く立上つた。梁が昇口に立てかけて置いた例の黑檀の圓いステツキを提げて、私は先に降りて行つた。梁は階段の下で女の圓ぽつたい掌から釣錢を受けとつた。

「握手」と彼は其の女の掌を取つた。輕く振りながら「左樣なら」と言つた私は構はず獨りて烈しく出て行つた。

二人は隱やかに停船場の方向に歩いて行つた。

停車場に通ずる眞直な、最も殷賑らしい街の上も、私の心には靜かなものに映つてゐた。

店さきに堆い果物の澤々しい色彩と、轢轆と過ぎて行く荷物の響とが、午前の空氣の中に沈著した調和を有つてゐたし、玄海灘の方に夢のうへの白雲が明るく浮いて居たりして、光を胸に浴びながら私は、周圍の物音と色彩と悠くりした旋轉とに、日本の和やかさを熱つと受けとつた。

停船場に出る所の左側に建てられた、小さな白ペンキの待合所に、久く默つて來た二人は前後に入つてみた。卓のうへに二三の新聞綴が載せられてゐた。

其に隣邦時局紛糾と掲げてあるのを見ても、私には夫等が現在も過去も自分と全く別のものに思はれてたゞ二人は各自に無意味に頁をはぐつてゐた。「何だ、こんなもの」と言ふ氣が底に動いてゐた。そして是から先の旅行を何としても自由に、透徹した唯の人になつて通したかつた。「亡命」といふ字から免れたい念が熾烈に胸を衝いた。

また然し他からしては如何にも亡命其のものを具體してゐるのに相違なからうとも、主觀としてはたゞ單純な路傍の旅人に過ぎない私達は、遁れて來た等といふ思も、戒愼などゝいふ趣も、決して胸の一はしにも影を差してゐなかつた。從つて畏怖も氣兼も夫等は悉く最初から度外視せられてゐたのだつた。

それを、戀を戀するやうに此國の新聞記者は、自分て自分を好奇心と、浮氣らしい氣紛れの俠氣らしいものとに浮動させて、其の特有の唇とペンとに私達を迎へやうとしてゐるのではあるまいか。

辛うじて今門司を無難に遁れやうと仕てゐる私は記憶に殘る對岸の、下關停車場の步廊を思出して、思はず眉を顰めた。

旅行案内の時間がきたので、私は梁を誘つて船著場に行つた。併し改札口にゐた驛夫は

「ランチは最う出ませんよ」と慳貪に言ひきつて、冷やかな鋭い一重瞼て、二人の身裝に撫て廻した。

「之は」と私は旅行案内を展いて見せた。彼は見むきもせずに、睫毛に乏しい眸を私に注ぎかけた。

「其は變更したん」と言つた。

「日本の鐵道院は不信用だね」と梁が日本語で言つた驛夫は排他の光を明らさまに瞳に滿たしたまゝ梁を凝視した。唇を動かしてゐたが默つてゐた。

二人は引きかへして、眼の下に幾つも浮むでゐる艀船を呼むだ。

「汽車に間に合ふかい」と私が聲をかけた。

「えー、今ならば大丈夫」と船頭が答へた。

二人は危い橋と梯子とを蹈むで、其の艀船の一つに飛び込むだ。

船は深綠の淵を渉つて出た。

談判を仕てみた船賃が法外に高かつたのに梁がスキヤキ式に不平を言つたのと、警官が別の艀船に乘つて若干距離を並行して漕がせて行つたので、私は船を材木の層積した陰に著けさせた。そして二十錢銀貨を渡して扁い石段を昇つて復た土のうへに立つた。船頭は無頓著に笑つてゐた。

二人は竹柵の側を傳つて、極めて悠くりと歩いてゐた。海峽のうへの汽船の煙筒や艀船のうへの紅い蝙蝠傘などを望みながら、佇むでゐた。

やがて復た前の艀船の上に出た。煙草を暫く吸つて

「佳い天氣だね」と私が言つた。

「あゝ、最も行くのが嫌になつた」梁は斯う言つて「門司て止まつて仕まはうか」と切句した。

市にしては小さく、里にしては大きいやうな門司は暫く止まるのにしても、私の氣にふさはぬ思がした。同時に何となく其の街の一境が扱ひにくいやうな氣もした。

「いけないね。第一つまらない」と私が言つた。

「何處へ行つてもつまらないぜ」と梁は私を見た。

「門司は猶つまらない」

若い渇いた町として、潤ひに乏しい街として、門司に一夜以上を過すのは確かに嫌であつた。

二人は其のまゝ復た艀船を呼むだ。前と同じ船に同じやうにして橋と梯子とを踏むで乘つた。船頭はたゞ笑つて漕いで出た。そして猶同類の一人を新しく呼び加へた。

發車の時間は切迫してゐた。二人の船夫は協力して襤褸のやうな帆を樹てた。聲を合はして漕ぐことに猛ましい全力を集注してゐた。

深碧の水は光つてゐた。光に飽和して其の剩餘を反射してゐるやうな色合を私は瞰ながら運ばれて行つた

「何だか面白いね」と梁が言つた。スキヤキも名殘なく拭きとられてゐるやうな面を仕てゐるのが、新しく笑止さうに私は繁々と、彼の面を視てやつた。

彼は短く笑つて見かへしてゐた。

舊式の型をした石炭船が、他の船には無頓著さうに、獨り斜めに錨卸してゐた。

「おや、俠黄さん——李烈鈞氏——の乘つて來た船だよ」と梁が其の舷の上端に横に誌されてゐる白い××丸といふ字を讀むだ。

「さうだ」私は偶然が齎す興趣を覺えた。

近づいて行つてみると、其は一字が違つてゐる石炭船であつた。

「違ふよ」と梁が笑つた。

「違つても面白い。兎に角何處にか其船が居るんだらう」と私は人の見えぬ甲板を仰いだ。

「矢張り面白くても亡命だ」

「こればかりは違ひない」と二人が言つた。

下の關の船著場には人影が疎に動いてゐた。梁も私も細かい金を持合はせてゐなかつたやうに思つたので、船頭は汗を舗道のうへに覆しながら跟いてきた。梁は停車場の構内に店を持つてゐる冷しビールの一つを快く飲み干して、五圓紙幣を出した。釣錢のうちから船頭は勞銀を受取つて還つて行つた。私は彼の後姿を眺めた。

二人は急いで客車に入つた。あらゆる新聞と一冊殘つてゐた「太陽」とを賣子から購つた。

「小錢が有つたんだ。カクシに入つてゐた。西洋料理屋の釣が」と梁は笑つた。

私が「太陽」を擴げると列車は動いた。荷物はボーイの注意によつて體裁よく並べられてゐた。

「太陽」で私は同車の人の眸を保障した。其の目次には「得意の袁世凱」とか、「亡命民族の性癖と支那の將來」とか謂ふのがあつた。「亡命客と日本人」と謂ふのもあつた。終りに大きく「逆徒」と誌されてゐた字面が妙に眼を惹きつけた。袁世凱は今未だ決して得意でも無からうし、亡命民族といふ語も理屈なしに面白く見られた。口繪には李王世子垠殿下が勳章をつけて正面に坐つてゐる彼の中央幼年學校豫科を卒業の寫眞が挿まれてゐた。私は未だ少い彼の胸を忖度してみた。

本文では袁世凱も亡命民族も讀む氣が起つてゐなかつた。そしてスケッチ、田山花袋といふ所に行つて始めて其の植字の二段にした體裁が輕いカットと共に、拾讀をさせた。其には、「　」から私は言つてみた。「　」などゝ私は考へて見た。「　」などゝ私達は話し合つた。などゝいふ言葉が綴りあはせられてゐる其の文句が面白かつた。

南軍の領袖が船て亡命して來てライフの潮流が何とか仕て瀑のやうだと書いてあつたので、つい噴き出してしまつた。夫ほど業々しいやうに思つてゐるのかも知れぬ田山さんを通じて、文士といふ面影を私などが窺つてみるのは速斷であり將た盲斷であらう。

しかし、唯それだけに過ぎぬ事を彼方に持つて行つたり此方に持つて來たり仕てゐるやうな氣風を弄ぶことが、所謂此國の文壇と謂ふものゝ首要な仕事になつてゐるのでは有るまいかと、職掌から見なければ成らなかつた日本の新聞や雜誌や著述などに依つて兼てから想像してゐた私は、此の「スケッチ」といふ一文を拾讀むでみても、新しさうな古さが何時までも執着してゐて、此の執著を離れては生きて行けぬやうな人達の面目が窺はれるやうに思はれた。また自分だけは面白さうに、單に其だけにすぎぬ事を、然う言ふ人達が各自に方々に持つて歩いてゐるやうにも思はれた。「陸軍の長閥、非長閥」といふのもあつた。最後の「逆徒」と言ふのは自然に漸く精讀してゐた。そして或る意味に於て日本と支那との共通點を、之が事實を描いたものとすれば、私は發見したやうに思つた。

「太陽」を伏せると、私は右前に一人の將軍を見出した。彼は夫人に枕を與へてゐた。また親しさうに夫人と話し交はしては撫わつてゐた風姿を、私は千年も前の貴重品でも發見したやうに見てゐた。彼は笑つては夫人と話し、立つて日よけ窓を夫人の爲に閉め、毛布を敷いて夫人を寢かせたり仕てゐた。夫人は樸吶らしい中老の淺黑い面に和やかな色を見せて、優しく將軍のするやうに仕てゐた。

「食堂に行かう」と梁が新聞を投げだして言つた。

「好からう」私は同意して二人は將軍の前を過ぎて行つた。

食堂には未だ誰も居なかつた。梁は腕を上げて欠伸を仕ながら、また「あゝ、つまらない」と言つた。

「牡蠣は何うだい。廣島の」と私は言つた。

「もう、止めた。大阪まで行かう」、と彼は手を下すと卓を烈しく叩いて給仕人に

「エビフライ、エビフライ」と言つた。

「ウイスキーソーダ」と彼が復た言つた。

そして電報用紙を持つて來させて、彼は手帳を展げながら、未成さんに紹介して貰つた大阪の人に、今夜未成さんの友二人十一時に着く、よろしく賴むと書いた。

梁と私は食事中に未成さんを評しあつた。私は彼の朝日新聞に通信した轉覆したやうな文章を思出した。

梁は彼が白リンネルの服に白いヘルメットを冠つて、白いネキタイを仕て白靴を穿いて、いつも思ひがけない時に忽然と其の白い姿を現はした事を話した末に、著てゐる彼のクラヴネットの胸を見て、

「終日家に居て飯も食ひに來ないのかと思つてゐると何處かへ出かけて居るんだ。そして漢口から手紙を寄したりする。變な男だ」と言つた。

そうして紅茶を喫み干すと先に出て行つた。

室で一人日本式に造られた窓縁や簾などを私は眺めてゐた。珈琲の湯氣を瞰ては暫くうつとりと仕てゐたそして私達の次の客車に乘つてゐるらしい刑事の心などを考へてみた。其らしい男は下の關で船着場から私達を尾行して來たし、梁が麥酒を飲むだ時に傍に立つて梁の横顏を底光のする眼で瞻てゐたのだつた。

客車に漸く來てみると、梁は將軍に何か頻りに喋つてゐた。將軍は溫厚らしい笑顏を私に見せた。

「是は國の新聞記者です」と梁が私を見て將軍に言つた。次に彼は將軍が藤井中將であること、將軍が日露戰役の時に第一軍參謀長としてクロパトキン大將に畏れられた等と私に話した。將軍は唯だ笑つてゐた。私はシガーの箱を持つて來て蓋を切つて奬めた。將軍は梁の日本語に對して獨逸語で分らぬ所を説明した。私は佛蘭西語で將軍と話した。

梁は鴨綠江の話を始めて、將軍に意見を尋ねてゐた。

「はゝゝ、よく知つてゐますね」と將軍は言つた。そして若い支那の將官だなと言つたやうな柔かな貌をして梁を眸めてゐた。

夫人は靜かな面持を保つたまゝ、聞くとも無しに聞いてゐた。私は溫淑な日本婦人の一人に接したやうに思つて會釋した。彼女は依然とした靜かな自然のまゝに挨拶した。私は寛いで將軍と梁との會話を聞いてゐた。

梁は日本の士官學校に留學してゐたことを告げて、修學した初級士官としての智識ばかりでは歸國後に何の用をも辨ぜぬと言つて、民國承認の後には陸軍大學校へも、砲工學校とかへも、すべて留學生を入れて貰はねば成らぬと、自分の亡命を忘れて注文がましく告げてゐた。

「何、私達でも初めは皆然うです」と將軍が心に會つたやうに笑つた。

梁は袁世凱が自身の生涯をのみ頭に置いて國家を視ずにゐる實例をあげた。そして彼の性格を「困る」と言つて、將軍を笑はせた。私も笑つた。將軍の隣にゐた紳士も笑つた。

三人は暫く話してゐた。夫人は常に頰笑みながら、靜かに其を聞いてゐるやうな姿をして眺めてゐた。

梁は將軍にも獨逸軍艦が蕪湖を砲擊した裏面の消息に就いて吃々と話しつゞけて居た。彼は獨や英や米やが殆ど明らさまに袁軍を援けて憚らなかつた事々のうちにも、分けて此の蕪湖砲擊に就いては極端に憤慨してゐるやうに見えた。將軍は此の話に會つたときに、始めて今までの柔かゝつた面の筋肉を緊めて、梁を暫く瞶めて聽いてゐた。

「實際、其事に當つてゐた貴方達には殘念でしたらう冗談ぢや無い」と將軍の隣の紳士が半身を梁の方に寄せて私に言つた。

梁は樣々の實例を擧げて、各所の交戰に就いて袁軍內援に關する列國の擧措が端的に討袁軍に齎した不利を更に說明した。そして終りに輕く笑つてゐた。

斯うした話を聞きながら、私は最う東京とか京都とか兎に角何處かに著いて、各自が夫々の生活を始めてゐる時分の同志の周圍や、未だ國に居殘つて流轉の中途に焦躁してゐる親友の前後などに就いて考へてゐ

た。また曩に大連に行つたといふ戴天仇の事をも思ひあはせた。優しく拵へられたやうな小さな入海の黄い砂の隅に、漁師らしい人達が、小さな漁船の蔭に茶いろい網を擴げてゐた。

藤井將軍は黄い羅紗マントを著て、廣島驛で私達の手を堅く握いて下車した。私達は歩廊に凡てが謙讓なる彼を見送つた。夫人は頬笑みながら低い背を黒いショールに掩ふて跟いて去つた。

やがて鈍い倦暈を梁も私も感じてゐた。後頭に慴平した重さを覺えながら、すゝまぬ食事を二人は更にとつた。食堂から還つて來ると、二人は自然に默つてゐた。そうして途中の下車を幾度か思ひかへしては其のまゝ運ばれて行つた。

夕になると二人は直ぐ言ひあはせたやうに睡つた。物に心も何も彼も搖られるやうに、私は絶對の動搖と謂つたやうな感じを睡に入りながら受けてゐた。乘客が少く成つてゐた。

大阪驛に著いたときには十一時を過ぎてゐた。

「君達を迎へに出る時は紺の背廣と紅い襟飾、白い麥藁帽に白い靴、手帛を右の衣嚢に半分ばかし出して置くやうに書いて置くから、いゝかい」と未成さんが手紙を認めてゐた姿を想ひうかべながら、私は周圍の群集が忙がしく橋を昇つて行くのを、歩廊に佇むで待つてゐた。梁は煙草を啣えながら近くを徜徉したり、呉服店の大きな廣告などを眺めたりしてゐた。

手紙に書かれた姿の當人が何うした態で迎へてくれるかに、淡い興趣を覺えながら、私は軈て梁と共に注意して別々に歩いて行つた。そして間もなく橋の下に凝と佇むで此方を瞻てゐる白い顏を發見した。

「そうれ、居た。白い手帛を御覧、中々ハイカラだな」と梁が後から聲をかけた。私は微笑して更に其人を視た。

二人は彼の前を何氣なく横ぎりながら、其の小さい眸と物靜かな動搖の無い小型な面を眺めた。彼も私達の眼鏡を視て、輕く慌てたやうに手を擧げた。その唇が僅かに動いてゐた。私は此人の然うした擧動に彼が支

那人に會ふのは最初であることを認めた。そして準備してきた未成さんの名刺を彼に示して帽を脫つた。梁は直ぐ私の後に佇むで步廊を蹴つてゐた。

「えゝ」と其の人は全く快く首肯した。私達は彼と握手した。

「難有う御坐います」と梁が言つてゐた。

橋を渡つて、かなり濶い構內を大阪が始めての私は見た。改札口にも猶一人の人が待つてゐた。其はつゝましく日本服を著けてゐる實直らしい姿をした眸の大きい細面の人であつた。私は前の人の言によつて此人に荷物の事を鄭重に依托した。

三臺の俥は私達を運むで行つた。私は眼鏡を脫つて細い街を眺めた。街燈の多い兩側が直ぐ頭の傍を過ぎて行く、狹い町は殆んど戶を閉ぢて睡に落ちてゐたし、鐵橋のうへから瞰た川面には儚いやうな燈の多くが紅い彩を醸してゐた。大阪と冠稱しての夜の色彩は通りすがりの私の眼には、たゞ纖細な燈ばかしが間斷なく映るばかりであつた。

川沿ひの旅館に俥は止まつた。二階の奧まつた一室が明るく私達を待つてゐた。その室にはやゝ古い沈著を有つた、嚴丈に造られた總ての構造に、しつとりと仕た重さを見せてゐる氣分の深さがあつた。明るい電燈の光を快く加減よく浸みいらせて靜かに對應する柱や床や棚などやが、私を悅ばせた。厚い坐蒲團のうへに梁は其でも暫く正坐して、にこ〳〵と無邪氣に笑つてゐた。

其人の名刺に依れば眞淵秀夫といふ未成さんの親戚の人であつた。やがて日本服の人も來た。彼も眞淵姓であつた。柔い大阪の言葉のうちに、此の二人の凡て周到と實質を主とするやうな堅い性格が窺はれたのと同時に、格別に所謂亡命くさい味を私達に對手から匂はされるでもなく、將た彼等には亡命其のものが全く交涉のないやうにも見えてゐた。して私達は心から此の眞淵氏二人を悅ばなければ成らなかつた。

深夜に斷る二人を止めて、四人は小宴を催した。そして彼等は直ぐ醉つた。和やかな蟠りの無い笑顏に此

處て私達は久しぶりて會つた。未成さんの噂も當然話のうちに現はれた。また四人は其噂に最も興じあつた「何しろ、變な人てす」と梁が意外に早く結論を著けてしまつた。二人は更に靜かに笑ひあつてゐた。

遠慮がちな二人は暫くして、安堵したやうにそして鄭重に歸つて行つた。未だ懶い倦暈が殘續してゐるやうな私達は一所に入浴して、身體を溫めたり頭を冷やしたりした。背を流してくれた若い男も快く船の料理屋や納涼船や川魚等について彼等が專門的のものを話してくれた。仄暗い湯殿の裡て、梁がまた大分其と喋つた。上海から持つてきた香油を私の頭から不意に流しかけて手を拍つて悦むだりしてゐた。然し私は知つてゐる、彼は贋造の香油を購つてきて竊かに悔むてゐるのに相違なかつた。

翌日も佳い天氣てあつた。梁は大阪の最も殷賑な個所を求めた。私は眞淵氏の宅に返禮の挨拶の爲めに行かうと定めてゐた。電話て都合を訊ねて二人は戸外に出た。狹い衢に行人を避けては停まる自働車は却て遲かつたのと、道路の制限の爲めに意外に長い距離を歩かなければ成らなかつた。

其の時間に、商牌と商品とに色彩の錯綜した街と夥しい俥の烈しい徂徠とまた凡てが軟かさうな人々とに象徴せられた大阪の商賈といふものが充分に示し盡されてゐたやうに思はれた。同時に小規模な綺麗な舖に極端な進化の原理を見せつけられたやうな氣も仕た。自働車に日本第二の大市民が珍しさうに集まつて來たのも梁と私とに珍らしかつた。

眞淵氏の宅ては昨夜迎へに來て下さつた人の尊父が私達を主として接待せられた。また如何にも慈母らしい面もちの老婦人がよち〳〵と歡待に盡された。二人の心はたゞ歡むだ。また親戚の白髯を長く垂れた老人も來た。彼は私達に老人の興味を傾けて、快い無遠慮のもとに高聲に話した。

「なあに、日本に刺客などが來やしませんさ。もう御安心なさい」と活々とした枯れた聲て笑つてゐた。肥つた軀を低く埋めるやうに坐つてゐた眞淵老人は、手

を揉みあはせながら、輕く調子をとつて話してゐた。床のまに坐らせられた私には異鄕の老父を現實にしたやうに思はれて、鶴のやうな白い人と、布袋のやうな肥つた人とに交る〳〵心置きなく話した。梁は煙草や象牙の箸や眞珠などを强いて此人達に送つた。私も穿めてゐた指環を箱に收めて老婦人に呈上した。

やがて二人は其席に合議のうへて數へられた「天王寺」と「新世界」との二つを觀る爲めに城の前を南へ奔つて行つた。「天王寺」は有名少數な古刹としての名が私の記憶に殘つてゐた。

其の日は恰も天王寺の祭日であつた。暖い光を浴びた群集が織られるやうに蠢いてゐた。童孩の着物をいろ〳〵の色を綱に架け亘してある堂の奥に、肩を磨つて坐りこむてゐる人達の幷むだ低い背や、數も知れぬ龜の甲が日に曝されたり密集して浮いたり仕てゐる青濁の池や、瓦や古錢の夥しい寄附を集めたのや、そして戒名の札に長い竿の杓子て水を注いでゐるのなどが、古塔の麓に黄い埃の底に喧雜してゐた。

「面白いね」と私が言つた。

「これも大和魂か。スキヤキ君」と梁が獨りて笑つてゐるやうに答へて、塔の方に歩いて行つた。天王寺の歷史に就いては私は何も知らぬ。しかし天王といふ語に接しると、果して徹底した此國の國粹其ものを此寺が有してゐるものとは思はれなかつた。梁が復たスキヤキ式を持出すにしても、また斯うした古風な色彩を察したにしろ、大和魂などゝは冗談の輕率であるのだらう。しかし日本人の風習と謂へば、此の一境の裡に展げられた賑かな景象のうちに、其一端が隱かに含まれてゐたことは爭はれぬ。但しまた此の裡に漂ふ彼等の宗教心にまて云爲するのは所謂ヤボの事てあらうし全體そんな事を考へるのが抑々のヤボてあるのに必ず違ひない。

二人は薄暗い勾配の急な狹い梯子を職に蹈むて、漸く塔の頂上に現はれた。鐵網を透して豐沃な綠と、詰めこむだやうな甍と、其うへに搖曳く濃渇の煙とを眺めた。しかし東洋のマンチエスタアとしては、其が日

本人の獨特の名と言へば、之こそはスキヤキてもありまた白人が言つたものとすれば、スキヤキの下火に風を吹き込む類のものにすぎぬ眺望てあつた。

「何だ。をい、どうした」と梁が言つた、携へて來た雙眼鏡を放すと、「火事が盛んな筈だ」と私に其を渡した。城の方は霞むてゐた。

自働車は盆栽のやうな公園を走つて「新世界」についた。摩天樓とか言つたうへにエレベートルて載せ上げられた二人はオールライト言つて扉を開けた。

「誰てもオールライと言ひなはる」と昇降手が言つてゐた。

たゞ繁華な脚下の娯樂園を瞰て、太平の象がしみぐ\と私を首肯かせた。彼等は自分の周圍にのみ世の錯綜を味つてゐるほか、其の外には何も知らぬ氣に無邪氣さうに集散してゐるのらしい。取りのこされた逸樂の民といへば語弊が有らうし、また何も一々の瞥見に、ともすれば尖鋭なりやすい昨今の神經に專斷的の觀感を、印象などゝ謂ふのは確かに愚てもあらう。

二人は堅い柿を剝かして喫べた。梁は默つて西北の方に連亘する山を眺めてゐた。私は眼下の玩弄の瀧を瞰てゐた。そこて昇つてきた運轉手と三人が空中滑走と謂ふ宙乘を狹い鐵製の籠に乘つて、鐵線に傳はつて往復した。そして直ぐ降りて出て來た二人は更に自働車の窓から、同じやうな商家の軒並を見た。そして歸路には約束によつて再び眞淵氏の宅を訪ふた。

憲兵や刑事の多くが氏の宅を尋ねてゐた。梁はそら來たと言つたやうの顏を此處ても見せた。何も彼も其等に對する談判を私に任せて、何回か私に黑眼鏡をかけさせた。

來者は皆私の脣を視てゐた。

「日本語が善く御解りですね。驚きました」が皆の私に對する常套語てあつた。また私達が此家を來訪した所緣に就ても誰も訊ねた。各自が異つた態度と表情をして、同じ事を手帳につけて歸つて行つた。

中には袁世凱が上海の鄭汝成に逮捕を命じた同志の連名などを新聞から切抜いて、其所在などをたづねた

りした。それが支那人とさへいへば總てを新來の私が知悉してゐるやうに思つてゐるらしかつた。又同志の消息に就ても彼等が調査して總てを私に示した人もゐた。

私は苦笑した。梁と私が所謂刺客か或は諜者である者として、あのやうに仕て上海をたち、斯の樣にして是から東京に行くものとするのならば、餘程便宜な諜報的資料を此處に獲たものとせねばならなかつた。何を根據に彼等は私達を單純に亡命客として扱ふのであつたらう。彼等は實際私達二人の實姓をさへ全く識つて居なかつた。また同時に刺客や諜者が討袁同志の名を僞つて亡命として來たものとするならば、彼等は何に依つて其等を判別してくれるのであつたらう。正直な波瀾を知らぬ此國の人の眼識に私は輕い苦笑を禁めることができなかつた。とは言へ、私達に對する此人達の保護と其處に現はれた無報酬の責任と同情其ものに對しては、すべてが感謝に値するものに相違なかつた。義俠と言つた風が何處にか匂つてゐるやうな心持もすが〱しく受けとられたのでも有つた。私は此の拙き稿が「中央公論」に載せられる機會に於て、此の謂はゞ下働きとして直接に警護せられた人達の實意を深く忘れぬことをも、私ながら附記して置きたいと思ふ。

其夜は眞淵一家が私達と會食せられた。梁も痛飲しては高らかに語つた。字も快く幾つか書いた。白髯の人も麥酒の二杯に醉つて、私達を勵ますやうな響の入齒らしい聲を私の耳に殘した。昨夜きて下さつた和服の人の夫人も微笑しながら靜かに現はれた。纔かに歩けるやうな孫達の多くが、小さな面をして出ては隱れてゐた。夫人の長男で初孫だといふ少年が學校の制服を著けて恥しさうに出てきた。

「好い形の頭を仕て居るて御坐います。賢い頭だな」なぞと梁が其れを撫てゝゐた。白い老人から幼い末孫までが終には悉く坐に連つて、わざと點ぜられた日本式の燭臺の火の傍に、打解けた二人は、悉く初對面の人達と話し交した。私は白い老人に上海で求めた象牙のパ

イプを謹呈した。昨夜迎へられた若人の二人にも其を進呈した。夫人には更に眞珠粒の連鎖を無理に送つた。

此處で復た未成さんに長い第三回の手紙を書いた。

斯うした大阪の一夜には私も絶えて無かつた醉を陶然と催求した。そして是等が一夜の遭別であるものとは到底思はれぬほどに、梁も私も暫く前後を忘れた。

梁は此處で日本服を造つた。彼は擴げられた縫ひとりの武士の故事について、丁寧に白髯の老人から說明せられて首肯きながら羽織の裏を其に定めてしまつた。それは梅花を背に負ふて拔刀してゐる若い武士のであつた。絢爛の美しさと共に、美しい風流の戰物語を私は聽いた。そして此度の江西省の戰に深創を脚に負ふた機關砲隊長の劉が退却に際して、部下と砲とを安全に退けさせた後に、割腹して死むだのを私は思つてゐた。犧牲といふ意が纔かに此の宴の中に私の心に影を曳いた。

豫定の時間が迫つてゐたので、二人は秀夫さんに送られて、一家と袖を別つた。そして後から同じやうに俥に乘つてきた刑事に感謝して、停車場の横に建てられた瀟洒なビヤホールの二階で彼を合せて暫く復た盃をあげた。彼は手帳に英勇閑日月と書いて

「是てすね」と私に示して笑つた。

其日の赤い新聞の夕刊には、私達が奈良に行つたとか言ふ甚しい想像說を銳い文字を使つて載せてゐた。

停車場の步廊には二見といふ憲兵の人が見送りに來てくれた。彼は特に私達に眞底からの同情を有つてゐた。また人を見る直覺性が何時のまにか異常に銳く成つてゐるやうに淡ながら思はれてゐた。

夜行列車は復た北に走つて行つた。

「愈々東京だぞ」梁は斯う言つて此國の都を珍しがつてゐた。

私自身にしても半年もたゝぬうちに、斯うして復び日本に來やうとは、眞に數奇の身であるやうに思はれて成らなかつた。

先著の懷しい同志に私は電報を打つた。其の誰や彼やの面影がはつきりと思出された。失敗と詩などゝ言

ふことをさへのんきに考へてゐた。

神田の大火に遭つた夜は、私が恰も歸國の夢を見て居る時てあつた。焼けだされて紫の衣裳一枚て荷物の煩雜な圍を見戍つてゐた私の妹の姿も思浮べた。彼女が揚子江を溯りながら、甲板て歌つた一節などが列車の響の裡から縺れて聞えてゐるやうな幻覺に暫く醉つてゐた。

梁は又すぐ頭痛がすると言つて寢臺に入つてしまつた。

去年潼關破　妻子隔絶久　今夏草木長　脱身得西走
麻鞋見天子　衣袖露兩肘　朝廷愍生還　親故傷老醜
涕涙受拾遺　流離主恩厚　柴門雖得去　未忍即開口
寄書問三川　不知家在否　此聞同罹禍　殺戮到雞狗
山中漏茅屋　誰復依戸牖　摧頽蒼松根　地冷骨未朽
幾人全生命　盡室豈相偶　嶔岑猛虎場　鬱結回我首
自寄一封書　今已十月後　反畏消息來　寸心亦何有
漢運初中興　生平老耽酒　沈思歡會處　恐作窮獨叟

（杜甫）

こんな歌を口吟してゐるうちに、東海道に入つてゐた。

耳に喚起すやうな驛名を油燈の硝子板に眺めてゐたまた此國の現在に就いて私の有する限りの智識と經驗を絞つて考へてみた。また夫等を國歩幾艱難とも謂ふべき自國に思ひあはせてもみた。桂、大隈、山縣、井上、などゝいふ名と、孫、黄、李、柏、岑、などゝいふ名とを比べてみながら列車の夜を深かした。

各驛ては刑事が交替しては、隣の列車に乘込むでゐた。其度に私を窓から眺めて立つてゐた。私は此機會ごとに禮をして感謝した。最う不體裁も何も容易く諦めの裡に忘れてしまつてゐた。

亡命、亡命、亡命。恥さらしを、つい書いて此國の讀書子に見られる。また其が何れだけの意味が有るのてあらう。たゞ是までに少からぬ同志の者が此國に渡つて來た。

そして此國の人はいろ〳〵に其を見てゐるのらしい。また各自の立地から夫々異つた有意味に觀てゐる

人達もあるのらしい、私は茲に私だけの謂はゆる亡命行といふべき拙いものを眞に覺束なく書いてみた。

斯うして來た私は、亡命の一人として見む人に唯だ理由も無く見て頂くといふだけに過ぎぬ。事だて丶言ふべき程のものでも素より無く、まして私として何の有意も自らは認めて居ぬ。

其の翌晝に二人は新橋驛についた。下駄の堅い響が「戰好き、々々」と響いてゐるやうな、と白人の友が言つたことを思出しながら、響の中に交つて行く途中を、狄と詹と柯に迎へられた。

「何うした、面白かつたか」と狄將軍がきいた。

「うん」と梁が答へて笑つてゐた。

「途中何處で泊つた」と詹法學士が私に言つた。

「道の尾と大阪、隨分面白かつた」と私は彼の肩に手を措いた、梁が笑聲をたてた。

柯少將は洋杖を振りながら、先に立つて行つた。

改札口で二人の巡査が私を儼めしく瞶めてゐた。

新橋驛の構外は依稀として私の眸に映つた。

「何處に行くんだ」と梁が言つた。

「神田に借家をしてゐる。隨分遊びにくるよ」と詹が言つて、煙草に火をつけた。

「さあ、暫く保養だね」と柯が始めて同時に口を開いた。

「國も無し、戀もなし」詹が斯ういふと、私の肩に手を措いて

「ね、然うだらう、文學士の出來損ひ」と笑ひながら自働車置場の方に行つた。

「あゝ――」と梁が大きな欠伸を仕た。

「亡命のあくびかい」と柯が言つた。

（十一月二十二日）

此稿の前編にあたる「亡命の記」は本誌昨年十二月號に掲載せられたり。

東京十二新聞の社會部長

安成二郎

此記事の様式は、僕の提出した二つの問題に對する各社會部長諸君の回答が諸君各々の姓名の次ぎに在り、諸君各自の人物に對する僕の私見が各々其の次ぎに置かれる。

『貴下の社會部編輯の用意如何』と云ふのが第一の問題で、『貴下は社會部外交記者として如何なる人を欲するか』といふのが、第二の問題である。

而して此諸君の回答に就ては、黄口を敢てしない。其道に於て、皆悉く僕の先輩であるが故に。

△新聞は社會教育の機關

東京朝日新聞　佐藤眞一氏

一、朝日新聞の社會部は公益といふ事を重く取扱つて居る。換言すれば、社會の風教を紊し、徳育上惡影響ありと認むる内容の記事は之を成る可く掲載しないのである。例へば、今回の海軍問題に際して、收賄方面の事實を餘り書かなかつたのは如上の主義に由來してゐる。從つて常に殺人盜賊などの所謂警察種を重視しない。若し此爲めに社會の要求に滿たずして發行紙數の減ずる事があらうとも、それは顧る遑が無いのである。要するに、新聞は社會を教育する心を以て編輯すべきものと思ふ。猶ほ政治面社會面の區別は將來必ず徹し去らるべきものであらう。

二、人格を第一とし、熱心を第二の資格とする。學力は專門學校以上でありたい。天才的の人は人の考へつかぬ事をやる點に於て立派な資格を有してをる。其他、健康も必要であらうし、「押し」の强い事も現在の世間を相手とするには必要であらう。

次長山本笑月君

一時新聞界に異彩を放つた澁川玄耳氏、又の名藪野椋十が去つてから、朝日の社會部長は缺員の儘である。佐藤眞一氏は即ち朝日の編輯長、今暫らく社會部長を兼ねてゐる。氏は盛岡の人、盛岡中學を半途退學して上京し、東京朝日新聞に椅子を占めて獨學自修、其の明、其の識、夙く既に編輯長として東都の新聞界に推重さるゝ事久しい。今回初めて社會部に關係したのである。が、朝日の社會部面は、佐藤眞一氏が日々の編輯を直接するのでは無い。實際の編輯に當つて居るのは社會部次長山本松之助君である。山本君は號を笑月といふ。松の月をもぢれるものか。其のもぢり方の甚だ微温的なるが如く、人物亦穩健にして何等の奇も無い。澁川時代には美術や能樂の方面に隱れて、不遇を喞じてゐたが、今や大新聞朝日の社會部を主宰して、以て曩日の欝屈を伸ばしてをる。にも關はらず、朝日の社會部の近時殊に振はざるは何故であらうか。山本君の手腕は如何

君が社會部次長の地位を贏ち得たのは、手腕名望と云はんよりは年功である、といふのが一般の批評である。恰も澁川氏去つて、老舗的社風に馴致されたる朝日が、他から遽かに番頭を雇ひ來るを許さぬ事情から、社内に其人を求めて、白羽の矢が君に立つたのである。君は年齒四十五六、朝日の祿を食む事二十年、經驗に富めることに於て、新聞社會の實情に通ずる事に於て、社會部長として不足は無い。度量は大きいとは云はれない。人を使ふにも、命令が遠慮勝ちである。が少しも所謂記者化した風の無いのは君の人格である。而して人格が朝日の標幟であるならば、朝日は今日に於て最も適當の社會部長を得たのである。どう云ふものか社内に人望のなかつた澁川玄耳を待つて起るよりは、山本君によつて舊態を墨守する事が朝日の望むところであらう。朝日の社會部が天下を驚かす事は先づ當分あるまい。

△趣味と實益と「米の飯」

萬朝報 中内蝶二氏

一、「趣味と實益」といふ萬朝報の標語は、當然又萬朝報社會部の編輯の標語である。「一年中飽きる事の無い米の飯」といふ言葉が萬朝報を譬喩へたものならば、社會部も亦もとより飽きる事の無い米の飯の味を備へなければならぬ。實際の紙面が其標語を證據立てゝ居るや否やは讀者の判斷に任す外無いが、少くとも編輯當事者たる私は、その標語に向つてベストを盡して居る。編輯の方法にも相當苦心するが、方針が前述の通りであるし、狹い紙面であるから、米國流に標題や組み方の新奇を以て人の目を驚かす事はしない。要するに新聞は社會の先覺者たる覺悟

を忘れずに編輯すべきてあらう。

二、專門學校卒業以上の學力があつて、常識に富み(天才より常識家がいい)事件の大小輕重を判じ得る頭の働きがあり、特別の嗜好あるを妨げぬが、嗜好に偏せず趣味が廣くなければならぬ。特に外交記者に就いて言へば、專門的知識を要する外交と出來事に對する外交とに大別され、前者にあつては批評的頭腦のあるを尊び、後者にあつては、敏捷な頭と銳敏な觀察力を兼ね、臨機の活動をとり、要領ある文章と爲し得る能力を欲する。又編輯と外交とを兼ぬる記者も必要てある。例へば、手近かな例が、萬朝報には時々「年の暮の街」とか「御大葬の夜」とかいふ印象記が載る。普通の社會記者ては事實の列擧しか出來ないので、事件に依つては編輯記者を特派する必要を生ずるのてある。且つ萬朝報の讀者には學生が多いから、あの種の文は一面には學生の爲めに文章の參考に資するつもりてもある。

文學士中内蝶二君は昔帝國文學などへ餘り上手で無い(寧ろだらしがないと云ふべき)小說を書いてゐた。黒岩氏が招いて社會部長としたのは、その人を見るの明、大に感服せざるを得ない。皮肉では無い中内君は小說は下手でも、新聞編輯は上手である。

小說はだらしないが、新聞記事はキリツと締つて居る。それと同じくゾロリとした風をして、男振りもキリツとした好い男とは云ひ兼ねるが心はチヤンと要領を得てゐる。一見氣の置けない、人を外らさない世馴れた應對振りの中に、何處か初な生地が人を惹きつける。

生れは四國、土佐の高知に名高い料理亭得月樓の息子で、幼にして秀才とある、帝大の國文科を出て當時は恩人小日向是因など〻同列に思はれてゐたが、今ではズンと器量を上げた。いい喉で長唄を唄ふ。女にもてること云ふまでもない。

△ニユースは作るべきもの

東京每夕新聞　永代靜雄

一、ニユースは報導するものてあると共に、より多く作るべきものてある。作るとは決して架空の意味てはない。既に確存する材料を成長せしめ、充實せしめ、且つ活躍せしむるを謂ふ。探索の徹底、記事構成の完全、これが配列の意匠等は以上の目的を遂

する第一の手段であらふ。勿論これが爲めにニユースの本然を傷けてはならない。ニユースに對する編輯者の主觀及び批判は唯その取扱方の輕重によつてのみ表はされ、直接露骨の主觀をニユースその物に混じることは絶對に許されない。それは總論て、僕は正午版と夕刊新聞との社會部をやつてゐるが、一體日本の新聞が政治部と社會部とを區別するのは頗る意を得ない、これは是非外國流に打つて一部とし、所謂硬軟を通じて一つの頭腦(あたま)で統卒し度い、ゴツゴツした政治記事に社會記事同様の一般的興味を點じ度い。夕刊だけの編輯法としては僕は紐育のイヴニング・ジヤーナルを第一に推す。此新聞が近代新聞界の傾向たる、新聞は先づ人の眼に訴へるものとの主義を實行し、編輯の純然たる技術であることを實證するからである。然し僕は、朝刊に於ては決して米國新聞の謳歌者ではない。寧ろ近來日本の大朝刊が、唯一の萬朝を除いて、申し合せたかの如く著しく米國流の刺激的編輯法を使(もち)ひ、地元的(ローカル)ニユースを過重するに對しては全然賛成を躊躇する。朝刊と夕刊とは本來の約束として全然その編輯法を異ならしめなくてはならぬ。

二、嚴正に時間の觀念を有し、健康、正直にして常識、才氣兼ね備はるからは、學歴、文章、風采は必ずしも深く問はない。若し夫れ敏感にして勁捷、人格確實にして相當の知識あり、凡ての新しき試に興味を持ち得る人ならば、目下の外交記者として蓋し理想に近いと許される。

永代靜雄君の境遇は神に惠まれたり、惡魔に呪はれたり、隨分波瀾曲折の半生を經た人である。播磨の人、神戸の關西學院に居つた時分は忠實なるクリスチヤンで、充分に神の恩寵を受け、美くしい戀人さへ授かつた。講壇に文章に、豐かな天分を有して行くとして可ならざる無く、遂にその才氣に惚れ込んだある富豪がパトロンとなつて卒業後の洋行を保證し君を同志社神學部に送つた。が、その頃から君の信仰が動搖し初めた。蓋し惡魔も亦君の才氣を利用せんとしたのであらう。君は遂にフアウストとなつて上京した。もし終りまで神に從ひ、パトロンの保護を受けたならば、我々は新聞記者としての永代君を見る前に、先づ神學博士として講壇に彼の雄辯を聞いたであらう。

君の上京は流離である。初め暫く早稻田に遊んだが、異常の才を以てして文壇名を成し難く、或は田舍新聞に行き、或は雜著に從つた。かくて四十一年の暮に東京毎日の記者となつたのが、君の東京に於ける就職の初めである。次に中央新聞に移つて家庭部を編輯して、大に時の編輯長小野瀨不二人氏の認むるところとなつた。四十三年頃小野瀨氏中央を退くや、君亦共に去り、間も無く富山日報編輯長　て、富山に赴き、帝國新聞大阪に創立さるゝや、聘せられて大阪に行き、歸京したのが四十五年の春である。昨年小野瀨氏毎夕新聞に編輯長となるや、招かれて社會部長の椅子を占めた。

君は才の人だ。一夜に四十枚の原稿を書き飛ばし、一週間に一部の著書を爲すが、身體虛弱であるから精力を以て繼續的事業に從ふには或は他に及ばない。君がもつと執着力があり、精力があつたならば、文學者たる最初の希望は夙くに滿足されたに違ひないが、虛弱で、感情的で物に飽き易く、才にのみ賴つたのは、君を未だに一新聞記者として置く所以である。

君の新聞編輯者としての手腕は確實だ。毎夕新聞の社會部面は今や、あらゆる他の米國式を學ぶ新聞を壓倒して、斬新なる編輯法を以て常に新機軸を示して居る。

君、今年二十九歲、東京各新聞の社會部長中の最年少者だ。そして、猶も將來のある一人だ。しかし、君はいづれ新聞記者の足を洗ふだらう。そして最初の希望通り文壇に立ち復るだらう。もうそろ〳〵毎夕新聞にも飽きる時分だ。

著書に小說『都會病』がある。佛のルネ・バザンの『死ぬる土』の飜譯である。譯文の妙、近時群出の飜譯中出色のもので、特にその方言を自在に驅使した手腕は文壇の注目を惹いた。

△中流社會を見當てにして

國民新聞　大田　茂氏

一、新聞の讀者の大多數は中流社會である。それは生活ばかりではない、智識も中の程度の人が一番多いと思ふ。それで私は中流社會に影響する問題に第一に着目する。日々の記事の取捨に關しても其方針を以て臨んでゐる。之を廣く云へば、社會に廣く影響する事件を先づ先きにするといふ事である。記事については內容の重んず可きは云ふまでも無いが、宴會、葬式などは文章で讀ませたいと思ふ。何ういふ記事が欲しいかと云ふと、具體的には一寸思ひつかぬが、一口に云ふと、「あ、面白いナ」といふものである。

二、多少花やかな文章を書き得る人。觀察が銳敏で、辛抱强く、熱があつて、興味を追ふ人がいゝ。命ぜられた仕事に對して「そんな事が問題になりますか」などと反問する人は駄目である。それから一方面の記者としては、例へば運動記者ならば、相撲にもベースボールにもレガッタにもといふ風に廣く通じて居るのが重寶がられるだらう。

太田茂君は四國香川縣が其生國である。二六新報の活動時代に、其處で初めて新聞記者の生活に入つた、非常に花やかな生き〳〵した文章を書く人で、才氣渙發、生彩奕々といふ形容詞が當て適まる。當時秋田淸氏が特に目をかけてゐた。其中に一年志願で丸龜の兵營に入營して二六へ書いた兵營通信が觀察にも筆致にも記者としての將來を矚目させるものがあつた。四十二年、三等主計となつて二六に歸り、外交部長代理となつた。恰も同年八月、大岡育造君入つて中央の社長となり社の改革に意あるを聞くや、太田君は同僚座間鍋司、上野熊藏の二君と共に大岡君に直接談判で中央に移り、田村江東君の下に其の手腕を試みたが、四十五年の春、或る條件付きで伊達源一郎氏の手から國民新聞に入つた。次で同社の社會部長千葉江東氏が德富社長と議合はずして退くや、代つて社會部長の地位を占めた。或る條件付きといふのは即ち横を見て社會部長になるといふ事であつた。今や二六脫走の相棒たる座間君を外交部長として大に手腕を揮つてゐる。蓋し今が君の得意時代である。

以上、君が現在の地位を獲得した順序を見て、或る者は君が人に取り入る事に妙を得るを感嘆し、或は君を以て單なる游泳術の達人と貶し去るものもある。が、それは表面の經歷に見て速斷する者の陷り易い過失である。少くとも記者の知るところでは、君は實に逢つて氣持のいゝ人だ、對者に甚だ好感情を與へる態度と容貌と聲とを持つてゐる。人に取り入ると云はんよりは、寧ろ、人に惚れられると云ふの適切なるに如かない。而して手腕のこれに副ふものあるは疑ひ無いところで、苟も國民新聞の如き八頁の紙面を有する新聞の社會部長として、木偶が盲判を押してゐるお役所ではあるまいし、游泳術が上手ばかりで勤まるものではあるまい。社會部長になつて日が淺い。記者は大に君の今後に矚目する。

君は、性格は頗る圓滿だ。或は圓滿過ぎるかも知れないところに長所が渦を卷いてゐる。色淺黑い美男子で、うるさいほど女の子に惚れられる。酒豪で、杯を手にして唄を謠へば、美音亦女を惹きつけるに足るといふ。法政大學出身、三十二歲。

△風教が第一の主眼

東京每日新聞　平井　晚村氏

一、新聞には孝子や節婦の話といふやうな世間の美

談を紹介したいと思ふ。私はそれに就て一つの經驗がある。昨て報知新聞に居つた時代に、横濱のある貧民の孝子に同情して一段ほどの記事を書いた。すると忽ちの間に救恤金が百圓餘も集まり、その他夜具、什器などの寄附もあつた。あの時は非常に愉快であつた。そこで、斯ういふ記事を書くには、筆に同情をもつ事が大切で、同情を根柢とした興味によつて讀者の同情を事件に引きつけなければならぬ。それと共に一方には、階級に隠れ、地位を利用して惡事を爲すものを責める必要がある。要するに社會記者は、一世の風敎を徳化する責務をもつてゐるのであるから、社會批評に一隻眼を有して、事件に依つて筆を下す態度にそれ〲の用意が無ければいけない。社會記事に、單なる事實の報告は絶對に無意味な事である。

二、故に、一身を保つ事が社會記者の最要の資格である。そして、仕事に趣味をもつ眞面目な健全な人で、ヒントを與へれば探偵が賊を追ふやうに、それのみに精力を集中する人がいゝ。

平井君、晩村は號、名は駒次郎である。前橋の酒造家に生れ、三十九年早稻田の高等師範部國語漢文科を出で、四十一年報知新聞に入り大正元年十一月東京毎日新聞に移りて社會部長となり、以て今に及ぶ、以上が新聞記者としての君の經歷の輪郭である。年三十四。

ずつと前の青年文學雜誌「新潮」や「新聲」を知つてゐるものは平井晩村君の名に親しい筈である。君は筑波山の麓の薄倖詩人横瀨夜雨と相並んで民謠風の野趣豐かな詩によつて、素朴な田園の人情の讃美者であつた。新聞記者といふやうな激しい活社會の觀察者として、譎詐に滿たされた生活の中から、猶ほ努めて人情の光を見んとするところに、君の欺かざる性格を見る事が出來る。

報知記者として地方の支局を廻つた事もある。數年の新聞記者生活は君に活社會の實情を充分に見せたに相違ない。經驗も積んだ。が、君は新聞を以て終始する覺悟は無いらしい。もう一度詩を作ると今もよく云ふ。

君の近著に『頭山滿と玄洋社』がある。是れは長い間東京毎日に連載されたものであるが、此の事實の調査は綿密を極め、正確を期したもので、其爲めに一人の記者を調査に專任し、蒐集の材料一個の行李に滿つるの原稿となつて居る。古史を按じて眼光の紙背に徹するものを賞すべくんば、現在の事實を正確にして後來の史家をして疑ひを挾ましめざる

君の用意も亦認めなければなるまい。而して君は實に之を爲すに便宜の地位にある。君の前著『風雲回顧錄』も此の同一の理由によつて得難き側面的明治史である。

新聞記者としての君の手腕に就ては記者は多く知る處がない。が、甚だ貧乏なる東京毎日の現狀では誰が社會部長になつたところで、手腕の施し樣があるまい。君が轉じて史實の研究に走つたのは賢い方法である。

△文章と標題に骨を折る

中央新聞　山根眞次郎氏

一、御存じの通りの政黨新聞ですから、社會記事の方面にも隨分差し障りが多い。政友會二百餘の代議士と貴族院の政友系と、其院外團と、其等の人々の關係者と關係事業とに就ては、少くとも筆を遠慮する用意を要するので、中々編輯に骨の折れる新聞です。それで編輯上の理想もありますが、今多く云ふ事を好みません。唯だ以上の理由から材料の乏しい事は往々免れ得ない事實です。從つて記事の標題(みだし)については隨分苦心する、といふのは、乏しい記事を以て紙面を埋める自然の結果で、私は十の內容を十五に見せるために文章と標題に比較的重きを置いて居る。

二、第一に文章の上手な人である。次に常識の發達した人、態度の落着いた對者に好感情を與へる人を欲する。此間記者を募集したところが二百人からの應募者があつた。其中から履歷書によつて四十人を選拔し、第一回の試驗を行つた。それは　皇后陛下桃山御參拜を假定し、宮城御出門から新橋御發車迄の御道筋鹵簿を說明し、御奉送の各大臣、高官、皇后宮太夫などの名前を書き入れさせたのであるが、一人も完全に出來た人が無かつた。比較的出來のいゝのを又十五名選び、第二回の試驗を行つた。今度は飛行機墜落を假定し、私が墜落飛行機を前にして其模樣を語り、受驗者が新聞記者として其話を聞くといふ形式にして其記事を書かせ、それで十五人中から六人の登第者を得た。此試驗は何を新聞記者たらんとする人に求めてゐるか。先づ第一に大臣の名前位は知

つてゐて貰ひたいのてある。それに皇后陛下の行啓てあるから相當の敬語を知らなければならぬ。是が常識てある。第二回の試驗に於て私は、他人の談話の要領を摑んて脈絡のある文章にする組織的の頭腦と文章を求めたのてある。

山根君は三十四年に法學院を出てから隨分地方の新聞を廻つて歩いた。一昨年田村江東君に因つて中央新聞に來る前三四年間、時事新報の永島永洲君の下にあつて大に其手腕を揮いたのであるが、其前の七八年を通ずる地方新聞の生活て大分所謂田舍廻り記者的な性格に墮して了つた。

君の趣味は酒と女だ。が、英雄の風があるといふのでは無い。寧ろ、非常な感情家で、天才的である。短軀瘦身、容貌秀麗、貴公子風の態度があるから、女を語る資格は充分だと云つてよい。濱町あたりにも大分通はれるらしいが、君は特に、新橋の森川家若松のいい人たる事を以て非常の光榮としてゐる。此處に愛す可き性格の面が見られる。要するに、君の趣味といふも畢竟、酒は梯子酒に非ず、女は擶くに非ず、チビリ／＼と飲みながら女に可愛がられるところにあるので、頗る無事圓滿な道樂である。

文章も上手だ。プランを立てる事も上手い。もつと自由に手腕を振ふ事の出來る新聞に置いたら、蓋し大に伸びるであらう。著書に『日本花柳史』がある。山口の人、年三十一の働き盛り、號を秋仲といふ。社會部長心得である。

△今の讀者の要求

二六新報　山田旭南氏

先づお答へする前に申げねばなりませんのは、新聞編輯上に就ての理想と實際とは、種々なる事情に依て、必ずしも一致して居ない事です。其てすから私の申します事は、或部分は理想、或部分は實際といふやうな傾を生ずるてあらう思ひます。第一の御尋ねてある『努力すべき方面』から申しませう。之は眞正面の根本義から申しますれば、努力すべき方面に甲乙の差別は無い筈です。併しながら實際は、非常に多くの社員を有せざる限り、社會の各方面全部に亘つて、十分の努力を盡くす事は容易に行はれる者ては御座いません。そこて讀者が如何なる記事を最も多く要求するかといふ觀察が必要になつて來るのです。此前提に依て、私一個の意見を申しますれば、

今の新聞の讀者の要求は、甚だ單純なもので、世上の變事、殺人等の犯罪を一刻も速やかに報道せよ、面白き讀物(多くは小說です)を掲載せよ位に止つて居るやうです。尤も一部の讀者はもつと進んだ要求をするやうですが、是は甚だ僅かな數で、百人中一二を算するに過ぎませぬ。一體現時の社會は、一部の思想が豫想以上に進んだに反し、一部は豫想以外に進んで居りません。而して其差は餘りに甚しいのですから、之を調和し、何れにも向くやうな新聞を作らうとする事は、非常に困難な事で、勢ひ其何れかに傾くやうで御座います。前に申した一般の讀者の要求して居ります處は、當然新聞紙が最善の力を致さなければならぬ處ですが、吾々の天職として、其以外に努力せねばならぬ方面が甚だ多からうと思ひます。現在の社會、中流以下の思想には誤れる者が多く、不健全な點が多いやうですから、其を敎へ導いて健全ならしめねばならぬと思ひます。一體日本人は個人の權利を甚だ輕視して居りますが、之なども敎へ導いて改めしめねばならぬ一例で、一面から申しますと、是は敎育者の任務のやうで御座いますけれど、私は之を新聞記者の天職だと心得て居ります。一般の人の思想の發達しない限り、只表面丈の文物が進んで居ても、其は文明の衣服を纏ふたに過ぎませぬ。其ですから新聞紙は事實の報道を迅速に正確にせねばならぬのは勿論の事として、簡單に申しますれば、今申したやうなのが、最も努力す可き事であらうと存じます。此お答は或は御質問の主意に副はないかも知れませぬが、此機會に私の希望なり主張なりを言はして頂きましやう。

第二の『文章を主とするか、體裁を主とするか』といふお尋ねは、双方共に最も大切であると申さねばなりません。併し此二者の中で最も何れが重いかと申しますと、文章の方が第一で御座います。只體裁のみに依て新聞の甲乙を論じますのは、私の申す誤つた思想では御座いますまいか。日本人は大部分體裁を論じて其内容を構はぬ風が御座います。是は是

非とも改めねばならぬ事て、所謂、處其實不居其華てなければなりません。體裁と云ふ事も大切ですがより以上文章を大切と思ひます。併し新聞の文章は只美しい、上手であるといふよりは、讀者に心切てよく了解し得られるやうに書くのが本義て御座いましやう。

第三のお尋ねの『如何なる外交記者を欲するか』といふ御質問には、私は最も好く觀察し得る記者て、如何なる方面にも手腕を揮ひ得る人を欲しいとお答へします。觀察の正當であるといふのが、新聞記者の第一條件て、文章の上手であるといふのが其次てあらうと思ひます。其てすから私の理想としては、一部分、例へて申せば芝居の事より他には不向だの、運動の方面より外には出來ぬといふやうな不具者て無く、如何なる問題に逢着しても正當に觀察し、十分に報道し得る記者の多からん事を望みます。

其から第四のお尋ねの『朝刊夕刊用意の相違』といふのにお答へします。朝刊夕刊其何れも道理の上から申しますと、其編輯に要する時間は同一てある筈てすが事實は夕刊よりも朝刊の方が比較上多くの時間を有して居ります。其處が自ら用意の違ふ點て御座いましやう。實際夕刊を編輯しますには、甚だ僅な時間を有するに過ぎませんから、調査不十分と思ひましても或程度まて其を忍ばねばなりません。其てすから夕刊には先づ先づ出來得る限り事件の一般を迅速に報道し、其足らざる處は之を朝刊に於て補ふといふ事になります。是は要するに實際問題て其主義としましては、夕刊は事件の報道を主とし、朝刊に於ては實益と報道を共にす可きてあらうと思ひます。一體夕刊は一日の仕事を終つた勞れた人に依て見られるのてすから、餘りに理窟張つた事て無く、幾分か勞れた精神を安めるやうな風を加味したいと思ひます。

山田旭南君は二六では隨分古い人だが、その割には不遇であつた。堀紫山君、齋藤弔花君などが去つては當然社會部長が君の上に落ちて來る筈であつたが、暫らく社會部長代理をしたゞけて、本山荻舟君に先んぜら

れて了つた。君は家庭の負擔の重い荷を負ふてゐるので、社を怖けるといふほどでは無いが、內職の方に身が入り過ぎるのが、社の幹部のお覺えを損ねてゐるのだといふ噂もある。本山君報知に去つて即ち社會部編輯部長となる。（二六には社會部長といふものが無い）作家としても君は隨分古い方だ。明治文壇の才人故川上眉山氏の門下である。が、純文藝に努力したのは短かい間で、新聞社に入つてからは、即ち內職たる赤本を書き、山田呂峯作『新不如歸』といふやうな派手な看板が淺草の活動寫眞館の前に女子供の眼を惹くやうになつた。現に二六に小說『女伯爵』といふ大あまものを書いて、それがキリン館で活動寫眞になつてゐるが、呂峯でも何でも匿名で書いてゐるうちは、それが僞善であらうとも、左に右く山田旭南といふ純な名があつた。今山田旭南作『女伯爵』が淺草で呼び物となる時、さういふ事を嫌つたが爲めに自殺しなければならなくなつた川上眉山氏の七週年に逢つて、記者は思はずロマンチツクな感慨に耽る。

山田君は園藝に通じ、又花の傳說に關する著書がある。君人情に篤くその筆溫和にして洋々の態があるが、二六の相撲記者として、龍攘虎搏の壯觀を描くに當つては、筆端或は火を吐く。

△記者との問答

讀賣新聞　松本雲舟氏

一、不用意を以て用意とす。
二、如何なる人をも使ひこなす。

（安成）此間まで大島貞水君が社會部長でしたね。一度大島君の意見を聞いたのですが、貴下が今度社會部長になつたと聞きましたので、またやつて來ました。

（松本氏）大島君でいいぢやありませんか、私は何にも知らないンです表向きの會などには大島君に出て貰ふやうにしてゐるのです。

（安成）貴下のお生國は何地ですか。

（松本氏）まあさういふ質問めいた事は止さうぢやありませんか、友人として、……お目にかゝつたのは初めてだが、終始T君やS君などから噂を伺つてゐるのですから……さういふ事でいぢめずに置いて下さい。

（安成）今日は僕一個の訪問記者ですから……友人なら益々結構です。友達甲斐に簡單な質問にだけ答へて下さい。

（松本氏）私は實際何にも新聞の事は解らないンですよ。皆他の人がやつてくれますから。

（安成）それでは、讀賣の飯を食つてゐる貴下として餘り無責任ぢやありませんか。

（松本氏）まるで食はせて貰つてるわけでもありません。私はいつも編輯長に私に不適任だから他に人を求めて下さい、何時でも引き退ります

ッて云ふのです。全く新聞編輯に就いては理想も抱負もありません。

（安成）それでは何にも知らず、且つ理想も抱負も無い貴下を社會部長にした編輯長は餘程の馬鹿だと云ふ事になりますね。

（松本氏）さうかも知れません。一體私は再び新聞記者にならうとは思はなかつたのです。私は東京毎日時代を生涯に一度の貴い經驗だと思つてゐました。

（安成）あの時代は確か毎夕の永代君なんかと御一緒でしたね、何年頃でしたかしら。

（松本氏）四十二年の正月から七月まで東京毎日にゐました。田中穂積博士が編輯長で、主筆が倉辻白蛇、關和知の兩氏、高須梅溪君が社會部長でした。

（安成）あれからずつと著述の方でしたか。

（松本氏）いや、その年の十一月から四十三年一杯は教文館でエディターをして居りました。それから著述をしたり『婦人之友』の客員になつて飜譯を寄稿して居りましたが、本多精一さんが『財政經濟時報』をお出しになるので、その編輯をする事になつてそれは今でもやつてゐますその方の適當な後任者が急に無いので、讀賣の方は斷つたのですが、五來さん（主筆五來素川氏）に無理に連れて來られたのです。著述の間は國へ歸つて居りました。

（安成）どちらですか。

（松本氏）……相模です。中郡國府村大磯と二ノ宮の間で、こゆるぎの磯の邊です。

（安成）貴下に學校は同志社ですか。

（松本氏）よくさう云はれますが、早稻田です。三十九年の哲學科で、文科の相馬、片上君と同期です。中學を卒業後二三年間は一番信仰に燃えた期間で、洗禮は本郷教會で受けましたが、そのうちに植村正久さんの福音新報に關係が出來て籍を富士見町教會に置くやうになりました。さういふわけで、私は中學と早稻田との間に約三年の宗教生活があるのです。それが私を今でも宗教學校（ミッションスクール）出のやうに見せるンですね。

（安成）いやいろいろ伺つて有りがたうございました。ところで以上は眞とうは貴下から何はなくとも解らない事でも無いので、私が今日參つた意味は他にあるのです。繰り返して伺ひますが、貴下は何んな用意を以て社會部を御編輯なさるんですか。

（松本氏）用意も何も實際無いのです。他の人を總て信頼してゐるのですから。私は一行も書かないのです。

（安成）さう被仰ると、嘘を云つた事にはなりませんか。

（松本氏）さア、少しなるかも知れませんね。……強て云へば不用意ですね。

（安成）すると、不用意を以て用意とす、ですな。それから、どんな記者を欲するんですか。

（松本氏）誰でもいいですな。

（安成）すると、如何なる人をも使ひこなす、ですな。

（松本氏）いや、それは、……さう書いちや困ります。

僕辭して讀賣を出て、カフエー・ヨーロッパでお茶を飮んでゐると、讀賣の編輯長中村雅治氏が入つて來た。

（安成）今松本君に逢つて來ました。私は今度雜誌へ各社の社會部長を書くのです。何にもしないやうな事を云つてゐたが、よく働く方でせう

（中村氏）え、オツトリして、よく―。

△答案數則

やまと新聞　小川煙村氏

一、最も敏速に報導する事。主要點を面白く詳細に記して前後の贅を成るべく除く。事實を有の儘報導する。よくよくの事の外批評的言辭を使用せぬ事――神と雖も眞の正當なる判斷を下し得ぬものなればなり。人事百般の出來事は複雜にして其原因多樣、其關係亦多面なれば、微細の點に迄觀察研究し、其內の感じ易き箇所を特筆する事。紙面は勉めて興味ある樣に作るべし。併し何處かに讀者の實益を計る事を忘れぬ事。新聞紙は社會現象を寫す鏡面たるべし、雜に流るゝとも偏るべからず、文章は平易を尊む、古語死語若しくは通常以上の外國語を用ひる事を避く、要は讀者が僅かの勞力と僅かの時間を費して明確に知り得る點に注意すべし。繪畫寫眞は靜物より動的狀態のを選む事。事項に遭逢せば科學的研究と共に旺盛なる想像力を働かすべし。風の音にも心を配りゐるべし。人に多く語りて人より多くの出來事を聽け。讀者を喜ばすと共に讀者の信仰を握れ。其他あれど後日の事。

二、職に熱心なる性質の人。競爭心の勁き人。機轉の利きたる人。不平をいはぬ人。餘計な金を蓄めぬ人、同時に借金せぬ人。讀者を忘れぬ人。ひがみ根性を持たぬ人。返辭と共に手足の動く人。餘りな嘘を言はぬ人（少しはいふてもよろしい。）何でもやつて見る氣の人。身體壯健の人。まアこんな人があれば理想的外交記者てせう。

小川君は京都の人、古本屋に生れ、幼にして頴悟、手た任せて店の古本を讀んで頗る事理に通じ、大に近隣を驚かした。但　韋編の絕ち切れ

たのは三度び讀んだ爲めでは無く、本が古いからであつた。後、某塾に漢學を修め、某所にアルハベットを學び、以て兎も角、學和漢洋を兼ねると稱した。

次で君は雜誌『小天地』に小説を發表し、『文藝俱樂部』、『新小説』に勢力を伸張して、乖發近隣に鳴つた名が漸く文壇に及んだ。小川煙村の名が今に於て多少世間に殘つて居るのは、當時の小説が與つて力ある。京都で暫らく新聞記者をしてゐたが、後發然東京に上つて今に至るまで、新聞社の祿を食む事正に二十年である。今年三十七八で、年歯に於て經驗に於て正に大に現る可くして、其の自惚と不勉强とが夙くも君を新聞社界の老朽に伍せしめんとしつゝあるは、君の爲めに惜むべきである。

君は學者顏をしたがる。殊に德川史、維新史の通を誇る。が、それは、單に事柄を知るもので、系統的知識では無い。何等史家的研究をするものでも無く、史眼遂に日本外史を出でずと蔭口を云ふものもあり、事柄を知つてゐるだけでもエライと褒めるものもある。

君、小心にして狷介、京都人の鷹揚なところが無く、動もすれば社内に黨派を作らんとする。容貌に出來する綽名をキユビストといふ、キユビストの描ける角張つた顏の意か。

△社會より一歩丈け進むと

東京日日新聞　松内　玲洋氏

一、新聞は社會の縮圖である。一日の新聞には社會の一日がある。新聞の任務は即ちその日その日の出來事をその日〳〵の紙面に映し出すのである。併し、狹い紙面であるから、あらゆる出來事を盡く網羅し盡すといふわけに行かないから、多くの事件の中から代表的なものを選び出さなければならぬ。そこに新聞編輯者の明批評があり、社會觀がある。從て又、新聞記者は、社會のレベルより一歩進んで居らなければならぬは當然であるが、唯それ一歩である、二歩以上隔るべきでないといふのが私の持論である。細かい用意を云ふと、第一に事件の實質を重んじ、次に目に訴へる體裁、第三が文章といふ順序になる、だが、一日に一つはいい文章で面白く讀ます特種（とくだね）を入れたいと思ふ。

二、考へればいろ〳〵の註文も出やうが、小才の利く人よりも落着いた思慮に富む人がいい。

松内君は各社の社會部長中で一番名前を世間に知られない人だ。が、松内君を知つて居る人は口を揃へて賞める。社會部長中第一等の手腕家

典型的記者だと敬服する。

　松内君は非常な熱心家だ。頭もいいし、身體も强健だ、その頭と身體を新聞に打込んで新聞から頭の糧と身體の糧とを貪りとる。新聞は君の生命である。他社の社會部長は一二の例外はあるが、何れも文壇に多少の名のある人か、過去にあつた人か、或は將來に野心のある人かであるが、君は新聞に生れて、新聞に育つた人だ。

　君は東京の人、英語學校を經て、杉浦重剛先生の文學院を卒業した。後萬朝報に外交記者として實際に働く事三年、明治三十五年大阪毎日新聞に轉じて、又五年間の外交記者生活を經驗した。大阪毎日が電報新聞を買收して毎日電報と改めると同時に、君は其社會部長として東京に歸り、同社が再び東京日日新聞を買收して名をそれに改めて今に至るまで七年、君は續いて社會部長として腕を示した。前後十五年の記者生活でその八年間は實に外交記者としての苦しい經驗であつた。他社の社會部長の多くは最初からの編輯記者で、僅かに東京毎日の平井君、毎夕の永代君、國民の太田君、中央の山根君、讀賣の松本君の五人が外交記者の經驗を有してゐるが、それも極く短かい間で、或は一年に滿た無い人もある。勿論時日の長短はその人の經驗の効果、手腕の程度を律する唯一條件では無いが、手近かな例が松内君が今社會部長として、外交記者の文章を通じて其苦心の跡を洞察し、文を訂正するにもよく筆者の努力した點を買つてやる明は八年間の長い經驗の賜である。外交記者も亦松内君に文章を訂正される事を喜ぶ。

　昨年春、君は「十年以上勤續して一部の長たる者」には洋行をさせると云ふ大阪毎日の定款に依つて、ジャーナリズム研究の爲めに歐洲を漫遊し、九月歸朝した。此の洋行が君に敎へたところは新聞に着々行はれるであらうが、君自身の性格の上に影響したところは、第一に、規律である、第二に、精力主義である。松内君は歸來新聞社に有り勝ちな規律の弛廢（自由と誤られ易き）を一新した。働けるだけ働くといふ精力主義を宣傳したが、一歩社の門を出れば、君は社友の氣のいい金主たるに過ぎない。

　君は烈しい感情家だ。記事の報道が他社に先んじた時などの喜びの度も强いが、失敗した時は見る眼も氣の毒なほどガッカリする。が、近時の日々は海軍問題にしろ、此間の下谷のペスト發生にしろ、いつも他社に先んじて報道して居るので、君も餘りガッカリしないやうだ。

　君の趣味は文學と繪畫にある。隨分西洋のものも讀んで居る。繪畫は殊に、現代の大家の繪は大概持つてゐるといふ位で、鑑賞も確かである。例年文展の審査發表を他新聞より一日前に素ッパ拔く日々の機敏は君の繪畫熱の結果だといふ評判である。酒と女が又別箇の趣味、「趣味を廣く淺く養ふ」と君は云つてるが、至るところ女に惚れられると聞いては、誰しも其の言葉の意味深長なるに敬意を表せざるを得まい。則信は君の名、年三十八九。

△新聞の任務

時事新報 千葉 江東氏

一、新聞は一個の報道機關である。自分の判斷や批評を記事に加ふ可きものでは無い。判斷や批評を要するのは材料の選擇に對してのみである。無數の材料の中から、廣い社會から、明かな判斷力と正しい批評眼を以て價値の有無を甄別し、報道の價値ありと認むる材料を有りのまゝに、有りのまゝと信ずるまゝに（短時間の探訪によるのであるから、完全なる正確といふ事は滿たされ難い希望である。）何等の批評をも加へずに、生地のまゝに、最もヴイヴイッドな、平易簡潔の文章を以て最も機敏に報道するのが新聞の任務である。此の態度は、文學に於ける自然主義の態度と同一である。要するに新聞の任務が、何よりも第一に、報道（レポート）と云ふ事に向ふべきは、世界新聞界の趨勢ではあるまいか。出來るだけ機敏なる報道、出來るだけ廣い報道、そして、出來るだけ他新聞の知らない奇拔な事件の報道、（正確を出來るだけ尊ぶ可き事は勿論である）と云ふのが是れからの新聞の生死を爭ふ秘密の鍵であらねばならぬ。それから新聞のサアキユレートする範圍は、凡ての階級、凡ての社會に向つてゞあらねばならぬ。凡ての方面に行き亘り、凡ての方面に理解させるものであらねばならぬ。結局新聞の將來は、民衆を土臺とせねばならぬ。而し民衆を土臺とするといふ事は、直ちに、センセエショナルな記事を以て民衆に媚びるといふ意味では無い、唯民衆の理解する程度に任して、兎に角あらゆる事を廣く、機敏に知らしむる事である。かくて新聞なるものはあらゆる公衆の共同財産であらねばならぬし、又た共同所有の尊とい知識のストックであらねばならぬ。此意味から云つて、今日の日本の新聞が區別して居るやうに、智識者と民衆とを別にしたやうな社會面とか政治面とか云ふ區別は、早晩悉く取り去られて、凡てが差別の無い社會の出來事として報道される時が來らねばな

らぬ。政治記者も社會部記者も、地位に於て、知識に於て、何等相違の無いもので、共に同一の社會の出來事を報ずるレポーターだといふ自覺が、新聞記者界に起らねばならぬ。これは必ず近き將來に起る可き、新聞界の現象であらねばならぬと思ふ。それと共に一方編輯者の技倆が、新聞を活殺する事になるのである。

二、理想と言へば、誰く專門家を欲するが、現在の社會部外交記者としては、學力は中學卒業以上高等學校卒業以下で間に合ふと思ふ。性格としては、刺戟を鋭く感じてそれを生かし得る人(一面即ち擧止の敏捷な人)。何處までも物事を徹底して行く勇氣のある人、肉體が强健で精神の堅固な人、人に對して惡い感情を殘させ、或は不快な印象を與へぬやうな風采、容貌、言語。起つた事件に對して直ちに其のポイントを機敏に捉へ得而して其のポイントを間違はずに巧みに書き得る人、記事を自分の好惡で書かずに、何時でも讀者を第二者として書き得る人。

千葉江東君は花やかな過去を有する。と云つても酒や女に關するやうな艶つぽいものでは無論無い。寧ろさういふ方面では無粋な、品行方正の人である。即ち、君は品行方正に伴ふ學術優等の方面に於て花やかな青年時代を有するのである。

十年前に東京毎日の平井晩村君が詩人たり、報知の本山荻舟君が青年作家たり、二六の山田旭南君が頭角を現はした時代に、千葉君は雑誌『文庫』に據つて、風霜烈日の文を行り『新潮』の高須梅溪君と共に青年の二論客として盛んに文學書生間に名を馳せたものである。その後、君も高須君も新聞記者の生活に入つたが、高須君は方々の新聞を渡つて今は文筆の世界から淘汰されて了つた。頭と修養の點に於て、當時既に兩者の間に逕庭があつたのである。千葉君の當時の文を蒐錄したものを『いざさらば』と云ふ。

いざさらば……彼は斯くて先づ日本新聞に入つた。後三宅雪嶺氏に從つて退き『日本及日本人』に筆を執り、政治を論じ、歐米學界の思想を紹介し、ツルゲーネフを繙譯した。次で國民新聞に迎へられて、間も無く社會部長となつた。其間に霹靂火の號を以て國民紙上に或は『文章世界』に獨特の小說評を發表して文壇を騷がした事もある。桂公宮中を出でゝ第三次桂內閣を組織せんとすや、君は德富社長と政治上の立脚地を異にするより、意を述べて穩やかに退社した。喧嘩をして別れたやうな事を云ふ人もあるが、國民新聞が、燒打された時は行つて編輯を手傳つた位であるから、感情の上に何等の衝突も無い事は推定し得られる。過

退に於て君は實に君子である。

時事新報に於ける君の地位は、社會部長では無い。社會部長は永洲永島今四郎氏で、君は社會部長の實權を有してゐるのである。

永島君は慶應義塾の出、隨分古い記者で年輩も不惑を越ゆる事三四、溫厚老實、從來の時事の社會部長としては誠に適任であつた。が、新聞界の競爭は彼の大新聞をしても舊態を墨守するの非を曉らしめ、三田系以外に人材を物色せしめた。千葉君は即ち、時事新報社内に於ける閥外の人である。福澤先生の特別の崇拜に依らずして人格を築いた人である。

君は羽前酒田の人、名は龜雄、少年支那に志を抱き外國語學校に支那語を學んだが、中途轉じて國民英學會を卒業した。非常の篤學者で、深いとは言はれないかも知れぬが、學和漢洋の廣き事に於て、各新聞社會部長の第一に居るであらう。三田系の小姑の多い時事にゐてよく周圍と調和して居るのは、君の苦勞人たる事を語つてゐる。

立派なカイゼル髯の所有者で、態度謹厚、初對面の人には少しブッキラボーに思はれる。

△明るい益になる方面の材料

報知新聞　村上　政亮氏

一、日々の事件を機敏に報道する事は云ふまでも無いが、主義として、私は、讀んで益になる新聞を作りたいと思ふ。此意味から、多くの材料の中から成るべく明るい方面のものを選ぶ。例へば、零落した貴族に關する記事よりも、成功した奮闘家の記事をとるのである。それでは人の好奇心を惹く事が少いといふ嫌ひもあるけれど、(好奇心を惹くのは惡い事ては無い)不道德に陷らないためには已むを得ない。報知新聞が常に家庭記事に比較的多くの紙面を割き、且つ氣節の變り目〳〵に專門醫家の衞生上の注意を揭載するのも、上述の益になるといふ意味からである。夕刊は一日の勞働を終つてから讀むものであるから、多少慰藉の心持をもつて編輯する。文章は簡潔に、意味の通するを以て足れりとするが、皇族の御旅行などに就いての文章は潤色する。

二、中學卒業程度の學力があり、忠實で手足の勞を厭はぬ人ならば外交記者として不足が無い。才氣よりも根氣のある人がいい。

村上政亮氏は北海道の人、函館商業學校を出た外に學歷を有し無い、

日清役の時分に報知の社會部長をしてゐたから、社會部に對しては經驗に富んでゐるが、今は編輯長として社會部長は兼務である。廣く人を包容し、性格重厚、新聞界の長者である。

村上氏の下に、社會部の實際の編輯に直接責任を有してゐる記者が二人ある。一人は文學士高田梨雨氏、一人は小說家本山荻舟氏である、此の二人が夕刊と朝刊を毎月交替に編輯するので、七月は朝刊高田氏、夕刊本山氏である。

高田君は三高敎授茅野蕭々君や工學士平野萬里君など丶共に舊の明星派の秀才で、典雅な上田柳村張りの文章でクラシックを飜譯して居た。その時分記者などは書くものから想像して、高田君を貴公子風の人で、いづれは高等學校敎長にでもなつて、女の歌よみとラヴでもして收まる人だらうと思つてゐたが、近頃の事、銀座のライオンで、へゞレケに醉拂つた瘦せぎすの背の高い洋裝の紳士をあれが報知の高田梨雨君だと人に敎へられて、少年の日の想像の餘りにロマンチックにてありしを苦笑せざるを得なかつた。若し記者と同じ想像をもて、見ぬ戀に憧がれし若き女詩人もありしならば、乞ふ意を安んぜよ、高田君は醉拂ひである。

酒は飮む。が、それは高田君の人格に煩ひしない。報知にはもう六七年も居る、社會記事はもとより、政治面の編輯をした事もあり、十把一束に輕妙な筆を揮つた事もある。何をさせても書きこなす多方面な趣味と手腕をもつて居る。報知にとつては無くてならぬ記者であらう。

高田君の相棒たる本山君も亦飮む事に於ては一方の雄である。君は岡山の人、中國民報にあつて社長坂本金彌氏の秘蔵記者であつた。上京の希望があつて坂本氏から二六の秋山氏へ貰はれて來たのが四十一年、秋山、秋田の二朝に仕へて三年ばかり前に報知に移つた。

飮むと行衞不明になる。流連荒亡、一週間も十日も社に顏を見せない。が、元來非常の才人、極く氣の好い人で惡氣が無い。それに二六第一の名文家だから社でも離さない。秋田氏が社長になつてから社の先輩山田旭南君を越して社會部長になつたが、間も無く報知に移つた。

芝居が好きで二六時代から劇評家、折々『文藝俱樂部』や『笑』などに小說を書く。年三十三。

附記。『此の十二新聞の社會部長』は初め某氏の企劃したる或る雜誌の爲めに書いたのであるが、該雜誌が流産に終つた爲めに本誌に寄せたのである。二つの問題は大槪訪問して聞いたのであるが、時事の千葉、毎夕の永代、やまとの小川、二六の山田の四君の解答は四君の執筆にかゝる。特に玆にお斷りをしなければならぬのは、最初から問題を二つに分けて聞いたのもあり、山田君の回答中にあるやうに分けて聞いたのもあるのを、執筆の際に總て二つに纏めて了つた事である。此點は各社會部長諸君に謹でお詫びを申上げる。猶ほ此の十二新聞の外に都日本の二新聞があるが、前者は編輯の方針畧ゝ我々の想像し得る處であり且つ社會部長大谷誠夫氏は演說政治家で餘り社會部編輯に意見もありさうでなし。後者は社會部記者僅かに五人、社會部長といふものが無いので共に省く事にした。(七月十日、安成生)

漏水艶話

奈良のはたごや

池田畑雄

六月八日、溫室の裡に居るやうな蒸暑い厭な心持の日だ。降り足らぬ雨が頭を押つけるやうな灰色の空から時々少しづゝこぼれる。汚れた去年の麥殻帽子に雨を防て梅田の停車場にゆく。

福澤桃介さんと長田秋濤君と一美人とを迎えてこの春開業した許りの奈良行電車に御案内する事になつて、驛前から直ぐ上本町行の市電に乘つた。

奈良行電車とは一時大阪の經濟市場を騷がし疑問として注目せられた大阪軌道のことである、社長は僕の恩人にして且つ先輩たる岩下淸周氏である。殆ど富士山の高さと同じ長さのトンネルを生駒山の半腹にぬいて日本に未だ曾て試みられた事のない廣軌複線の大工事を企畫した事であるから其成功を危ぶむのも無理もない。

何人も四月の末に開通しやうとは豫期して居らなかつたのである。

四月三十日にいよく開業した、日本一の宏大なるトンネルと、あらゆる建設に最新式を應用したる點と、汽車よりも早く而かも乘心地よき點に於て大阪市中の評判はすばらしいものである。電氣業に幾多の關係をもたるゝ福澤桃介さんが今日しも奈良行電車に試乘しやうとして、僕自ら東道の主人たるを得たのは如何にも心嬉しく光榮とするところである。

風に誘はれて雨が降り出した。

上本町六丁目の停留場の正面に立つて涼しい西風の斜に吹きつくる細い雨に、色白い横顏の半面をぬらしながら、四邊を眺めて居る福澤さんは『出札口をなぜこう小さくするのだらう、小さくしないと、何か不都合があるのかい』

『サア、小さすぎますなア、何もこう小さくする必要はないでせう』と僕は返事はしたものゝ流石に注意深いのに驚いた。

『僕は是でも奈良は初會だから不思議だらう』と秋濤

君は尖髯の先に雨の雫を宿らしたまゝ、歐山米水を鵜呑にして椿姫を専門の博士にあるまじき初心な口振て言ふ。

『奈良を知らぬとは妙ですな』

『いつでも京都でどうかなさるからでせう』と女の聲。

『さうです奈良へゆかぬ先に京都で醉ふからです。要するに美術よりも美人ですな。』

『まだ早いよ。』と福澤さんに言はれて、展望車のやうな奇麗な電車に乗り込むと、三百廿馬力、五十哩の速力を有する車が帶のやうな眞直な線路を滑かに動き出した。

戀の辻占て名高い瓢簞山のお稲荷サンの丸い小さい塚を朦朧たる雨中に眺めて、三十三分の一の爪坂のぼり、二哩半の隧路を、石切神社の欝蓊たる森の前まで來るといつもならば攝津河内の廣い／＼田畑が一眸の裡に收まる沿線唯一の好景も雨にとざされて峰の頂から吹き下がる白雲の中を、けたゝましい警笛の響が行手の谷合にこだますると思ふと、直ぐに生駒大隧道の入口に來た。

崩壞！爆發‼、黒煙り、叫び聲、生血の泉など、幾多の犠牲を挑つたこのトンネルの中には、彼世から此世につゞくやうに電燈の光が細く長く星のやうに限りなく輝いて居る、煉化巻から滴れ落る雫をてらすヘッドライトの銀色のものすごさ、バラストを傳ふてせゝら流れの水の音がかすかに聞える、延長五千何百尺といふ處に大和河内の國界の目標を見付けたと思ふと、出口の半圓形の頂が、山の端に現はれる月のやうに見え出した。

『實に奇麗だ、愉快だね。』

と晝のやうに明い車中に立つて行衛を眺めて居つた秋濤君は、『君、出口が見え出したよ、隨分長いトンネルだね。』

『涼しくて佳い心持だわ、夏はいゝてせうね』と江戸辯の女の唇から巻煙草の白い煙がもれる。

闇中正に八分、穴を出ると大和路につゞく小松の丘陵を左右に見て速さこと矢の如しだ。

『流石に岩下君だ、この仕事は岩下君でなければ到底も出來ないよ、よし岩下君が北濱銀行を開城しても、唯だ一つ此大阪軌道の存在によつて渠の生命は永久だ、君大阪からハイスピードの電車で數十分間に奈良にゆかれるといふ事は、今に見玉へそれは非常なことになるから、他日株主は必ず渠の頌德碑を建る時代が來るから。』

と福澤さんは熱心に語り初めた、それから優先株の發行額や運輸收入の豫想なぞ胸の裡で計算しながら時々質問せらる。

『大阪軌道の前途は勿論有望だ。今に見玉へ此次の成金時代には此鐵道が起點になつた伊勢路から名古屋へ連絡する大鐵道になるから見玉へ』、と言つて暫く考へて居つたが『矢張り岩下君はエライよ。』と妙に感心をし初めた。

岩下さんに對する福澤さんの感情はどちらかと言へば平素冷かであるやうだ、岩下さんの此度の失敗に對して、同情の念はあるけれど、然し當然免るべからざる運命だと豫期して居られるやうに斷言せられたこともある。福澤さんも世間から誤解を受ける人である、岩下さんも又世間から誤解せられて居る人である、隨分辭骨に憎まれ口をきく福澤さんが『矢張り岩下君はエライよ』と感慨無量にあつた樣子を直覺した僕の心中は實に嬉しくてたまらない。今や大阪に於ける唯一の問題は岩下さんのお身の上である。實にお氣の毒だとお世辭を言ふ人に存外同情のない顏付を見脈て居る僕は、平素惡口を言ふ福澤さんの其眞卒の態度を見て實に〱堪らないほど嬉しかつた。

西大寺の甍に注ぐ雨の大和路は、夕暮のうす煙を、彼方此方の青葉の影に漂はせて、まだ消えやらぬ菜種がら燒く野末の先にはお誂の塔が見える、奈良はよい所、古き都の雰圍氣の裡に電車が着くといふ事實其物が少くとも史的興味を殺ぐやうに思はれて困る。

『まだ水道の出來て居らない奈良の市街に僅か三四丁乘入れるといふ丈でダブルドロリーを適用せしむるといふは實に馬鹿氣た話だ、大阪から十九哩何十チエーンをシングルで來て僅に二十チエーン、それを複線にしろといふのは隨分無理な話だ、そのくせ、彼所は大極殿の跡だからといふて遠廻りをしろ、一直線を大曲線にせよと強ゆるのだからこの位矛盾の話は無いお役人も困つたものだよ。』と大阪軌道の當局者が愚痴を其まゝ受賣しながら停留所につく。雨はまだ止ない。

『僕は田舍漢だ、お上さんだから、幌を上て置てくれ、なに濕てもかまはない、見物すべい。』と秋濤クンは洋服の襟を立て夏帽子を阿彌陀に被りながら車に乘る。

四臺の車は輕き風に柳のみどりなびく猿澤の池のほとり、人に慣る鹿の一群をよけて、南圓堂前の坂を上つて、青柴の廣やかな春日野の一端を左に見て、こけむ

す燈籠に杉の木立、大鳥居の前を右に折れて奈良ホテルに着く。

池を隔て、春日山東大寺、三笠山が一目に見ゆる二階の一室へおちつく。『實に絶景だ、いゝ處だね。』と秋濤君は上衣をぬいて窓を明く、若艸山のあたり、一沫の白雲うす羅の如く漂ふ、折から聞ゆる大佛の鐘の聲ー

『詩的を通り越して芝居氣に出來て居る、爭はれんものじやテ』と秋濤君は少し反身になつてシガーを燻らしながら部屋の中を歩いて居る。突然『君、奈良の鹿には角がなかつたやうだね』

『今は何處の鹿にだつて角はありませんわ、これからてすもの』

『へいー。』と秋濤君は不思議そうな顔をする。

『君、鹿の角は年に一度、枯れて落ちそれから來年の春頃から新しく生るものだ。』と福澤サンは説明する。

『冗談じやないよ。』とすました顔付。

『アラ眞實よ、貴方、貴方の様な博學に似合はぬことてすわ春日さんの年中行事には鹿の角切りといふ古式なお祭まであつてよ。』と物を言ふ度に白いそろつた齒を一寸見せるのが愛嬌ある此美人の特色だ。

『然し、角のある方が男の鹿てしやう。』

『男の方に角があるのよ。』

『それは妙だ、角を切るべきものならば女の方に有るべき筈だ。』

『知らないわ。』と茶かされて美人は横を向く。

『ハヽヽ。』と秋濤君は安樂椅子にどしんと座る。

『妾、失禮してお浴をいたゞきますわ。』と三人を殘して出てゆく後髮には唯だこれのみと飾れる、音符形にちりばめたるダイヤモンドの光りが消ゆると共に、部屋に漂ひたる香水の馨は自然とうすれゆく。

『情夫ては何しても食ない、到底も女て食ふ資格は無いと見える。』と何に感じたのか秋濤君はそれから獨言のやうに『もう、舞子の濱浪宅の場も厭々だ。』と大な欠伸をする。

『君は反抗心があるから駄目だ、女て食はうと決心する以上は何も女髪結や女義太夫の亭主を學はずとも、

或る點までは自我を沒却しなくては駄目だよ。」と福澤さんは言ふ。

「强ち自我を沒却せんでも情夫の資格のあるものはちやんと統御して居るから妙だ、君、林稲にしても伊藤大八にしてもそうだ、どうもそこへゆくと僕には情夫の資格は絶對的にないものと大に悲観したくなる、福澤君なぞは不幸にして金があるから困るけれど或點は充分に情夫の資格があるから偉いよ。」

「そうすると僕は女で食へる見込があるのだね、難有いな。」

「福澤サンなぞは問題外だ、それは長田君の方が段が違ふと思ふ、長田君は實に理想的の色男だ。」

「何故かい。」

「何故つて只だ色男過ぎるから困るので、要するに美人薄命の類さ、何時でも何人でも出來るから、直に逃るか逃られるかで解決が着くから、男女の問題を輕く見すぎる罪だ。」

と僕は物知顔に少しおだてた心持で言ふ。矢張り嬉しいと見えて頬のあたりに少し微笑が浮んで來た。

「そうすると矢張り執念深いのに限るかな、然し執念深いのには閉口するよ、物事は淡泊とせなくては長持がしないやうに思はれるが」

「程度問題で、餘り淡泊すぎると乘氣になれず、執濃と嫌はれるし。」

「結局は戀を重大視するものが勝つに極まつて居る、長田君などは餘りに戀を輕視して來た罪で、今日に至つて情夫の賣口を探そうとしてもそれは無理だ。」

「そうだ、もうこう老衰になつては駄目だよ。」と心の底から出るやうな錆た聲で言はれた時、僕は不圖秋濤君の横顔を見る。

中央からうすくなり初めて來た髮の毛には油氣もなく今朝は剃刀もあてぬと見ゆる頬髯にもう白髮が見える、女優浪子の情夫として一度は滿都の青年の羨望の中心となつた才人秋濤子の哀れなる末路――といふは少し言ひにくいけれど、女にかけては思ふこと叶はざるなしと、艶福のありたけをつくして來たこの色男の

口から、自分には情夫の資格がないものと自覺せしむるに至つたのは實に悲慘な話である。

行く春を惜むのは女ばかりては無い。年齢は重たくないといふ愚痴は、わけて此道に趣味を持つ四十男の詐らざる述懷として何人も苦笑する所である、朝な朝な何時とはなしに知らぬ間に禿げかゝる髮と、增える白髮とを鏡に見る心中の無念さは人に言はぬだけて女房にさへも內所て繕ひ勝の人情をさらけ出して情氣なしに言ふものとせば一角の豪傑も昔より思案の外と定まれる範圍內の痴漢たるに過ぎぬから況して我秋濤先生が其老境に入るを悔む面影を見ると情夫資格論を持出すのも實に無理がないかも知れぬ。

『年齢をとつては事實駄目てす、馬鹿らしいと言ふのは實は負惜みて、到底落伍者たるを免れんからてすな。』と僕も近來趣味索然たるに心細くてたまらぬ折柄とて百萬の味方を得たやうな心持がする。福澤さんは默つて瞑目、長倚子にもたれたまゝ、氣味の惡い笑を漏らして居るのは、青春の戀を顧ふて居るのてはあるまいか。

『奈良は僕に初戀を味はしめた舊き都である、僕が二十二三の頃宗右衞門町に中雪といふお茶屋があつて、そこに別嬪の娘があつて、それから一人可愛らしい藝妓があつて、名は勿論覺えて居るけれど言へない、娘と藝妓と三人で奈良に遊びに行たと思ひなさい……今に忘れぬのはその娘が（妾あなたのやうなお方にあつたことはない）と言ふたが何ういふ意味か、それが判つて堪るものか』と要領を得ぬ話の中にも特に其文句を忘れない位、頗る得意氣に當て話されたことを思ひ出して、今それを繰返し〳〵思ひ出して居るのではあるまいかと、僕も逆ひ誘はれて微笑するやうになつた。

過去を語るものは老たり過去を回想して其興味に滿足するに至つては現在に希望なきを證して餘りありて四十男三ッ巴の智惠の無さ加減が可笑くなる。

『長田君そら悲觀するにも及ばないのは下山京子のことが今月のニコニコに出て居たよ』と僕は少し景氣づける。

『あれを讀んだのか。』

『讀んだ。』

『來月はもつと面白いものが出るから讀んで呉れ玉へ』

『今度は松竹女優征伐談かね、あれは君が一あたり平均に恩怨なしに滿足さしたそうじゃないか、決して悲觀するに及ばんテ。』

『冗談じやないよ、馬鹿なこと僕は松竹の女優には一人も關係がないよまさか長田秋濤老たりと雖も。』

『いやに老たりを氣にするね。』

『老たる點は京子には誂向だ。』

『あれも僕は全く關係ないよ然し存外彼女は堅いよ、今日世評に上つて居る連中で、望月小太郎、野間五造勿論駄目さ、神戸の鹿島、あれだけは確然だ、ア、いふヌウボウ式でなければ一寸京子の相手にはなれぬよ、僕も一月餘り一葉茶屋に寢食を共にしたが、たつた一度機會があつたけれど、』

『その機會は先方からか又は當方からか。』

『無論先方からさ、然し中々考えて居るから僕にもそう馬鹿は出來なかつた、爾澤さん貴方も評判されて居る一人ですぜ。』

『まさか、僕はア、いふ惡黨はきらいだ。』

『君も御連中の一人ではないかい。』

『僕も初の中二三度行つたけれど、到底我々の敵でないと見た、段が違ふから、直に引下つたね。僕等の連中には函根へ一泊がけで引張出した男が一人あるだけて、然しそれも悧巧な男だから退却したやうだ。』

と話の最中に浴上りの美人が這入つて來た。ほんのりと色付いた兩頰を手て擦りながら窓を開けて涼風を呼ぶ雨は益々強く白銀のやうに斜めに〳〵硝子扉を打つ春日の山も森も闇の中に隱れて脚下斷崖の池に倒まに映るホテルの燈影は畫を見るやうである。

酒場にゆく。ホヰイスキーコックテール、平野水など思ひ〳〵にて、やがて食堂に入る。食後喫煙室にて安樂倚子に足を投出しながら語る。

『女て飯が食へると言へば島村抱月は今後に須磨子で食つて行るだらうか。』

と、僕は不圖抱月のことを思ひ出して、彼の男は五人組から直に、女房、直に女優と一足飛に結論に到達した因果として、喜劇と悲劇が一時に現はれるべき運命を有すといふ話を聞いて居つたから、尙一つの理由は僕の尊敬する先輩が精神的に須磨子を扶養して大成せしめたいといふ希望を――實に幼稚な笑ふべき希望を眞面目に持つて居るから、僕は須磨子に對する智識を努めて養成しやうと心掛て居つたから、つい問ふて見たのてある。

『須磨子て飯が食へるものか、島村は今後に狂氣するよ、然し同時に狂的文學者として大成するかもしれ

ぬ。」

「四十男の初戀だそうだ、可愛そうに。」

將來に烏村はどういふ小説を書くだらうと、妙に同情の念が涌いて來ると、現狀に不滿足なる僕の胸中にはそゞろに過去の熱烈なる戀を回顧して一瞬の興味を貪りたくなると急にホテルが厭になつた。僕は春日の森が好だ、森の樹影の朝露が好だ、朝露を踏み碎く吾妻下駄と、其裾のぬれるにまかすお召縮緬の女が好だ。ア丶僕は奈良が好だ。僕の初戀、三つある初戀の一つは奈良のはたごやに一夜を明かした二十二歲の昔の夢の年上の女が好だ。

僕は急にホテルが厭になつて大阪へ歸る氣になつた。

「今夜はこれでお別れして歸ります。」と力なく椅子を離れた。僕の腦中には淡い〱夢のやうに年上の女の顏が浮かんで居る、此幻影を何時までも保存したい。もう何にも言ひ度くない。早く此まゝゆきホテルを去つて闇き春日の森にゆき度い。

「雨が降てこんなに遲う御座いますから今夜は泊つて入らつしやいな。」と美人はすゝめてくれたけれど僕は人力車を命じて歸ることにした。雨の吹込む窓を開てこゝらあたりと思ふ菊屋の裏二階を闇の中に茫乎と見る。魂が飛ぶやうだ、もしやお歌さんに心が通じたのではあるまいかと云ふ氣がする。お歌さんはたしか其時二十五歲、色は淺黑かつたけれど細そりとした意氣な藝妓であつた、書生上りの其頃の僕の眼には、何だか非常にお婆さんのやうに思はれた。色も、戀も、そういつた事は未[illegible]もない、遊を覺えた許の僕の眼中には二十五歲のお歌さんなぞは勿論無かつたのである。

梅雨の晴れ間の或る土曜日の夕方、お歌さんと二人で烏六で御飯をたべて芝居の看板を見ながら道頓堀のそゞろ歩き、ほとゝぎすといふ烏の啼く聲を聞たことがあり升かといふ話が緒口になつて、お歌さんに誘はれて、俄に奈良へ遊びにゆくことになつた、菊屋の裏二階へ着いたのは彼是十一時過であつた。

「別々に寢るんだよ。」

女中は笑ひながら僕の言ふがまゝに床を二つ展た。お歌さんは女中と顏を見合せて笑ひながら馬耳然ておつた。

「蚊が居るのかい」

と僕は蚊帳を張る女中に聞く、ハイと輕く返事をした而已で張て出てゆく一の蚊帳の中に寢るのは一種の侮辱を受けるやうに感じたけれど、強いて拒まうともしなかつた。

丁度猿澤の池に影る半圓の月が、躍る魚に碎かれると又雲に隱れて消ゑ欄干の下の流の音と蛙の聲が喧しく聞えるだけで、ほとゝぎすのとは忘れて仕まつた。一枚だけ開殘した雨戶の傍にある椅子にもたれて朗詠式の詩吟を小さい聲で試みる僕に關はず、お歌さんは蚊帳の裡でしばしば煙管をたゝく音をさせて居つたが、

「もう、寢なはれや。」

と初て言つた。僕は一枚の雨戸をしめて、蚊帳へ這入つた。默つて寢たけれど僕には到底も寢入られない。坊主枕をくる〳〵と廻しながら右に左に寢返りをする許りだ。

其中にお歌さんの鼾聲が聞えた。僕は蛇の首のやうに少し立て樣子をうかゞつた。うす暗き有明の火影は蚊帳越の水色に美しい寢顏をてらして居る。

一時、二時、三時、二階の上り口のあたりで響く時計の音よりも、二階中を馳廻る鼠の音よりも呑氣に寢入られるお歌さんの鼾の聲が耳について困る。なぜ女はこう平氣だらうと口惜しい樣な心持がして來た。僕はそつとお歌さんの顏を覗いて見る。

『もうお起なはつた。』

と突然お歌さんが眼を半開にした時、驚いて自分の床へ飛び下つた。

『もう、お起なはつた、まだ早いわ。』

とお歌さんは右の手をだるそうに疊の上に投出した。

とう〳〵一睡もしない僕は、お歌さんに誘はれて、朝日の上らぬ中にと朝詣でがてら、春日の森に運動に出かけた。

『ゆうべ杜鵑が啼ましたか。』

とお歌さんは僕の手を握りながら『なきやしまへんでつしやろ。』

僕は默つてうつむいて。お歌さんの露にぬるゝ吾妻下駄とお召の裾を見詰て居た。初めて我に返たやうに。

『どうしたら宜の。』と顏を上げると

『何をどうするの。』とお歌さんは頗る平氣だ、そして『もう一晩とまりなはれや。』といつて僕の顏を見てニツコリ笑つた其笑ひ顏の當時を思ひ出しながら僕はホテルを出た。

雨が少し小止になつて雲の絕間から星の光が見える、空想にふけつて丁度阿片を呑めば、こうもあらうかと思はるゝ情潮の中に、車は鳥居前に來た。

『オイ車屋一寸降て吳れ。』

車夫は不思議そうに梶をおろして幌を上た。僕の好きな春日の森、お歌さんに手を曳れた青葉の影、僕はどこ迄其幻夢の境に醉ふことが出來るかと心嬉しく車を降た。

『暫く待つてくれ。』

僕は二歩三歩、あゆみ出した。

雨夜の森の中、サンデリヤの光りを避けてお歌さんを思ひ浮べながら行くと、一陣の强風杉の木立のたまれる水を颯とこぼす、洋服の片腕はしたゝかぬれた。

森の奥より冷い風が襲ふ樣に吹いて來ると、急に馬鹿〳〵しい樣な氣がして、直に引返して車に乘る。『なん

だ、馬鹿〳〵しい」と我知らずつぶやいた。狐につまゝれたやうな氣がせぬでもない。もうお歌さんのことは忘れて仕末つて、こういふ時に鹿の鳴音が聞ゆると宜いがなと耳をそばだてるけれど駄目だ。ペタ〳〵と車夫の足音が廣い公園のさむしい裡を走るばかりだ。

涼味の今昔

笹川臨風

此人數船なればこそ涼みかな。綠陰に茗を啜るも、石燈籠に灯を點じて茄子の新漬を食ふも、岐阜提灯をつけて葉越の月を疊に寫すも、扇風器をうならせて、冷藏庫から取り出した水蜜桃を嚙るも、涼味は即ち涼味であるが、まだ水邊に涼榻を安ずるに若かず。水は清淺、水石相打つて、操琴の響をなすは、頓に暑氣を一洗する。ごろりと手枕すれば、夢路は秋の大野を徜徉うてあらう。水の淸くして淺いは、徒然草に云つた通り涼しくて宜し。しかし其の深くして湛へたのは舟を泛ばせて涼を取るに足る。前者は鴨の夕涼て、後者は隅田の涼船である。

京は糺の森、靈泉玉を漱いて、冷、骨に徹する。林間に茶店を設けて酒食を賣る、(日次紀事)ことは、古くからのことである。四條河原に床を並べ席を設けて川原の涼をなしたのも(前同書)、古いことだ。高天原の昔に天安河に夕涼をしたかどうかは分らねども、月明の夜に天鈿女命が舞ひふざけたことはあらう。奈良は水に遠く、あつた處が佐保河か猿澤の池では水邊の納涼とはゆかぬ。平安朝となれば、東に鴨西に大堰がある。水の趣味も都人士に理解せられて、夕涼の料に

供せられた。六月祓は奈良の小川の夕暮にも盛てあつたが、鴨、糺の森は其執行處であつた。後撰集に、「賀茂川のみなそこすみて照る月をゆきて見んとや夏はらへする」と云ふ歌も見える。河原院などヽ云ふ大規摸な邸宅が出來ると、前栽に山水のさまを寫つせば、公卿殿上人は夏の一夜を涼しき水のほとりに過すことも盛てあつたらう。拾遺集に、惠慶法師が河原院の泉のもとに涼み待てと小書して、「松影のいはねの水を掬びあげて夏なき年と思ひけるかな」と云ふ歌が見える。金葉集には水風晩涼だの、詞花集には水邊納涼だの、千歳集には泉邊納涼だの、新古今集には納涼だのと云ふ歌の題が見えて、水畔の涼味はいよ〱饒かになつて來た。六條河原が梟首の本場となつたり、四條河原に飢饉歳の死人の屍骸を埋めるやうては鴨河の夕涼もあつたものに非ず、鴨河の夕涼こそなからうが、足利の八代將軍義政即ち東山殿になると、例の贅澤三昧の風流寛濶の君であるから、蔭涼軒での發句に「秋を思ひ遣水涼し夏の庭」などヽひねつてゐる處を見ると、

花見ほどの大規模ではなくとも、夫人富子の方を相手に、童朋連を左右に並べて、お手前拜見の納涼會ぐらゐはあつたらう。天文年間の奇異雜談に糺の森のことを記して「地下の西よりにきれいにして大なる家あり、茶屋なり」とあれば、水茶屋のありしことが分る。江戸時代に入ると、四條の納涼は盛であつた。宇治加賀掾の古淨瑠璃に「さて又涼みの夕景色、上の御手洗掬ぶ手に夏なきとしも思ひ川、水に蛙の聲立てし苫屋のかゞり打烟、かなたこなたに灯火のやゝみえそめつゝ程もなく東石垣西は又ほんとにつゞく石垣町の軒に爭ふ釣行燈、かみは三條橋の下、下は松原こなたまで流れにつゞく水茶屋は曇らぬ空の星月夜、天の河原もかくやらん」とあるは、其狀況である。歌舞伎事始には「六月涼みの間、四條河原水茶屋を矢ぐら年寄支配することは、昔涼みの間芝居なし、よつて水茶屋迷惑に及ぶ、この事を思ひて名代座元矢倉年寄合體の上にて「涼みの間水茶屋を願ひつかはす、これに依て今あまたの茶店を出す事になれり、故に今以て芝居の表に涼みの

間右の面々出て川原の支配するなり、もとより四條河原は萬事矢倉年寄起をとり計ふなり」とあつて、水茶屋の支配權を說いて居る。京は砂糖漬のやうなる所だの花の都は二百年にて今は花の田舍なり、田舍にしては花殘れりと、ひどく皮肉をあびせかけて居る見た京物語の著者は「四條の凉に所々芝居あり、皆輕業見世物等なり、爰に明りのため松のひでを焚く、芝居葭簀圍ひなれば表へすき通り悉くすぐ見える、夫を三條の橋などより見渡せば、挑灯も夥しく火も見ゆる故江戸火事場の如し」と罵り、「四條凉には町方御附方より固め出る」とかいてゐる。一代男に「風待つ暮、河原の凉み床を見渡せば、柳の馬場の長七提煙草盆に大團扇を持ちまぜ人尋ぬる風情」あるにて元祿の夕凉、定めて華車風流なことも多かつたらうと思ひなされる。舞子のだらりは行燈の光に照つて、目さめる金絲の色が**水に流るゝは夕涼の餘興である。**どうせかきもちかあかいりのみを肴の淺酌低唱、しかし趣は又そこにある。古浮世繪て其さまを伺へば、どうしても繪てある。東山は黑く、河水のあたりに燈火が五六點見える。水は藍を溶して、瀨にせしらぎの音がする。京は一體に暑い所だ。土手の柳の絲は低く垂れて、滿天の星は降るかと輝く。其間に優長な、それて腦天から出發するやうなきい〳〵聲が響く。世の中は太平である。關東が政治を執らうが、三百諸侯が素通りしやうが、何にしても禁裡樣の御膝元、あんたお上りどすなの一語は江戸つ兒を輕蔑し畢る。

昔の鴨河の夕凉は繪てあつた。キリンビールやレート、仁丹の廣告燈が四條橋畔に明滅して、ビーヤホール、メリーゴーランドが河原の上下て幅を利かしては、一寸考物である。しかしそれても猶可なり。鴨河に水が多くなつて、河原に床がかけられず、四條の大橋が和洋折衷衛生料理式となつては、愈々以て告朔の餼羊。夕凉、そないなことがおましたかになつてしまふは燭照して龜卜するよりも明々白々のことである。

凡そ關左に遊ぶものは、必ず富士山を見、武藏野を過ぎ、隅田川を渡り筑波山に登れば則ち皆四方觀遊の

奚を誇るなり（靜勝軒詩跋）と云はれた隅田川は伊勢物語以來の名所である。廻國雜記に「同行のうちに、さゝえを携へける人ありて、杯酌の興を催し侍りき、猶ゆきゝて、川上に到り侍りて、都鳥尋ね見んとて、人々さそひけるほどに、まかり讀める、（中略）、やうやうかへるさになり侍れば、夕の月、處から面白くて、舟をさしとめて云々」とありて、偶には風流の遊をなしたるものもあれども、鎌倉南北朝の頃には、「隅田の渡り兩所に陣どつて、櫓をかき櫓の柱に馬を繋いて、源氏を待かけたる」（源平盛衰記）處であつた。「東の渚に幽村あり、西の渚に孤村あり、水面悠々として、西岸にひとしく、晩霞山江に流れ歸帆野艸をはしるかとぞ覺ゆ、筑波蒼空の東にあたり、富士碧落の西に有て、絶頂はたへに消え、裾野に夕日を帶び、朧月空に懸り、扁雲ゆき盡して四域に山なし」（北國紀行）と云へるは、其古の隅田川の風情であつた。しかし都鳥が唯一の名物とて、古歌には「ことゝはん」とか、「昔の鳥の跡」とか、「都を鳥の名に忍ぶ」とかばかりて、水の趣水の遊に至つては一向に物の本に見えぬ。まして鐘紡だの札幌ビールだの、モートル艇だの一錢蒸汽だのが、次第〳〵に所謂文明的にすることなどは金龍山の未來記にもござるまい。しかし徳川殿御入國となると、そろそろ此川に目がつく。昔々物語に「慶長の頃、夏日暑氣強き故、諸人涼のため平田船に屋根を造りかけ、是を借りて淺草川を乘廻し、暑を忘れ慰む、是れ船遊の始なり大身は大勢のとも人故船狹く涼しからず、其翌年より船頭共申合せて舟次第に大く造り立、四五間もある舟になり、承應の頃船の盛りにて、明暦三酉正月江戸中大火事、翌年に至りても御城の御普請、江戸中の大小名普請故、船は如何やうの小舟迄も材木竹石の運送舟になりて、更に涼みの屋形船一般もなし、依之三四年の間、船遊山すきとやみしが、萬治の末、右の涼舟造り出し、諸人借りて夏の暑さを凌ぎ。過し火事の苦みを忘れ、夥しき流行、大身衆まてあまた出らるるにより、船ちいさく間數少くして足らざる故又次第に大く七八間の屋形を造り、後には船の名川一丸關東丸

山一丸、熊一丸大關丸十一丸などして、山一は九間熊は十間、十一丸は十一間あり、大身衆是に乘て辨當色々美を盡し、人數十人なれば鎗十本兩の艫に添てかけ並べ、十二人なれば十二筋なり、是を大身の晴に見するなり、町人の出る船には鎗一筋もなし、大身の乘たる舟は鎗ばかりにあらず、家來侍袴着用人らしき者は紋子肩衣着るありしを、近年船遊山には舟も小く、鎗などは一筋も見えずと云へり」とありて、隅田川の遊船の擧も出來た。但し紫の一本に依るに東國丸（前にある關東丸のことか）は大船の初、山市丸は日本橋の舟にて屋形入間にしきりて東國丸より大に、熊市丸は江戸橋の舟にて九間にしきたるより此稱あり、神田市丸は神田にて、一番大なる舟と見ゆ。同じ書に「熊市丸と云ふ船には紅葉の幔幕をはしらかし、桂の棹に蘭の梶とも云ふべく飾りたる船碇を下して幕を高く卷上たるを遙に見着たれば、年の齡二八ばかりの女十二三人時花染とも入流して、當世風流伊勢音頭、さすやうてさゝぬは人待宵のから木戸またもさすものは追手の風に水馴棹、さすや汐時に川市丸に打乘、江戸橋の下より漕出したや大川一凉しき風の福市丸、勢かゝる虎一丸、西國丸や北國丸東國丸も出たり、かゝる繁昌の江戸市丸へ浦々の湊々より押出す穀船千石丸萬石丸二丁立も見えたり、淺草川をのぼりつゝ觀音丸を脇に見て山の宿の際に付て漕ぐは待乳の山市丸まさりたりや都丸、三谷にての太夫衆、その高尾丸吉野丸に吉田丸、姿花市丸に櫻丸の粧ひかゝる君達に手枕丸むすびよらばや泉丸高砂丸や住吉丸の相生の末吉丸と祈る。伊勢丸百足丸有とな辨天丸の船頭も仕合がよからば大福丸にならふ、けふは日和の波吉丸に打乘て棹の雫に、袖打濡てさすやうてさゝぬはなんど諷ふ、やがて遺佚がよむ、淺草の川の面の船遊びこひになりつゝ身もをとるなり、此舟ばかりにあらばこそ、暮時分になれば角田川牛島金龍山駒形堂こゝかしこの下座敷町屋〳〵の茶屋やきこ〳〵かけ讃きたる船ども、水の面も見えぬ迄に漕ぎたせば、兩國橋の上御藏前のあたりより下は三段たまり、深川口新川口をまん中にてかけならべたる舟ども幾千

萬と云ふ數を知らず、殊更延寶巳年より伊勢踊はやり、老たるも若きもよきもあしきも坊主も女も浮き立て踊る頃なれば、鼓太鼓て踊るもあり、琴三味線にてはやすもあり、尺八小弓て合するもあり、女をどり男をどり武士をどり武士踊町人踊引汐に任せて流し舟にて踊るもあり、さす汐にろを立のぼり、舟にて踊るもあり、此屋形の外に踊り。見物とて出る舟もあり、月を觀んとて出るもあり、涼みに出る舟もあり、餅賣酒賣饅頭賣田樂煮賣肴賣冷水冷麥冷瓜蕎麥切めせと云ふもあり、花火船を呼びかけて一般切りに仕立てさする、枝垂柳に大櫻、天下太平文字うつり流星玉は手ぼたんや蝶やふとうに車火や、是は仕出の大からくりちうてん立傘御覧ぜよ火うつりの味はつかまつゝたり、天下一あつちやあ〳〵と譽むるもあり、北も南も西東こゝかしこにてたてあくれば、たゞ日中の如くなるに玉火の出る筒の音流星のあがる羽音人のわめく聲にて心靜に漕ぐ船なしと云へり」とある。此うなると隅田川も大利用、都人士の遊び場所、納涼場所となつて、江戸錦繪の好書題となつて來る。金紋打たる贅澤船は有司の癇に觸つて、禁じてしまへと、寛文八年三月には遊山船金銀の紋座敷の内繪書申間敷候事と、一本、屋形船の上にきめつけることゝなつた。但し屋形船の濫觴に就ては前の諸書とことかはつて、洞房語園異本考異には、「傳奏御座敷へ召れし遊女の往來には、舟の上に苫覆をいたし、幕簾をかけたるを初めとして、外々にも屋形舟といふもの始りけるとなり、是れ樓船の權輿と聞えたり」とある、之も一説として聞き屆け置く。元祿の頃となれば、大殿女中などが幕打廻したる屋形船に乘りて隅田川への納涼、中やゆかしき三味琴の音、歌舞伎役者などが陪席せぬだけは目つけものであらう。「忘れては春の夜や花火のさかりを見んと、淺草河の暮を急ぎしに、九間市丸の大船金銀のかざり浪にうつりてみるに。小座敷九つあるに時々名のおもしろく、また一間には祝彌四郎かゝりのかはりまがきのつれ歌永閑ぶしの道行艫の間には伊勢守が斗樽高砂屋の白味噌川越瓜の組籠青鷺は大汁眞鰹はさしみ取交てのさは

ぎ世間も恐れず、天下の町人なればこそ一日五兩の船賃は出せ、これさへ奢と詠め行くに阿武丸と云ふ船に八疊釣の紋紗の蚊屋乳緣ひどんす四角の唐房匂ひの玉簾かせ軸簾の内には人も大勢あると見えし、」とは流石に元祿の寬濶出立てある。紀文の豪奢になると、川遊に出かけると見せかけて、朱觥を河上より水のまに〳〵流して、あつと都人士の膽玉を消し、どうだ名案てげせうとの獨よがり、それよりは流燈會都鳥流しの方が餘程凉味が饒てある。明曆の大火以後山谷に假宅が出來ると、河は到る處に利用の妙を顯して、船宿が出來る、二挺立の早舟が出來る、一挺艫の猪牙船が出來る、「明曆の比、兩國橋笹屋利兵衞、見付の玉屋勘五と云ふもの是を作る、押送りの長吉と云ふもの、船を藥研の形に作り、魚荷を積て押すに、至てはやしてこれを考へて作るものなり、長吉舟と云ふべかりけるを、ちよき舟と云へり、近年猪牙の二字を用ゆ、猪牙に状似たる故か」（本朝世事談）とあるは即ちこれてある。此うなると川遊凉舟も從つて盛行せねはならぬ。侍乳沈て梢乘り出す山谷堀は忙しい秦淮の渡頭となることは必定てある。芝全交の通一聲女暫と云ふ黄表紙には浮き川竹の身を舟に喩へて云ふ、「遠い南國北國深川合せて四ツ谷四里四方、是れ江戶川のすゑ〳〵も皆川竹の流の身、自らとても三茶舟新艘引舟引連れてずつと出船の其顏は少しはどなたも水馴棹檣かい苦界をおしたてゝ田舍育ちの鶯のほを帆掛舟しばらくと親舟の親玉や小舟に小玉市川が眞似を似たりや御茶舟をにごして其まゝ引返し川一丸や高尾丸、是此里の傾城の名も吉野丸にこ〳〵と夷丸に御笑もとかくまろかれまる顏の四角にとりしすみ前髮口先の猪牙舟に掛り舟とはなりんせん、せんとはねたるせんの字も船といふ字が白濱の嘸御傳馬な女とも思し召しもいかだ舟、こんな事は岡場所へさらりとやつて捨小舟、先づ仲直り元舟の通りに丸く千歳丸、千歳萬舟萬々歲、其帆柱の數々は一本日本堤から日の出を待合衣紋坂えも揃つて大門へ御入舟を松葉やとゝゝうやまつて申す」と。苦界十年の熱さはとても川舟の凉味に及はぬ。

さるほどに水野越前守の天保改革あつて、其やかましさ一方ならず。屋形船涼み舟川開の上にも一大痛棒を加へて、とにかく此に一頓挫があつた。寛文見聞記に、其一班を述べて云ふ、「仲町を初め其外の娼婦、客の迎ひとて屋根船にのり、船宿まで行く事あり、又送りとて客とともに舟に乘り行くあり、皆衣類髪の飾り美を盡くし、時花ものを專らとして、高金の品を用ひ、輕子と云ひて中居の女つきそひ行く、是も縮緬の前垂をして、頭の飾り高金の品を用ゆ。此舟春夏の頃は兩國川あたりに納涼花火などに遊ぶことあり、前に云ふ三味線藝者を伴ひし舟ともに、橋間に繋ぎて猥がはしき事もありしより屋根船のすだれは雨雪の時、または波立たる時の外は卷き上げ置くべし、橋間に繋ぎ置くべからずと、此年四月に令ありける」と、水越の改革は一時の變現象には過ぎなかつたが、久しからずして幕府の末造に際したから、隅田川隆盛時代も先づ此邊で打切りであらう。しかし北に吉原、山谷、南に柳橋を控へて居ることゝて、名ある料理屋船宿は此間に散在して、屋根船に涼を納れ、玉屋鍵屋の聲に二州橋畔を賑はしたことは猶存じたのである。關屋の里、待乳山、竹屋の渡、菴崎、首尾の松など不風流な江戸に猶且つ風雅風流を留めたのは全く隅田川の賜物で、江戸の詩味書趣は此に止めを刺すのである。

川舟の川魚御料理、御座舟、川々の橋上夏時の晩涼を趁うた大阪も、電車で箕面に往く寶塚に往き、濱寺淡の輪和歌の浦に行き、葦屋住吉須磨明石へ行くやうになつては。もう土地で納涼の工夫をするに及ばぬ。東京でも亦同樣である。鎌倉片瀨大磯箱根に出かけ、鹽原、日光へ避暑と洒落るやうになつては、屋根舟も涼み舟もあつたものでない、それほど遠征せずとも、玉川、大森、森ケ崎、十二社、もう少し下つて國技館の納涼場へでも往つて一日の暑氣拂ひをするやうになつては、隅田川は石炭船、肥やし舟、千住通ひの蒸汽の跳梁する所で、風流とは緣もゆかりもなくなつてしまつた。首尾の松も枯れ果てゝ、駒形堂が電車停留場の前に棄てられたやうに立ち、言問のほとりに醜惡なる銅

像があたりを俗化する今日、隅田の風流は一掃されてしまつたが、とにかく此儘に風流と絶縁するのは惜しい。夏期の暑熱に會する毎に古の水趣涼味を復活したいと思ふ。

政爭渦中の滿鐵劇

鐵拳禪

〔一〕

滿鐵問題は、もと一理事の進退問題に過ぎず。而も紛糾錯綜し來りて、容易に解決し得ざりし所以の者は、政爭を加味せるに由らずんば非ず。現內閣贔負の徒は、決して政爭の具に供せしに非ずと云ふと雖も、其の問題劇の成行を觀る時は、其處に顯著なる政治的色彩あり、黨同伐異の情調あり、以て舞臺面を粉飾せること疑ふ可からず。若し此の事件にして政治的色彩なからんか、單に雜報的の材料にして、問題劇となるべき性質のものに非ず。唯事もなげに一理事の馘首のみにて、天下泰平たるべき筈のものなり。然るに、其の事件の單純なるが如くにして實は單純ならず、四圍の關係交錯し來るや一波忽ち萬波を生み、波瀾重疊測るべからざるに至らんとせしは、政爭渦中の問題たるが故なり。果然滿鐵問題は、新聞の一雜報に非ずして、滿洲を背景とせる所の政界の渦卷劇たるなり。事の起因は理事犬塚信太郎が部局制反對を固執せるにあり。去五月十三日新任重役等悉く大連に著任せるを以て、十四日午前十時より總裁社宅に於て重役會議を開き、總裁野村龍太郎は從來の合議制を改めて部局制となすの事務分掌規程改正案を一同に提示し、「合議制の動もすれば責任推諉の因をなすの弊あれば、自分は就任の初よ

り部局制の本體に復し、副總裁及び理事をして各部局の長たらしめ、以て責守を明かにし、其の事の重大なる者は乃ち合議審案して裁定宜しきに從ふことと合議制と相異なるなからしむるを以て、將來社務の刷新改善を計るに於て最良の方法なりと信ずる』旨を辯明せり。二三の押問答の後犬塚は部局制の短所を指摘し、『所長の上に部長を置く時は自ら所課長の責任を輕からしめ、其の極樂みて事務に從ふ者なきに至り、人心の動搖を招くの虞あり、最初部局制なりしも後幾許もなく合議制に改めし以來今日に及びて、實績顯著なるの事實に徵し、自分は飽迄反對なり』と絕叫せり。他の重役等は異口同音に條理を盡して犬塚に再考を求めたるも、彼れ頑として之に聽從せず。當日は午後五時に至るも何等決定する事なくして散會し、翌日再び續會を開き、他の重役等は原案に一致贊成せしに拘らず、獨り犬塚は頑强に反對を固執し、『縱令意見は一致せざるも、自ら進んで辭職せず、懲戒處分の如き素より意とする所に非ず、唯此の上は自由行動を取るの外なきなり』と放言して退席せり。是に於てか部局制は通過し、即日社報號外を以て改正規程の發表を見るに至れり。犬塚は事の己れに非なるを知り、十六日總裁野村に面會して病を別府に養はんことを請ひ、其の許諾を得るや、彼れは十九日大連を發して飄然旅程に上れるなり。

犬塚の重役會議前に於て、病氣入院中なりしに徵すれば、其の別府行の如き他意なきに似たりと雖も、其の議の容れられざるや自由行動を表明せしに見れば、心中尠からざる不滿を抱いて滿洲を去れること明かなり。彼れが何故に爾く部局制度に極力反對せしか、又彼れが何故に別府に赴きしかは、諸種の曲折せる事情の存するに相違なしと雖も、要するに新最高幹部に對する惡感の勃發と、彼等計畫の裏を掻かんとするの底意に外ならざりしなり。何故に彼れが爾く新最高幹部に對して不快なりしかは、彼れが滿鐵に於ける從來の地位と、最高幹部の更迭せる事情とに見れば、一層明かなりとす。

〔二〕

由來滿鐵は桂黨全盛時代の創立に係り、最初の總裁たる男後藤新平の如きは、臺灣民政長官として新領土を料理せるの怪腕辣手と、其の養ひ得たる勢力とを以て直ちに滿洲に殺到せるが故に、猛威當る可からざるものあり。滿鐵の要部は擧げて男後藤の一味徒黨の專有に歸し、殆んど其の利益を壟斷すと云ふも敢て不可なきの狀態なり。加之、關東都督府は長閥の據守する所なるを以て、彼等桂黨の驥足を伸ぶるに甚だ好都合なるのみならず、其の施設經營も亦軍事眼より打算し、傍若無人權を揮ひ來れるは世人の周知する所なり。男後藤は斯くして自己の勢力を扶植し、長閥の發展を圖ると同時に、一方富豪三井と握手し、以て其の施設經營に利用せり。然れども、之を他面より觀察する時は、後藤は却て三井の爲めに利用せられ、三井の爲めに滿鐵の利益を吸收せられたるの觀なからず。夫の利を見るに敏なる三井は公然滿鐵社內に一支店を開設し、車輛、軌條、其他改築用品の購買をなす等、殆んど滿鐵事業の一手請負權を獲得せり。而して其の理事に、三井物產の出身たる犬塚及び田中淸次郎を就任せしめたるを以て、半官半民事業の商事會社たる滿鐵は、男後藤の滿鐵か、富豪三井の滿鐵かを疑はしむるに至れり。爾後數年斯の如き狀態を持續せしが、男後藤の第二次桂內閣の遞相となるに及びて、總裁の椅子を其の乾兒たる中村是公に投げ與へたるなり。是公は臺灣に在りては男後藤の幕僚たり、滿鐵に在りても亦男後藤の下に副總裁たりしが故に、兩者同心一體の觀なきに非ず。男後藤の滿鐵を去るも、是公の在る間は、舊來の勢力容易に失墜するものに非ざるなり。而して其の左右に侍する所の犬塚、田中兩理事の動かざる以上、三井の勢力も亦減却せざるや勿論なり。

然るに第三次桂內閣の瓦解し、山本內閣の成立するに及び、薩派の復活するに反して長閥は頓に勢威を失し、再び政界に蘇生するの日無からんと思はしめたる程なり。是に於てか山本內閣の與黨たる政友會は俄かに猛威を逞しうし來り、一擧して長閥の勢力を根柢よ

り殘し去るの方策を講ぜり。先づ其の第一著手として滿鐵及び東拓の重役を更迭し、特殊會社部内に其の勢力を扶植し、以て其の利益を吸收せんと試みたり。乃ち滿鐵重役の昨年十二月を以て任期滿了せるを好機とし、總裁以下の更迭を斷行せるは、世人の記憶に新なる所なり。當時舊任理事の悉く職を去りしにも拘らず、獨り居殘りたるは、問題の犬塚其人なり。彼れは政友會の勢威漸く滿鐵を壓し來れば、彼れの疎外せらるべきを知らざる程の馬鹿者に非ず。而も傲然として殘留せる所以は、三井勢力の一掃し去らるゝを怖れたるに由るべけんも、亦機を見て新勢力を破壊せんの心算なりしや未だ知るべからず。政友會の徒素より犬塚を馘首せざるは、將來に禍根を貽す者なるを知らざるに非ざるも、遮二無二排斥し去らんは多少世間體を憚る所あり、且三井勢力の代表者なるを以て却て其の反噬を恐れ、漸次之を懐柔せんと欲せるやも亦測るべからず。其の何れにもせよ、此の不徹底的の處置は、遂に紛擾を釀すの因となれるなり。

犬塚は商業教育の本場たる高商を卒へ、三井物產に於て其の手腕を鍛錬せり。曾て門司支店長たりし時、男後藤の知遇を得、滿鐵創立と同時に、店員のまゝ理事の椅子に據れる人なりとす。されば犬塚は一面滿鐵の理事なると共に、他面三井物產の店員なり。特殊會社と私設會社との聯絡者乃至調和者なり。加ふるに其の人物雋鋭にして機略あり、其の手腕又理事群を拔くものあるが故に、滿鐵社内に隱然たる勢力を有せるなり。是を以て彼れは、副總裁伊藤大八の如きを眼中に措かず、從來執り來れる所の方針を、總ての方面に發揮しつゝありたるなり。

伊藤は其の人格鄙劣なりと雖も、政友會の肝煎なり。滿鐵に於ける新勢力の代表者なり。總裁野村の如きは、伊藤の一傀儡に過ぎず。野村就任の當初は、其の人格より觀て、滿鐵廓清の適任者なるが如く期待せられしも、後に至りて全然伊藤に驅使せられ、伊藤の畫策を實行する表面の責務者たるに、過ぎざるの觀を呈せり。野村は溫厚にして人と爭ふを好まず、成るべくは犬塚

の如きをも抱擁せんとせるも、伊藤は飽迄も犬塚を威嚇し、壓迫せずんば止まざるの概あり。野村の提示せる所の部局制は素伊藤の捻出に係り、社內の勢力を自己に集中し、以て漸次後藤系を驅除し、三井の勢力を殺ぎ、犬塚をして一隅に屏息せしめんとせるなり。其の部局制の內容を檢するに、從來の鑛務、地方、運輸、會計等の『課』を何れも改めて『部』となし、更に其の下に課を隷屬せり。而して新に總務部を設け、社內全般の權力を是に集中せるのみならず、電燈、瓦斯、鐵道工作等の技術に關する者をも之に併合せり。其の改正の結果、有利なる鑛務は薩派の樺山資英に占められ、會計は佃一豫に、地方其他は藤田虎力、川上俊彥改野耕三の據る所となり、犬塚は纔かに運輸部に蹈蹐せざるを得ず。伊藤は自ら總務部長となり、權力と利益との中樞となりて、滿鐵を我物顏に振舞ふことを得るなり。犬塚の見て以て改惡なりとせるは、啻に彼れが權限の縮少に基く不滿のみに非ず。改正の美名によりて私曲を行はんとする伊藤に鐵槌を喫せしめたる者ならずんば非ず。然れども、吾人の犬塚の自由行動を以て壯なりと賛し得ざる所以は、餘りに三井の背景の鮮明に、新舊勢力の衝突より來れる私憤の掩ふべからざる者あればなり。

〔三〕

犬塚の大連を去るや、伊藤排斥の聲漸く熾んに、遼東新報、盛京新報等は筆を揃へて滿鐵幹部攻擊を開始せり。彼等は單に筆陣を張るを以て足れりとせず。自ら馬を東京に進めて運動する所あり、滿洲在留民の飛電又政府を動かすあり。犬塚の投じたる一石は、意外に大なる波紋を織出して、政海の平調を破れり。山本內閣の時代ならんか、殆んど一顧を値せざる問題なるも、同志會を味方とせる大隈內閣の時代なるだけ、事愈よ面倒となり、一犬塚の馘首を以て終結せず、延いて總裁及び副總裁の更迭を誘起せるなり。伊藤對犬塚の抗爭は、一轉して政友會對同志會の問題となり、遂に政爭の色彩を帶ぶるに至れるは、又止むを得ざるの勢なりとす。

現内閣成立の際、伯大隈の黨弊芟除を聲明するや、先づ財界の疑問となれるは、滿鐵の伊藤、改野及び、東拓の野田等政友會所屬の人々を如何にすべきかにあり。尾崎行雄の如きは未だ法相たらざるの時なるも議會に於て、代議士が特殊會社の重役たるの弊害を指摘し、勅令を以て絶對に禁止すべしと敦圉ける事あり。伯大隈の聲明又黨閥打破にある以上、必ずや一紛紜なかるべからずとは、夙に世人の豫期せる所なり。政友會は黨勢發展上、自黨の代議士をして特殊會社の要樞に配せるは、餘りに無遠慮なる行り口と謂はざるを得ず。一體代議士は監督者の地位にあり、特殊會社の重役は被監督者の地位に立つものなり。されば被監督者にして同時に監督者の地位にあるは、恰も判事の檢事を兼ぬるが如く、不都合此上なき事なり。若し夫れ代議士にして重役たるを欲せば、宜しく一方代議士を辭せざる可からず。縱令其の規定なしとするも、斯の如くするは是れ政治家の德義にして、信を選擧區民に維ぐ所以の道なり。彼等の口を開けば、必ず憲政の濟美を謂ふも、斯く特殊會社の一椅子に戀々し、監督權の紛亂を來すを意とせざるに於ては、何を以てか其の言責を完うするを得ん。吾人は現代政治家なる者の、餘りに沒人格、沒德義の甚しきに屑々慊めざる能はず。

此の見地よりするも、伊藤は鐵總裁仙石の勸告を待つ迄もなく辭意を決すべきなり。然るに彼れは滿鐵問題を以て政界の波瀾を捲かんの底意あり、七月七日辭職の勸告を受くるや、之を理由なしとして斷然拒絶するの態度に出でたり。野村は始め辭職の意なきに非ざりしも、新聞記者等の排斥熱に反感を勃發し、剰へ伊藤の釣込む所となりて、强硬の態度を持するに至れる由なり。然るに事の玆に至れる以上、野村の頑張るを以て不可なりとし、圓滿辭職の途を講ぜんとせるは、其の友人たる工博渡邊渡、末延道成の二人者なりしも、彼れは遂に其の言に耳を假さざりき。又中野武營は此の二人者とは別個の立場より仲裁を試みんとせしも、時機を失しては如何ともする能はざりき。獨り這の間に立ちて、暗中飛躍をなせるは子三浦梧樓なり。

彼れは盛京新報社長中原眞雄の動かす所となりて、首相大隈等に說じ込み、野村伊藤の馘首を促せるは爭ふべからず。十四日に至りて先づ犬塚の解職となり、翌日野村伊藤の罷免となり、即日男中村雄次郎を總裁に起用せり。さしもに長く紛紜を極めたる難問題も、此の一刀兩斷の決行に依りて、一段落を告げたり。然れども、是れ政爭前の一解決のみ、軈ては來るべき議會の問題となり、政友會の再び政權を握るに於ては、何等か報復の手段に出づべきや言を俟たず。此處暫くの間、滿鐵は依然として政爭渦中の者たるなり。

〔四〕

滿鐵總裁の問題起る每に、天下の注目を惹くは男後藤なり。昨年同志會を脫し、本年大臣の選に洩れたる彼れは、時に政界に出頭沒頭して、何物かを攫取すべく跳躍することあり。今回の問題劇に於ては、表面事も無げに粧ひたるも、內心乃公出でずんば滿鐵を奈何せんと獨語し、竊かに手を廻したりとの風聞あり。眞逆とは思へども、野心滿々たるの彼れなり。折角扶植せるの勢力を一掃し去らるゝを不快とする以上、彼れは自ら進んで總裁とならざる迄も、何等か畫策し置くの必要あり。總裁を他より推薦すとするも、副總裁には自個腹心の徒を据ゑざる可からずとは、彼れの胸裡に徂徠せし所のものならずんば非ず。子三浦の活動と、男後藤の夫れとは其の趣を異にせるも、滿鐵劇に周圍にありて、必ず逸すべからざる人物なり。

男後藤の飛躍しつゝある間に、鐵總裁仙石の胸中には旣に幾多の人物を描き出せり。唯其の詮衡決定の運に至らざりしは、首相大隈の旅行中なりしが故のみ。何事も貴族院に氣兼する現內閣は、先づ總裁候補者を貴族院に求めて子曾我祐準、男目賀田種太郞に囑目せり。子曾我は舊日鐵社長にして鐵道經營に經驗あり。骨硬にして滿鐵刷新には誂向の人物なるも、頭腦古びたれば殖民地經營には如何はしきの疑あり。男目賀田は韓國政府の財政顧問となる。滿韓の事情にも通じ、其の人物手腕寧ろ滿鐵總裁以上の格なり。貴族院外の候補者として屈指せられたるは、法博添田壽一、現臨

査役河上謹一の徒なるも、其の器に就ては多少の疑問あり。辻村楠造の如きも亦侯補者中にありしも、如上の人々に比すれば遙かに下位にあり。彼れは山本内閣の當時總裁に擬せられ、或程度まで進行せる者の如くなりしが、中途にして沙汰止みとなれり。職を陸軍經理局に奉じて、其の長官となり、經理の才凡ならざるも人物に非難あり。侯補者半ダースに垂んとして長短其の所を得ず、偶ま適任なりと思はるゝは諸種の事情に由りて推薦するを得ず、其のお鉢の持廻りたる結果、遂に男中村の選任を見るに至れり。

　男中村は伊勢松坂の人、少時岡本柳之助等と共に紀州藩の兵學寮に學び、明治七年始めて陸軍中尉となり、三十五年中將に陸進せり。日清戰後當時少將を以て軍務局長となり、次て陸軍次官となりて軍政に鞅掌せしも、素一個の技術官にして軍政官は其の適所に非ず。三十四年製鐵所長官として赴任するに至りて、始めて眞個の力量を現はせり。當時八幡製鐵所は諸種の情實内部に蟠りて、非常に紛糾錯綜を極め、彼れ中村に非ずんば此の難關を整理する能はずとありて、首相桂の懇請に依りて、次官兼軍務局長の榮職を捨て之に赴けるなり。爾來職に在ること十有二年、能く快刀亂麻を斷つ底の手腕を揮ひて根本的刷新を行ひ、而して之を整理し、遂に今日の如き健全發達をなさしめたり。今又滿鐵の紛糾を來すや、首相大隈に推されて難關に就く。果して能く之を整理し、之を發達せしむること製鐵所の如くなるや否やは、政爭渦中の問題劇たるだけ夫れだけ、其の役者たるの技倆に裏書するを躊躇せざるを得ず。

　工博野村は帝大出身の技術家なり、男中村は砲術の先覺者たり。前者は鐵道界に於ける技術方面には何人の追隨を容さざるべく、後者は砲術界に於ける技術方面には拔群なるべしと雖も、之を起用して滿蒙經營に至大の關係ある滿鐵總裁たらしめんこと詮衡者の熟考を要すべき點なり。前總裁野村の覆轍は、新總裁中村の鑑みる所なるは、吾人の多言を俟たず。其の人物を較するに、野村は溫厚なるも思慮足らず、伊藤の

爲めに致されて社内の統一を破り、事業荒廢の端を啓けり。中村は人と爲り剛直なるも、頭腦緻密にして經營の才あり。其の地位名望衆心を收むるに足らんも、外交的手腕に缺くる所ある、聊か其の短所ならずとせず。然りと雖も、其の總裁たるの貫祿、遙かに前二總裁の上にあり。唯茲に怪しむべきは、現内閣の對滿鐵の方針なり。特殊會社に代議士を重役たらしむるを不可とせば、貴族院議員を重役たらしむるも亦不可とせざる可からず。其監督、被監督の關係、毫も代議士に異なるを見ず。然らば現内閣は、貴衆兩院議員の特殊會社の重役たるを是認する者と謂はざるを得ず。更に現内閣の與黨は文官任用令の改正を叫び、陸海兩相に文官任用の途を開かんと揚言しながら、曾て文官の總裁たる滿鐵に新に武官を選任し、以て之を武裝せんとするが如きは、矛盾の甚しき者と謂はざるを得ず。

惟ふに男中村を滿鐵に配置せるは、必ずや二個増師の前提なり。表面政爭の具に供せざらんが爲めに、人物地位を本位として無色透明の人物を選びたりと云ふと雖も、其の閥閲の關係を見る時は、長閥の鼻息を窺へるの嫌なきに非ざるなり。男中村は閥族の寵兒に非ざるも、公桂の次官となり、伯兒玉と姻戚の關係あり、從つて伯寺内と惡しからざるに徴すれば、今日に於て閥外の人物とは見る可からず。況んや國防の方面を見れは、滿蒙經營の急を唱導して、是が非でも二個増師を決行せんとするの形跡あり。偖こそ彼れを推薦せしなれと、點頭するを禁じ得ざるに於てをや。曾て三井勢力の扶植地たりし滿鐵の、爾後軍閥の跳梁に委するなくんば可なり。

【五】

副總裁の候補者には、長尾半平、長谷川謹介、石丸重美等の鐵道院技術派あり。又武辨派には、總裁に落第せる辻村楠造あり。長谷川は曾て臺灣の鐵道部長となり、臺灣鐵道界の恩人として銅像を以て記念せらるゝの人なり。石丸は鐵道院技監、引込み思案の男なれば、副總裁の適任者と見るべからず。長尾に至りては、覇氣あり、縱横の手腕あるを以て最も有望視せられ、

十が九まで副總裁に決せる由傳へられたり。彼れは後藤系の人物にして、臺灣に在るや宮尾舜治と共に後藤の双尾と稱せられ、土木部次長を以て辣手を揮ひたるものあり。其の後後藤大島兩系の軋轢するや、久滿次を民政長官の椅子より追ふべく上京して內密に運動せるは彼れなり。彼れは斯の如く時に謀士となり、時に親分となり、平地に波瀾を起す事なきに非ざるも、一種の人物たるを失はず。現下九州管理局長に雌伏するも、將來或は鐵總裁たるを空想し居るやも知る可からず。

されば長尾にして副總裁たらんか、後藤系の勢力は支持せらるゝ譯なるも、男中村は爲めに多少の牽制を免れざるべし。野村對伊藤の關係の如きは、男中村の肯んぜざる所、長閥又た之を喜ばざる可ければ、案外辻村の如きを推薦するやも測られず。曾て東拓總裁に男宇佐川の据ゑられ、非難を蒙りたるに、今回男中村の滿鐵總裁となりて却て歡迎せらるゝの傾向あるは、其の人格の差異に由るべしと雖も、是れ伊藤を憎惡せる一時の反動に過ぎず。總裁は豫備中將なり、副總裁も亦豫備主計監なりと云ふに至らば、長閥を攻擊する者の增加すべきや必せり。

理事犬塚の補缺に擬せられたるは、早稻田出身の渡邊亨なるも、非難の多き人物なり。彼れは東京株式取引所の下級書記より身を起して、遂に理事とまで漕ぎつけたるも、中途不評を蒙りて引退の止むなきに至れり。然れども才智のある彼れの事とて巧みに岩下淸周に取り入り、營口水道電氣會社を經營せしが、幾許もなくして之を滿鐵に賣却し、以て巨利を博せり。今日は鬼怒川水電常務、萬歲生命取締役、其他數會社の重役となり、稻門實業家の雄を以て稱せらるゝも、若し滿鐵に赴任せんか、營口水電賣却事件を攻擊せらるゝの惧あり。爲めに、任命を見合す事となれりと聞けり。伯大隈たるもの、子の可愛さに手を引かれて、自ら弱るゝの愚を演ずる事なく、重役の選任に深く留意せられん事を望まざるを得ず。（七月十九日稿）

此篇の脫稿後、副總裁は國澤新兵衛氏に決定せり。

午睡

黒頭巾

其一

●清らかなる朝なりき、樗陰來りて吾輩に、「趣味の午睡」の說を書かん事を求む。吾輩、少壯時、嘗て晝寢を爲せし事あらず。三十歳以後、往々、試むることもありと雖も、今年は經驗、未だ甚だ少く、午睡の新たらしき感興を印象せず。

●六月の末なりき。一時、炎熱、昂騰し、數十年來、未曾有の極暑を現出し、東京の下町にては、室内の溫度、九十五度にも達せし事もあり。吾輩の駒籠書樓は東京といふと雖も、實は郊外に近し。綠樹、遠近に圍繞し、田端の蒼翠眼中に在り。遠風、木末を度り來り稍、田園の凉味を齎らすと雖も、此の極暑に當り、尙ほ强いて人を引いて、白日、睡鄉に到らしめき。則ち下町の午睡鄉の繁榮推して知る可かりしなり。

●「炎暑」に戰ひ勝つは吾が流汗の力に在り。吾輩、夏はつねに頑健、今年は殊に體力の旺盛なるを覺ゆ。靑天白日、淋漓たる流汗、吾が面を洗ひ來る時、併せて炎軍の暴威を推し流し去つて、神氣の爽然たるを感ず。

●吾輩、近來、日々、炎日に勞作し、午睡を味ふの暇無し。則ち一日の閑境を求めて、併せて新たに午睡の妙味を樂まんと欲し、今日、森ヶ崎に往く。午前十時家を出て、駒込驛より山ノ手線に搭じて品川に出て、東海道線に乘り換へて、大森に下車し、再たび電車に搭じて森ヶ崎に到る。風無く、烈日、地を燒き、東京灣の帆影、動かず。舟は人と共に午睡せるに似たり。

其二

●吾輩の知人には、瘠せたる男の、午睡を說く者多し。吾輩も樗陰も共に肥滿、吾輩は肥硬、彼は肥軟にして一層、肥大なり。而して共に未だ午睡を說きたる事ならず。彼は午睡の趣味を解するも未だ言はざりしにや。

◉嗜好に依る飲食には趣味の伴ふあり。滋養に本づく飲食には趣味無し。痩せたる男の午睡といふは、或は滋養に本づく食物に似たらずや。

◉規律を脱したる睡眠には、概ね趣味あり。然れども午睡は朝寢よりも詩趣、畫趣多し。趣味の睡眠は、吾輩を以て見れば即ち午睡ならずんばあらず。

◉牽牛花の咲く頃、主人、朝寢するは牽牛花に笑はれるなるべし。向日葵の咲き誇る烈日に、少時の午睡に耽けりつゝあるは、また畫趣あり。

其　三

◉吾輩、午睡を說けば、忽然として、琉球のガジユマルの綠陰に向つて神往せずんばあらず。ガジユマルは榕樹なり。ガジユマルは巨幹、屹として地を拔き、枝葉叢生、氣根垂下し、鬱然として『綠葉のテント』を爲す。彼の樹下のベンチに午睡せば、如何に詩興湧く可きやと思ふ。

◉吾輩、去年、南航して琉球に到り、屢、ガジユマルの樹下に逍遙す。或は、月明に『綠の闇』の樹下に立ち、クバの葉團扇を携へて、滿光を眺めし事もあり。然れども未だ『綠葉のテント』に午睡を試みしこと無く、試みんとせし事も無く、又た樹下に午睡を樂める島人を見し事もあらず。

◉吾輩は、彼の樹下に、「午睡の畫趣」の中の人とならざりしを、今に於て、深く遺憾とするの情に堪えず。而して彼の島人は、樹下に午睡せざるにや。吾輩の見たる所を以てすれば、すべて彼の亞熱帶の人は多く午睡せざるなり。

其　四

◉午睡は溫帶の趣味なり。朝寢は、熱帶、亞熱帶の趣味なり。寒帶には、趣味に、朝寢も午睡も無かるべし、則ち午睡は、日本に於ては、地理上、特有する天賦の趣味ならずんばあらず。

◉熱國の人は、夜、就寢甚だ遲く、概ね夜半を過ぐるを以て、勢、朝寢を馴致す。熱國の人は朝寢の人なり而して朝より夕に至るまで溫度の變化少く、隨つて午睡の妙境を作り出ださず。熱國の人の朝寢は、午睡を兼ぬるといふを妨げず。

◉溫帶の人と雖も、極めて朝寢の趣味を貪ぼりつゝある者は、炎暑の時と雖も、午前十時、十一時に至るも尙ほ蓐を離れざるあり。此の如きは、朝寢より直ちに午睡に續くものたるを失はず。

◉王陽明の「不知日已過亭午、起向高樓撞曉鐘」の

詩、世間に喩炙す。彼の詩の本意は暫らく措き、此の詩は「朝寢より午睡に續く者」を詠ず。知らず彼は這般の實歷ありしや。

◉温帶は、早起に妙味あると共に、午睡に趣味あり。早起、淸曉に對すると、午睡、炎日に對すると、其の背景、全然、相異なりといへども、覺後の味、爽凉、滿身に透徹するは則ち一なり。

其五

●夏の夜寢と午睡とは對照の興味甚だ豐かなり。恰も「熱」を熱殺すると冷殺するとの興味無くんばあらず。

◉夜寢は凉に依つて睡むる。夜深しと雖も、凉、來らざれば寢られず。午睡は熱に依つて睡むる。凉、來れば睡むらず、熱、來らざれば、乃ち午睡の妙境無し。凉は夜寢の舞台にして、熱は午睡の背景なり。

●夜寢は、吾が體、先づ凉を覺えて、而して後ちに、凉、吾が心に上る。午睡は、則ち、吾が體、先づ熱を覺えて、而して後ち、凉、吾が心に上る。

◎晝は熱にして夜は凉なり。凉殺して凉來り、熱殺して又た凉來る。夜寢の、爽快なる熟眠の後、淸曉、心身ともに凉味あり。午睡の覺後、體尙ほ熱、凉は吾が心に在り、心の凉は體の凉を催ふす。午睡の妙味は則ち此に存するなり。

其六

◎今朝、微雨。空に呻る音して、モールス式飛行機來る。上野の大正博を見舞ひて所澤に向つて歸り行くなり。乃ち奔つて樓に登りて之を望む。吾が飛行機の飛ぶこと太だ低く、東の窓に向つて雄姿し來ると見る間に忽ち見えず。忽ちにして西窓に其の雄姿を示す。近き櫻の高き木の、蟲に喰はれて薄紗のように空の光を透かしつゝある葉の梢の下を、飛行機の飛び行く、見ゆ。

●駒込驛に到る。山ノ手線の中にて、尤も畵趣あるは此ハ驛なり。此の頃は、停車場ハ前後の兩蜼に、百合花咲き、萩は青々と伸びて深く波立ちつゝあり。萩の葉の下を、蜼に沿ひて、一尺ばかりの小流の、水淸くして、底の小石なるに、音立てゝ遠く流れ行くも、此の風景の凉味の源泉は吾なりと、自から語りづゝあるにも似たり。

◎此の朝、電車を待ちつゝ立てば、蜼の間の電信柱に修繕の爲にや、上にも下にも工夫の働らきつゝあるに下なるは半身を萩のうねりの浪に沒しつゝあるは、水の中に立ちて働ける人を聯想せしむ。

●顔は平常なる女の、袴を穿ける子供を伴へるが、白飛白の浴衣の上に、長き〳〵五ツ紋の薄羽織を著けて今様顔せるは熱苦るし。

●十二三ばかりの小娘の、眞白の、洋裝して、小さき麥稈帽を戴けるは、前よりも、後ろより見て、涼しく、愛らし。麥稈帽の下より垂るゝ「お下げ」の雲髮と白衣と、小さき靴と。

●吾輩は、車窓の涼風に、煙草を薰ゆらしつゝ、「趣味の午睡」を思ひつゝ行く。池袋に到るの前、車掌が、事々しく赤羽、十條、板橋、中仙道、奥州線など多くの乘換線の名を警告する、節おもしろき聲、沈思に耽りつゝある吾輩を呼び醒ます。

其　七

●午睡の氣、頻りに醸もすの時の氣分は、譬へば酒の醱酵するが如きものあり。根底よりして、歩一歩づゝ沸々として變化し行く勢は過む可らず。此の時、不可已の故障あつて、或は客、來り談じ、或は不意の用事あり、午睡の氣、ます〳〵濃厚にして、而して荏苒として午睡に就くを得ざる時の氣分、東京の縁日の夜に賣店のアセチリンガスの臭に襲はるゝが如くならずんばあらず。

●午睡の氣、深く且つ密に催ふすの時は、或は、炎天に雲を生じ、雨來らんとして來らず、雲低くして、天極めて不愉快に蒸す時に譬ふ可し。此の時、驟雨、沛然として一過せば則ち溽暑を一掃して、天、新涼を生ず、午睡の氣、密なるの時の午睡は、驟雨の趣味あらずんばあらず。

●炎日の午睡は則ち驟雨なり。時間の長きを要せず、急にして密なるを要す、春雨の細々なるが如く、或は五月雨の綿々たるが如くなるは大不可なり。午睡は唯だ驟雨の如くなるべし。

●午睡の淺くして長き時は、覺醒の刹那、山路に、濃霧に襲はるゝが如くなるべし。强いて目を開くとも、濛々として物を見ず。此の時、不愉快の氣、内に磅礴して、時に、或は午睡を悔ゆる事あるべし。

●天意、人間に必要なる夜寢をして工藝的ならしめ、趣味と午睡をして藝術的ならしむ。夜寢は覺後の味、必ずしも均等ならざるも、また大差を生ぜしめず。以て、慰安と休養との本義に適せしむ。午睡は則ち一回毎に一回の味あり、全く豫期す可らざるものありて、而して其の特徴、色彩、價値は甚だ印象的なり。

●人は朝起の氣分を記憶すること少し。然れども午睡

の醒後の刹那の氣分と背景とをば、深く印象して、其の後、久しきに渉りて、回憶を辿りつゝ、其の詩趣、畫趣を、獨り、ひそかに樂む事を得る。

其　八

●午睡は食事に譬ふれば間食の如し。午より晩に至るの中間、淸風に、小卓を圍んて、菓子を食ひコーヒーを喫むの趣味あり。所謂「お茶」といふものに當れり。簡短にして輕便なるを可とす。

●間食は趣味あるものなり。時には慰安ともなり、補充ともなる事あり。啻に趣味なるのみならず、必要なる事もあり。然れども間食の必ずしも日課とす可きものに非ざる如く、午睡も亦た日課とす可きものには非ず。

●午睡は日課とす可きものに非るところに、午睡の趣味あり。午睡の興來れば午睡する可なり。午睡の興、動かざる時、必ずしも午睡せずして可なり。

●夜寢は則ち人の權利なり。午睡は權利に非ず。午睡は即興的のものなり、詩なり。

●炎日の午餐後、體緩るみ想倦むの時、則ち午睡の來る時なり。此の時の午睡は食後の果物の如く、一種、人を淸涼にす。又た想泉の管の凝滯を竹木を以て疏通せしむるにも比すべし。竹木一過の後、新泉、活潑に流れ出づ。

●炎日、餐後、想泉倦むの時、筆、必ずしも重きに非ずして、躊躇、凝滯、運行せざるもの、恰も烟管に脂の詰まりたるの感無くんばあらず。午睡の氣磅礴すること、强ひて抑へて、想泉を驅るは、恰も脂の詰まりたる烟管を啣へて喫烟しつゝあるが如きなり。

●午睡は簡短、輕便なるを可とす。必ずしも床に就くを要せず、寧ろ就かざるを佳とす。倚子にもたれるも可なり。卓に伏するも亦た可なり。涼風に、ベンチに籐倚子に横たはるも亦た尤も妙なり。山顚水涯、隨處靜座、禪を修む可きが如く、午睡は、隨處、隨樣、唯だ體の安定するに任かす可し。

●炎日、午睡後、午睡の氣、未だ必ずしも熟せずとも臥して書を讀めば、陶然、午睡の人となる。必ずしも書を讀まざるも可なり。唯だ一箇の枕は、午睡の國に到るの指南車たらずんばあらず。

其　九

●樹間に、ハンモックを釣りて、空氣枕に頭を擡げつゝブラリ〳〵として午睡に陷るは、夏の淸樂事の一たらずんばあらず。ハンモックは、泰西新文明の齎らし來

れる日本人の午睡郷の大革命なり。

●舊日本の午睡は、これを泰西に比するも、支那に比するも、共に趣味を缺如せり。未だハンモックを知らず、學者、徒ちに宰予の午睡を語るも、また未だ籐の寢倚子を知らざりき。

●午睡の中、疊の上に臥するは、尤も美味ならず。何となれば、身體に傾斜の安定を缺如し、且つ、此の身床上に密着して、涼風の腋下、體下を通過せしむるの餘地ある事無し。これをハンモックの如く、籐倚子の如く、涼風自由に吾が全身の上下左右を吹き、吾が身は地を離れて宇宙に在るが故に、恰も飄々として涼風に駕して直ちに睡郷に游ぶの感興爛熳たるものあるに若かざるや遠し。

●疊の上に、蒲團を敷きて午睡の國に到るは、ハンモックの半空に飄々たるに比すれば、駕籠と飛行機との趣味の相違無くんばあらず。假令、夏蒲團の頗る快適なるものを擇び得たればとて、蒲團は到底、四ッ手駕籠以上の趣味を出てず。高飛して睡郷に游ぶの飛行機はハンモックなり。飛行機を考へざりし民族は、ハンモックをも考へ得ざりしなり。

●遐たる昔より支那人は飛行を說けり、飛行は彼等の空想にして、遂に飛行機を考へ得ず。睡郷に到るの籐倚子は、列子、風に御して行けば冷然として善しの感興は、ハンモックに及ばざるも、尙ほ空に浮ぶの味無きに非ず。

●籐倚子は頗る快適なり。臂を掛け、物を措くの快適なるに至つては、また固よりハンモックの上に在り。吾輩は、籐倚子を見る毎に、支那人の「趣味の午睡」を聯想せずんばあらざるなり。

●舊日本はハンモックも無く籐倚子も無かりし。然れども、又た一種、日本的の「趣味の午睡」の、以て、海外に誇るに足るもの無くんばあらず。

●蓋し、昔の大名座敷の森閑として大なるを、緣側の障子を悉く開け放ち、大庭の喬木の蒼翠をして靑疊の上に映ぜしめ、薰風をして自由に吹き通らしめ、而して五百疊の大座敷の眞中に、唯だ一人、一杯に伸びて午睡を逞しくする如きは、ひとり舊日本に於てのみ見るを得可かりし尤も豪快なる「趣味の午睡」ならずんばあらず。

其十

●高山の頂に登りて、靑雲を見下しつゝ、午睡するは男兒の午睡なるべし。日本アルプスには萬古の雪あり

寒冷にして午睡に適せず。午睡の犧牲を發すべきは四五千尺の山なるべし。

●吾輩、嘗て、富士山に登る。二三合目の山中に多くの旅館を作らば、暑休の客を吸收するに宜しかるべしと思へり。四合目ぐらゐの處は、尤も豪快なる午睡をなすに適す。蒼蠅も居らず、蚊も鳴かず。理想的の午睡郷なり。

●高山の頂に登らずと雖も、大江に臨んて、萬里の流に枕して午睡を貪ぼるも亦た男兒の趣味たらずんばあらず。富士川、刀根川などの沿岸、處々、好風景の地無きに非ず。大江は殊に急流なるを可とす。

●吾輩、先年、上總の大原に淹留して、萬里の濤聲を聽きつゝ、松間の樓上に午睡せしことあり。波濤は沙岸を拍ち來って、海獸の如く吼けり立てり。今夏は筆を載せて、伊豆の大島に到り、炎日、午餐後、想泉渴するの時、茫々たる大海の風に、靜かに夢を吹かれつゝ、午睡せん事を思ふ。

●江山大海に午睡せずとも、紅塵萬丈の中にも亦た自から午睡の王土無くんばあらず。吾輩は識れる、尤も痛快なる建物は、京都の東本願寺の本堂なる可し。

●東本願寺は、今、多難の際、新内閣、僅かに成りて新大臣は鞠躬如として大事に當りつゝあり。新首相讚經丸は謹嚴にして大膽の人なりと聞く。新閣員に春日圓城、吾輩、舊友なり。また謹直にして渾厚の人。是等の人、恐らくは、皆、未だ午睡を語るべきの時に非ざる可し。然れども凝つては思案に能はず、大事に當りては綽々として胸中に閑日月あるを要す。權現樣も三方原の大敗軍に、命、辛くから城中に、遁げ込みつゝ、立て續けに湯漬を三杯かきこみて、直ちに枕を取り寄せて、ゴロリと午睡せりと傳へたり。吾輩は東本山の新閣員に、權現樣の午睡を學ぶ位の度胸あり度きものと思ふ。

●東本山の新閣員に、午睡の度胸ありや否やは、則ち法燈の光否如何に干す。此の如く見來れば、午睡も亦た一國一山の盛衰に干す。等閑に見る可からざるなり。

●一棟の建物としては、東本願寺の本堂は吾が日本式の建造物に於ける第一流の大伽藍たり。其の面積は、これを帝國軍艦に比すれば、略ぼ敷島に匹敵す。巍峨たる屋瓦は、京都の町に聳え、遠く七條停車場の汽車の窓を壓して見ゆ。若し此の大伽藍の眞只中に午睡するを得ば、現代の痛快事なる可きを。

●東本願寺の本堂に午睡せんといふは、或は、佛罰を

恐れざるに似たり。然れども古の大智識には木佛を燒いて煖を取りし人さへあり。佛は、隻手、法燈を捧ぐる大度胸を嘉みし玉ふべし。而して白日は善男善女の賽錢の雨降る。此の大伽藍の閑寂たるは、唯だ夜半なるべし。即ち午睡せんとしても能はざるところに、更に、人の感興を挑發するもの無くんばあらざるべし。

其十一

●日本の古文學には「午睡」少し。道學者は午睡を惡事の如くに思ひたればなり。而して午睡の機關の發達せざりし爲にや、其の俗説に現はるゝもの、概ね低級趣味の午睡のみなり。低級なりと雖も甚だ野趣あり。日本文學の午睡に取る可きは、野趣なり。

●「盗人の晝寢」の一句は、午睡の文學の一斑を象徴す此の一句を聞けば、或は空寺に、或は山門、五重塔などに盗人の午睡せるなど想像さる。蟒蛇の鼾聲かと疑ひて、恐る〳〵窺へば、疲れ果てたる盗人の、鼻孔に提灯を揭げつゝ午睡せるなりなどの俗話の可笑味も憶ひ出さるゝなり。畢竟「盗人の晝寢」の一語は、社會半面の悲劇を語ると共に、對照の滑稽を覺えしむる、深酷なる警句ならずんばあらず。

●武者修行が山に入つて、木の根を枕に午睡に耽るところを、計らずも枝上より大蛇が焰の舌を吐きつゝ覘ひ寄る圖などは、繪草紙の紋切型の一となり了りて、兒童傖夫も亦た能く這般の題材を理解し得る。

◉山中の午睡は頗る爽快にして野趣横溢す。樵夫が木の根に午睡する如きは、午睡の妙諦に入れるものなり薪を卸して木根の午睡は、天眞の儘に自然に冥合し、一種、樵夫の浩然の氣を發露せるものたり。

◉仙人の午睡といふ話も亦た甚だ興味あり。風を餐ひ霞に棲み、尙ほ午睡の趣味を解する乎。眞に仙人ありせば、仙人に午睡は無かるべし。仙人といふは、人の作れるものなれば、午睡するものなるべし。

●仙人も午睡するは疲るゝことある乎。唯だ午睡の趣味を樂める乎。俗人にして午睡せず、午睡の趣味をも解せざるものもあり。然れども仙人の午睡するは、不老の條件の一なるや知れず。

其十二

◉一切の圓滑なる交通機關は、人を齎らして午睡の門に入らしむ。駕籠に搖られ〳〵て山路を踰ゆるの時、汽車、汽船は言ふに及ばず、夏の電車に丁稚小僧のフラ〳〵と午睡するも可愛らし。交通機關は、つねに、車掌の外、睡魔を載せて乘客を誘ひつゝあるなるべし。

●吾輩も電車に、午睡に誘はるゝ事もあれども、電車は餘りに忙はし。併し、其の忙しといふは則ち午睡の妙境なるやも知れず。

●俥は、また能く人を睡鄕に導くものなり。俥上の睡客の、首も折るゝばかりに睡むりつゝ行くを見れば、上半身が危ふく地上に墜れんとして、ガクリとして體を持ち直し、此の如くして繰返し進む事、恰も大なる果實の枝の、風に揉まれ〳〵て刎ね返りつゝあるが如くならずんばあらず。

●學者が萬卷の圖書堆裏に午睡するは、客觀的に甚だ興味あり。彼は、亂帙せる書卷を背景として一箇、出世間的の書趣を爲しつゝあるなり。

●吾輩、交通機關の上の午睡は大汽船の甲板に籐倚子に横たはりて、浴衣の懷を長風に孕ませつゝ、大海を眺めつゝ、おほように午睡するほど、大なる午睡はあるまじと思ふ。

●航海中の快樂は、入浴に在り。浴槽の中に立ちて、窓より遠くの島を望むときは、活ける油繪を展開する心地す。此の油繪は、一點の世塵に染まず、宛然、仙人の國にてもある可く思はる、漂流の怪談に、往々、仙人島に到れる事を說くものあり。浴槽の船窓より見る遠島は、漂流者の見たる仙人島なる可くや。

●浴後、鹽分の强き水を以て蒸したる吾が皮膚を、薄き浴衣に包みて、甲板の風に冷ます時は、滿身の毛孔悉く健剛なる皮膚呼吸を作用して、萬里の海風を吾が一身に呑吐しつゝあるを感ぜずんばあらず。此の刹那團扇を持つて籐倚子に乘りて、書を讀まず、詩を作らず、半ば詩を思ひ、思はぬやうの氣分にて、海に見惚れつゝ、徐ろに午睡に入る。回憶するだに快心事なる哉。

其十三

●吾輩の知人は、嘗て吾輩に、詩趣尤も奇異なる午睡を語れり。游君の午睡なり。游君の午睡といへば、蒟蒻本の味ある可くやに思はるれども、實は「へちまの皮」を剝ぎたる如きものなりと云へり。

●游君は本來、ブラリとしたるものなり。ブラリとしたるものはヘチマなり。試みに皮を剝ぎ去るとも、ヘチマは依然としてブラリとしたる所以を失はず。然れども皮を剝ぎ去りたるヘチマは、其の書趣を失ふ、唯だ奇異なる詩趣の新に生ずるあるのみ。

●先年、吉原に大火ありし後、吾輩の知人は炎日の午後に、遊廓の假宅に遊び、長き廊下を經過するとき、

計らずも長き部屋に、資に引き上げられて並らびたるイルカの如くに、浴衣の儘なる遊君の一列、錯雜して脚も露はに、胸を開き、髪を投げ、手を伸ばして、一齊に、午睡の郷に群遊せる、遊君の團體を見たり。彼等は皮を剝ぎたるヘチマの如くに、累々として葉枝の間に錯雜してブラサガリたり。午睡の王土消えて、晩涼の漸く催ふす頃、皮を剝ぎたるヘチマの遊君は、ヘチマの皮を著けて、店に居並らびて、美しく復活せるを見たりといへり。

◉遊君の午睡といふは、炎天、日々、ある事なる可く必ずしも珍奇とするに足らざるも、其の團體的に午睡せるは、頗る珍とするに足る可く、これを假宅に於ける如き特殊の場合に於てせざれば、また見ることを得ざる可く、吾輩の知人は、千載稀有の午睡を見たりと誇說せり。此の人、また趣味の人、今、其の名を逸す。

◉近時、團體午睡を爲すもの、或は、軍隊に、或は學校の寄宿舍に在り。然れども軍人の午睡の深き詩味あるものは、兩軍對陣に於ける將士の、交戰、機未だ熟せず、後方に在る者、時に、槊を枕に午睡するものなるべし滿洲に於ける吾が日露對陣の時、這般の光景ありしならずんばあらず。

其十四

◉伯大隈と公伊藤とは、當年の兩雄にして、また共に午睡を爲せり。彼等の壯年時には、午睡を常習となせしや否を識らずと雖も、老來、殆んど常習の如くになせるは、一には休養の爲なる可く、一には修養の意味も籠もれるなる可し。

◉晩年の藤田傳三郎も亦た食後の午睡を日課となせりと聞く。彼は鶴の如くに瘠せたる男なりき。彼の日課的午睡といふは、修養もありしなる可きも、修養といふよりも、弱き彼の躰を休養せんが爲なりしなるべし。

◉伊藤、大隈の日課的午睡といふは、藤田のとは、其の意義を異にし、休養よりも修養の方を多しとするなる可し。

◉彼等は、日々、朝來、客に接し、折衝し、辯難し、講釋するの爲に忙殺せらる。午睡といふは、白日、客を防ぐの第一法なり。彼等が客を防ぎて、午睡するは則ち想泉を養ひ、併せて體力を養ふ所以なり。

◉伯大隈は七十七歲にして新首相となり、廣長舌を揮ふに忙はしく、日課の午睡を遂行するの暇無しと聞けり。彼は平常、書齋に午睡するらし。吾輩は彼の人物趣味、閱歷を詩的に象徵するものは、彼が、其の花壇

の溫室に午睡するを理想とするものなり。

●吾輩、嘗て、日蘭協會創立會の時、伯大隈が花壇の溫室に日蘭の賓客ヶ列ねて、自から其の中央に立ちて羽織袴にて演說したるを以て、彼の一生を象徵するものにして、其の演說ぃ亦た吾輩の聞きたる、彼の辯論の上乘なるものと爲せり。吾輩は、伯大隈を思へば彼と彼の花壇　溫室とを聯想せずんばあらず。

●伯大隈が其の花壇の廣き涼しき溫室の中央に。籐倚子に橫たはりて、海外の絢爛たる色彩と馥郁たる芳香とに圍繞されつゝ、午睡するありせば、彼の大なる額と、堅く閉ぢたる大なる口とは、殊に、彼の無鬚、無髯なるは、如何に、其の特異にして精采ある背景に調和して見ゆ可きぞや。

●若し伯大隈にして、未だ嘗て其の美しき溫室の中に午睡したる事無かりせば、今、彼の聲望隆然、意氣軒昂たる刹那に於て、彼の博大なる理想を載せて、一たび溫室に壯大なる、午睡の夢を樂まん事を、吾輩は彼に望まずんばあらざるなり。

其十五

●吾輩、森ヶ崎に至るの日、衆客雜然、旅館の中、甚だ趣味無し。土手に松あり。土手ヶ踰えて白帆見え、旅館を環ぐりて蘆葦茫々、人よりも高く土手に向つて連る。其の外に高くして繁茂せるものは家と門とすべて埋沒し去れるものあり。

●此の日、午睡の興來らず。西窓ハ斜陽、激しく吾が背を射る。吾が少年時に、田舍の農家に、殘陽を滿身に浴びながら、褌一つに、口を開いて大なる男の午睡したるを見し事など思ひ出す。

●森ヶ崎より歸るの翌日、午餐後、ベンチに橫たはりて、獪園を讀み、琉球冊封使徐縚が琉球より歸途、颶風に逢ひて、小島に漂着し、計らず鄷都に入りて閻魔王と語りし事に及び、ひとり微笑するを禁ずる能はず何時、書を措きたりとは覺えず、午睡に入る夢無し。

●吾輩、家人に呼び覺まされて、午睡より覺む。體を起せば、浴を出るが如く、流汗、吾が肥えたる胸腹に滋ふ。汗を拭き、顏を洗ふ。庭樹、蟬聲、恰も泉聲の如く吾が耳に濺ぎ來る。

今日、朝、雨ならんとして又た晴、午後、稍、風あり。輕き櫻の葉は、風鈴と共に、尤も多く風に戰よぐ。世間、恰も午睡の仙客多き頃なるべし。

黑頭巾　再記

人物評論（五十一）

田村俊子論



田村松魚

△日常生活と交遊

○此所へ私を引張り出したのは瀧田氏の皮肉ないたづらなのです。「俊子さんは毎度あなたを材料に使つたやうだから、今度はあなたが反對に俊子さんのことを書いて下さい。日常生活の方面を主にして‥‥成る可く長く書いて下さい。」と氏は用務を述べられた。その時が初對面であつたのと、氏の東北辯の高い調子に卷き

込まれてしまつて、「では、何か書きます。」とお答をした。後で考へて見ると、何んだか、私の出る幕ではないやうで、實は少し氣迷つたのですが、何にもさう初心がる程の自分でもな！、一度お受けをしたものだから済く役目を果すことにしました。

△俊子氏の日常生活

○俊子氏（私も此所では氏の字を附けて從く）の日常生活――特に彼女のインナーライフをより多く知つてるものは私かも知れない。それは夫妻關係があるといふ一點である。併し「知らぬは亭主ばかりなり、あの男も氣の毒だ。」と私も何かの雜誌で同情された覺えもある身だから、夫妻關係必ずしも知るに庶幾しとは云へない。

○俊子氏は一家（夫婦に下女一人、若い女の寄寓者、大きな犬一匹）の經濟を自分で遣り繰つてゐる。そのやり繰り算段が勞作の間々に行はれて行く。小さな手帳や、原稿紙の切端などに算用數字が極めて小さく、加減乘除が小學生の答案のやうに書かれてあるのを屢々見る。それをひねくり廻はしてゐる時の氏の顏には何時も苦澁な色が眉の間に漂つて見える。「勘定合つて錢足らず……」なぞとつぶやいてその手帳を投げ出したり、切端の數字の上をペンの先で衝き透したりしてゐる。斯んな時に氏の作『木乃伊の口紅』の一節にあるやうな、七ツ屋通ひの場景が演ぜられるのである。

○新聞、雜誌社等から受取る原稿料は兎に角一度は俊子氏自身の大きな蝦皮の蟇口の中へ景氣よく這入つて行く。（此の蟇口は隨分大きい、確か左團次氏の内室が呉れたもので、その中には芝居の切符や、繪畫展覽會の切符や、いろ／＼のものがごちや／＼這入つてゐる。畢竟その中に俊子氏の全財産が潜んでる譯なのだ）併し直ぐにそれは片ッ端から消えて無くなつてしまふ。移り更りの衣裳や、代り目毎の芝居やなどの纏つた出費の外に一番俊子氏の蟇口に手傷を負はすものは菓子代（及び水菓子代）と按摩さんに拂ふ金である。

（俊子氏は極めて間食の好きな人である。創作の間々に、机の傍のお木皿に何か甘味が盛り上つてゐなければ筆の運びが一向に捗取らないといふのである。丁度それは男の作家の煙草や酒と匹敵するものだが、却つてそれを多量に用ひて胃を害したことが無いと云つてゐる。胃が惡るいのも、甘味を食べると癒つてしまふ。」と云つて笑つてる。よく／＼の甘黨なのである。

○按摩は勞作の時程その度數が倍加して來る。一日に二度も招びにやることがある。肩が鐵板のやうに凝り固まつて、大抵の上手の按摩の手では、それをほぐし兼ねてゐる。

○酒は殆ど飲まない。飲まないのではなくて飲めないのだ。麥酒さへも一口附けて顏をしかめてゐる。俊子氏を酒飲みのやうに云ふのは大なる間違である。但し強ひて飲めば猪口に二つ位はいけぬことも無からうが、頭腦を資本にしてゐるものが、強ひて酒をのんで思索力を攪亂するのに愚だと云つてゐる。

○煙草もちよい／＼用ひてゐたが、結局嫌ひの爲殆んど止めた。

○大概の作家は宵ッ張りの朝寢坊だが、俊子氏はその反對である。氏が睡眠不足を恐れることは毒蟲の襲撃を恐れるよりも甚だしい。「よう／＼眠らないぢや、わたしは何にも出來ない。」と口癖のやうに云つてゐる。それ程眠を欲する丈けに、その寢附の速いのは驚く位ゐである。横になつて暫くしたかと思ふと、もうすや／＼と眠りに落ちてゐる。仕事の都合上、已むを得ず夜更かしをするのであるが、夜は成可く早く寢て朝は早く起きたいとは彼女が衞生論のモットーである。

○時折徹夜をすることもある。併しそんなことをするのは、よく／＼日限に切迫したものを書いてゐる時である。いくら夜更しをしても六時頃には起きてゐる。「日が登つては、どうしても臥床の中にはゐられない」さうだ。

○此頃は朝の四時頃起きて、その日の新聞小說を一回分宛書いてゐる。大槪十時頃に出來上る。

○食事は不規則だ。二度の時、三度の時、夜更けてからの時もある。食事の時々の下物に就いては全く無關心である。何んであれ、膳の上に出てゐるものを默つて箸をつけてゐる。曾つて一度もそれに對して好き嫌ひを云つたことがない。私は五年以上も氏と同棲してゐるのだが、只の一度も副食物に附いての文句を聞いたことがない。「嫌なら食べなければ好い。」とは能く此の人の云ふ言葉だ。間食をする惡癖をこれでうめ合はせてるのかも知れない。

○それから、俊子氏は曾つて下婢に叱言を云つたことがない。今使つてゐる女はもう三年程もゐるが、恐らく一度も叱られたことがなからう。(併し、私は毎日がみ／＼と下女を怒鳴つてゐる。)臺所へは殆んど顏を出さない故でもあらうが、見てゐても齒がゆい位寬大なものだ。その寬大さは他を叱るのを氣の毒に思ふ慈悲心か、つまらぬことを叱り附けて自分自身の氣分を破壞されてはつまらないといふ自重心か、兎に角その處置は寬大を極めてゐる。

○この寬大さは、併しながら種々なことにも及ぼしてゐる。例へば、飼犬が隨分ひどい惡戯をやつて、折角買立ての下駄を臺無しにしてしまつても、氏は默つてそれを見てゐる。私が首輪を押へて鞭を加へると「お止しなさいよ、惡氣でしたんぢやないわ」と云ふやうな譯である。

○凡てに向つて寬大といふ點は此の人の美點かと思ふ。五星霜の同棲中私が氏の性格に就いて一番感心してゐるのはこの一事である。自己が寬大にされたい爲、自由でありたい爲に、自然と他の自由をも尊重するのであらうか。性來、さう云つた風に生れついてるのか、子供の時から、誰々に云ひ附けるとか、告げ口をするとかいふことはしなかつたと話したことがあるが、さういふ風はその人の天禀であるらしい。私は恐らく氏が、氏の知人に對しても、さういふ傾向を示してゐることゝ信じてゐるが、如何なものか。

○併し、さうは云ふものゝ、文藝上のことになると、何んでも寬大の眼ばかりを以て凡てを觀るといふわけには行かぬらしい。時々激昂した調

子で自分の思惑を云つてることを聞く。文藝上のことには可なり神經質な處もある。自作の批評などに就いて「私は褒貶を餘り氣にしない。」と云つてるが、それは「氣にしたくない。」と云ふ心であらう。

○氏はまた正直な人である。愚直と思ふ處さへある。氏を才の人だといふ人もあろ。才もあらう。併し根は愚直と云ひたい程の人である。「私は小供の時分は此の子は馬鹿だと兩親から始終云はれてゐた。」と話したことがある。その馬鹿なやうな薄ぼんやりした處は確にある。それが善い意味では無邪氣である。惡くすれば淺慮と云へやう。併し根は正直で、律義である。

○斯う云つてしまふと、俊子氏は極く單純な「正直もの」になるが、併し頭腦の複雜で、曲折のあることもまた無類である。一體俊子氏の性格は矛盾と撞着が幾度も鉢合はせをしてるやうな形で造り上げられてゐる。非常に弱いかと思ふと、馬鹿に強いやうである。華やかに明るい裏にじめじめと暗い色がある。冷淡なのだと思ふと、それが本統に親切なのであつたり、あきらめが早いかと思へば、また執着や未練が附き纒つてゐる。その交錯して網のやうになつた細い神經が各自に勝手に働いてゐるのを、俊子氏は辛うじて敎養の力で操つてゐるやうに見える。私は此所で氏の性格を研究して見る氣はないから、此のことは他の批判に讓るとしやう。

○創作をする際の俊子氏の苦惱狀態を見てゐると、全く氣の毒にならずにはゐられない。半病人か、半キチガヒのやうになつて朝夕を物苦しげに喘いでゐる。此の人は筆を下ろす迄の醱酵期が隨分長く掛る。僅か、四十五枚の短篇に掛るのに、一週間位ゐも百搔いてゐる。さうして、漸つと筆を卸したかと思ふと、また書き惱んでゐる。さうして盛り出して來ると身邊は原稿用紙の反古で埋つて、この原稿料は原稿紙の代價とおつ附きはしないかと思はれる位だ。さうして肩が凝り出す。頭が痛み出す。神經が昂奮して來て赫々と逆上しだしてくる。無口になつて眼ばかり鋭く光つて來る。創作家も隨分悲慘なものだ、としみじみ思はれる。

○だが、時によると頗る安產なことがある。二十枚位の短篇なら、朝から掛つて晝過には出來上ることがある。さういふことは極めて稀だが、作物の評判はそんな時のものが却つて好いやうだ。

○斯ういふ風で、この三四年來製作を續けてゐる。さうして一方には絕えず新らしいものものと讀書してゐる。その間々に訪問者に逢ふ。芝居に行く。一家の經濟をやりくる。さうしてまたその隙に戀をしやうといふのである。その多忙はお察し申す所である。

○しかし、忙しいとは云つても、事務的に忙しいと云ふのではないから、外見には閑散にも見える。また實際閑散な時もある。そんな時に彼の女の玩弄箱がひつくりかへされて、棚の上に乘せられたりする。それは七ツか八ツの少女が飯事をして喜んでゐるのと同じ心持らしい。いろいろな玩具の選擇や、それに對する小さな趣味上の鑑賞眼などは別として、それを愛する心持は如何にも子供らしいものである。

○俊子氏は正に三十女である。それが千代紙で人形をこしらへて、「これ

もわたしの創作だわ。」なぞと眞面目に云つてるところなどは振つてる。厭になれば投げ出して、何處かへ突込んだ儘、けろりと忘れてしまつてゐる。

〇投げ出すと云へば、俊子氏は或る處まで來てゐるのを、不意と投げ出す癖のある人である。「アヽ、面倒臭い！」さう云つて投げ出す。耐忍力が弱いのか？

〇針を持つことは好きである。閑があれば何んでも縫ふ。さうして立派に仕立上げて後、「文學でもやる女は針が持てないものかのやうに云つたりする人に見せてやりたい。こんなことを云ふ人に限つて碌すつぽ針の持てないものですよ……」と云つて「もし、私が死んだら、此の事を書いて下さいね、斯んなことはあなたで無くちや知らないことだから――」と云つたことがある。手は何んでも隨分器用な人である。氏の裁縫の技倆に就いては其道の人の讃辭を聞いたことがある。

〇家内では無口で、靜かなことを何よりも好きである。私の聲は怒鳴り聲で、物さへ云へば怒つてるやうに聞える。必ずしも怒つてるのではないが、ガミ〳〵と衝ッ掛るやうに聞えるのだ。それを俊子氏は睡眠不足や蒸蟲の襲撃よりも嫌ひである。「後生だから、その怒鳴るの丈けは止して下さい、何をしても好いから――」と常に云つてゐる。併し、私はそれが止されない。何んとお互に因果なことであらう――氏はまたいろ〳〵な動機から宗敎へ行かうとしつゝある。若し氏が宗敎の道に立つた曉には、その心靈の底には乾洟大なるアラムの響を振ひ起すであらう。

〇俊子氏とその交遊

俊子氏は交際嫌ひである。交際といふやうな繁累を當抵上手にするやうなマメな人ではない。併し交遊は（同じ意味かも知れないが、此の方は自然的の交情を意味する）狹い方ではないやうだ。さうして同性よりは異性の方に餘計親しみを持つた人が多いやうである。その人々は凡て藝術家の範囲を出ない。

〇一寸と私丈けで思ひ出した處で、讀賣社の德田、上司、正宗の三氏。小山內氏、森田氏、阿部氏（次郎）小宮氏、相馬氏、楠山氏、及び鈴木氏（悅）等は孰れも俊子氏の先輩なり、親友なりであるやうだ。その外に俊子氏を訪ねて來る人は可なり多い。

〇私は或時、俊子氏の知つてる丈けの文壇の男作家の中で「君は誰を一番好きかい？」と訊ねて見たことがあつた。俊子氏は此の間に對して「さうね……」と云つて暫らく考へてゐた。「誰だらう……」さう云つて誰かを探り求めてゐるやうな表情をしてゐたが、遂に「誰です」といふ返答はしなかつた。

〇私はまた直に、「では誰の書いたものが一番好きだね。」と訊ねた。矢張り、彼女は「さうね――」と云つてゐた。俊子氏は斯んな場合、能く「さうね」と云つて默つて居ることがある。自己の愛好する人物乃至作物に對して明確な返答を與へることが出來ないのか。但しまた自己の意中の人はあつても、それを吾人の前に開展することを欲しないのか。或はま

た、優劣、長短、是非、好惡、各々等差異同のある爲に、その唯一人を指示するに苦しむのか。其邊のことは私と雖追及することは出來ない。

○併しながら、前述の人名の中に俊子氏の特に愛好する人物が必ずあることゝ私は信ずる。さうして、その愛好はやがて戀愛を意味し、心私かにその人格や作物を渇仰（少し重つ苦しい。欽仰或は欽慕とか云ふべきであつう）してゐることであらう。孰れも拔群な才能と優秀な容貌とを持つて居られ、さうして月々に新らしい文壇の中心生命を作つて居られる諸氏を知己親友しとてゐる俊子氏は、婦人として大なる光榮と云はなければならぬ。その中で私の良友であつて、また俊子氏の良友であるのは德田氏と鈴木氏と、それから文壇の人では無いが、彫塑家の朝倉氏位のものである。附け加へて云ふ迄もないが、私自身は眞に孤立孤影である。悄然として只一人である。誰に行き、何處へ適く道もない。只一人あつた師さへも數年以前私自身が棄て、且つ棄てられた。

○俊子氏は、此を外にしては斯ういふ知名の人々に、それぐ\理解ある交遊を作つてゐる。然るに、此を内にしては私のやうな、才能や伎倆と云つては皆無であり、男振と來ては更に一段の不の字と來てゐる男を所天乃至亭主として同じ屋根の下に巢を作つて居るのである。さうして朝夕例の怒鳴聲を聞かされてゐる。俊子氏の身としては隨分悲慘事なことである。私は靜かにその事に思ひ到ると俊子氏の薄運を同情せずにはゐられない。

○それから翻つて俊子氏と同じ女流の中を見渡して來ると、御交際は無いが、晶子氏には鐵幹氏のやうな偉丈夫の配偶がある。彌生子氏には臼川氏のやうな博識能文の文學士が夫君である。仲よしの八千代さんは岡田畫伯のやうな大家が良人である上に、才識共に新人の中に秀でゝゐる小山内氏のやうな兄さんがある。舊友で打ち明け話をする樋口かつみさんには近い將來には博士を贏ち得べき龍峽氏が配偶である。それから親友の長沼智惠子さんには新人の典型のやうに持囃されてゐる高村光太郎氏が郎君となつてゐる。淸子氏には行くとして可ならざる無き文壇の名物岩野泡鳴氏がある。舊くからの知り合ひで、俊子氏の所謂「好きな人」の一人、元の巴家八重次さんには江戸の風流と巴里の粹とを淘ひ交ぜて渾身を飾つた三田の荷風氏がある。それから平塚明子さんには未來ある青年畫家にして、美少年の名の高い奧村氏が郎君となつてゐる。俊子氏と同性であつて、その天職を共にしてゐる人、乃至親交のある人達の周圍を見ると、その人達には凡て上述のやうな水際の立つた男性が、それぐ\その女人の背後にひかへてゐるのである。

○然るに俊子氏の配偶は如何であるか。その男と來ては實にお粗末極まる野郎である。彼はとくに文壇の落伍者である。（今では落伍者の數に入る資格さへも無い）どうやら有り附いた職業も、その主權者から放逐され、それ以來行く處もなく、徒らに文壇の埒外をうろつき廻つてゐる。さうして彼はまた自ら衣食することも出來ず、女房の脛をかぢりながら宿六然と構えてゐる。彼は手の附けやうもない怠惰者で、正しく一個の無賴漢だ。

○さういふ男を所天とした俊子氏は全くその配偶の選擇を誤つたものであつて、氏の爲には實に惜しいとも氣の毒とも云ひやうない譯である。俊子氏がその無頼漢のやうな男を離別せぬと云つて、文壇の七不思議の一つだと不思議がつた雜誌もあつたが、それは實に無理もない事である俊子氏の身になつては嘸ぞや肩身の狹いことであらう。

○さう考へて來ると、その無頼漢のやうな男が私であることに思ひ到る。さうして私は時々俊子氏の爲にも、また自分自身の爲にも涙の出るやうな悲しさを感ずるのである。

○それで私は一日も早く處決して、俊子氏を薄倖な宿緣から離脱させ、さうして彼女の藝術の爲めに、彼の女に自由な天地を與へなければならないと思ふのであるが、尙ほ何か、さうする事に深い痛恨を感ずるやうで、今日までも其儘になつてゐるのである。私の身にしては其所にまた人知れぬ苦勞がある。併し私の苦勞の如きは誰も同情などして與れては一人もない。

○泣事は扨て置き、少し氣を代へてまた考へ直して見ると、俊子氏が同性の女流に對して肩身の狹い痛恨事も、天の配劑が、其所に不思議な妙機を傳へてゐる。と云ふのは俊子氏自身の藝術である。彼女の藝術に絕對無保護の自由境があつて、一種特有の毛色を示してゐるのは、氏自身の天稟の然らしむる處ではあらうが、併しまたその所天の下らない野郎であることに發憤したのではあるまいか。

○併し、私の口から斯ういふことを云ふのは世人の苦笑を買ふ丈けのことである。それよりは私は俊子氏の交遊と戀愛のことに就いて少し立ち入つて見たい。

○俊子氏には知名の交遊の外に、半知名、半無名、乃至無名の若い作家達とも多少の交遊がある。此の交遊の間に俊子氏の所謂「放埒な女」の色彩が發揮されたものである。作品を觀て直ちに實際行爲と見做すのは迂濶極まる話だけれども、その反對に實際行爲を知つてゐて作品を觀るといふことは、その人間の全面を透視したやうで如何にも心地好いものである。

○俊子氏は自ら告白してるやうに放埒な女に違ひない。戀せずには居られない人である。故國木田獨歩は幾度も新らしい戀が出來たとか聞いたが俊子氏も獨歩派の人である。(其の點丈けなら私にも獨歩氏や俊子氏の眞似は出來さうだ。)その戀の形式が對照物の如何によつて、如何行動するか、それは其場合によつていろ〳〵な變化があるだらうが、兎に角俊子氏の戀には危險性を帶びてゐる。

○俊子氏は能く「愛することは自由だ」と云つてる。私は果して自由か不自由かはまだ能く分らないが、愛するなと云つても、愛するものは仕方がないといふことは私にも分る。それは私自身にしても愛すれば如何も仕方がないからだ。恐らく千萬人皆然りであらう。其所で夫妻關係があるといふやうな薄弱な理由を以て、他の絕大な愛の自由を束縛するわけには如何考へても行かない。併し、自己の愛が果して自然なものであるか。矛盾と撞着とが直ぐにやつて來て、自己の存在までも破滅に歸し

てはしまはないか、——自己の存在を賭しても尙且つその愛によつて蘇るを得るか、其邊をよく〳〵省察靜觀する處に救はれる道があるのではないか。俊子氏の敎養が其所まで到達して、理由ある大戀愛の下に華々しい凱歌を揚げる分には私などが彼是文句をいふ筈もないことである。兎に角私は今の處、俊子氏の軀を嗤つてゐる一種の無賴漢である。多くを云ふの資格はないから此で止める。但し何處までも附隨いて行つて默つて觀てゐるのは、私に取つて苦痛な滿足であるのだ。

△まだ野暮臭い田村女史

岩野泡鳴

僕の或方面の交際範圍で、——それはすべて男どもだが、——田村俊子はいやな女だ、話しかけられるのもぞツとすると云ふやうな噂さを聽いたことがある。その時は、僕はまだかの女を直接に知らなかつた。その後、僕の妻から有樂座の落合ひに紹介されたが、僕は友人と食事をしてゐたので、碌に話をするひまが無かつた。で、女優にもなつた經驗があるのだから、化粧でも着つけでも、ただべツたりでは無く、もツと氣が利いたやうに出來さうなものだのにと云ふ印象しか殘らなかつた。

その後、帝劇内のあがり段で出會つた時、僕がちよツと挨拶の聲をかけて行き違ふと、かの女は僕を認めなかつたが、そばにゐた岡田八千代氏が說明したやうであつた。その夜の歸りに、日比谷の電車乘り場に、かの女が獨りぼツちで、しよんぼりと傘をさして立つてゐたところへ、僕はあとから行きついた。若し西洋の社會なら、名が出れば出るほどその婦人には、亭主なり、他の多くの擁護者なりが、こんな場合についてゐるだらうに、田村女史にはそれが無いのかと思つて、僕は私かに氣の毒な氣がした。そしてまた聲をかけた。すると、かの女はつんと橫を向いてしまつた。僕とは知らなかつたやうであつたが、直ぐあとから僕の妻が來たので、一緖に電車を待ち合はして、一緖に電車に乘つた。

それと前後して、かの女の作『憂鬱な匂ひ』を讀評する機があつたので、僕は時事文藝欄に於て、かの女を推賞して云つた——かの女は平凡な婦人作家連中からずツとかけ離れた高位に立つてゐるばかりで無く、男子の作家連中に這入つても、あれだけ內容に飛び込んだ書き方を爲し得るものは、恐らく、あつても少なからう。谷崎氏や長田(幹)氏のやうな、徒らに淺薄に感傷的に通過してしまうやうな風とも違つたところがあるし、永井氏や森田氏のやうな筆の上で遊んでばかりゐるやうな點も少いし、進んでは田山氏や正宗氏に於てもどかしい不充實なところを、かの女は多少根抵のある肉の感じで補つてゐる。『憂鬱な匂ひ』だけで云つても、女史としてのこの特色は示めしてゐる、と。この評に對して、かの女は間接に僕のところへ感謝の辭を致し、かう云ふ風に根抵から批判して吳れた人はそれまでに無かつたと、

然し、またその後、僕は——もう、かの女とはいろんな場合に會談す

るやうになつてからであるが、――かの女が『炮烙の刑』に於て『どうすることも出來なかつた』と云ふ概念的說明を連發したのを、田山氏の作風を、殊に同氏の常套語を模擬した氣味だと評した。これに對して、かの女から『田山さんを模倣したのではありません』と云ふ辯解が來た。僕の意味を誤解したか、それとも僕の意味を解する力がまだ無かつたかだ。

同時に、僕は別な雜誌で、婦人問題の雜話中に、俊子氏には、全くとは云へないまでも、可なり女自身の聲、女自身の息、女自身の生命を生地で出すだけの勇氣と奮發とが見えてゐると云ひ、然しなほかの女を婦人が婦人の爲めに立つ新らしい生活を眞にやれる人だか、どうだかには疑ひがあるので、僕は『あなたはその場の都合上で、乃ち、その場の利害上から、新らしいとも誇り、舊いとも媚び、若しくはどッちでもいいちやアありませんかなどと愛嬌づくで過ぎてしまひはしませんか』と追窮して置いた。すると、それに對して、――これも前項の返事と同時にだが、――『私は新らしい女を賣り物にしたことはありません』と云ふやうな通知であつた。根柢に於て舊式を脫し切れない婦人連が、無自覺に若しくは見當違ひによく云つてる言葉だ。

ここに於て、水野葉舟氏がかの女に與へた公開狀(文章世界七月號)中に、かの女の思想若しくは生活がなほ從來の舊式婦人の型を離れてゐないと評した言葉は、かの女に取つて十分内省の價値がある。僕が『炮烙の刑』を平凡な道德觀を脫してゐないと云つたのも、つまり、そこだ。

かの女はその作者として、世人の不道德と見る事件を、世人と同じ淺薄な程度の形式判斷で不道德と概念して、書いてゐる。そこが水野氏にかの女の鋭敏と見える感觸も、かの女の本能的要求の放縱な現はし方も、すべて附け燒き刄だと見爲された所以だ。僕等が新時代の婦人に對する要求から云つて、新らしかるべき筈のやうなかの女が底を叩けばまだ舊いままでゐる樣子は、丁度、僕がかの女の、擁護者も無く、しよんぼりと日比谷の電車乘り場に立つてゐた時を思ひ出させるのである。

然し僕はかの女を水野氏の觀察ほどに意地惡い、獨りぎめの概念で抹殺してしまひたくない。かの女には、まだその生活からして革新して、鋭敏若しくは放縱の内容に突入する正當な用意も覺悟も無いやうだが、かの女にして若し眞に新生活なるものの意味が分つたら、きッとそこに至れるだけの素地はあるやうだ。かの女の『寒椿』が新潮に發表された時、僕はこれを以つて男子連の不徹底な女性觀察を婦人として訂正したやうな物だと云つた。そしてそこにかの女が婦人として婦人の爲めに舊式な男子の獨斷に向つて戰ふ意氣が見えた。この戰ひは、現代の舊式婦人の生活を革新する爲めには、一つの眞劍な必須條件では無いか？

そしてかの女の作風が――たとへ水野氏の云ふやうなうわッ面の轉化であつたとしても――目に立つたほど急轉して、眞劍な方向に出たのには、かの女が創作をして物質的にも生活の自營をしなければならなくなつたことがあづかつてゐるらしい。かの平塚女史が眞面目でありながらその發想に於て世人からまだ不眞面目に見られる餘地があるのは、一つ

には、生活に迫らないからのことだ。そして不眞面に見られ易い田村女史に眞面目な風が出て來たのは、無論、嘉みすべきことである。然し今一つ注意して置くべきことがある。婦人の生活自覺と云へば、尾島菊子氏でも長谷川時雨氏でも同じことであつたらうが、若しくはあるだらうが、これ等の人が革新された風が一向に見えないで、田村女史にそれの徴候があるのはなぜだ？　つまり、かの女の素地に賴母しい才と實質とが、他の婦人作家連よりも、否、また一部の男子連よりも、多くあるのだと云はなければならぬ。

兎に角、かの女は、新らしい婦人の道を踏んでゐる代表者等が、まだ世間の無理解の爲めに、街ふとか、突飛だとか、不眞面目だとか云はれて毛嫌ひされる時代では、その身に、却つて渠等の身邊よりも多くの擁護者や取り卷き手があるべき筈だが、どうもそれが出來ないやうなのはわが國の社會の寂寞を實證してゐるのである。かの女が相撲を見に行つたなどはちよツと面白いことになるのだが、その取り卷きは德田秋聲上司小劍等の諸氏で、乃ち、ただ同社に出勤する人々であつたに過ぎない。先日、福澤邸の試演場に藝術座の研究劇があつた時にも、その落合ひ每に、かの女は自分からの應接にはなかなか努めてゐたやうだが、さて、かの女と共に食卓に行かうとするやうな氣の利いたものは殆ど無かつたやうだ。ただ瀧田氏が雜誌編輯者としての親しみを表してゐるところへ、長田幹彦氏と僕等夫婦とがお相伴しただけだ。

僕は然しから云つて、かの女の交際的無勢力を示めすつもりでは無いこれから少しわが社會の無趣味な事情を云つて見たいのだ。田村女史ほどに活動してゐれば、西洋なら、きつと或範圍の交際的クインになれる。が、さう行かないのは、かの女の罪では無く、わが社會に、從つてまた研究劇などを見ようとして集る藝術家肌の人々でもに、朴念人が多い爲めだ。かの女は度々會つて見るとさう惡い感じがしない婦人だ。それを初手から見るのもぞツとすると云ふのは、男子の方にすべての婦人（賤業婦を除いて）に對する交際上の趣味も修練も、雅量も無いからなのであらう。別な例で云へば、今日世の注意を引いてゐる青鞜社のおも立つた二三婦人に對しても、下だらない毛嫌ひをするものは別として、理解する男子連が、少くとも同年輩若しくは年下のが、五人でも六人でもありさうなものだらうにと、僕等は思つたことがある。然し實際は、殆ど無いやうだ。

蓋し社會の習慣が婦人に對しては一般に田舍臭いからである。開けてゐないからである。同時に、婦人自身の方にも、まだ一般に引ツ込み思案の習慣が取れないのも身づから招く原因になつてゐる。無論、外國の婦人だツて、婦人の方から男子を訪問するやうなことは滅多に無いが、男子が崇拜、賞讃、若しくは贔負の意味で訪問して來るから、それに對して應接する呼吸などには、なかなか慣れてゐる筈だ。で、田村女史をから云ふ點に於てまだ野暮臭く、こと更らめいた程度にとどめて置くのは、わが國の青年男子が一層野暮な爲めにかの女にもツと垢拔けをさせるだけの經驗を與へたいからである。

婦人の身を以つてニイチエに先きんじて超人主義を獨逸に鼓吹したと云はれるヷルンハゲン夫人を、思索的方面では殆ど何物も無いやうな田村女史と對照するのは、無論當を得ないことだ。が、假りに模範の一例として出して見ると、同夫人には――かの女の結婚前と結婚後とに拘らず――ハイネ、ゲーテ、カライル等も貢ぎを入れ、シユライエルマヘルフンボルツ、フイヒテ、ヘーゲル等も感化を受けた。つまり、渠等は皆かの女の間接直接の取り卷き手であつた。そしてかの女は一冊の書をも著はさなかつたが、から云ふ多くの知名な人々に對する應接やら手紙やらで自己の主張を知らせると同時に、渠等の思想をも動かしたのだ。こんな思想界の、同時にまた交際界の大クインなどは、わが國ではいつ出るか分らない。

曾てやまと新聞が學生相撲の催しを國技館でやつた時、多くの青年男子間にたツた一人の女性なる瀬沼夏葉氏が洋服で這入つてゐた。婦人は一切招待しない筈てあつたのを、どうした拍子にか、招待者が雅號を見て男子だと思ひ違つた爲めであつた。それにも拘らず、その時かの女はおほ評判のまとになつた。斯くも女性に精神上の渇ゑを持つてゐるわが國の青年男子に、奇麗な意味で婦人に接近して行くだけの勇氣が、今のところ、見え無いのはどうしたわけだ？　社會の習慣が悪いのだ。第一に男子が婦人を輕蔑すること。第二に、蔑視されるやうな婦人が從來多かつたこと。第三に、或範圍で多少は取り卷き手を持つてゐた婦人も、結婚すると、返り見られなくなること、また返り見られないのを、沒我的に當前だと婦人自身が思ふこと。第四に、有夫の婦人を訪問すると、その所天が直ぐ燒き持ちじみた樣子を見せること。から數へ立てると、實に馬鹿々々しい習慣ばかりだ。そしてこんな習慣を、卑怯にも進んで破り得ない習慣は、一層馬鹿々々しいではないか？

昔、湘煙女史が身づから語つたところに據ると、中江兆民が或日かの女のもとを訪問し、いつに無く、政治上並に人生上の苦悶を訴へて、泣いたさうだ。あの飄輕な哲學的政治家兼新聞記者の生活にも、斯く感傷的だが率直で眞面目な半面があつたのだ。田村女史も、かかる男子が自分に崇拜、賞讃、若しくは贔負の意味で近づいて來るのを、人一倍に待ち受けてゐる婦人であることは、その創作並に實際を見れば明らかに分つてゐると僕は思ふ。

それには、然し、一般社會がもツと一般婦人に敬意と雅致とを拂ふやうにならねばならぬし、またこの女史の身にもなほ改善すべき點があるやうだ。(大正三年七月十六日。)

△私の考へてゐる田村俊子氏

岩野清

私が始めて田村俊子氏を知つたのは、有樂座の中でであつた。それは尾竹一枚氏が紹介したのである。其時私は通り一篇に挨拶を交はした。

然しそれきり私は談話を俊子氏に向つてつゞけなかつた。これは私が特に俊子氏にのみとつた態度ではない。私はいつでも初對面の人に對しては、かう云ふ氣分を持つ性癖なのである。相手の人が自分と親しみをもつ事を希望してゐるか、或は親しまれることをさけない樣子が見えるまで、自分から押しきつてその人に接近したくない、と云ふような氣分が私にあるからである。で、私は俊子氏に對してもさう云ふ氣分で向つてゐた。私は尾竹一枝氏と對話してゐる俊子氏が、折々私の顏に、俊子氏の愛嬌をたたへた目が向けられた時は、私も同時に笑ひ顏を返した。さうして私は作物から感じ想像した、誇りかな婦人としての俊子氏とは違つた柔らかい感じを得た。私は俊子氏を作物の上から考へてゐた時は、もつと才はじけた、すべての周圍のものを胸の底まで見とほさなければやまない、と云つたよりな冷たい底深い目をもつてゐる人だと想像してゐた。かう思つて私は俊子氏を畏敬してゐた。さうだつたから不意に俊子氏に紹介された時は、自分が何となく威壓されるように感じた。だから俊子氏から暖かい笑をふくんだ目を向けられても、親しみいい言葉を聞かされて後も、さういふ心もちはきえなかつた。が暫くして後、丁度私の椅子の後に立つてゐられた俊子氏が『いい奥さんね。』と尾竹氏に向つて云はれた聲で、ふと振り向いたとたん、顏で私を指し示したのを見とめた。私はこの時子供らしい恥かしさに顏の赤くなつたのを覺えた、と、同時に又又一種の反感が起つた。と云ふのは、まだ親しみのない人から、自分の前で自分を批評されたと云ふことが、如何にも子供扱ひにされたような感じがしたからである。私はこの不快な感じから其夜は再び俊子氏と言葉を交じへなかつた。作家としての俊子氏を尊敬する點に移動はなかつたけれど、友人として親しみたいと思はなかつた。

　其後、青鞜社で二度目にはからず落合つた。さうして平塚明子氏、伊藤野枝氏、及俊子氏と、私と四人で西ヶ原のちまきにおしるこをたべに行つた。染井の墓地をぬけて、ちまきに行く途中で平塚氏のあごに毛がはえてゐたのを發見した俊子氏が、さう云つてもまだ信じない明子氏に承認させるため、『うそぢやあないわね。』と私に云はれた。私はそれに對して事實だと云ふ簡單な言葉を返した。その外は直接に俊子氏と會話をしなかつた。然し歸り路に又染井の墓地を四人で、話しながら歩いた時は、もう私の心の中には、初對面の時の不快な印象はなくなつてゐたそれは他の二人の婦人に對する懷かし味のある俊子氏の態度が、いつか私の氏にもつた不快をけしてしまつたからであつた。この時私は、俊子氏との初對面からうけた感じは、私が俊子氏を知らなかつたから起つた私の誤解だと思つた。俊子氏が親疎によつて、言葉や態度を二重にしない恬憺な性質を理解しなかつた結果だつたと思つた。で、私は歸り路には、かなり親しい氣分で、私の家庭や周圍のことなどを俊子氏に話した

　其後からは折々俊子氏とお會ひする度に、いつも好い印象を與へられた。あのまる味のある言葉、愛人に向つてゐる時のようなしなやかにまきつくようなこととなし、殊更めかしく卑下もせず、さりとて虚勢も張らない態度が私に感じよく思へた。

然し勿論これが俊子氏の全部ではない。私の感じてゐる俊子氏は、かなり好き嫌いの多い感情の流動起伏のはげしい機嫌の取りにくい人だと思へる。在來の日本婦人にあり勝ちな小さな我儘を時々見せることもある。

公人としての俊子氏、作家としての俊子氏としてはまだ私から見てあきたりない處がある。勿論あのデリケートな官能の描寫は、他の婦人作家中比肩するものがないのは事實であるが――殊にその點に遲鈍た私は氏に及ばない事遠いのを思つて、常に氏を尊敬と羨望の目をもつて見てゐるのだけれど――あれが官能描寫の最も完成したものとは思はれない、と云ふのは、俊子氏の人生の見方の根柢が、根本から因習を離れるまでに行つてゐないため、氏の日々の生活からほとばしつて出る新らしさと、生々しさとが少ない。つまり氏でなければ感じあぢはへないと云ふ獨創味が少ない。只多くの作家が雲烟過眼してしまふ感觸を、こまかに叮寧に觀察し描寫してゐると云ふちがひだけなのである。これだけでもたしかに他の無感覺にみてゐる人達よりは、まさつてゐる事には相違ない。然し私から期待するものは、さう云ふ違ひよりはもつと根本の異彩がありたいと思ふのである。

其他の描寫に就ては、たとへば炮烙の刑でも、木乃伊の口紅のみのるでも、氏の人生の見方が、忌憚なく云へば因習道德からぬけ出す事の出來ないのがよく見える。これが、龍子の場合のような深酷なるべき材料をあつかひながら、矢ッ張り在來の一般道德心から遠くない氣分しか洞察出來なかつたのだと思ふ。氏のかう云ふ人生觀の態度が、引いて公人としての氏を評する起點にもなる。

世間の一部の人達は、氏を一面に放縱な點のある人だと思つてゐるらしい。

けれど、私から見れば、氏はむしろ一般道德の殼から、一歩もぬけ出してゐない婦人だと斷言したい。只、氏の天性の一部とも見える感觸の鋭敏さを、技巧を加へて助長させてゐるらしい態度を、氏の道德觀と結びつけて一般人が見誤つてゐるからだと思ふ。

私はかう云つても、無論、自己內省のない盲目的な放縱を贊成するのではない。

私は個人としての俊子氏が、御自身を置く立場を、本當に自分のために生きる婦人となつて、すべての、前から作られた女性の世界からすつかり離れた世界に立つて、そこから、女性の、或は男性の人生を見なほさなければならないんだと思ふ。さうしなければ、眞の生きてゐる人間の、矛盾の中に統一あり、統一の中に矛盾とみえる事もまじる流動限りない生活を、奥深く觀察することが出來ない。

たとへば本乃伊の口紅のみのるにしても、只男が、自分の藝術を愛することを知らない、と云ふような感じばかりでなく、もつと男に對して憎み、又慕ふ、內心の葛藤があつた筈の處まで、洞察してゐないのも一例である。

かう云ふのは誠に大づかみな批評ではあるが、私は、氏の作物に對し

て私としての感じを云ふのが、當面の目的でなく、作物からかりて來て氏を論じようとする所よりするだけなのだから。

で、俊子氏が、創作をされる時程のまじめと、熱とが、氏自身の内面生活には乏しくあるのではないかと想像してゐる。

さうして割り合に世間と云ふものを、氣になさり過ぎるように思へる。或る時、或る場所で『私は新らしい女ぢやないのよ。』と云はれたのなども、或はアイロニカルな意味で云はれたのかもしれないが、一面には世間から嫌はれたくないために――新らしい女と云ふ言葉が現在の日本では一般から嫌はれがちなので――自己を僞はつて辯解したものとも思へる。又眞實新らしい女となることをいみ嫌つてゐるものとすれば、作家としての俊子氏の價値も亦大に移動を來すわけになる。が恐らく本當は内心ではさう思つてゐられないのだらうと、私は推察してゐる。若し私の推察があやまりないなら、あの場合あんなことをおつしやるには及ばない事だつた。俊子氏としてはもつと、衆俗のためにこびないしつかりした處がありたいと思ふ。

かう云ふ私の考へからみた俊子氏は、どうしても、もう一枚殼をぬぎすてなければならないと思ふ。さうして赤裸々な本然の女性に返つて、もつと大膽に、もつとむき出しに世間に向つたらいいと思ふ。同時に又自已をつき放して、行くままに分裂させ葛藤させ、さうして其中に眞の自分と云ふものを發見し、把握しなければならないと思ふ。

私は隨分むき出しに、無遠慮に惡口を云つてしまつた。さうしてから書いてしまつた後、自分の見方が淺いために、俊子氏を非常に誤つて考へてゐはしないか、と云ふ恐れが起つた。もしさうだとすると、私は俊子氏に對して申し譯のない罪を犯したのだと感じた。

然し他人を觀察すると云ふことは、普通の人間としては、どうせ誤解はまぬかれ難いものだから、さう云ふことを恐れるなら、始めから批評しない方がいいのだし、批評する以上は、自分が考へ感じてゐる通りを眞實として云ふより仕方がない。

だから、私のここに書いた俊子氏論も、これが俊子氏であると押しつけるのでなく、私は俊子氏をかう見てゐる、と云ふ意味で書いたのであることを、俊子氏及び此文をよむ人人にしかとお斷はりを申し上げる。

尙最後に一言書きそへて置きたいのは、私が俊子氏の作物の批評らしい事を處々に、一言二言位云ひ及びながら、具體的に評論しなかつたのは、俊子氏の作物に對しては、世間既に定評があるし、又それ以上にするのには私のような其道の後進でなく、もつとしつかりした方々がある、と思つたので探入りしなかつたのである。

私が此文に書いた事に就て、氏が公開狀或は私信で、氏から考へられた誤解の點を叱責なさるとしても、私は尊敬を以てそれを受けとる心だと云ふことを、特に田村俊子氏に申し上げて置きます。

（大正三年七月十七日）

△俊子論

正宗白鳥

感覺的といふことが近代文學の特徴のやうに云はれてゐるが、今の日本批評家の用ひるやうなこの語の意味から云へば、女の方が男よりも一層感覺的であるべき筈だ。田村女史の作物など最も感覺的筆致に滿ちてゐる。またそれをつとめてゐるやうに見える。男では分らない女の氣持が時々出てゐる點で私はこの人の作物に興味を持つてゐる。明治の一葉は或は時代が時代だから、態度も舊日本的で、文章も舊風に泥んでゐたが、田村氏は今様に自己を憚る所なく出さうとしてゐる。しかし、出さうとしてゐるだけでまだ充分にそれが出てゐるのではなからうと思はれる。男としても專門に藝術に從事するには惱みが多いが、まして女の身で月月の毀譽褒貶の間に浮沈するのは、さぞ神經の惱みが激しいことだらう。文藝上の批評ばかりではない、女流作家に對しては私行上の虛實の噂が激しい。尤も田村氏はそれ等に耐忍ぶ力を持つてゐるのかも知れないから、傍から氣の毒に思ふのは僕の杞憂かも知れない。兎に角僕は好き嫌ひの私情を去つて見れば、現今の女藝術家で、柴田環松井須磨子田村俊子の三人を推賞するに躊躇しない。しかし日本の社會が此等の才女を充分に發展させるだらうとは思はれない。

△蜜豆の好きな人

上司小劍

田村俊子氏に始めて會つたのは。去年の初夏の頃であつた。お召か何かの荒い縞物に、青い絽縮緬の單羽織を着て、あの役者のやうな、舞臺の上に見るやうな眼で、ニヤリと笑つてゐた。場所はある會社の應接室で、眞ん中に粗末な卓子を置き、椅子が二三脚、上手寄りの壁に三省堂の世界地圖がかゝつてゐた。『女といふものは、絶えず芝居をして暮らしてゐるもの』と誰れかの言つたやうに、女は眠つてゐる間にでも、枕を外すまいとか寐だしなみをよくしやうとか、いろ／＼の芝居がゝつた苦勞があつて、本質さながらの姿を以つて人に見られるといふことは殆んどない。さうして私はこの女の芝居がゝつたところが好きで、本質さながらの姿なぞを見せられるのは厭やだ。

俊子氏には、これより先き二三度ある用事で手紙を往復したことがある。其の時私は非常に字を書くことの上手な人であると思つてゐた。『君田村俊子は字が巧いね』なぞと、私はよく友達に話した。昔しの清少納言といふ人はこんな字を書いた人ではあるまいかと思つた。枕草紙の原稿はこんな字で書かれたのではあるまいかとも思つた。さうして初めて俊子氏に會つた時、丁ど彼女の書いた文字其のまゝの姿であるのを思つた。手際よく技巧を凝らされた文字と姿。そんなことを思つた。

俊子氏の藝術もまた彼女の文字と姿と相通じたものである。私が初めて俊子氏の作品を讀んだのは、あの文藝協會の應接室で、嘲弄ふやうな態度で老博士に對する小說、梅の實でお手玉を取るやうなことをしながら、博士の足音を待つてゐて、扉の開いた瞬間に、其の梅の實を袂に押し隱くすといふやうなことのある小說であるが、それ以後氏の作は大抵讀んでゐる。昔の一葉もよかつたであらうが、時代の違つただけに、今の私たちには一葉よりも俊子の方を取りたいと思はせる點が多い。これは何人も同感で、極く平凡な評であらう。

二度目に俊子氏に會つたのは、ホトトギスの招待館の時で、氏は頻りに、サイダーを飲みたがつて『サイダーあつて』なぞと探し廻はつてゐた。サイダー、氷水、蜜豆、そんな物の好きらしい下町的の可愛らしい一面が、氏の上に見らるゝのは當然であらう。今年の春私が二ケ月餘の病院生活を無事に終つて、衰弱した身體で久しぶりに銀座の街へ現はれた時、俊子氏は秋聲、白鳥等の諸兄とゝもに、私たちと机を並べて座ることがあるやうになつてゐた。さうして私の全快祝ひの發企者の一人として、十數人の知友への案內狀を書いた時、俊子氏が例の名筆を揮つた案內狀には集會の日附が落ちてゐたので、電話で問ひ合はせが來たりなぞした。かういふところにも氏の藝術家的の閃めきが銳く見えるやうに思ふ。こんな次第で最近には氏に會ふ機會も多く、秋聲氏等と共に、俊子氏をも連中の一人として、芝居見物なぞに行くこともあるけれど、眞に氏を評しやうとするには、今少しの隔りを置いた後でなければ、眞個に何うといふことは言へません。

△俊子女史の印象

徳田秋聲

俊子女史に關して、人物若くは藝術評をしろといふことだが、僕は俊子女史について知ることが甚だ淺い。無論是迄多少交際はして來た。それは田村松魚氏が僕の舊友であつたから、氏が米國から歸朝して間もなく結婚した俊子女史をも、その後知ることになつた。初めて紹介されたのは、女史が舞臺の人として、東京座で森雨氏の脚本「波」の女主人公に扮してゐた時であつた。それから餘程たつてから、帝劇で逢つたときの、女史の印象は、第一印象と全然異つたものであつた。其時の女史は大阪朝日の懸賞小說「あきらめ」で、既に文壇へ乘出しかけてゐた。

女史の前身は、舞臺の人としても、作家としても、孰かと云ふと古い藝術界に於て、働き出さうとしたかのやうに見えるが、女子の箇性は、それらの空氣と融和しなかつたやうに見える。これは（自身に比較を取るのも可笑しいが）丁度僕などが紅葉先生などに對するとき、何處かに折合ひかねる心が腹にあつて、そのしんねりむつつりした暗い自我が、一種の壓迫を受けて、苦んでゐたと同じやうな狀態ではなかつたかと思ふ。女史が「波」以前にも芝居などに係はつてゐたとしたら、更に其苦悶が深かつたらうと思ふ。

それゆゑ女史は必ずしも厭世家ではないが、普通の東京兒のやうな明い人では、決してない。東京の下町氣分をば多分に有つてはゐるが、八千代女史や時雨女史などとは大分趣を異にしてゐて、さういふ風な意氣味や、氣の利いた輕いウヰツトなどが少ない代りに、一種のセンチメンタルな情緒をもつてゐる。尤も感覺に鋭敏でないことはない。それは寧ろヒステレカルに鋭敏である。そして女史の作品の主なる色調を作つてゐるものは其である。無論女史は常に、殊に近來は單に感覺のみでは物足りなくなつて來たと見えて、思想の方へも踏込まうとしてゐる。「木乃伊（みいら）の口紅（くちべに）」などにも、そんな傾向はみえたが、しかし「砲烙の刑」に移ると一層その努力の傾向が、そこへ進まうとしてゐることがわかる。といつても、それは矢張病的な誇張された感覺を土臺（どだい）としたもので、思想としては其の渇望と努力はあつても、それはまだ分明しないものである。强ちそれを惡くいふのではない。單にあれだけの感覺でも、女史の特色は充分發揮されてゐると思ふ。

女史の頭は、隨分ヒステリカルに變化する類である。表情が東京の下町の女などのやうにピビツドではない。しかし變化はする。女史のペーソスが、そこに現はれてゐる。そして僕の知る限ではどんな時にも、女史は心から燥（はしや）ぐと云ふことがないやうである。顏面神經は大抵の場合幽欝な色調を帶びてゐる。そして女史が常に生立の印象などに告白するやうに、人にひつついたり、取りついたりするやうな幼時の氣質が、今でも見出される。

△俊子氏に就て描く私の幻影

野上彌生子

私は田村さんにはまだお目にかゝつた事もないし、作物と云つてもこの雜誌にお載せになつたのと、今讀賣にお書きになりつゝあるもの以外には一つも拜見してをりません。從つて大した作物の批評も人物論も出來さうにありません。その人の書いたものを讀んでゐない事が、作物の批評の出來ない原因にはなつても、その人に逢はない事が人物評の出來ない理由にならない事は勿論だと思ひます。でも逢つた事がない許りでなく、間接に顏を見た事もなければ、委しい言行も知らない。その他內的生活を忖度する材料となるようなものを一つとして持つてゐないのですから到底その方面の批判は不可能であります。

たゞ一つ私は同氏に就いてはある幻影を持たされてゐると云ふ事丈けを申して置きませう。その幻影は私の接した氏の三四の小說中の女主人公から放射されたもので、私には作者たる氏と、その女主人公達とを切り離しては到底考えられない位ゐになつてゐます。容貌でも、性格でも、趣味でも、乃至戀愛上の態度でも。それ故もし假りにその幻影をその儘氏が本來の面目だと假定する事を許るすならば、氏は可なり情本位な、ばいくれんではあるが、涙もろい勝氣な、分別のある、いゝお姉さんと云ふ人らしい。理智とか、冷靜な批判とか、嚴粛な省察とか云ふものには乏しい人らしい。と同時にそれ等のものゝ乏しくない事を望んでゐる——

寧ろ見せつけ度い人らしい。けれども本統に私のこの幻影中の女主人公にインテレクチユワルな方面が多分に存するならば、彼女の今までのところ唯一な仕事となつてるらしい戀愛關係の紛糾などは、容易に解決されるものだと思はれます。――私のこの言葉はあの龍子の幻影に多く支配されてる事を斷はつておきます。

作物に關しては氏の深い苦心と用意になつてるらしい、あの特殊な豐麗な文章が一番に目につきます。如何にも纖細な、一と針拔きに物を縫つて行く風な描寫を小五月蠅いと云ふ人もあろうだけれども、あの位ゐちり／＼した感覺を盛つて行くには、あれでなければならないでせう氏は丁度恰好な容物を見つけたのだと思ひます。併しも一步深く突つ込んで考へると、氏の美しい色つぽい。珍らしい、言葉や、句はそれを讀んでゐる間、讀む人の目の前に非常にアトラクチーヴな舞踏は續けても心の內面までは這入つて來ない、どきんと胸に浸む響を持つてゐない。これを武者小路氏などの、或物を最小限の文字の數に壓し込められるだけ壓し込めて打ち出したと云ふ風な文に比較すると大變な相違を覺えます。

內容に就いてもあり云ふ事はあまりません。主なる主材となつてゐる男女關係を初めとして、その他の生活にも性格描寫にも、別に特種な哲學もなければ、新らたな戀愛的自覺も見出す事は出來ないと思ひます。讀賣に載せられてゐるものなど、新婦人を描くとかの事でしたから、その方面に對する期待を抱いてゐたのですが、今のところではその點は可なり失望しそうに感じられます。――私は大分無遠慮な言葉を連ねたようです。併し氏が今掘り當てゝゐられる泉から勢よく色んな水の吹き出しゐる事には驚嘆してる一人である事は申して置き度いと思ひます。同時にその水がおひ／＼と純な、透徹した、心奥のにじみにならん事を希望してゐます。

△田村俊子さん

らいてう

田村俊子さんの作品と人物とを評して見たいととうから思つて居ますけれどそれにはまづ第一に俊子さんのこれ迄發表された作品を少くとも一通りは讀まねばなりません。處が私にはまだそんな暇が與へられてないのです。九月の青鞜の記念號で出來たらして見たいと思つてゐますが人の作品、殊にその人物を評するといふことは何としても責任の重いことですから、今何の準備もなしに、輕卒なことは申したくありませんが只今迄私の讀んだ俊子さんの作品とそれから私が「青鞜」を出すやうになつて以來幾回か御めにかゝつて御話した俊子さんから漠然と得てゐる印象で申しますと、この間の「文章世界」に水野氏が御書きになつた、「田村俊子女史に與ふる書」は私の考へてゐる處と可成り一致したところがあるやうな氣がいたしました。

思ふに俊子さんは別にどうといつて根本に於ては特殊な個性ある婦人でもなく、人間としてほんとの生活をしようといふやうな要求や努力に生きる新しい婦人でもなく東京の下町の墮落した、物質化した、平面化した過去の文化が生んだ、利巧な器用な古い日本婦人ではないでせうか。

評論

文藝時評　中澤臨川

現代の神秘的傾向

吉江孤雁論

　最先きに、我等は神秘主義(ミスチシズム)の意義を考へて見たい。人間の心意活動に二様の方式の在ることを是認する場合に、我等はおのづから其何れかの傾向を多量に享分するものと見なければならない。或る者はラプラースとカントとそしてビスマークに左胆し、或る者は蜜蜂と旅鳥(たびどり)とそしてベルグソンに歸依する。前者が理智派て、後者が本能派である。前者は本然的に幾何學と視覺とを萬能視するが、後者は寧ろ藝術に重きを置き、聽覺を信賴するかに見える。總じて後者の態度は理性に對する不信である、そして社會生活に就て抱く不安である。懷疑家は理智を以て理智の功果を疑はうとするが、本能派は一歩遠ざかつて、理智の根源なる感覺その物を輕視するのである。本能派は廣い意味の神秘家である。

　然かし斯樣に漠然と範疇的に下された定義は、具體的に神秘家その物の本質を捉へてゐない。何人も或る程度までは神秘家でなければならない。野へ出て蝶をピン附けにし、メスを以て花蕊を截斷する自然科學者も、その解剖の手を停めて雲の行衞を見遣つた瞬間からは、好個の神秘家である。我等は一個人の理智と本能とを衡器(はかり)に懸けて、その輕重を問ふわけにはいかない。神秘家の本質は寧ろその人本來のムッド乃至は傾向の中に求めなければならない。

　亞米利加の或る批評家は現代の代表的神秘家を數へて、メーテルリンクとベルグソンとグリアーソンとを

擧げた。この例證の如何に範疇的知識に墮してゐるかを知ることは、神秘家本來の面目を窺ふに最も好都合な材料を與へるものである。

ベルグソンの哲學は、人の知る如く、理智の職分を闡明し制限し、別に直觀の德を揚げて、之が養成と擴大とを奬めてゐる。彼に從へば、我等が實在の本質を生き、その自然の流動に棹して生命のリズムと諧和する爲めには、一種の「知的同情」に由らなければならない。理智は持續（デューレーション）本然の姿を敵視し、停止し、配列し、分拆し、抽象する。理智は死せる概念に由て凡らゆる生命を固化する。唯だ全意志の緊張が導く一種の感應のみが、我等を意識の奥宮に導き、そこに溫かき夢と黄昏（たそがれ）のあはひに、我等の自我が目覺め花咲き榮かえ實のる故郷（さと）の在ることを訓える。斯樣な點から見てベルグソンを神秘家と呼ぶのは謂れのないことではない。然かし一方から見れば、彼は理智の不當な要求を限定しようとはすれ、決してそを蔑視しようとはせなんだ。彼は繰返し／＼理智の爲めに辯じ且つ說いた。況んや、彼の所謂直觀は自覺した本能である。而して本能に自覺と自由とを與へるものは理智よりほかにない。彼は理智の眼を「それ自らの内部に向け、その中に眠る直觀の潛在力を覺ます」ことを望んだ。無自覺にして進歩を知らない本能を直觀に引上げ、やがて之を擴大するには、理智の力に俟たなければならない。て、總じて彼の思想の開展を窺ふに、ベルグソンは本來の本能派ではない。彼は優越な天賦の理智家であつた爲めに、却て理知の極限を洞察して、直觀の德を稱道したと見るのが至當である。ベルトラント、ルッセルが彼を評して「視覺家（ヴイジュアライザー）」と謂つたには、一面の眞理がある。その心的ムッドまたは傾向から見るとき、ベルグソンを正統の神秘家とは謂はれまい。

顧てメーテルリンクを見るに、彼は確かに在來の神秘家である。「マレーヌ王女」や「謙遜者の寳」を書いた頃の彼は、純の純なる神秘家であつた。無理な努力を待たない本能の自然に動き、沈默の中に、無爲な小兒の死の中に、盲人のざわめきの中に、靜かな常住座臥

の姿態の中に、白鳥の蒼空(あをぞら)を横ぎる如き哀涼閑寂な心靈の囁きを聞き得た彼を想ふがよい。それが彼の本然の姿である。然るに後半生の彼は、本能の衝動にのみ甘んずることを厭ひてか怖れてか、そが溫かき暗闇(くらやみ)を照らす爲めに、次第に理智の光を借りて來た。彼の『叡智(ウイスドム)』には多分の常識が混入し、彼の『善識(グツド、センス)』には生命の要求よりも社會道德の懸念が重きをなした。彼は人間の堀つた神秘の深さを縱に測らずして、横に『神秘の進化』を說いた。彼の本能は曲げられた(それを彼の進步と見るのも、或は退化と見るのも、人々の心々てある)。要するに、本能その儘の姿に隨ふことが生命の自然であると云ふ見地からすれば、今日のメーテルリンクは尠くとも一步は横道にそれてゐる。從て彼は純粹正統の神秘家とは謂はれない。

之に反して、グリアーソンこそは生粹の神秘家である。彼は生れながらの汚がされざる本能家である。北米大平原の中に生ひ立ち、曠野の靜寂と、人間の呼吸の混じることの少ない自然の吐息とに身を包まれながら、カンサスの平原を吹き越ゆる風の音に耳を傾て、何人(たれ)とも知れない先住者が捨て丶行つたロック、ハウスを唯一の隱れ家としてゐたと謂ふ彼――その風の音草の囁きをおのづからなる旋律(ハーモニー)に仕組んで、即興樂に妙を得たと謂ふ彼――やがてはそれを敢果ない生活の資本(もとで)として、目的(あてど)のない旅に上つたと謂ふ彼――『自分は如何に待つべきかを知つてゐた、何處へでも行きたいといふ衝動が自分を捉へるまで待つてゐた、一度その衝動が自分を捉へると、直ぐ自分は其處へ出掛けて行つた、先方へ着いた時、自分の嚢中にはいつも全く金の殘つてゐたためしが無かつた、けれど貧乏や飢は私に何の恐怖をも起させなかつた』と言つてゐる彼――『書籍から世間を知らうといふ考は決してその心に上らなかつた』と謂はれる彼――『年齡(とし)をとればとるほど、次第に純理智的な著作を嫌つた』と謂はれる彼――は如何なる點から見ても、純の純なる神秘家であつた。彼の本能を愛するは本然天賦の衝動であつた。彼は決して理智の眼を以て疑ひはしなかつた。彼は現

在と未來に絕對の信念を置いた。彼の本能は努力を要求しなんだ。彼は旅鳥の空を渡るが如くにさすらひ、蜜蜂の巣を營む如くに述べ作つた。彼の著作は憐むべきほど論理の統一を缺いてゐるが、之に、代はるにムッドの見えない强い糸が全體を調整してゐる。彼は視るよりも先づ感じた。理性的に盲目な彼の信仰は、本能的に益々深く堀り下げられた。三十年進步も變化もない彼の宣傳主張は、唯だ之を裝ふ經驗と表現との新しさと深さに於て喜ばれた。之を思ふに、正統の神秘家は造らるべきものでなくて、賦へらるべきもの、生まるべき者である。

私はグリアーソンを想ふ每に、我が文壇に於ける現代唯一の神秘家として吉江孤雁氏を聯想せざるを得ない勿論、彼の經歷はグリアーソンのそれほどストライキングなものではなかつた。然かし閱歷は必ずしもその人の心的態度を指示しない。丁度後者と同じやうな境遇にゐたゴルキーやクヌート、ハムズンが遠くそれぞれの路に岐れて行つたのを見てもわかる。孤雁氏は寧ろ常識家に見えた。それは日本人の性癖と、日本の天然とが何かと言へば小規模で、漂泊の民を育くみ、本能の自然人を容れるだけの餘裕のないことにも因るのであらう。然がし、彼の性向は夙くから純一不可分で、ずつと今日まで續いて來てゐる（私は年少彼を識り、その後些しの間斷もなく彼の發達の跡を追ひ得たことを喜とする）。山國の高原に育てられた彼は、夢見勝ちな少年であつた。彼はウォーズウォースに歸依してはルシー、グレーの可憐な姿を偲び、ツルゲーネフの『獵夫日記』に露西亞の森林と曠原とを慕ふこと、稍や久しかつた。その間に彼は自然詩人としての自分の天分を自覺しながら、一路其方向に進んだ。その後も彼の採つた態度と經路とは、現代人としては餘りに單純に見えるほど純一であつた。世間は唯だ忠實な『紀行文家』として輕く彼を見過ごした。最近數年間に我が文壇に起つた慌たゞしい動搖でも、人並に之を理解しながらその影響を受けることの最も少なかつた者の一人は彼であらう。今日までつぎ〳〵に彼を牽きつけた外國の

作家は、前に擧げた人達のほか、トローや、小泉八雲や、ピエルロチや、メーテルリンクや、ゴルキーや、イエッツや、そして最後にグリアーソンがあつた。

グリアーソンの文壇に占める地位は暫く問はずともよい。然かし、彼の態度と性向と、そしてその表現とが、何れだけ孤雁氏を啓發したかは殆んど人の豫想外にある。彼はグリアーソンを鏡にして、本然の自分の姿を映つし見ることが能きた。其處に彼は曇らざる自我を發見した。久しく求めて達せざりしものを確かに摑みえた自信が急に彼を擴大し、そして彼の心の奧深く囚えられてゐたさま〲な謙遜な室を解放した。彼は今迄の堅い天地のほかに、別に洋々たる海の心内に波打つ心好さを覺えた。彼が自身用ゐた比喩を藉りて言ふならば、在來の彼は丁度丈夫な玻璃で四方張詰めた部屋の中に推込められてゐたやうなものだ。玻璃を透して自然の萬象が彼の前に姿を投げた。彼は終日その部屋の中に座つて、いみじき四季の變遷(うつりかはり)を觀てゐた。「けれど、地平樣上の淡青の光が廣がつて、天半までも及ぶ中に、流星が閃めいて過ぎ行くのを見やつた時、彼はその光の下に湧き返る大海の姿を思ひやつた」。今までは唯だ玻璃窓の四方を眺めて喜んでゐた彼も、この未知の大海の面影を思ひ浮べてからは、ひたすら其方角ばかりを見詰めるやうになつた。「夜更けてくると、その海の響は大地の胸を傳つて、私のゐる室の下から呻きを立てるやうに思つた。私は頭を下げた。そして耳を澄してその響を聽き取らうとした」。今まで幾年か外界の自然にばかり氣を取られてゐた彼は、譬へば知覺といふ玻璃窓を距てて實在に臨んだのである。窓一つ破つて出さへすれば、其處に意識の大きな自由の海の在ることを、彼は知らずにゐた。漸くこれに氣附いてからも、如何にしてその部屋から逃るべきかを思ひあぐんだ。彼は『狂ほしく玻璃を叩いた』。丁度、機の熟した一刹那にグリアーソンが現はれて、幽囚から彼を救つた。『今までの靜けさよりも強い深い悅ばしさが胸に湧いて來た、血液の運行が勢づいて來たやうな氣がする』と彼は言つてゐる。

純一な本能の力を外の自然から内の意識に向けた時から、彼は眞の意味の神秘家になつた。『自然との接觸は他の場合に於けるよりも私達の生命を純化し流動せしめる多くの機會を與へるものである。併しただそれだけである。自然その物が私達の生命を左右するのではない。私達の心靈の上に命令權をとつてゐるのではない。水の中ではどれだけ熟練な游泳者でも兎角く漂はされがちなのが、陸上へ立てば確かな足どりで歩むことが出來るといふだけである』。所詮、力は内に在る。『蜘蛛手に分れてゐる途の中へ迷ひ込んだ者は、先づ大地の上へ腰を下して、自分の胸へ手を當てて、自分の越方を考へるが好い。既に來た途のある以上は、歸るべき方がなくてはならない。生きてゐるからには、その生き方を力強くする方法がなくはならない。歩いてゐるからには歩むべき正當の途がなくてはならない。その生き方を、その歩むべき途を自分以外に求めたらは、また以前と同じく迷はなければならない。私達はあまりに他に向つて求め過ぎた。他に對して從ひ過ぎた』。要するに生命の活力、實在の慈光を求めようとならば、自我を深く堀り下げなければならない。『神秘は自分以外に存するものではない』。

然るに我等は餘りに客觀的な物質的な物の觀方に慣らされて來た。自己を沒し、自己を無にして客觀に順ずる結果は、所謂公平な態度を裝ふ結果は、無差別の迷ひに陥り、自己の生活は分裂し、斷絶し、しどろに亂れて了ふ。理智は我等の生命を殺す。『死とは私達の肉體と心とが分離した生活、現今では解せられざる、私達の前途に待つてゐる一種の生活のみを言ふのではない。現在我等の生活に於てその生命の流動を阻礙する力、流動を阻害し、停滯し、氷結せしめる力、愛情を冷やして物質に化せしめる力、高く翔けんとするものを地に落す力、私達の心の扉を閉ぢしめ、人が來て叩いても開けさせまいとする力。光に對しては闇である。晝に對しては夜である。神に對しては惡魔である死は即ちそれである』。

理智は死である。我等はどうにかして方向の開展を

計らなければならない。努力が我等を或る新しい途に導くてあらうか。

否々、努力とは間違つた生活を無理に推し進めようとする場合に起る顯象である。グリアーソンの言つたやうに、智力生活に重きを置き、汽車を脱線したまゝて進めんとする場合に努力がある。世の人は『この苦しみを是非しなければならないものゝやうに思つてゐる。苦しみがなければ生き甲斐がないやうに思つてゐる。私達は餘りに強いて顰め顏をしたがる癖がある』。『實際私達は最う物の破碎される響には厭々して來た。塵埃を立てゝがら〳〵物の崩れる亂雜さは嫌になつた』。『自己解剖の苦しさ、然かもその結果は一層自分を分裂せしむるに止まつて、やがては生命までも斷つてしまふ』。

然らば我等は生くべく何うすれば可いかといふに、勿論本能生活に隨ふほかはない。『自然の生活とは、その人の本來の生活、靜かにして力強き生活、純化せられたる統一ある生活、斷えず全體の流動の方向の定められてゐる生活』である。『主觀が強く發現して客觀を包括する』生活である。『退いて何物かに自分の脊を倚せかけて、そこに立場を求めるのではなくして、進んて兩腕を開いて總てを抱くところに生命が動くのである』。斯樣な生活には、理智の行ふ分裂もなく、努力の强ゆる無謀もなく、河の石床に從ふが如き自在な流動がある。て、孤雁氏は之に名けて『純一生活』と呼んてゐる。

純一生活の最も好き顯現は、メーテルリンクに於ては沈默のうちにある如く、孤雁氏に於ては『獨座の姿』にある。『人がただ一人だけて坐つてゐる室内の空氣は其人の心内から起る一種の動波をそのまゝ傳へて、永久に持續して行くものゝやうに私には思はれる。其時その人の心に浮ぶ樣々な考が、また感じが、其人の顏面の神經を動かし、筋肉を動かし、それが動波となつて空中に彌漫して行く。人がただ一人てゐて、何人に對しても取繕ふ必要もなく、また如何なる外來の刺激に依て呼起されたてもない自發的の心理經過が、おのづ

と其人の神經をそゝり筋肉を動かして發現を求める。その時の表白は其人にとつて最も貴いものである。即ち其人自身の發現であり表白である』。斯様な時、我等の心は在りのまゝなる本然流動の姿に歸つて、純一無汚な空氣の中に、大宇宙の生命と融和する。それは丁度ロダンの彫刻に見るやうな姿勢であり、祈禱者の心に現はれるやうな諧音である。

獨座の姿は刹那的で且つ孤獨のうちに起る。然るに斯様な心の姿態を持續しうる人こそ、眞に確かな自分の生活を生きうる人で、積極的な純一生活が茲から始まる。

本然流動の生活は、蔭に咲いて人知れず萎む花のやうな孤獨のものではなく、互に親和し感應し傳染し抱擁する生活である。『靜かな中で先づ命が目を醒ます。一つの生命が目を醒ます時は、その醒めた眼で周圍を見るときは、他の生命が相應じて來る。一つ一つ次第に廣く醒めた生命は他を呼び、他を求め、共に談り共に抱き合ふ』。て、孤雁氏が折々に說いた所から推察すると、彼は心靈間の斯様な感應親和に二様の形式のあることを認めてゐるらしい（よし、彼自身は明らかに之を意識してゐないにせよ）。即ちその一つは兩者の間に起る直接接觸で、他は兩者が或る媒介物を通ほしてする間接抱擁である。前者は愛の形に於て現はれ、後者は藝術の形に於て現はれる。愛と藝術とは純一生活の表現の二方面である。

『私達の生の力が強く流動して行く時、その流が包み抱く自然なり人間なりの周圍には必ず火花が飛ぶか、若くは渦紋が起つてゐるのである。双車の周圍には旋風が起る。生命の流が勢よければ必ず風が生ずるに違ひない。その旋風が、その火花が、その渦紋が、即ち幻想（イリュージョン）である』。更にグリアーソン及び孤雁氏の詞を籍りて言へば、それが眞の『象徵』である。斯様な幻想または象徵を形に現はしたものが即ち藝術である。藝術は二つの生命の間の火花である。我等は山嶽の生命と合奏せずして其リズムを讀みえたであらうか。自然の生きたラインと感應せずして、ロダンの藝術が產ま

れてあらうか。藝術は『理智の探りうる秘密』の奥に生命の神秘を搜してはならないのか。我等はドストエフスキーの描く農民のやうに大地に接吻してはならないのか。ダヌンチオが描く戀人の如くに、愛人の胸の中に海の響を聞いてはならないのか。

　更に純一本能の生活が直接行爲として現はれる時、それは愛の形をとる。「一體私達の眞の生甲斐のあるといふ生活が、眞に生きてゐる心持が、直ちに他の人をも生かす力を持つてゐないであらうか。生の眞の自信は他の胸の中に同じ自信を植ゑつける力を持つてゐないであらうか。私達が有ゆる心の扉を開いて、其處から生命の力を流れ出さしめる時、その力の溢れ行く先に、生き生きした命の花が咲かない筈があるであらうか。眞に生きると云ふことは、眞に生命力の活動を意味してゐなければならない。その活動には總てを育み總てを養ひ、何物をも活かして行く力が籠つてゐる筈である。……自分の生きると共に他を生かす力のないものは眞の生命ではない。……この生命の流動は愛といふ語で現はしても一向差支が無いと思ふ』こ愛か、藝術か、然らざれば死あるのみだ。

　以上で私は能ふだけ忠實に孤雁氏の說を紹介したつもりである。彼の神秘主義は、グリアーソンを評論した『純一生活』なる文章から一新紀元を劃してゐるものと見て差支なからう。その後發表されたもので、彼の主張を窺ふに便利なものとしては、『再び純一生活に就て』、『死か愛か』、『生命の力』、『獨坐の姿』などがある。忌憚なく言へば、彼はまだ充分グリアーソンの壓力から逃れてゐない。新しい途に進んでから後の彼は、丁度雛鷄(ひなどり)が嘴を以て卵の外殼を破りながら、胚子生活を脫したばかりの所である。然かしその胚子には爭はれない天分があり、且つそれが孵化するまでには長い修養の年月を積んでゐる。我等は刮目して今後の彼の發達を眺めよう。

　彼の說話法は大部分描畫的(ピクチユレスク)で且つ多變多產である。幾多の疑問も其處では比喩と引例とで易々(やす〳〵)と跳び越さ

れてゐるかに見える。象徴の波がうねりを立てて、隆起した水面の中に理智が呑まれた形ともとれよう。然かし冷靜な思索家から言へば、條理を文章に重んずる者から言へば、彼の論據と説明とはパラドックスの好い實例かも知れない。要するに斯樣な主張に對しては各個人の趣好に由て、その全部を受取るか、然らざれば全部を排斥するかの二途があるばかりた。個人のムッドに就て下された是非の判斷は、多くの場合無意義てある。それは造られたものてなくして、賦へられたものてあるから。

新刊批評と紹介

△紅綠脚本集

佐藤紅綠著
菊屋書店發行

官憲の壓迫が甚だしい今日の我國で、實演を本位とする脚本作者には側から想像する事の出來ない困難と苦心とが附き纏つてゐる事であらう。本書には「日の出」外四篇の脚本が收めてある。作者が一種の社會劇の瀬踏をするつもりで書かれたものであらう。只餘りに西洋の社會劇を模倣したやうな、少くともそれからヒントを得たやうな嫌ひのあるものあるけれど、現在吾國社會の欠陷を穿つて其の病根を剔抉し來る所流石に作者が凡庸の手腕に非ざるを證して餘りがある。吾人は眞に吾國民性の上に根ざした偉大なる演劇が生るゝまでの道程として此種の脚本を歡迎し又作者の苦心を多とするものである。（定價金九拾錢）

△天保物語

森林太郎著
鳳鳴社發行

本書は鷗外氏が歷史小説中、特に天保時代に基くもの、「護持院原敵對」及「大鹽平八郎」を輯めたるものとす。氏の小説は既に定評あり。巧に歷史的事實を藉りて事件の發展の中に讀者をして宛ら書中の人たらしめ、其間に何等かの創意と寓意とを發見せしむる所氏の獨擅場と言ふべし。（定價九拾五錢）

△エニスの商人

早稻田大學出版部發行
坪内逍遙譯

吾國に於ける沙翁通の第一人者として其の研究造詣の深き、又其飜譯家としての手腕の傑出せる元より吾人の喋々を待たざる所。此書は特に博士が現代語に譯せられたるもので、それとても近頃の生硬な飜譯とは違ひ一字一句洗練し盡されたる譯語は無韻の旋律をなして讀者の耳に快きメロディの波を漂せる。卷頭の解題亦極めて親切であつて劇文學の研究者は勿論一般何人にも熟讀せらるべき良書である事は言ふまでもない。（定價金壹圓卅五錢）

新刊書百數十種の批評及び紹介は頁數超過の爲め之を次號に廻はすの止むなきに至りたり。右寄贈者及び讀者の御諒恕を乞ふ。

藤原喜代藏著（政治家の虎の卷、選擧民の政治教科書）

比較研究 歐米及日本の政治

菊判美裝全一冊　紙數五百頁　價金壹圓參拾錢　送料金拾二錢

此書は予の多年の研究結果に成り歐米諸國の立憲制度及政界の實際事情を闡明して相互に比較し更に之を日本の政治制度及實情に對照し隨所に批評を加へ結論を與へ毎章毎節に上述する所を概括しつゝ事實と意見とを交互に述べ世界立憲政治各樣式の是非得失を論評したる者也（著者）

第一章　立憲政治とは何ぞ
第二章　英米獨佛憲法の制定由來精神及特色＝歐米憲法と日本憲法との比較
第三章　英米獨佛元首と實際政治との關係＝歐米の元首と日本の天皇との比較
第四章　英米獨佛の內閣制度及政機運用の實際事情＝歐米の內閣との比較
第五章　英米獨佛の議會制度及實際事情＝歐米の議會と日本の議會との比較
第六章　英米獨佛の選擧事情＝歐米の選擧と日本の選擧との比較
第七章　英米獨佛の政黨事情＝少黨分立は世界の大勢＝各國の政黨と內閣との關係＝政黨政治の利弊＝歐米の政黨政治と日本の政黨政治との比較

東京京橋區銀座一丁目　**大日本圖書株式會社**　郵便振替口座東京二一九番

（中付二の一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

八月以降

號を重ぬる一萬四千(歷史は信用を證す)

最古の新聞

東京毎日新聞

齡を重ぬる四十五年(經驗は正確を語る)

面目一新

●論壇の權威の如何に揚がれるかを見よ
●主筆の囑に應ぜる者に一大經世家あり
●現代操觚界の巨擘唯一無二の寶石なり
●寶石其名は何ぞ發表蓋し近きにあらん

●水蔭江見君に天啓の小說あり『活路』と云ふ
●構想の奇警寔に是れ天の大默示錄なり
●桂舟武內畫伯の麗筆之を彩る錦上の花
●伯知松林氏が講談『德川家光』今正に佳境

最新の記事

▲本紙定價▲
一ケ月廿三錢(新家庭共)郵税一ケ月十五錢三ケ月前金に限り郵税共金一圓(郵券代用一割增)

東京麹町區有樂町
東京毎日新聞社
電話 本局 一七九〇番 五〇六八番 二〇八七番 二〇八六番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

在大學院文學士
中村孝也先生
新著

英俊傳第一卷

源九郎義經

菊版五百頁洋装美本
定價金壹圓五拾錢
送料地方十二錢市内四錢

見！天才の靈筆

文科大學近年の秀才にして第二の樗牛を以て人の許す著者が、優麗溢るゝ才筆によりて、茲に『源九郎義經』の一篇はなりぬ。美しき傳説に包まれたる御曹子の少年時代、波瀾重疊せる時代の大勢、旭將軍義仲の興亡、進んでは判官義經の花やかなる雄飛を語り、轉じて哀情慘たる流離を叙す。或は豪宕、波浪天を浸し、或は嫻雅、流泉巖に咽ぶ。說明あり、思念あり、或は詳密、よく隱微を開き、或は深邃よく暗昧を燭らす。殊にその雄健にして壯麗なる史論は、典雅にして幽婉なる感想と相映發して時に朗々として誦すべきものあり。蓋、著者獨得の壇場なるによるか。英俊傳の第一としてこの快著を出すは本會の光榮とする所、乃ち敢て天下の諸君に薦む……

演說の新態樣と官私各大學生の活氣横溢せる言論と雄辯の結晶

青年雄辯集

四版出來

三六版五百十頁
定價九拾錢
郵税六錢

本郷駒込坂下四八 大日本雄辯會 發行
振替三九三〇 電話下 四〇五四 六四九九

(中付二の四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品廣告の掲載は謝絕す



紫のダリヤ

小川未明

一

熟んだ太陽は、巴旦杏のやうな色をしてゐた。其の黄色い夢のやうな光りが、兩側の町屋の上に這ひ纏はつてゐる。蒸し暑い、物の腐れるやうな日の風の死んだ午後である。

正助は埃を吸ひながら、其の町を歩いて來た。咽喉は干からびて、眼球が落ち窪んで、襟許から油のやうな汗の滲み出る、言ふべからざる不快な心持と自からの零落を憫れむ哀愁の情と縺れ合つて、聲を立て、此儘地にしがみ附いて泣きたくなつた。

彼は病院を出てから、道を何う歩いて來たか思ひ出せなかつた。たへず頭の中には形の定らない妄想や、不安の濁つた霧が渦を卷いてゐる、しかも眼に見る物の姿までが、其の暗い色で塗り隱くされてしまつたからである。けれど、もう彼の歸る家は此町からは遠くなかつた。

ちやうど、この町の縁日と見えて、其の時分から小間物店や、金魚を賣る露店などが路の傍に出てゐた。植木屋は何處からかいろ〳〵の草花や、盆栽を車に積んで來て、横路に引き入れて置いた。白い花、赤い花、黄色の花が細かい葉や、糸のやうな小枝の繁つた間に咲き亂れて、車の上を見るとさながら自然の野趣其儘てあるやうな氣持がした。

其等の中から、背の高い數種のダリヤが拔き上つてゐた。大輪の紫色の花は夏の落日に照らされて、重々しく首垂れて、穩かに呼吸をしてゐる如く思はれた。

正助は其處を通る時に、これを見て歩るいて來たが、一目見た紫色のダリヤの花がいつまでも眼に映つてゐて取れなかつた。彼はあまり其の花の色を好きとは思はないのである。何方かといへば紫が強すぎて、寧ろしつこくて毒々しかつた。けれど、何となく六月の淡々しい白い柔らかな息の立ち籠めたやうな中に秘密があり、風の吹くにつけて、折々草木が戰されるやうに身に輕く脈打つてゐる不安が感ぜられるかと思へば、其れて活々としてゐて、刻々に萬物の生長する力が目に見えるやうな、しかも一種病的な暗い氣持のする、この季節の自然から眞に産れたやうな花である。

さう思ふせいか、この花が忘れられなかつた。思ふ存分に水分を澤山に含んでゐるやうな太い莖と、黒ずんでゐる大きい厚味のある葉を持つた。濃紫のダリヤに六月の魂ひが宿つて吐息してゐるやうに思はれた。而して、ある妖艶な婦人が黒い面紗をして立つてゐる姿のやうに、すらりとして麗はしかつた。

曛日は庭の喬木の葉にも、草の上にも輝やかしい餘彩を投げた。夏の夕暮方をしみ〳〵と思はせる澄

み切つた、紅い西の空の景は、たま〳〵家根を越えて見えた。而して、彼方の森では蜩が鳴いてゐる。正助は家に歸ると着物を被換へてから緣端に坐つて、つくねんとして暗く考へ込んでゐた。日數を經るにつれて、だん〳〵體が衰へて惡い方になつて行く女のことや、先刻見舞ひに行つて見て來た病院のことや、それから自分自身のことなどを思つてゐたのであつた。何もかも其等のものは灰色の霧の裡に埋もれてゐる。其れをいつまでも忍耐強く見詰めてゐるといふ樣子であつた。――この時、紅い空に響き返へるやうな蜩の鳴音を聞くと、すべての思ひから脫け出て、子供の時分の心持が蘇返つて來た。眼を擧げて遠くを見ると、あの空の下には、今も子供の時分に遊んだ、桑圃や、森があることが分つた。いつしか故鄕の全景がありありと紅い空を背景にして描き出された。――しかしこれは瞬間に過ぎなかつた。

彼の子供の時分の幸福の日が、二たび返へらざる怨みがあるやうに、蜃氣樓の如く、鮮かに見えた故鄕の景色は、煙の消え去るやうに眼の中からうすれて、旣に庭は一面に黑く蔭つて來た。

同時に現實の苦惱はます〳〵重苦しく正助の心を捕へた。

二

彼は此日の二時少し過ぎ頃であつた。K慈惠病院前の小さな菓子屋に入つて、珈琲の入らない角砂糖を一斤買つた。其店は貧弱であつた。幾日も經つたやうなパンが曇つた硝子蓋の箱に入つてゐた。この病院へ見舞ひに來る人が、晝飯の代りに買ふ位のものであつたからだ。前齒の外部へ突き出た、四十餘りの女が、

「珈琲の入らないのですね」と注意した。

正助は額際から滴れる汗を拭いてゐたが、

「さうだ。病人にやるのだから、珈琲の入つてゐないのだ」としつこく念を押した。而して女が箱の中から掴み出す間も、間違ひはせぬかと不安な面持をして、これを見守つてゐたのである。

彼は病院の儼めしい門を入ると、見舞ひに行く者が出入りする口の方へと向つた。雨上り後の炎天で砂地の上が蒸れてゐた。この熱氣を煽り立てゐる處を重い歩調で五六歩ばかり來かゝると、不意に立止つて、今買つて來た角砂糖の袋を開けて、中から一つ取り出して、直樣歯で其れを割て見た。彼はやつと安心したらしく、またもとのやうに袋を風呂敷に包んだ。而して、早く妻を見るために大股に歩き出した。

彼はいつも其處で帽子を脱り、手に持てゐる物を置いてから行く控室に入つた。其處には長方形の腰掛けが窓の下に設けてあつて、圓形のテーブルの上に灰皿が載せてある他何の裝飾もなかつた。帽子掛けの釘は三つあつた。彼は其の一つに自分の汗で周圍の濕れた鳥打帽子を脱いでからかけた。而して、がつかりとした氣持てベンチに腰を下した。

しばらく暑い中を歩いて來た疲れを休めるために、ハンケチで汗を拭いた。つひ扇子を持て來るのを忘れたので、其の小さな布を顏の前で目まぐるしく手早に搖つて、風を送らうとして見たけれど何の役にも立たなかつた。

今日は、妻の様子がどんなであらうと思つた。一昨日來た時とやはり同じであらうか。たとへ其れよ

り惡くなつてゐることがあつても、萬に一つも好い方に向ひはしなからうといふやうな氣がした。正助はかう思つた直ぐ其の後から、なぜ自分はこんなことを思つたのだらう？ 全く縁起でもない。と其の豫感を心で打ち消しにかゝつた。

「何方(どちら)にしても、直に分ることだ」と、彼はまた自分の迷信を嘲笑つた。

其の後は茫然として、廊下を隔て、彼方の窓の硝子を透して、小舍の家根から突き立つてゐる煙突の赤錆びの出た胴の邊りを見詰てゐた。あまり距離が近過ぎて、其の頂きは見えなかつた。けれど煙の出る時には、鼠色の淡い影がちら／＼と家根の上に落ちるのであつた。今日は煙が出てゐないと見えて、其の小走(こばし)るうす墨色の影が目に止らなかつた。

彼は、こんなことを考へてゐた。

「今度來て下さる時に、また角砂糖を持て來て下さいな。澤山はいりませんから、どうしても牛乳ばかりでは飲み難いのですもの、濟みませんけれど」と妻が青腫(あをぶく)れのした顔を向けて言つたのであつた。

「あゝ持つて來てやる。それに水飴も……」と彼が答へた。

「水飴は隱して持て來て下さいよ。茶と角砂糖の他は差入れることが出來ない規則なんですから。けれどあまり體が衰へるやうですから」と妻が歸りかけた正助に言つたのであつた。彼は其時のことを思ひ出した。而して高くなつた懷の上を手て叩いて見た。肌に付けて水飴の罎が隱されてゐる。着物の前の寛いだ間から其れが見えないやうに、きちんと襟を合せて正助は起ち上つた。

其の控室を出て受付所に來て、妻にまで屆ける角砂糖の袋を渡してから、自分は札を受け取つて草履

を穿きかへ、上被を着るために白い上被の下つてゐる室に來た。傳染病患者に面會するには、これを着てから行かなければならぬ規定である。上被は傳染病の種類によつて別けてあつた。ヂフテリー、窒扶斯、猩紅熱、虎列剌、といふやうに病名を書いた木札が壁にかゝつてゐた。後から從いて來た看護婦が「何病患者のお方にご面會ですか」と聞いた。そこに居る看護婦は行く度毎に變つてゐるので、いつも始めてのやうに問はれたのである。

「窒扶斯です」と正助は簡短に答へた。

看護婦は直に窒扶斯の札のかゝつてゐる下の上被を取つて被せてくれた。けれど中には背の馬鹿に低い女があつて、容易に釘からはずせ得ないやうなのがある。其時は、正助は自分で取つて被たこともあつた。頭髮の縮れた、赤ら顔の女は正助が上被の紐釦をかけてゐる間に敏捷に手頸の紐を結んでくれた。

彼は穿き難い草履を爪先にかけて、長い廊下を歩いて行つた。上被を着たゝめに急に體から汗の浸み出るのを覺えた。何の病室も開け放たれてゐた。寢臺の上に横はつて、殆んど枕を並べて一室毎に幾人となく患者が青い顔をして呻いてゐた。何れも幾日かの苦しい疲勞のために肉が落ちて、頬骨が際立つて突立て見えた。眼は暗く骨の中に落込んで、顔の半分は蔭つてゐた。病室の大さは其れ〳〵に異つてゐた。從つて室によつて收容せられてゐる人數に多いと少ないとがある。廊下には各室毎に便器が置いてあつた。たへず消毒するらしく板の上が濕れてゐて、石炭酸の臭ひが鼻を突いて來た。彼は其の濕れた上を踏まなければならなかつた。白い衣物を着た怠屈さうな病人の氣味惡い眼付きは其處を通る外來

の人間を物珍らしさうに眺めた。これ一つだけても厭惡な感じがせられるのに、汚物罐が置いてあつたり、錆の出た便器の色や、窓際に置いてある赤い昇汞水の入つた器などが病的に神經を焦立たせずに置かなかつた。庭の方を見ると、其處に人間と無關心に立つてゐる木立の葉には、日の光りが流れて、飴色にてら〱と光つてゐた。

　正助は廊下を歩いてゐるうちに、ふと重く壓されるやうな厭な感じがした。其れはまたあのうす氣味の惡い室の前を通らなければならぬかと思つたからである。

　其の室といふのは、何か特別の患者を容れるためにあるものゝやうに、極めて陰氣に見える狹い室であつた。而して、其の室の内の光線は死んでゐるやうに三方は灰色の壁が重苦るしく前へと壓し合つてゐるやうに見えた。其處にはたゞ一人老人が、大きな寢臺の上に仰向けに臥てゐて、頭を廊下の方に向けてゐた。正助は始めて、妻を見舞ひに來た時から此の室の前を通りかゝつて、この老人を見たのである。其れはあまりに其の室が陰氣てある上に、また患者が目に見えて窶れてゐたからてあつたが、此の印象は惡夢のやうに、家へ歸つた後でも眼から取れなかつた。而して、病院へ來るたびに其の室の前を通る時には何うしても忘れることの出來ない、この氣味の惡い室を振り向かなければならぬやうになつた。何うかして、其の室を見ずに行き過ぎてしまふと思つても、急に其方を向くやうに惹き付ける怖しい力が何處かにあつた。

　やがて其の室の前にやつて來た。まだ其の室を見ぬ先きから正助の胸はわく〱とするので、自然と怖氣が付いて足が進まぬやうな氣がした。彼は前方を見詰めて、脇見をせずに急いで其の室の前を通り

越さうとした。けれどやはり駄目であつた。

『あの老人は何うしたらう』と自分の心の中で問ふた者があるやうに、つひ室の中を見たのであつた。

其處には冷たい死の影が宿つてゐる如く、寂然として陰氣であつた。而して灰色の壁が空間を塞ぐために、前へと壓し付けてゐるやうだ。老人は日にまし窶れて來た。益々病氣が重るばかりであるらしい全く髑髏のやうに顏は尖つて、二つの眼が大きな孔となつて落ち込んで、顎は憔けて、頰骨が土手のやうに突立つてゐた。老人は一昨日見た時から未だに身動きもしなかつたやうに、やはり頭を廊下の方に向けて、痩せた手を胸の上に組んで、仰向けになつて其儘の樣子で臥てゐた。しかし今日は餘程、苦しみが增して來たと見えて呻き聲が聞える。正助は其の呻き聲を聞くと體に刺されるやうな寒氣を催ふした。其れは、もう直に此の老人は死ぬのだといふ考へが頭に浮んだからであつた。

何か不思議な合圖のやうに、正助が其室の前を通る時に老人は胸に組んでゐた痩せた片手を力なげに上に擧げた。其れがちやうど白い骨が空間で躍るやうに見えた。正助は自分の神經にこの氣味の惡い何等かの合圖が通ずるやうな氣持がして、急いで走るやうに通り越したのであつた。

三

廊下を中途から左に曲つて、少し行つて突き當りの室が、正助の妻のゐる室であつた。其の室は大きかつた。其處には七八人の患者が收容せられてゐた。彼が其の方に進んで來た時に同じ室にゐる七ッ八ッの女の兒て、屢々行く處から彼の顏を覺えてゐるので、正助の姿を見ると廊下に出て遊んでゐたのが

彼の妻に其れと知らせる樣子らしく走つて室の中に驅け込んだ。其の兒は殆んど癒りかけてゐて近日退院するといふのであつた。其のことは、この前、何か話のついでに妻から聞いて知つてゐる。

彼は廣々とした、比較的風通しのいゝ室の前に立つた。室の中に臥てゐる人々は、皆な此方に視線を注つた。彼は直に室の片隅の寢臺に横はつて、やはり此方を見てゐる妻を見付けた。一種のうれしさと悲しさとが胸に混み上げて來た。彼は妻の寢臺の方に歩いて行つた。彼の來たのを見ると臥てゐた妻は少しばかり身を起して迎へるやうな樣子をした。

『何うだ』と正助は彼女の寢臺に近づいた時言つた。

彼方の窓際の處て、先刻見た女の兒は立つてやはり此方を見守つてゐた。其れにこの室にゐる人々の眼や、耳は、すべて此方を注意してゐると思ふと、自から打解けて話するとも出來なかつた。飽迄隔てを付けて置かなければ彼等が直に嘲るてあらうといふやうな懸念が正助の心にも、妻の心にもあつた。二人は正面だけても冷淡に見せなければならなかつた。其れてなくてさへ、この前正助が來た時に、妻から、

『あなたの檀那樣はよく見舞ひにゐらつしやいますね』と同じ室にゐる、あの女の人が言つたといふことを聞いたのてあつた。そんなことが互ひの心にあるので、一層表面だけても冷淡に見せるやうな考へになつた。

『やはり同じいことてす。心臟が惡くなるとかう腫れるもんださうてすね。先生はたゞ呢として少しても動いてはならんとおつしやいますので、今日から小便までかうしてゐてするのてす』と彼女が言つた。

青白く蠟のやうに血色のよくない顏が見えた。しかも水氣を含んで堅くなつて表皮が水銀色に光つてゐた。

『起きなくていゝ。それなら體を動かしてはいけない。さあ、靜かに臥てゐるがいゝ』と言つて正助は彼女を舊の樣子にさしてやつた。

『牛乳が飮めるか、角砂糖を持つて來たよ』と彼は言つて、妻の顏を覗き込むやうにした。

ちやうど其時、看護婦が正助の差し入れた角砂糖の袋を持つて入つて來て、彼女の枕許に置いて行つた。

『どうも有難うご座います』と彼女は小さな聲で言つた。

看護婦が彼方に行つた時分に、彼は懷から水飴の罎を取り出した。其れは新聞紙で包んであつた。

『あゝそれに水飴を持つて來たから』と言つて、彼は其れを彼女の枕許に置かうとした。すると、

『有難うご座います。もう何も食べたくありませんから、折角ですけれど持つて歸つて、あなたがお食り下さい』と彼女は細い聲で言つた。而して何と心で思つたか急に眠いつぱいに涙ぐんだ。

『だつて、何も食べんでは體が弱るぢやないか。折角持て來たんだから、此處に置いて行くから、少しでも食べたがいゝんだよ』と正助はたとへ言つても無効のことゝは知りながら、それでも諭すやうに言つたのである。

『はい』と彼女は言つたばかりであつた。

かうして暫時二人の話は杜絶れた。正助は二たび妻が舊の如き健康の體となつて家に歸るといふことと

は夢想することすら不可能のやうに絶望を感ずると共に心が暗くなつた。而して胸が苦しく寒がつて來た。どうかして氣をまぎらさうと思つて、始めて室の內を見廻はした。

何處かに務めてゐる會社員だとかいふ四十前後の男は、此前に來た時には、いろ〳〵傍の人々と話をしてゐて、なか〳〵元氣さうに見えたが、今日は餘程樣子が變つたと見えて、頭の上に氷嚢を當て、默り込んで枕に付いてゐた。其れと四五日前に入院した雜貨商の年若い女房は、始めて見た時にはこれが眞に病人であるかと疑はれた程、血色もよく顏付きも何處となく活々としてゐて、大きくぱつちりと見開いた、黑味勝の眼は魅するやうに强い印象をこの灰色の室の裡に與へてゐた。而して白い上掛の上に露はに出した二本の太い腕は、張り切つてゐるやうに好い色氣に肥えて脂切つてゐた。正助は其の眼の印象や、腕のくつきりと浮ぶ幻を心の鏡に映しながら、其の女の臥てゐる寢臺の方を振向いた。僅か二日ばかりの間に、昔の姿がなくなつた。其れを見ると、今更ながら病魔の力を怖しく思はずにはゐられなかつた。女の腕は瘦せて、顏の色が靑晒めて來て、天井を無心に見詰めてゐる眼には力がなく、落窪んでゐた。女は何か獨言をしてゐるやうに、口を微かに動かしてゐた。彼は何を言つてゐるのだらうかと思つて、しばらく其の女の方を見守つてゐたのである。すると女は、

「あゝつまらない」と人に聞えるほどの大きな聲で言つて、此方に寢返へりを打つたので、彼は急に眼を轉じてしまつた。

二たび其の眼は窓の方に向いたのである。女の兒は、もはや其處には立つてゐなかつた。この開け放たれた硝子戸のはまつてゐる窓から、病院の庭頭が見えた。日の當つてゐる木立の葉が輝いてゐる。而

して外側の往來と境をした高い板塀が見えた。窓の敷居の上には誰が持つて來たものか、小さな草花を植えた鉢が載つてゐた。けれど水をやる者もなかつたと見えて、既に葉が凋れてゐた。

此時、妻が物を言つたので、正助は急に其の方を見て、驚いたやうにすべての空想から心を引戻した。

『來ました女中といふのは、どんな女でご座いますか』と彼女が問ふたのである。

『どんな女つて、此間こゝへ寄來したぢやないか。お前は見たんだらう』

『白粉を塗つて、白足袋なんか穿いて來んぢやありませんか』と妻が言つた。

『働くことは働く女だよ』と正助は言つた。白粉を塗つたり、白足袋を穿いて來たことがさう妻の怪しむやうに、惡いこととは思はれなかつた。

『あの人は何んですかつて、此室の人が後でお聞きになつたから、今度留守に來ました女中ですと言つたら、大へんめかした女中さんだと其の人は言はれました』と言つて、彼女は強ひて淋しさうな笑を造つた。

『もうあの年にもなるのだから、少しはめかすだらう』と彼は苦々しく思ひながら言つたのである。

其れきり妻は其の女のことについて默つてしまつた。正助も別に、其他のことについても語ることがなかつたので、默つて其處に立つてゐた。

やがて廊下を軋る小さな車の音が聞えた。其の方を見ると小さな車の付いた箱を押しながら、二三人の看護婦が患者に藥罎を配つてゐた。十七八の色の白い看護婦が正助の妻の處にもやつて來て、藥罎を置いて、其れから檢温器を腋の下に狹まして行つた。

彼はこの美しい、まだ年若い看護婦を見ると命がけの危險な職に對して、このやうに忠實に働いてゐることを心の中で感激せずにはゐられなかつた。此時、彼方から別に二三人の看護婦を從へて、三十七八になる金縁の眼鏡をかけた醫者がやはり白い服を着て、手に聽診器を持ちながら患者を一人毎に診察して來るのであつた。

これを見ると正助は、醫者が妻を見終るまで待つてゐて、其の樣子を聞いてから歸らうかと思つたが此の病院の門の閉るのが四時であつて、もはや何となく外の木の葉にうす赤く、弱り行く日の光りが、其の刻限に近づいたのを感ずると、またこの次に醫者に遇つて聞かうと思ひ、彼女の方に向つて、また二三日中に訪ねて來るからと衰弱して瞼を閉じてゐる妻の耳許に顏を近付けて、柔しく言ふと後をも見ずに廊下を歩いて來た。

四

赤銅色に空を焦がした、午後の光りの中を黄色な埃の立つ路を歩いて來た。

彼は道を歩きながら、妻の言つたことなどを思ひ出した。而して、妻が留守になつてから來た、今の下女のことを念頭に置いて、この女に關したいろ〳〵のことを考へ出して、はじめてどんな女であらうかと吟味する心が起つた。

この下女の名は初と言つた。二十三四で、茶釜に眼鼻を付けたやうな大きな顏をして、横に肥え太つてゐる處から、ちやうど家鴨の歩く時の容子にそつくりであつた。

彼はいろ〳〵に考へてから、結局あゝいふ醜い姿をした女の方が、却つて美しい女よりは心の良い者が多いものであると思つた。

『成程、先日下女を病院へやつた時にはめかして出て行つた。けれど性質の惡い女ではないらしい』と正助は道を步きながら、漫然とこんなことを思つて、獨言をしたのである。

其の日下女は朝出たのが、正午少し過ぎになつてから歸つて來た。暑い日であつた。彼女が歸つて來た時には、顏の白粉は汗で大半は洗はれてゐた。間の迫つた二つの眼は血走つて鯰の眼の中のやうに赤かつた。女は外の暑い中を急いて來たらしかつた。

『おそくなりました』と下女は言つて、着物を被換へて、脫いだ他行きの衣物を窓にかけてから直に晝飯の仕度に取りかゝつた。

『病院にどれ程居たね』と正助は聞いた。

『三十分ばかりゐました』と下女は答へた。

それにしては、かうも時間を取るものかと思つたが、

『なか〳〵遠いからな、殊に女の足ではこれ位かゝるだらう』と彼は氣を換へて快活な調子で言つた。

『お晝が遲くなると濟みませんと思ひまして、これでも急いで來たんですが、まことに申譯けご座いません』と言ひつゝ、彼女は起つたり、坐つたりして、其處にあつた焜爐に炭を入れて火を起しかけた。

いよ〳〵飯を食つたのは一時を過ぎてゐた。

其夜、彼は机に向つて、ペンを持つて考へ込んでゐた。いろ〳〵の俗事に苦しめられて、早く書き上

げなければならぬものでありながら、日が多くかゝつた。其れに雜念から脱れて、描かうとする詩境に心を潜めるには一行を綴るにも相當の沈默と苦心とを缺くことが出來なかつた。しかも其の創作的の氣分は少しの音にも、外界の刺激にも、時としては無慘に打ち破られるものであつた。此時、彼は自身の子供の頃のことを材料として、ある不幸な下宿屋の跛の女主人のことを――子供の眼を通して見た――書かうと思つてゐた。

彼は今北國の鉛色に空の曇つた、寒い冬の日の午後の光景の空想の眼に描いた。而して古い淋しい町にある、其の暗い高窓の付いてゐる下宿屋を思ひ出した。烈しい外の吹雪は反古紙が貼られた窓に力强く吹き當てた。處々破れてゐる間からは、微かに、其の風に煽られて狂ひつゝ舞つてゐる雪の姿が見えた。而して悲しい、裂の入つた管笛を子供が吹き鳴らしてゐるやうな音が、其の窓の破れた處で起つた。三十を少し越した位の色の青い女がうす暗い居間で針仕事をしてゐた。彼女は起たうとしても跛であつた。其時、體を半分起して疊の上を泳ぐやうに、何か探すために邊りを搔き廻つた。……彼は其の時の光景を遠い記憶を辿つて、ありありと再現しやうとしてゐた。

しかるに、この瞑想は直ぐ次の間から聞えて來た異樣な呻り聲で破られてしまつた。

『オイ初、お前か其處で呻つてゐるのは』と彼は振返つて、下女を呼んだのであつた。

其の呻り聲の聞えたのは玄關の三疊の間である。夜になると下女は其の室で蚊帳を吊つて寢ることになつてゐた。其の間には三尺の押入れがあつて、彼女の着類を入れた行李や、夜具などが收められてあつた。南の方に低い窓が附いてゐる、晝も夜も其の窓から涼しい風が吹き込んだ。窓の外には隣家と地

境をした枳殼の垣根が靑々として繁つてゐた。

　下女は其れには答へなかつた。やはり低い聲で呻りつゞけてゐた。正助は机の前から立ち上つて、其の室に行つて見た。女は疊の上に打伏すやうに體を曲げて、兩手で頬を掩へてゐた。

「何うしたんだ」と彼は其の傍に立ちながら女を見下した。

「蟲齒が痛み出しましたので」と、やはり其の儘の樣子をしてゐて答へた。

「前にも、こんなことがあつたのか」と、何となく說明のし難い不快を感じたので。正助は冷淡に言つた。この時、彼は心の中で、これからもたび／＼こんなことがあるだらう。其のたびに自分までが煩らはされるだらうと思つたことゝ、何か他の目的があるために、女が嘘を言つてゐるのでないかといふやうな氣がしたのは事實である。

「前にも、よくかういふことがありました」と女は答へた。

「其の時は何うしたんだ」と彼は問うた。

「醫者へ行つて、藥を差してもらひますと直に痛みが取れました」

「この近所に齒醫者があるか知らん」

「あの、下の街の方へ少し行くとありました。いつか其處で藥を差してもらひました」と女はやはり片手で頬を掩へながら、片手で醫者のある方角を指すやうな手付きをした。

「そんなら、あまり遲くならないうちに、醫者へ行つて來るがいゝ」と正助は命ずるやうに言ひ殘して自分の室に入つて、二たび机の」前に來て坐つた。

けれど一たび傷付けられた感興はもとのやうな姿で蘇生つて來なかつた。しばらく落付くことの出來ない心を抱いて、眼を暗い庭の方に向けてゐた。

『行つてまゐります』と下女は次の間で言つて、やがて家を出て行く氣はひがした。其の後は急に家の裡が寂然としてしまつた。

正助は何の氣なしに、緣側の處まで出て、外を眺めた。刻々に更けて行く暗碧の空には、地球の上に棲息する生物から全く忘れられてゐるやうに、弱々しく星が光つてゐた。何となく自分の體の如く、其等の星にも疲勞が絡らんでゐる如く思はれた。

其夜、下女は遲くなつてから歸つて來た。正助は彼女の歸つたのを知らなかつた。戶を閉めて、外から入れるやうに戶口の鍵をかけずに彼女の歸らぬ前に眠たのである。枕に頭を付けると魔醉藥にかけられたやうに直に前後不覺の深い眠りに陷つた。其れはこの頃の氣候のせいもあつた。眠むると惡酒を飮んだ時のやうに四肢が痺れた。而して不快な夢をしつきりなしに見つゞけた。彼は自から精神が疲勞してゐることを感じたのである。

五

彼は病院を出てから、妻のことを思ひ、また四日ばかり前に下女を病院へやつた、其の日の出來事などを思ひ出して、家に歸つて來たのであつた。

もはや、黑ずんだ木の間から僅かに消え殘つてゐる、入日の赤い餘炎の見えたのも無くなつてしまつ

て、昨日と同じいやうに空の色が暗碧に變つて星の光りが見えて來た。

初は醜い顏に濃く白粉を塗つてゐた。彼は其れを見ると不快に思つたので、何とか言ひ聞かさなければならぬやうな氣がしたけれど口に出せなかつた。而して、たゞ呢と彼女の横顏を見て、しばらく此方の室に突立つてゐた。下女は電燈の點いた居間で、もう少し前に來た其日の夕刊を下をこゞんで見てゐたのである。

正助は先日から苦心して書いてゐた原稿を漸く昨日金に換へることが出來て、拂ひを濟ました殘りを本箱の誰れにも氣付かないやうな書物の間に入れて隱して置いた。

「あのダリヤでも買つて來やう」と彼は獨り言をして、急に本箱の方に歩き寄つた。

彼は本箱の下の抽斗の中から、赤い紐の付いてゐるニッケルの鍵を取り出した。而して殆んど無意識であつたが、細心の注意は下女の方に瞳みを向けた。けれど彼女は此方のすることに氣付かない樣子であつた。彼は早速本箱の戸棚の錠を落した。而して戸を開けて中から重さうな原書を四五冊取り出した。すると其の跡が切り拔かれたやうに四角の穴が明いた。彼は其の穴の中に手を差し入れて奧の下の方を探ると小さな箱を取り出した。其れは名刺の入つてゐた紙箱であつた。彼れは其の箱を開けた。中には銀貨と紙幣が混ぜられて入つてゐた。其れを掌の上に打ち撒けて、音を立てないやうにしながら計算したのである。すべてゞ金額は拾圓に少し缺けてゐた。彼は八圓五十錢を其の箱の中に殘して、三四枚の銀貨と嵩ばつた銅錢だけを袂から出した皺だらけの紙に包んで、其れをまた袂に入れたが銅錢の重みでだらりと垂れるので、取り出して懷に入れて見たが、拔けて下に落ちるやうな氣がしたので、帶の間に

布の端に卷くやうにして挾んだ。而して、箱を舊の場所に隱して、足許にあつた取り出した書物を穴を塞ぐやうに差し入れたのであつた。これなら誰にも分る氣遣ひがないと心のうちで思つて、戸棚の錠をかけて、鍵を抽斗の中に收つた。瞬時其の前を立ち去り兼ねた、彼の常に惱みのある顏が、夕暮方の灰色の光線を反射してゐる硝子の上に映つた。

「散歩して來るから」と言ひ遺して、彼は書齋を出た。此時新聞紙をがさつかせてゐた下女は、耳さうな體を起しかけたのを横眼で見た。而して急いで下駄を穿いて、彼女が掛ける聲を聞くことを煩はしく思つて、杖を握ると後戸を荒く閉めて外に出てしまつた。

街の通りへ出ると、何處から人がこんなに集つて來るものかと疑はれる程に賑かであつた。無目的に無意味に、彼等は互ひに押し合ひながら同じ方向に歩いて行く者と、同じ方向に歩いて來る者とで機を織るやうに體を擠れ合ひあつてゐた。正助も後方から押されながら、この黑い人の流れの中に身を埋めて泳いでゐた。

兩側には、露店の上に明るく灯が照らしてゐた。あくどく赤い玩具があつた。其の獨樂の色は血のやうに眼にいつまでも殘つた。ふと青白い瓦斯の洩れる活動寫眞館の前に來ると其の夢のやうな光りを浴びて、入口には水色の衣物を被た女が立つてゐた。而して、中では頻りにヒルムが變つてゐることを思はせるやうに寂然としてゐて、たゞ機械の動く音だけが洩れて、小さな硝子窓に紫色の光りが映つてゐた。其の光りを見ると其處に音のする機械が据え付けてあることが分つた。

もう彼是れ九時を過ぎてゐた。此の時分になつてから、活動寫眞を見に入る者もなく、札賣る女も、

案内する女も、下足番も、客引く男等も暇てあつた。彼等は漸く身に疲勞を感じて、茫然としてやがて終りに近づいたのをそれとなく心に思つて、待つてゐる樣子てあつた。

この邊りから、植木屋が並んてゐた。カンテラの火は、植木の葉を異樣に彩つてゐた。根こぎになつて、力の弱つた草の葉はだらりと垂れて、其の葉の色が飴色がゝつてゐた。しかゝ水の雫が、木々の葉から、草々の葉から滴つて暗い地面に落ちてゐる。彼は火の點つたやうな、眞紅の瞳に染み入るやうな柘榴の花を見た。また銀のラッパを空に向けてゐるやうな百合の花を見た。

正助は、先刻見た紫のダリヤを探して歩いた。而して遂に其れを見付け出した。其時は夜のことて、晝間見た時には、濃紫に見えたものが、全く黑色に見えたのてある。

彼は其れを買つて家に歸るまてには途中幾たびと知れず、地の上に鉢植のダリヤを下して休んだ。暗碧に更けて行つた空に、天主敎の會堂が儼かに、默つて聳えてゐた。其の前を通る時にも休んだことを覺えてゐる。

微風が忍足をして、沈默の夜の領域を行くたびに、木の葉が闇の裡て動く氣はひがした。物悲しげな虫の聲が近くに聞えた。其れを聞くと正助はどういふものか祖母が死んだ、夏の晩のことを思ひ出すのてあつた。其の虫の聲は、また病院にゐる衰へた妻の顏を思ひ出す程に哀れを感じさせた。彼は庭に出て、買つて來たダリヤの鉢を地上に置いて、しばらく其處に立つて、何思ふともなく、耳を遠くに澄した。けれど町のどよめきの響きも此處まては聞えて來なかつた。

彼は緣側に腰を下して、闇に咲く黑い花影を見詰めてゐた。この時、また下女の泣聲を聞いたのてあ

つた。

彼女は例の三疊の南についてゐる窓際に腰をかけて、兩手て、いつものやうに頰を押へてゐた。其の室には電燈が引いてなかつた。座敷に點いてゐる燈火の餘りが此の室まて屆いて、うす暗の裡にすべての光景が墨繪のやうに浮き出て見えた。

『また、齒が痛むのか』と正助は言つた。

『甚く痛めて來ました。今日は正午時分から痛みはじめましたので、晩のご飯はやつと一ぜんしか頂けませんので……』と下女は答へた。けれど何處となしに、けろりとした物の言ひ振りは正助の同情を少しも惹かなかつた。却つて、彼は冷淡に、

『藥屋へ行つて、何か買つて來て付けて見たらどうだ』と言つた。而して、容易に醫者へ行けとは言はなかつた。

『精綺水なら持てゐます。けれど、付けても効果がありません』と言つて、帶の間から、小さな罎を取り出した。强さうな藥品の臭ひが暗い空氣を傳つて來て、正助の鼻に染みた。けれど其れは新しく今日買つた品てはなかつた。

女の背後には黑ずんてゐる垣根の葉が、影を星の光りの下に浮き出してゐた。何處ともなく、新樹の香氣は、青晒めて行く空に淡く湧き返つてゐた。すべて是等の外氣は夏の酣けて行くといふ感じを切ならしめた。

『夜出るといふことは、あまりよくない。痛むから仕方がないけれど、遲くならないうちに歸らなけれ

ばいけない。しかし、よくこんなに遲くなつてから行つて、醫者が見てくれるもんだね」と正助は闇の裡に眤としてゐる女の樣子を見詰めた。

『此家へ來ます前に町の菓子屋に奉公してゐました。其の菓子屋の者は皆な虫齒なもんですから、よく其の醫者にかゝり付けてゐます。其れてどんなに夜遲く行つても戶を叩いて起しさへすれば、藥を差してくださいます」と言つた。

「ぢや、醫者へ行つて來るがいゝ。けれど此の前のやうに、あんなに遲くならないやうにして歸つて來なければならん。己は直に休むから、戶締りをよくしてくれい」と正助は言つた。

やがて女は悄然とした樣子て出て行つた。彼は居間に蚊帳を吊つてから、窓や、緣側の戶を閉めて床に入つた。枕に頭を付けてからいろ〳〵のことを思つたりした。――病院にゐる妻はもう休んだらうか？　苦痛がうすらいて、この蒸し暑い晚に少しは眠むることが出來たてあらうか？　其れとも床の上て呻いて苦しんてゐるてあらうか？　雜貨商の女房は何うてあらう？――隣室の書齋にしてゐる六疊の座敷には、ちやうど机の上に吊された十燭が白熱に光り閃めいてゐた。青い蚊帳を透して、机の上に載せたまゝまだ書きかけもせずに置いてある原稿紙の白く光りを反射してゐるのを見た。其の中に視力が自然と疲れて來て眠りに陷入つてしまつた。途中てふと眼を醒した時には、家の裡が寂然としてゐて、たゞ茶簞笥の上にあつた時計の音が際立つて耳許に響いて來た。十二時を過ぎてゐたらしかつた。彼は時計を見やうともしずに、蚊帳の中て體を起して、玄關の三疊の方を透して見た。けれど下女はまだ歸つて來なかつた。頭の中て誑かされたことに對する憤りの感じがむら〳〵と起つたけれど、頭を枕に就

けると其儘、深い眠りの憂鬱な谷に惹き入れられてしまつた。

きれ〳〵に、いろ〳〵な夢を見てゐた最中であつた。不意に、彼は女の呼び聲で起された。

『旦那樣泥棒が入つたんぢやありませんか』女は、また同じいことを言つた。

彼は急に床から起き出たもので頭がぐら〳〵とした。而して眼はまた眠氣のために痛かつた。下女は書齋の緣側に立つて、開いてゐた障子に片手をかけて室の中を覗いてゐる。彼女は浴衣の寢衣に赤い細紐を詰めてゐた。正助は何となく迂散に思つて、女の顏を見た。お鉢に眼鼻を附けたやうな、大きな顏に二つの小粒な眼が引詰つて、鼻柱を狹んだのが、此方を見てゐるのであつた。

『何、泥棒が入つた』と正助は大きな聲で言つた。

彼は書齋に來て見ると本箱の戶棚が開いてゐた。而して原書が下に取り出されて、其の傍に名札箱の蓋が開けられたまゝ空になつて、疊の上に置いてあつた。其れは自分でなければ、誰もこんなに直には出來ぬやうに、明かに金の隱してある場處を知つてゐる者のした仕事であつた。其れでなければから偶然に、其の金の置いてある場處を探り當るといふことがないやうに思はれた。彼は忌々しさうにして名刺箱を取り上げた。

『何か他にも盜んで行かなかつたか知らん』と言つて、早速居間に來て、蚊帳の上になつてゐる電燈を點した。壁際に置かれてあつた、妻の簞笥は抽斗にも異狀がなくて無難であるらしかつた。

『何うして、お前には泥棒が入つたことが分つたんだ』と正助は聲を鋭くして、下女の顏を睨んで言つた。

『便所へ參らうとしますと玄關の戶が外してありますから、おかしいと思つて此處まで來ますと本箱の戶が明いて、本が出てゐましたから泥棒が入つたのだと思ひました』と落付いて下女が答へた。
『何時に歸つて來たのだ』
『十二時、少し過ぎてご座います』
『そんなに遲くなるまで醫者の處に居たのか』と正助は彼女の顏から眼を放さなかつた。
『家を出て行きます時に十一時になりかけてゐました。』と下女が言つた。彼女の鯰のやうな眼が益々厭味らしく見えた。
『嘘を言へ、なんてそんなになつてゐたものか？』と正助は打ち消しにかゝつた。
『私は出て行く時、時計を見て參りました』と下女は言つた。正助は實際彼女の出て行つた時に時計を見たのではなかつたから、彼女の言ふことを否定したものゝ、或はさうであつたかも知れぬと信ずる心も起つた。
『今、何時だらう』と言つて、正助は時計の置いてある處へ行つた。ちやうど二時にならうとしてゐた。
『お前は一時近くに寢て、何うして今頃眼が醒めたのだ。其れてなくとも此頃の眠ひのにおかしいぢやないか。』と彼は下女を顧みて詰つた。彼は心て全く此女を疑つてゐたから、こんな言葉を意識しながら使ふことに躊躇しなかつた。
『毎晩、今頃起きる癖が付いてゐます』と下女が辯解した。
『お前は昨夜も起きたか？』

「ハイ、起きました」
「一昨夜(をとゝひ)も起きたか？」
「一昨夜は、忘れましたが、起きなかつたやうでご座いました」
正助はたゞこんなことを無意味に聞いたに過ぎなかつた。彼女が嘘を言つてゐるか、事實を言つてゐるか、其れを糺すつもりで、さも自分が昨夜も、一昨夜のこともすべて記憶してゐる風に見せかけて、問うたに過ぎなかつた。其の實彼は夜になると死んだもののやうに眠入つてしまつて、たゞ不快な夢を見つゞけてゐるばかりで、其他の事は何も知らなかつたのであつた。
正助は机の上の灰皿の中に載つてゐたマッチを摺りながら、下女の寢てゐた三疊を拔けて玄關に出た。吊手のたるんだ、色の褪せた蚊帳は痩せ馬の汚れた腹掛けを見るやうであつた。何となく四邊りが蒸されるやうに生温かな晩であつた。玄關にまで來ると手のマッチは燃え盡してしまつた。表戸を見ると一枚外れてゐた。闇の底から、一皮剝げて仄暗い世界が覗はれるやうな氣がした。眼を凝らして其の方を透して見ると青黑い空の端が出てゐた。其の下に隣の家根が黑く見えた。尙ほ瞳を凝らしてゐると微かに星の光りが見えた。枳殼の延びた新芽が、其の青黑い空に伸び上つてゐるのが分つた。しかも外にも内にも少しの風がなかつた。この天地が魔睡にかゝつて、生溫るい虛空の間に死んだもののやうに轉がつてゐる如く思はれた。
正助はまたマッチを摺つた。火は狹い上り口の灰色の壁の面にたどり付いた。其處には古くなつた二枚の張板が重ねて立てかけてあつた。彼は周圍を見廻はした。格子戸は閉つてゐた。

『オイ、この格子戶は閉つてゐたのか、其れともお前が閉めたのか』と背後について來て立つてゐる下女に聞いた。

『知りません、さうなつてゐたんです』と彼女は言つた。

正助は板の間の上を見た。けれど土が付いてゐなかつた。彼はまた別にマッチを摺つて顏を板の上に近付けて仔細に見た。

『土が付いてゐないな』と女に問ふやうに言つた。

『さうて御座いますね、付いてゐませんやうですね』と彼女は眼を下に向けながら言つた。

彼は下駄を穿いて、格子戶を開けて外まで出て見た。夜は更けてゐた。自然は悉く眠つてゐた。黑い木立の姿が見えた。彼は足許を見廻はしてゐた。往來に向いて閉つてゐる筈の共同門が何うなつてゐるだらうかと思つた。彼は其の門の處まで行つて見て來やうかと思つたが、ふと胸に浮んだことがあつて其れを試して見やうと刹那に氣を變へた。

『何にこの犯人は直ぐ分る。きつと素人に相違ない。平常こんな事件を數限りなく取扱つてゐる刑事が來たなら、直に捕へてしまふだらう。オイお初！　あの門の處まで行つて見て來い。何か其の邊に落して行かなかつたか？　見て來い』と彼は家に入ると、下女を門の處まで見にやつた。こんなことを言つたからとて、たとへ彼女が盜んだにしろ、遽かに恐怖を感じて其の金を持つて來るものでないと思つた。

彼はしばらく、うす暗い玄關に立つて、何うしたらいゝかと思ひ惑つた。出て行つた女の下駄の音が彼方に遠ざかつて行つた。これに耳を澄してゐるばかりで頓に好い考へも浮んで來なかつた。何とか言

つて、鋭く女の肺腑を貫くやうな言葉がないものか、其れとも思ひ切つて女を强迫して自白させるやうなことは出來ないものかと思つた。しかし女が果して盗んだとも斷言し難かつた。もし男でもあつて外から來て女と二人してこの犯罪を遂げて、男が金を持つて行つてしまつたものならば何の役にも立たない。女が果して其れまで自白するか否かは疑問であつた。

やがて二たび女の歸つて來た足音が近づいた。女は正助の顔を見ると

『門は閉つてゐます。何も落ちてゐません』と言つた。

彼はもはやこの事件に關しては、自分の力では駄目であることを知つた。しかし兎も角も門の處まで行つて見やうと思つた。彼の家は門から最も隔つてゐて奥にあつたので、眠靜まつた他の家の前を通つて行かなければならなかつた。兩側に枳殻の繁つた垣根があつた。彼は空怖しい感じがした。賊が此の木陰に潜んで様子を見てゐやしないかと思つたからだ。また他の家の前にあつた溝板を踏むと夜中に時ならぬ音を立てたので、もしや人々が眼を醒まして自分を却つて賊と思ひはしなからうかなどゝいふ餘計の心配のために一層神經が焦々させられた。

門の處まで來ると門が閉つてゐた。しかも鉤までかゝつてゐた。彼はこれを見て賊が塀を乗り越して入つて、乗り越して出て行つたものか、さもなくば女が男を出してから、鉤をもとのやうにかけたかの二つであると思つた。彼は家へ入ると直に下女に訪ねた。

『お前は門の鉤に手を觸れなかつたか?』と言つた。

『いゝえ、少しも觸りません』と彼女は言つた。けれど其れは僞りであつた。先刻、女を門の處まで見

にやつた時に、正助は耳を凝らしてゐた。而して、彼女が鉤に觸れたらしい微かな鳴音を聞き取つたのであつた。彼は決してこれを空想に聞いたのだとは思はなかつた。

『嘘を言へ、先刻お前は鉤に觸つたぢやないか？　己がたしかに聞いたのだぞ。嘘を言ふと承知しないぞ』と正助は大きな聲で怒鳴つて嚇し付けた。女は急に下を向いた。

『なんて嘘などを言ふのだ。お前の身に暗い處がなければ嘘を言ふ必要がなからう』と正助は言つたものゝ、これだけで女を疑ふといふことが出來ないやうな氣持がした。

『御門の鉤を掛けるのを忘れたやうな氣もいたしましたので、叱られると思つて掛けてまゐりました』と彼女は小さな聲で言つた。彼はこれを善意にも、また惡意にも解することが出來なかつた。人間の心は複雜であつて、傍から見ると矛盾してゐるやうなことでも、其れが其人に取つては僞りない眞實を語つてゐるやうな場合も少なくなかつたからだ。

六

正助は衣物を着換へて、直に警察署まで屆けに行かうとした。交番へ行くよりは、本署の方が近く、道順がよかつたからだ。けれど一人でこの眞夜中出て行くのがうす氣味惡かつた。まだ盜賊がこの邊にうろついてゐるやうな氣がしたので、

『オイ、お前もいつしよに己と警察署にまで從いて來い』と彼女に向つて言つた。彼はかう言つて女の顏色が變るかと注意した。けれど下女は平氣であつた。

『この儘の樣子でよろしう御座いませうか』と其處に突立つてゐながら、彼女が聞いたのである。
『どうせ警察へ行けば、お前はしらべられるのだぞ』と正助は帽子を被りながら言つた。杖を握つて暗い外へ出ると、女は日和下駄を穿きにかゝつた。

正助は先になつて歩いた。門を開けて往來に出ると路傍の木は黑くなつて、頭の上から掩ひ被さるやうであつた。風すらなくて、生温るい物音一つしない晩であつた。彼は心のうちで後から來る女を憎んだ。——何となくこの犯罪は彼女のしたことゝしか思はれなかつた。——どんなことを女は心に思つてゐるだらう。己のすることを愚かしく思つてゐやすまいかなどゝ考へた。二人は一語も交はさずに歩いて來た。途中まで來ると、正助は不意に立止つた。

「オイ、お前は家へ歸つて居れ。また留守に泥棒が入つて物を持つて行くかも知れない。よく留守をして居れ」と言つて、惡々しく女の姿を見詰めた。けれど其の聲は形の分らない不安を感ずるために戰いてゐた。實際彼の眼にはまだ何者か隱れて内部の樣子を覗つてゐるやうな氣持がして、庭頭の黑ずんだ木立の繁みが浮んだのであつた。

此時、彼は偶然にも直ぐ近く、路傍にあつた黑いポストに眼が止つた。其の刹那、これが人間のやうに見えて胸が騷いだのである。後から自身てあまり意氣地がないと思つた。

女はかう正助に言はれると、來た道を戾つて行つた。其の步み付きから見ても、この暗い處を怖ろしいとも思つてゐないことが、振返つた正助には感ぜられたのであつた。

彼は圖太い女だと思ひながら反對に町の方へと急いだ。左手には廣場の中に大きな工場があつた。其

夜中のことで眠靜り返つてゐる。內部に點いてゐる幾つかの電燈が硝子窓を透して、外部に橫はつた無限の闇の裡に光りを射してゐた。而して、沼を覗くやうに深みのある夜の空が、此の長方形の建物を見下してゐた。

彼はこの建物の前を走つて過ぎた。坂の上に來た。其處を驅け下りれば、警察署の前に出るので、眼の下に町の燈火が集つて見えた。其の中に赤いのが混つてゐた。彼は其の火を見當に、其の坂を走つて下りた。

警察署の門口を入らうとすると、出て來た白い服の巡査に摺れ違つた。巡査はちよつと正助に眼を注いて行き過ぎてしまつた。

彼は是迄度々此處の前を通つたけれど、かうして其の內に入るのが初めてゞあつた。冷たい扉の金屬製の把手(ひきて)に手をかけて引くと扉は重々しく音を立て開いた。彼は身を內側に入れると机を並べて、事務を執つてゐた二人の警官は銳い眼付きで彼の樣子を睨んでゐた。彼は其の前に來て一應今夜の事件の顚末を語つた。

其の話しの中途であつた。一人の警官は、『其の賊を捕へたのですか』と口を入れた。

『賊は分りません』と正助は直に其の問ひに答へたが、彼等は自分の言つてゐることをよく聞いてゐなかつたことが分つた。其れて、自分はこんなに張り詰めた氣持てゐても、彼等は熱心になつてこれを聞いてくれぬことが分つた。

こんな事件は其筋の人々にとつては極めて平凡て、また有ふれた事件に相違なかつた。而して犯罪に

對して、既に一種の興味の眼をもつて見てゐる者には、單調な平凡な事件よりは異常な、複雜した事件の方が面白かつたに相違なかつた。彼はもし、自分が此處に來て、かうして彼等の前て、「人殺しがありました」と叫んだなら、

彼等は、きつと驚愕の眼を見張つて、「え、何ッ」と言つて、直樣起ち上るに異ひがない。而して、自分の一言に刺激されて、全く眠氣を醒すてあらうと思つた。

しばらくしてから、警官の一人が、正助を見て、「いつたい、盜まれた金は幾何てすか」と言つた。

「八圓五拾錢てす。箱の中に入れて置いた全部を持つて行きました」と彼は答へた。而して明かにさうとは言はなかつたけれど、其れが自分の現在の所有してゐた金の全部てあるために困却するといふ意味が、この答への中に含まれてゐた。

彼等の一人は、其れを手帖に書き留めた。

「直ぐご一所に行つて見ませう」と一人の警官が椅子から起ち上つた。其の警官の顏には睡眠不足のために疲勞した色が見えた。

「まことにすみません」と彼は挨拶をした。

警官が先きに、正助が後から、二人は共に警察署の扉を開けて外に出た。刹那てあつたが、軒燈の火が、警官の白服を赤く染めた。二人は間もなく闇に身を包まれて、默り勝ちに坂を上つた。正助はかう

して警官と共に歩くといふことが心を壓へられるやうな苦しさを感じた。

二人は門を開けて入つた。其の時、警官は振向いて門を見た。而して默つて、先になつて歩いて行つた。二人は家に來た。正助は先になつて玄關から上ると、

『さあどうぞお上り下さい』と言つた。

警官は上り框に腰を下して、兩手で片方宛の靴を脱いだ。而して三疊を拔けて書齋に入つて來た。正助は座蒲團を出して、自分は机の前に坐つた。下女は居間の片隅に坐つてゐた。其處には正助の臥てゐた床が敷しいてあつて蚊帳が吊つてあつた。上に點いてゐる電燈の光りで蚊帳の内が透かして見ることが出來た。枕の布や、敷布の色が眞白であつた。彼は直に本箱の前へ行つて、警官に向つて、

『金を此處に入れて置きました』と言つて、先刻、警察署で言つたやうなことを繰り返して、昨夜から今朝にかけて、僅か二三時間の間に起つた出來事を説明した。警官は其の傍に來て、仔細に本箱や、疊の上に取り出してあつた書物と名刺箱の上に眼を晒らしてゐた。而して頸を傾げてゐた。

『全く外から來たものでせうか』と正助は思つたことを其儘口に出して、疑はしげに聞いたのである。

『よく檢べて見ませう。今の處外から來たものか、或はさうでないか、夜が明けてからもう一度來て、門の處や、戸口を檢分してゞなければ何ともいへません』と言つて、二たび舊の座に返つて、隱しから手帳と鉛筆とを取り出したのである。

正助は其の間もたへず下女の樣子を探ることに注意を怠らなかつた。彼女は繪のやうな眼付きをして平氣で此方の二人の樣子を見守つてゐた。彼は何となく女の小面が憎々しかつた。

「オイ、瓦斯で湯を沸して、お茶を入れて持つて來い」と正助は女の方を向いて、其處を追ひ立てるやうに言ひ付けた。

「いやおかまひなく」と警官が言つた。

「此家にゐる人は、誰と誰れですか」と直に警官は語を次いで短かい鉛筆を舌で舐つて、小さな黒い表紙の手帖を片手に取り上げて言つた。

「今、二人限りです。妻が病氣で入院してゐますので、下女と二人限りなんです」と正助は嚴肅に彼が誤解をしないやうに言つた。

「下女といふのは、あれですか」と警官は言つて、ぢろりと白眼で居間の方に視線を送つて、何やら手帖に書き留めた。

「さうです」と正助は穏かに答へて、自分も徐ろに顔を向けて、彼女の様子を見やうとした。彼女は宛かも此方の話に無關係であるものゝやうに、平氣で茶を入れてゐた。二人は彼女の後姿を見たのであつた。

しばらくすると二人の坐つてゐる處へ、下女が茶を入れて持て來た。警官は彼女が盆を下に置いて立去る時に其の様子を見たのである。正助はかうしてゐる間にもこの事件を離れて、他のことを考へた。たとへば夜もかうして勤務しなければならぬ是等の警官等はどんな生活をしてゐるだらう。果して、この辛い任務と勞力に酬ゆるに足る程の月給を取つてゐやうか、彼等が眠らずに警護する人々の中には不義の快樂に耽つて、この夜を送つてゐる者もある。眞正な勞力を要せずして、不正な手段と欺瞞によつ

て言を違り安らかに眠つてゐるものもある。其等の矛盾した、且つ不公平な此の社會に於ける惡むべき事實を考へて、この四六時中の勤務に疲れた警官の様子を見守つた時にいろ〳〵の疑問と生存に關する不安とが心の中に起らざるを得なかつた。警官の日に燒けた頰には幾日も剃刀を入れないと見えて小髭が延びてゐた。眼の白味には黄色な雲がかゝつてゐて、眼球は心持ち骨の中に落ち込んでゐた。而して、燈火に顔を向けるたびに視神經は衰弱して、眩しい刺激に堪へ得ざる如く懶げに瞬きをつゞけた。正助は最後に警官の胡座を組んだ足の靴下に眼を止めたが、其の汚れて眞の地肌の何色であるか分らないやうな靴下は兩方とも二三ヶ處に穴が明いてゐた。これを見て、彼は略ぼ其人の生活を察することが出來るやうな感じがした。而して、其の靴下に眼を止めてゐたが、あまり見るのは惡いといふやうな氣が差すと正助は横を向いてしまつた。

此時警官は手帖を隱しの中に收めて座を起ち上つた。

「これから下女を連れて行きますから……」と正助を見下して言つた。

正助は胸が穩かでなかつた。彼は下女がどんな態度をするだらうと其の際まで見屆けやうと注意を凝らしてゐた。

「お前は、ちよつと來い」と警官は座敷に立ちながら居間にゐる下女に向つて、顎で招く様子をした。

「私てすか」と女は鉛のやうな眼付きを凝らして此方を見詰めた。而して、肩にかけてゐた襷を脱して其れを疊の上に置くと立つて此方の室に入つて來た。警官は默つて玄關に出て框に腰を下して靴を穿いた。女も其處にあつた日和下駄を穿いて後から從いて出やうとした。正助は其處に立つて、二人を見送

つた。

「ちよつと行つて參ります」と言つて、女は正助を振返つて頭を下げた。靴の音と、日和下駄の音とが次第に遠ざかつて行つた。彼は茫然としてゐた。女の態度について、自分の經驗だけでは何とも批判することが出來なかつた。たゞどんな心持で彼女は自分に向つて、あゝ落付いた態度で言つたらうと思つた。

家の中にたゞ一人となつてから彼は急に淋しく感じた。二度と眠ることが出來なかつた。夏の夜は明け易かつた。程なくすると、ほの〳〵と戸の隙間が白んで來た。彼は緣側に出て雨戸を繰つた。まだ近所は靜かであつた。庭の木立には白い霧がかゝつてゐた。遠くで鷄の啼く聲などが聞えた。彼は獨り座敷の眞中に坐つて、まだうす暗い外の庭頭を見ながら、日の上るのを待つてゐた。次第に霧は梢を離れて動き始めた。其内に近所でも雨戸を繰り始める音が聞えた。彼は三疊に來て下女の蒲團と蚊帳とを隅の處に固めて、其の室の窓を開けた。東の空が色づいて、快活な紅の中に金色の光りが洩れてゐた。彼はまさに堂々として上らうとする日の光りを見るに居堪へなかつた。其れ程、眼が疲れて、頭の中がぼんやりとしてゐた。日頃の精神を過勞してゐる上に夜、滿足に眠らなかつたといふことが直ちに、殊に此頃の體には影響したのであつた。

正助は近所の小さな菓子屋からパンを買つて來て、瓦斯の火で湯を沸かして、其れて朝飯を濟ませやうとしてゐた。彼は青い火の燃えて居るのを見ながら、食卓の上に頰杖をついてパンを嚙つてゐた。今日も昨日にまして暑くなりさうな日であつた。何となく四邊の日の光りが赤味を帶んでゐた。

其時玄關に訪れた人の聲が聞えた。正助は直にパンを下に置いて出て見たのである。其れは四十餘りになつた、警察署の三字が襟に縫つてある紺色の上衣を着て、同じやうな色の股引を穿いた、警察署の小使であつた。正助を見ると頭を下げて、丁寧な物の言ひ方で、警察から承つて來たのだと前置きをして、

「先刻の女の人は、都合によつて長く留めて置くかも知れないから、其れで押入れの中に洗濯をした單衣と腰卷きが入つてゐるから、其れだけを渡してくれるやうにといひ付けられて來ました」と言つた。

彼はしばらくの間ためらつた。けれどさう言ひ付かつて來たものを出して渡してやらぬ譯にも行かぬと思つた。其處で彼は押入れを開けた。行李の上に、いろ〳〵の物が入つてゐるらしい風呂敷包みが乘つてゐた。この包みに目を止めて、

「この風呂敷包みの中か知らん」と大きな聲で誰れに向つて聞くとも付かず、また獨言するとも付かずに言つた。

「なんでも風呂敷包みの中に入つてゐるとかいひました」と小使は玄關に立つてゐて言つた。これに力を得て、正助は其の包みを取り出して、疊の上に下して、結びを解いて擴げて見たのである。洗濯した白つぽい單衣があつた。またいろ〳〵細かな物が重ねてある下に赤い色の腰卷きが見えた。其れを引き出す時に、彼は女から侮辱せられたやうな氣持がして、忌々しかつた。手荒く其れを引き出すと、白紙に包んだものが一處に出て來た。正助はもしや盜んだ金でも隱して置いたのでないかと、其の紙を開いて見ると黑硝子のはまつた、鍍金縁の眼鏡が出て來た。正助はこれを見ると、てつきり男の持つてゐた

物だと思つた。彼女が情夫からもらつた品て、紀念品として持つてゐるものだと思ふと、不思議に胸が躍つたのてあつた。彼は二品だけを小使に渡した。小使は歸つて行つた。其の後て、其處に出てゐる物を二たび風呂敷に包んて、舊の處に入れたのてある。

此時勝手許て湯の煮え沸つて、瓦斯の火に吹きかゝる音が聞えた。彼は其の方に走つて行つた。其れから三十分ばかり經つと、夜、自分と共に警察署から來て、下女を連れて行つた警官がやつて來た。正助は其夜來てくれたことに對して禮を言つた。

「何、あなたが騷いだ時分には、まだ賊は家のぐるりにゐたかも知れない」と警官は言つた。靴の踵に佩劍の尖きが觸れるたびに鳴つた。

「さうてすか知らん」と正助は答へた。

「家の中を探して見ましたか」と警官が聞いた。

「いゝえまだ探して見ません」と正助は言つた。警官は玄關の雨戸に觸れて見た。まだ昨夜からの儘になつて、一方の戸は外されて柱に立てかけてあつた。警官は其れを取つて、自分て敷居にはめて見た。極めて容易に其の戸は立て外しが出來るのてあつた。

「直ぐ外れるのてすな」と言つて、警官はついてに戸をば袋戸の内に繰り込んてくれた。それから格子を開けて、上り框に來て、板の上に足跡が付いてゐるかどうかと見詰めた。けれど土一つ付いてゐなかつた。警官は靴を脫いて家に上つた。正助は明るい光線の中て、二たび此人の顏と靴下とを見ることが出來た。けれど其の日に燒けた黑い顏は、積日の疲勞のために衰へてゐる色が見えるとはいへ、まだ現

實に打當つて直にひるむらしい處がなかつた。今にても賊が躍りかゝつて來たなら、これと組打する勇氣が潛んでゐた。これに較べると、自分は昨夜はこの人を憐れんだものにも似ず、今朝は全く氣力の萎れてしまつたことを怪しまずにはゐられなかつた。

警官は勝手許に來て緣板をめくつて見た。また、柱にかゝつてゐる屑籠を下して、其の中に手を差し入れて中を探つて見た。

「紙幣ばかりでしたか」と警官は言つて、固められた紙などを解してゐた。

「いゝえ五拾錢銀貨が三枚ありました」と正助は答へて、彼もまた臍棚の隅などを覗いて見た。

「よくかういふ處に盜んでから隱くして置くものです。本人についても檢べますが、あなたも家の周圍などを探して御覽なさい」と言つて、警官は此處を切り上げて、出て行かうとした。正助は其れを呼び止めるやうに聲をかけた。

「先刻、單衣と腰卷を小使をお寄來しになつたので持たしてやりました、其の時分、中から男の眼鏡が出ましたが、何んだかおかしいと思ひました」と彼は言つた。

「其の包みを見ませう」と警官は言つた。

彼は三疊の室に警官を連れて來て、押入の中から例の風呂敷包を出した。警官は身を屈めて其の包を開けると、中の物を掻き廻はして見てゐた。其の傍にゐた正助は、一つの紙包みを指して、

「これですが」と言つた。

警官は紙を開いて、眼鏡を撮み出した。而して其れを眺めてゐた。正助の眼には、緣日あたりの露店

に出てゐる、安すぽい品のやうに思はれた。
「男の持つてゐたものではありませんでせうか」と彼は言つた。
「彼奴こんなものを持つてゐるんですな、しかしこれは男の持つてゐたものではありますまい」と警官は尚ほ其れを見ながら言つた。
「しかし、黒い眼鏡など……」と正助は其の言が信じられなかつた。
「何、近頃の女は生意氣ですからな、眼鏡位かけませうよ」と言つて、警官は其れをもとの通りに紙に包んだ。
「別に、怪しむべきものもありませんな」と言つて、風呂敷を結んだ。正助には、この警官の言葉は多少意外な氣がしたが、自から專門家の見る所は異つてゐると思つた。かうして警官は歸つて行つた。
　正助は庭頭に出て、昨夜買つて來た、紫のダリヤを見た。いろ〳〵のことがこのあくどい色をした花に對して考へられた。この花を欲しいと思つたばかりに本箱の中から金を出して持つて出た。其れてなければ彼女に金の隱してある場所が分らう筈がなかつたのだと思つた。
　一目見た時には、いかにもこの紫の花が魅するやうに美しかつた。けれど買つて來てかうして見るとあくどい色で、だん〳〵厭になつて來た。彼はすべての女といふものがやはりさうであると、つく〳〵此頃は思つてゐる。哀れな女であるが、自分は妻のために苦勞をしてゐる。下女ですら、傍にゐると女の醜さといふものが見えて、しみ〴〵と心憎く思はれるのであつた。けれど、やはり女の手を借りなくては、何かにつけて困ることが多かつた。

正午少し前であつた。和服を着た肥つた刑事が、俎のやうな大きな下駄を穿いて扇子を使ひながら入つて來た。

刑事は本箱の前に來て、正助の説明を聞きながら、其處に立つて左右を見てゐたが、

「外から入つたのでせう」と言つて、やはり扇子を忙しげに動かしてゐた。

正助はどういふものか女が盜んだとしか他に考へられなかつたので、其の言葉が不滿でならなかつた單に不滿に思はれたばかりでなく、其れでは自分の疑ひが解けなかつた。さう思ふと自然と彼の言葉使ひまでが急しくなつた。

「どうして、直に金のある處が分つたものでせう?」と問ひ詰めるやうな言ひ振りで聞いた。

「書物を盜むつもりで入つたのが、意外に金があつたので其れを持つて行つたのでせう。大抵、八圓足らずもあれば其れだけで行くものです」と言つて、刑事は彼の言ふことを取り上げなかつた。

正助は心のうちでいろ〳〵の疑ひが起つた。たとへば。刑事が書物を盜むために外から入つたといふけれど、書物のやうな量になるもので、其の割合に金にならぬものを果して賊が目を付けるであらうか。また、もし賊が品物に目を付けて入つたとしたならば、机の上に萬年筆が載つてゐた。其の萬年筆は自分の生活には不釣合な程贅澤な品で金の餘りが付いてゐる。しかも電燈の點いてゐる下に置いてあつて燦爛として光つてゐた。賊はなぜこの輕い貴重品に眼を付けなかつたらう。其様な疑問がむら〳〵と胸の裡にこみ上げて來たが、畢竟このことを言つて見たところが、刑事があゝいふ上は役に立たないと思ひ返して默つてしまつた。

其れから刑事は家の周圍を歩き廻つた。庭頭に來た時、新しい足跡を見出して、「この足跡は?」と正助を振向いた。けれど、其れは昨夜、自分がダリヤの重い鉢を下に置く時に足に力を入れて、地面を踏み躙つたものであると知れた。

庭の木戸口から出て、二人は三疊の窓の下に來た時に、刑事は急に歩みを止めて、幾つとなく破れた障子の穴に眼を注いだのである。大きな眼球は、異様に光つて、鋭く見えた。

「この穴は何時明けました。」と刑事は疊んだ扇子て、其の中から指頭で明けたらしい一つの穴を指して言つた。けれど、正助には覺えがなかつた。彼も其の穴に眼を注いて、

「下女が明けましたか知れませんが、私には覺えがありません」と答へた。

「いや、これは外から明けた穴です。昨日か一昨日のもので、極く新らしいものです」と言つて、刑事はまた扇子を擴げて、大きな懐に風を入れてゐた。

見終つてから刑事は歸つてしまつた。烈しい暑さてあつた。午後の一時頃には、庭頭の地面は白く乾いて、黒い鉢に植はつたダリヤの花も、葉も、水氣が枯れてだらりと頭を下げてゐたのてある。

彼はこの炎天の中を歩いて、妻の晴着を抱へて兼て顔を知り合つた、町のある質屋まて行かなければならなかつた。其れは妻の見舞ひに病院へ行くのにも、また其の日の自分の生活にも、直ぐに金が無くて困つたからてある。彼はこの暑さのために、また精神の疲れてゐるために、急に筆を取つて、何も書くことが出來なかつた。

風もない、蒸される暑い日てあつたけれど、其れても質屋の紺の暖簾をくゞつて中に入ると身が冷や

りとした。無意識に羞恥心が萌したのと、日當りから、急に庇深く入つたせいもあつた。

正助の眼は速かに帳場に扣へてゐた冷淡な青白い顔をした男に止つた。其處には質の流れが積んであつた。細引きが幾筋となく天井から下つてゐた。男は正助の樣子を一眼で讀んだやうな素振りをした。而して溫か味も、潤ひ氣もない世辭を言つて、後は口許で私かにせゝら笑ひをした。彼はこの男を見て癪でならなかつた。けれど、物靜かに、持つて來た品物を手渡した。

其の品は一度此店に來たことのある品であつた。彼女には、數もない上に且つ愛惜してゐる品であつたゝめに、二三月前のこと金の入つた時分に受戻したものであつた。今度も妻に斷りもなくこの品を持つて來たものは、他に目ぼしい物もないのと一つは金額の分つてゐる爲めであつた。

男は、風呂敷から、着物を出して、一應其れを眺めてゐたが、

「十一圓でおよろしければ」と言つた。

「だつて此の前には十三圓貸したぢやないか」と正助はあまり足許を見た言ひ方なのに激昂して言つた

「それよりは何うも出せません。其れでおよろしければ」と言つて、男は例のせゝら笑ひをした。

「あれから一度も着た譯ではなし、どうしてさう前と價段が異ふのだ」と正助は息卷いて言つた。急に熱くなつて、額際からは汗の滴るのを覺えた。

「其れでおよろしければ」と言つて、男は他のことは言はずに口許でやはりせゝら笑つてゐた。足許を見て言ふことだとは知れるのだが、仕方がなく正助は其れで承知をしなければならなかつた。

彼は金を掴んで外に出ると一層胸の中で憤りが募つた。おゝ雇主と雇はる人との關係でなくてさへ是

れてある。眞に憎むべき者、呪ふべきものは金を持つてゐる奴等だ。質屋などは考へて見れば高利貸し以上の非道を敢てするものだ。彼等は物品の保證を――しかも踏み倒されるだけ踏み倒した價て見積つて――取つて置いて、其の上利子を貪る輩てある。正助は道を歩きながら、つく〴〵と高利貸の老婆を殺したラスコリニコフの心持に同感したのてある。「世の中にこれあるがために人々が苦しむのだ」といつた人殺しをした時の言ひ分を至極道理てあると考へた。

彼は奇怪な幻想に囚へられて、知らず知らずに道を歩いて、いつしか出る坂の中途まて上つて來ると偶然口入宿の主人に出遇つた。其の男の樣子を見ると、彼等の苦しさうな生活が察せられた。年は五十を越えてゐるらしく、額際には皺が寄つて、汚れた頭髮にも、頸から口許にかけて生へた短かい髭にも白い毛が澤山に混つてゐた。日に燒けた胸からは汗が光りつゝ流れてゐて、瘦せてゐるので肋骨が數へられるやうに皮の下に浮き出てゐた。

正助は男を呼び止めると、昨夜の出來事などを話してから、

『まだ誰が盗んだか分らないことだ。けれど夜出ると遲くまて歸らないのは事實だ。兎に角、あの女を出すから、他の女を世話してもらひたい』と言つた。

男は片手て扇子を翳して、頭上から射し付ける日の光りを遮つて、しよぼ〳〵した眼を眩ぶしさうに細めながら話を聞いてゐた。正助が言ひ終ると、

『それはお氣の毒のことてご座います。よくさういふのがありますので、私供ても顏だけ見たのては、正直さうな女だと思つたのを上げるより仕方がありませんので、承知いたしました。かはりを探して見

ませう」と言つた。男の着てゐる木綿縞の單衣は水で濕れたやうに汗が黒く染み出てゐる、正助は男の痛々しさうに浮き出た肋骨や、水落の處で忙しさうに鼓動をつゞけてゐる、其れに目を止めてゐた。而して、いつかは此の男のこの鼓動も止る日があるのだといふやうなことを空想してゐた。

彼はこの男の身にも同情せざるを得なかつた。

「この暑さでは、あなた方の商賈も骨折りですね」と言つて、正助は强ひて笑顏をして見せた。

「かなひませんですよ。かうして歩きましても、無駄骨になることが多いのですから……」と男は答へた。其れは雇主と雇はれ人の間で妥協が直ぐには成立たぬことを言つたらしい。而して折角口のかゝつた其の女も二度目には同じ宿に來ずに他へ行くものが多いといふことも正助は聞いて知つてゐた。

「さうでせうね」と彼は心から、此男の言ふことに同情した。

「至急探しますから」と言つて、男は挨拶をして行き過ぎにかゝつた。正助は懷を探つたが、急いで男に追い付いて、五十錢の銀貨を男の手に握らした。男は其れを返へさうとするのを無理に取らして置いて、

「何分にも頼みます」と言ひ殘して、彼は二たび急ぎ足に坂を上つた。彼は歩きながら、其の男の答たを思ひ浮べた。少しばかりの心付けのために、男が正直な下女を探して連れて來るなどゝは考へてなたた。彼は痩せた男の肋骨の浮き出てゐるあたりを見て、急に、たゞ何となしに憐憫の情が起つて、に置金をやる氣になつたのであつた。

彼は家に歸ると汗と埃に汚れた衣物を洗濯したものに着換へた。其れから庭に出て、暑さめのか凋男

れたダリヤの根に水をかけてやつた。漸く地上に木の影が出來て、日が傾いたのである。この時分になつて、其日の明方に警官に連れられて行つた下女の初がぶらりとして歸つて來た。

「只今、歸りました」と彼女は正助の居る處に來て頭を下げた。彼はぢろりと女の樣子を見たぎりで何も言はなかつた。夕飯を食べる時分に、彼女に向つて晝飯は何うしたかと聞いた。彼女は警察署てくれたのを食べたと平氣て答へた。彼は其の日の中に此女に暇をやつてしまふかと思つたけれど、もはや日の暮れ方にもなつてゐたので、明日の朝にしやうと考へ直した。

其の一夜、彼女と同じい家に寢なければならぬといふことが、何となく氣がゝりてならなかつた。更に彼女が警察署から免されて歸つて來たといふことが、畢竟此の社會生活に於て何者も賴むに足らぬといふやうな氣がして、不快てならなかつた。明る朝、飯を食べてしまつてから、正助は都合があつて、暇をやるからと下女に言ひ渡した。彼女はこのことを豫期してゐたものゝやうに見受けられた。

彼は其の月の給金を紙に載せて下女の前に出した。すると彼女は其れを押し戻すやうにして、

「金を盗まれなさつてご不自由のところ、これは要りません」と言つた。正助には、女の言ふことが何となく不自然に聞えたけれど、やはり眞に同情して言つたものだか、他人の心理といふものが探り難かつた。

「金を盗まれたことゝ、これとは別なものだ。やるべきものをやるのだから」と正助は言つた。

「ぢや頂いて行きます」と言つて、女は金を頂いて懷の中に收めた。而して永遠に此家から、何處へとなく去つてしまつた。斯くして其の女は去つてしまつたけれど、其後でも彼はあの繪のやうな眼付きを

思ひ出すと、言ふべからざる厭惡の感じに心を壓なされた。

七

明る日のやはり正午過ぎに、彼は殆んどこの一月ばかりの間といふものは、隔日のやうに往來した、病院へ行く道の上を歩いてゐた。この道は町の端れとなつてゐるので、其の兩側には汚たならしい古道具屋が二三軒もあり、また青物屋や、漬物屋なども處々に狹い小さな長屋の建ち並んだ中に混つてゐた。彼は下を向いて、たへず何等か頭の中で考へながら其の路の上を汗と埃に塗れて歩いた。しかし彼は何時からともなく、其の古道具屋の店にはどんな物が置いてあるかといふことも、また青物屋の店にはどんな物が並べられてあるかといふことも覺えて知つてゐた。たとへば一軒の古道具屋の店の臺の上には一枚の黃色味を帶んだ金屬製の四角な皿があつた。其れには繪具で彩つて、支那の女の繪が描かれてゐた。女は髮を揚卷に結つて、赤い帶をだらりと前て垂れて、黑い小さな靴を穿いて、椅子に腰をかけてゐる。けれど大分其の繪具が剝げて、下から光つた金の地肌が出てゐた。ちやうど釘尖か何かて引掻いたやうに小さな傷が無數に付いてゐるやうてあつた。彼はいつからとなく、其の店の前を通る時はきつと眼を其の皿の置いてある處に止めて過ぎた。而して、まだ一度も其の皿を手に持つて見たことがなかつたけれど、輕いといふことも略ぼ分つてゐた。彼は其の皿を欲しいと思つたことがない。けれど其の皿を見ずに其の店の前を通ると、一日病院へ行つて來た氣持がしなかつたのてある。

今日も彼は其の皿を見て店の前を過ぎた。其の置場にも、皿の位置にも變りがなかつた。彼は青物店

の前を通る時に、其處の品物に目を付けた。其れは一度林檎を其店で買つたことがある。けれど其の林檎は水氣に乏しく、萎びてゐて、日數の經つたものであつた。其上に他で買ふよりも價が高かつた。彼は其時心で不快に思ひながら、店に並べてある他の品物を見るとやはり一様に水氣の切れた、萎びたものばかりであつたので、この店は賣れないので、自然こんな風のであらうと思つたことがあつたが、此日も見ると、まだ其の時分の賣れ殘りの林檎が既に黑く變色したのが五ツ六ツ笊の中に入つてゐた。

彼は其れもやはり病院にゐる妻の許に持つて行くためにパイン、アップルの罐詰を買つた比較的奇麗な漬物屋の前を通つて、少し行くと、擔架に乘せられて行く病人の一群に追ひ付いた。彼は常にいろいろの傳染病患者のゐる病院に行きながら、尙ほ途中でこんな病人に遇ふと氣味が惡かつた。彼は成たけ其の傍を通る時には呼吸をしないやうにして、小走りに通り過ぎてしまつた。而して、遂に我慢がし切れなくなつて、ホッと深い溜息を吐いた。

其日も病院の窓下を通る時に、例の陰氣な室の前を過ぎた。見ると此の前まで其處に呻いてゐた髑髏のやうな老人の姿が見えなくて、灰色の室は空になつてゐた。妻に遇つてから、いろ〳〵の話をした時に、昨日、この病院で三人の死亡者があつたといふことも聞いた。窓の處に置いてあつた、赤く枯れた鉢植の草花は取り退けられたと見えて無かつた。また靑腫れのした妻の様子にも變りがなかつたやうだ。彼は病室を出てから、受付の處まで戾つて來て彼女の受持ちの醫師に面會を求めたのである。

看護婦が來て、正助を應接室に導いた。其の室は光線が不充分で少しうす暗かつたが可なり廣い室であつた。大きなテーブルの周圍に幾つかの椅子が置いてあつて、頭の上の三方の壁には、何かの寫眞が

額にして懸けてあつた。待つてゐると間もなく、一方の扉を押して入つて來たのは、先日彼が病室で患者を診察してゐる姿を見た、其のまだ年若い金縁の眼鏡をかけてゐる醫者であつた。彼は丁寧に醫師に對して、彼女の世話になる禮などを言つてから、話を進めて、終に妻の生死に關しての醫師の意見を求めたのであつた。

醫者は彼女の病氣の經過を委しく語つた。また今後の懸念すべき並發しかゝつてゐる餘病について、專門的の術語を混へて說明してから、彼女の身心の疲勞してゐることを話した。而して、から最後に言つた。

「何分にも、今申すやうに體が衰弱してゐますから、これで餘病が出ますと、今のところ保證は出來ませんのです」と醫者は事實を言ふと共に幾分なりとも相手の心にも同情することにつとめて言葉を低く、靜かに語つた。

「其の餘病といふのは何でせうか。實際起りかゝつてゐるのでせうか」と言つて、正助は眤と醫者の唇を見詰めた。學校教師の前に立つて、自分といふものが極めて賴りないものであると感じて、今、其の人の口から及落の決定が言ひ渡されるのを待つてゐた、子供の時分の心持を思ひ出した。今は、其れよりは一層苦しい、絕望的の氣分の濕つた心の狀態であると自覺すると、頻りに心臟が高く打ち始めた。

「いろ〳〵ありますが、心臟痲痺なども其の一つです。どうも豫防はしてゐますが、何か餘病が出ないかと思つてゐます」と醫者は答へた。而して此時の醫者の顏色には、これ以上のことを語るのは苦しくもあり、また眞に分るものでもなく、これ位にして置いてもらひたいといふ心持が現はれた。正助はこ

れを見ると、其の上開く氣にもなれなくなつて、たゞ何となく自分までが死の宣告を受けたやうに、たぢ／＼として病院から出たのであつた。

明るい、眩しい筈の路の上も、彼には全く暗かつた。彼は何處を歩いてゐるかすらよく分らなく、また何も眼て見る氣がなかつた。たゞ妻のことを考へつゞけて來た。三四年前の秋の日であつた。最も自分等が貧しい經驗をした日の當時であつた。雨の降る日に、彼女は井戸端へ水を汲みに出て、水の滿々と入つた重い手桶を下げて來かゝると、石に躓いて前のめりに轉んだ。やつと起きた時は膝頭を石て擂り剝いて赤黑い血が染んでゐた。其樣ないぢらしい彼女の有樣も心の眼に浮んで來た。彼は自分ながら過去の自分を考へると彼女に對して、慘ましいまでに tyrant であつたことを想はずにはゐられなかつた。

しかも其の egoistic であつた自分が、今こんなにたぢ／＼として歩いてゐるかと思ふと、其の姿を第三者となつて冷笑つてゐる氣持とならずにはゐられなかつた。

眼の前に彼方から來た黄色な電車が止つた。彼は危ふげな足付きて其の車に乘つた。中には人がいつぱいて、彼れも吊皮に掴まつて立つてゐなければならなかつた。不意にぎくりと體が動いて、電車が出た。彼はこの機勢て二たびたぢ／＼となつて、傍にかけてゐた人の上に倒れかゝらうとした。彼はやつと堪へて、唾を飲んで乾枯びた咽喉を濕はした。間もなく次の停留場に來て電車が止つた。また不意に動き出した。同じくこの反動て、彼の體はぢた／＼となつて、また前と同じいやうに人の膝の上に片手を突いて危ふく倒れかけた。今度は其の人が默つてゐなかつたので、彼は其の人の顏を見た。腰をかけ

てゐた人は老人であつて、其の傍にかけてゐる二三の人々までが不審さうにして正助の顔の上に眼を集めてゐた。彼は何とか言つて、其の老人に詫びなければならぬと思つたが、咽喉が先刻から塞がつてゐるやうな氣がして、聲を出せなかつた。たゞ神經質じみた眼で其の人の顔をまぢ〳〵と見詰めてゐるだけであつた。彼は自分の眼が深く底の方に落込んで、瞳の自由すら効がなくなつてゐる有樣を見るやうな氣持がした。もう此上には倒れてはならぬと思つて、彼は兩手でをかしな體付きをして吊皮にしつかりとしがみ付いた。

正助は此日から、どんな女が來ても、つまり自分に較べれば智識に於て、力に於ても弱いのだから憐んでやらなければならぬと思つた。また暇をやつた、金を盗んだらしい女も畢竟好い衣物を買いたいために、また好い櫛を買ひたいためにしたことだとも考へれば、何處か其の弱い、いぢらしい心根に對して憎むよりか、憫んでやらなければならぬといふ氣持になつた。

彼はちやうど知つた醫者から、看護婦にならうといふので、田舍から出て來た女があるが、とても看護婦にはなれさうでもない。どうせ飯も滿足に炊けなさうに思ふけれど、それでも一時の間に合はせに使つて見る氣なら連れさしてやるが何うかといふやうな手紙をもらつた。正助はどんな女でも我慢をして使ひ、また其の女のためには世話もしてやらうと考へた。

其の女はまだ十七にしかならなかつた。色の白いむつちりと小肥りのした女學生上りの女であつた。庇髮の下に其の腫れぼつたい、細い眼が隱れてゐるやうに頭髮が澤山であつた。田舍にゐては飯も炊き付けなかつたといふことで、女が來た明る日飯を炊かして見ると、まだ煮え切らないうちに火を落して

お鉢の中に移してしまつた。其處へ出て來て、これを見た正助は、
「まだ炊けてゐないてないか」と言つた。すると女は顔を紅くして、袂で半分其の顔を隱くしてしまつた。
「これは煮て食べるより仕方がない」と言つて、正助は二たび書齋に入つた。
彼はしばらくすると勝手許て米の焦付く臭ひがしたので氣になつて行つて見ると、女は顔から汗を流して釜を下してゐる處てあつた。其れを女が下ろしてから蓋を開けると米は黑く焦げて、中から臭ひのする煙が上つた。彼はこれを見ても女を叱らなかつた。たゞ今後のことを注意してから、自分てこの食べられなくなつた釜の中の米を埋めるために、庭へ抱へて來た。庭には一面に日の光りが當つてゐた。彼は其れを日陰になつてゐる青桐の根許に持つて來て、土を堀り始めた。見ると紫のダリヤの新しい枝に蕾が咲きかけてゐた。
女はこの頃の暑さにも衣物の襟をきちりと合はして、其れを光つた金屬の襟止てとめてゐた。常に白粉を顔に塗つてゐる上に、たへず香水などをハンケチに濕らして置いた。
彼は近所の人々が、この女を自分の親類の者か、さもなくば妹であると噂さしてゐると聞いた時に、何も知らずに病院にゐる妻に對して、何となく憚るやうな心になつた。
日に慣れるに從つて女は大膽に家の裡を歩いた。彼の眼は自然とこの女のむつちりとした圓味のある肉の上に止らずにはゐなかつた。暑い日などには、女が自分の近くに坐ると肌着を汚した汗の臭ひと、安香油の臭ひとが體温のために蒸されて來て、若い女といふものを實感的に感じさせた。彼の眼に、女

は體が熱さうに、また物憂く、けだるさうに見えた。彼はふと女の寢たり、また常に坐つてゐる三疊の間の疊の上に赤黑いものゝ付いてゐるのを見つけた。顏を其の染みに出來るだけ近づけて凝視すると生々しい血の滴れて乾いた痕であつた。其れを見た刹那、不思議な狂暴の快感が全身に痺れ渡るのを覺えた。しばらく眠つてゐた盲目の本能が眼を醒まして起き上つた。

彼は其日、庭に出てダリヤの花を見た時に其の當時艶やかに咲き誇つた花が黑く朽ちてしまひ、もう見る影もないのに引き換へて、新しく咲きかけた蕾には、自分獨りを褒めてくれいといはぬばかりの顏付きと、日に輝いてゐる笑ひがあるのを見た。其時、彼はたとへいかに憐れに思つても病んだ者、死んで行く者には、この變化多き世界に住つてゐて、共に享樂し、また幸福を受ける權利がないことを思つた。かう思ひながら、また彼は心のうちで妻に對して濟まないことだと思つた。けれど次第に悔恨の情がうすらいで行つた。彼の瞳は燃えるやうに、女を見送る時、既に發達した腰付きや、露はにまくし上げた、むつちりとした白い兩腕に喰ひ入つた。彼は是迄、自分を支配して來た信仰が壞れかゝるのを感じた。而して、新しい經驗のために、冒險を敢てする日のことなどを空想に描いた。

ある曇つた、蒸された日の午後である。女は病院まで使ひに出て行つた。正助は女の歸るのが待たれた。日が暮れても女は歸らなかつた。其の中に雨が降り出して來た。彼は女の居間に入つて、彼女の荷物や夜具などが置いてある押入れの戸を開けて、其の中を見詰めたりした。雨は夜の更けると共に益々甚く降り出した。筧から落ちる水の音は、さながら小さな瀧のやうであつた。耳を澄すと溝を走る濁流の音は、遠く闇の裡に響いてゐた。彼は雨戸を細目に開けて墨のやうに暗い外を眺めた。僅かに軒燈の

光りの落ちてゐる處だけは穴が光つて、其處に飛び込む白い銀のやうな雨脚が分つた。

雨は夜半前に止んだけれど、女は歸つて來なかつた。

明る日は、また朝から日の光りが強く射した。雲もない大空に赤く燒け爛れた銅盤のやうに太陽が燃えてゐる。彼は昨夜女は知人の家に泊つたので、今朝は早く歸つて來るだらうと思つた。しかるに其の日い午前は經つたけれど、遂に女は歸つて來なかつた。彼には漸くいろ〳〵の疑惑が湧きかけて來た。

彼はしばらくの間心が落付かなかつた。日の照る庭に出て其處を二足、三足歩いたりするかと思へば室に入つて机の前に身を投げるやうに坐つたりした。けれど徒らに頭の中が亂れて來るばかりて、何一つ考への纏る處がなかつた。

『なぜ己はこんなに苦しんでゐるのだ』と口に出して、自分の心に問ふやうに言つた。

彼は暫らく頭を垂れて、默然として考へ込んだ。而して、また次に口に出して、

『自分をこんなに苦しめて來たもの、自由を束縛して來たもの、また現に墮落させやうとしてゐるもののすべては女てないか。なぜ自分はさうと知りつゝ女から解脱することが出來ないのであらう。』と自分に向つて詰る如く言つた。

彼の病的な、衰弱し切つた體に石炭を燃やすやうに活氣を與へ、刺激して來たものが性慾の力であつた。今、其の性慾を斷ち、この底力のある盲目の本能の太い繩を滿身の力で斷ち切らうとするのである容易にこれが出來る筈のものてない。彼は其處に身を悶えて、この理想と本能の苦しき悶え戰ひのために轉々として、聲を上げて泣きたくなつた。

其日の午後二時頃である。ちやうど女が此家を出てから一日目になる同じ頃の時刻であつた。女が悄然として門口に姿を現はした。正助は急いで室から出て見た。

一目、彼は女の姿を見ると其の様子が尋常ならぬのを見た。病人のやうに其の顔色は青く、髮は崩れて眼の中には惱ましい悲痛の閃めきがあつた。彼女は正助の顔を見ると、直に首垂れてしまつて、顔の色を紅くした。

「オイ、何處で泊つて來た」と彼は鋭く言つて、女の姿を忌々しさうにして睨んだ。女は忽ち體をぶるぶると震はせた。肩頭の搖れるのが瞭然と正助の眼に映じた。

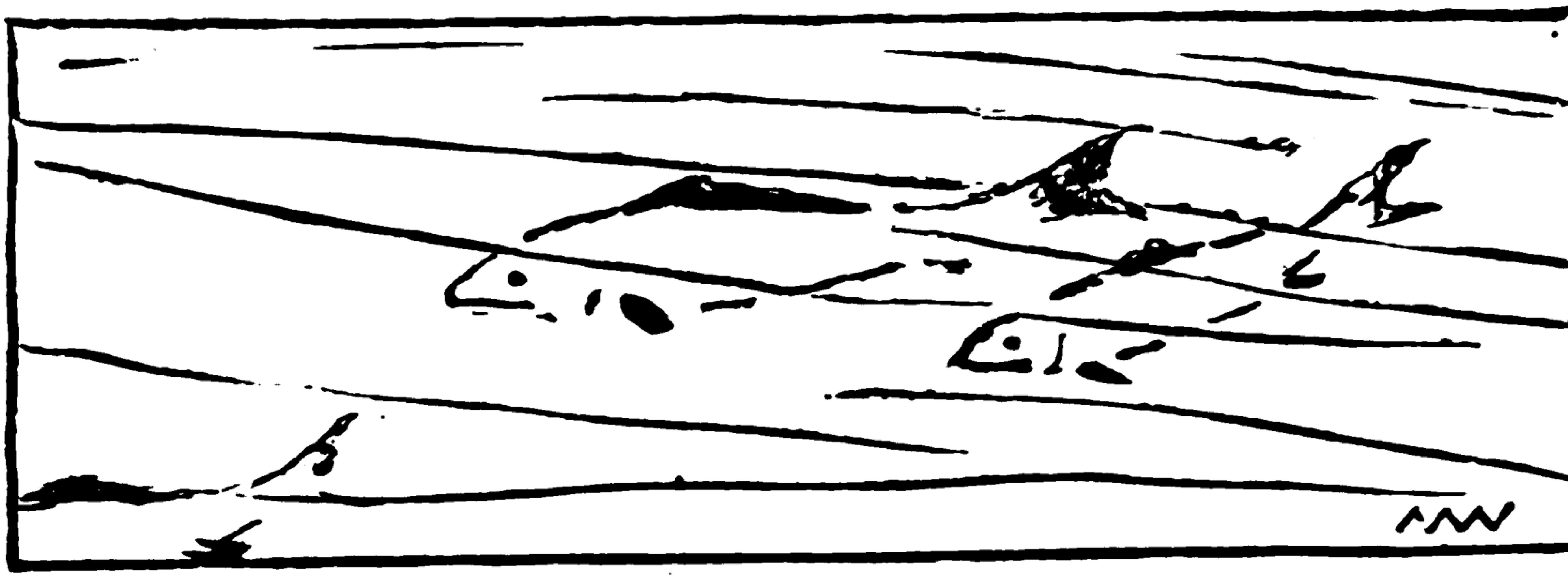
「オイ、何處で泊つて來た」と彼は一層大きな聲で言つた。

「門が閉つてゐましたので、其處の車屋で泊りました」と言つて、彼女は泣いた。青白い頰を傳つて涙が落ちた。

これを聞くと彼の體には、二たび狂暴な情慾の血潮が驅けめぐつた。眼は悔恨と嫉妬と殘忍な野性のために燃えて、堅く握り締めた拳が振へた。同時に强健な、無智な、若者等が毛脛を露出して臥轉んでゐる狹い車屋の光景が眼前に浮んだ。

彼の咽喉は乾き付いて、言葉が出なかつた。彼はづかづかと女の傍まで寄つて、柔かな肩頭の肉を摑んで、力まかせに其處に突き倒した。

――一九一四、七作――



裾

後藤末雄

一

翌る朝は、からりと晴れてゐた。眞夏の日脚がきら〱照り渡つて、廂の瓦家根から水蒸氣が霧のやうに昇りだす。まだ何處かで雨垂れの音がしてゐた。折々瓦の草が靡いて朝風は凉しかつた。日向の往來を見ると、大い泥路(ぬかるみ)が鏡のやうに照りかへして眩しかつた。

和歌子は二階の窓際(まどぎは)で歸りを待つてゐた。どしや降りの音を聞きながら、夜つぴて泣きあかしたせゐか、頭がずき〱病んで、雀の囀りを聞いても、四つ目錐か何かで、頭の天邊を揉み込まれるやうであつた。それに眞黄いろな日影を見ると泣き腫らした眼蓋にしみ込んで、頭が、ぐら〱してきた。彼女は顳顬(こめかみ)を押へながら聞き馴れた足音を待つてゐた。

いくら待つてゐても聞えなかつた。今朝も歸つて來ないかと思ふと、張合の拔けた氣がして、口惜しさと嫉しさに御腹の底が沸き立つてきた。

「ほんとに口惜しいつちやありやしない。散々、人の世話になつておきながら今になると用は無いと言ふ風に人を見限つて、……こんな酷い目に逢はふとは些つとも思やしない。克く〳〵人を欺まして……」

と和歌子は齒ぎしりをしてゐた。待てども待てども彼は歸つて來なかつた。ふと思ひついたことがあつた。

「お徳や……お徳はゐるかい……お徳……」

と彼女は階子口の方へ顏を向けながら手を叩いてゐた。やがて象のやうな足音が階子段に聞えると、

「なんて御座んす……」

と土臭い顏の口が動いた。

「あの車屋へ行つて昨夜の行先を聞いておいて……」

と言ひつけられて、お徳は怪訝な頰を膨らしながら、不精無精に降りて往つた。

十分ほど經つてもお徳は歸つて來なかつた。あの人の足音も聞えなかつた。

「ほんとに癪に障はつて堪りやしない。どうして斯う揃ひも揃つて遲い同士なのだらう……」

と和歌子は自烈れつたさに、袂の先きを嚙んでゐた。昨夜は口惜まぎれに書齋を掻き散らしたせゐて、銀杏返しの根がすつかり拔けて、亂れ毛が唇までふり懸つてきた。彼女は、ふと紛れ毛を嚙んでみた。それは毒草の露ほど苦かつた。

やつと勝手の開く音がすると、間もなく階子段に荒々しい音がしだして、葭戸の陰からお徳の姿が透

いて見えた。

「往つて參ゐりました。淺草橋の袂て寄道があるからと仰有つてお降りになつたさうて御座います……
……」

とお徳は思ひ出したやうに襷を外づして口をきいた。

行先は柳橋に違ない。友達の御通夜に往くなぞと眞赤な嘘を吐いて、白粉臭い佛様と飛んだ御通夜をしたのに違はなかつた。ふと淫らな幻が目を掠めた。思へば思ふほど妬ましさと怨めしさが込み上げて、腕には力が募つてきた。

彼は歸つて來ようか。それとも歸つてきまいか。今だに彼の姿は見えなかつた……

やがて階下の時計が撃ちだした。その音は彼女を嘲けるやうに、ぼん／＼と長く響いて、自烈つたい心を煽り立てた。彼女は顔を顰めながら耳を澄ましてゐた。心もとなく八時が打つてしまつた。

蒸暑い朝てあつた。

もう青空には雲の峰が湧き立つて今にも瓦家根が火のやうな息をつきさうてあつた。鴨居に吊した蟲籠から俄かに螽斯が鳴きだしたので、和歌子は頭を押へながら座蒲團の上に倒れてしまつた。もう眞黄色な日影が和歌子の足許に近いて、炮烙の御處刑に逢はせるかと思はれた。

「まだ歸つて來やしない。今日も歸つて來ないのか知らん……何んぼ何んてゝ人を馬鹿にしきつてゐるわ……とう／＼見棄られてしまつた。」

と思ふと俄かに涙が湧いてきた。和歌子は何うかして睡らうと思つて故さら目を潰つてみたが、思ひ

は只管、口惜しさと、悲しい方へ飛んで往つた。頭のなかは益々冴えてきた。

ふと俥の音が止まると、

「お歸り……」

と梶棒が門口に降りた。和歌子は兎にかく嬉しかつた。思はず立ち上つて入口の方を見ると、今しも彼は若い衆の手のひらに大い銀貨を置くと何やら言ひ棄てゝ、格子を開けた。彼は御通夜に往くと言つて出掛けた通りの羽織袴で、手には扇子を持つてゐた。疲れた顏には眞靑な「嘘」の覆面が掛つてゐた。

彼は本當に歸つてきた。何食はぬ顏をして歸つてきた。素知らぬ顏の小憎しさ。和歌子は彼の秘密を知つてゐるのが小氣味よくもあつたが、却つて其れが苦勞の種であつた。早く二階へ上がつて來たら思ふさま怨みを述べ立てゝ、怒りを晴らさうと思つてゐたが、今朝に限ぎつて、なか〳〵やつて來なかつた。すると、

「お德、床が取つてあるかい。」

と彼の聲が聞えて書齋の襖があいた。

書齋に這入れば、秘密の發見たことも氣が附くに違ない。書棚を倒し厚い洋書を引裂いて、あのモリエールとやらの黄銅像も机の脚に叩きつけてしまつた。口惜まぎれに斯んな眞似をするよりは默つてゐて油を絞る方が增してあつたのに……ふと後悔の影が彼女の胸にさしてきた。

彼も到頭、魂膽がはれたと思つたのか、二階へは上がつて來なかつた。いつもは何處へ往つても歸つてくると直ぐ挨拶にきて其日の出來事を話すのがきまりなのに今朝にかぎつて來さうな氣配も見えなか

つた。それとも疲れたせゐで直ぐさま寢床に這入つてしまつたのか。いつたい何故疲れたのだらう。昨夜出掛けに御通夜から歸つてくると直ぐ寢るから床を取つて置いて呉れと言ひつけた白々さ。ほんとに人を馬鹿にしきつた仕打てあつた。もう我慢にも我慢が出來なくなつてしまつた。一と思ひに呼んでみようか。それとも此方（こちら）から降りて往かうか。それも足許が見ぬかれるやうて氣が進まなかつた。それとも挨拶に來るのを待つてゐようか。それも何時來るか的（あて）にはならなかつた。大かた書齋から出て臥床へ這入つたのだらう。話聲も聞えなかつた。和歌子はもう辛抱が出來なかつた。

「お德、お德や……」

と和歌子は、まるて駄々つ子が乳母を呼び立てるやうに、額に癇癪の筋を立てながら手を叩いて、呼んでゐた。

お德は操り人形のやうに、何處となく、ぎごちない様子をして顔をだした。

「階下（した）へ往つて、さう言つてお出いて……用がありますから直ぐ來て下さいと……好いかい。」

と和歌子は言ひつけた。

また重々しい足音が階子段に消えて往つた。それでも彼はやつて來なかつた。暫くは音沙汰無して森閑とした下座敷から、掛時計の振子（ふりこ）が物々しく聞えだした。やがて書齋の襖がすうと云ふと、此度は厠の戶があいた。いつもの性急（せつかち）に似合はず、彼は殊更、愚圖〱してゐるらしかつた。

間もなく階子に足音がしだして、葭戶の間から寢足りない男の顔が見えた。彼は羽織も脫ぎ棄てゝ、どうやら御處刑を覺悟してゐるらしかつた。

「いま歸りました。」
「もつと此方へ入らしやい。昨夜は何處へ往きました……」
「御通夜に往きました。」
「噓を仰有い。人が知らないと思つて克くも白々しい噓がつけたものですね。昨夜は飛んだ御通夜でした……隱したつて駄目ですよ。これを御覽なさい。」
と和歌子は袂から引き裂いた手紙を彼の膝もとへ放りだした。彼は其れを手にもしないで、唯だ嫣然々々笑つてゐた。
「散々、人の厄介になつたくせに克くも人を欺ましましたね。ほんとに口惜しいつちやありやしない……」
彼女は思はず知らず男のそばに詰め寄せた。
彼女の待つてゐたのは謝罪の言葉であつた。けれども彼は後悔した樣子もなく、丁度、大い子供が馬鹿らしい惡戲を見つけられた風に頭を掻きながら、
「ほんとに弱ちやつたなあ。かう見付けられちや仕方がない。」
と脣には嬉し笑が溢れてゐた。
和歌子は、もう腹に据ゑかねた。彼女は男の肩を小突きながら、
「散々、人の世話になつたくせに克くも此んな眞似が出來ましたね。覺えてお居でなさい。えゝ……ほんとに口惜しいつちやありやしない。」

と物凄い形相をしながら、言ひ立てた。

彼の肩を小突く度毎に心の中に溜まり抜いた怒りと口惜しさが、胸から手先へ傳はつて消えてゆく。男に苦痛を與へることが妙に快かつた。さうして手先なり、指先なり彼の身體(からだ)に觸はつてゐると、今まて人に取られてゐた寶物を確かに取り返した氣がして、ほつと安心が出來た。彼女は物狂はしく怨みの言葉を云ひ立てゝ男の膝を打つたり、手を引掻いたり、捻ねつたり出來るだけ苦痛を與へてゐた。それが詮めてもの腹癒てあつた。

「こりや酷い。痛くつて堪らない。ちよつと放して下さい。」

と彼は逃げようとしたが、流石に手荒らい事も出來ずに打たれる儘に、打たれてゐた。さうして女に打たれることが彼にも快感てあつたのか、それとも昨夜の魂膽を思ひだして可笑しかつたのか、彼は、くす〱笑つてゐた。すると和歌子は之を見咎めて、

「どうして然(そ)んなに可笑しいのです。人が斯んなに怒つてゐるのに笑ひ事つちやありますまい。」

と振りかかる亂れ毛を拂ひのけた。

笑顔を見れば見るほど癪に障はつて、もつと男の身體が嘖(さい)なみたかつた。彼は何處を風が吹くといふ風に飽くまで茶化してゐた。彼女は、物狂はしい眼付て、四邊(あたり)を見廻はした。さうして跟めく足を踏みしめながら、手を伸ばすと、鴨居から物指を取つて、男の肩に振り上げた。

「さあ、撲つならお撲ちなさい。貴方に打たれるなら私の本望てす……」

と彼は科人が打ち首にても逢ふやうに、脊中を伸ばして頸を差しだした。

和歌子には考へがなかつた。心の怒は力となつて身體に溢れてきた。唯だ男を痛い目に逢はすよりほかにはなかつた。脆細い手に揮ひ上げた物指は鋭い音を立てゝ彼の脊中におちた。

「あゝ痛い……」

と彼は思はず脊中を引込ました。

物指は和歌子の手から滑つた。我ながら手荒いことをしたがと思ふと張り詰めた氣が一時に緩んで、涙が流れだした。ほんとに取返しの付かない麁相をしてしまつた。いかほど口惜しまぎれとは言ひながら、女だてらに物指を振り上げて男の脊中を打たうとは……秤の分銅は瞬くひまに替はつてしまつた。今は彼女の方が惡かつた。涙は頬を傳はつてきた。もう仕方が無かつた。泣いて男の同情を購るよりほかには途がない。それゆゑ彼女は故さら聲を立てゝ啜り泣いてゐた。女は何時も狂言を忘れなかつた。

啜り泣きは悲しかつた。彼は和歌子の泣き俯した姿を見詰めてゐた。昨夜から悶えぬいたせゐか、銀杏返しが、いぎたなく寢亂れて翡翠の根掛もゆるんでゐた。漣然と、しやくり上げる度毎に撫肩が輕く動いて、涙が横顔を傳はつてきた。

彼は啜泣きを聽いてゐた。それは癈墟の礎から聞える蟋蟀の鳴音に似てゐた。和歌子は浴衣の袖口に顏を埋めて、情事でも見付られた小娘のやうに、嘆いてゐた。

彼は黙々と此樣子を見てゐた。いつか眞劍な心が湧いて憐れみが胸を掠めた。とにかく恩義ある人を欺いて此程泣かせるのは濟まないと思はずには居られなかつた。

「もう泣くのはおよしなさい。まつたく僕が惡かつたのです。さあ泣かないて……もう機嫌を直して

下さい。重々、僕が惡いのです……」

と彼は和歌子の目許を探ぐると、手先には涙が流れてきた。

和歌子は漸つと胸を撫ぜ下ろした。あんなに手荒いことをして、脊中を物指で打つたのに斯んな優しい言葉をかけて與れる心根が却つて嬉しかつた。彼女の計謀（はかりごと）は巧く圖に當つた。

「だつて餘りですもの……貴方ばかりは此んな酷い方だとは思はなかつたのに……隨分、酷いわ、御通夜へ往くなんて……」

「それだから僕が惡いと言つたぢやありませんか。もう泣かないでお寢（やす）みなさい。身體に毒ですよ。僕が床を敷いて上げませう……」

とにかく彼は優しかつた。和歌子の怒りは、だん／＼溶けて、その後（あと）には嬉しさが這入つてきた。今は涙が流れば流れるほど快かつた。ふと戸棚の開く音がした。和歌子が、ちらと横目で見やると、彼は不器用な手つきで薄い蒲團と掻巻を取だして、枕さへ忘れなかつた。

「さあ、床が敷けましたからお休みなさい。身體に障はるといけませんよ。もう大丈夫、何處へも往きませんから……」

彼は子供を寢かし付ける乳母のやうに斯う言ひながら、彼女の帶まで解からうとした。

「克くつてよ……」

と和歌子は答へながら、面倒臭さうな手先で帶をほどくと、伊達巻一つで寢床へ這入つてしまつた。

枕許で團扇を使ひながら、つくねんと和歌子の御守（おもり）をしてゐたのは彼であつた。

熱苦しかつた。蟬の聲が些つとも止まなかつた。眞晝に近い朝日が莨戸の隙から射し込んで、だんだん枕許に近づいてきた。時々、涼しい風が吹いてきた。床の間の違棚に載せた金魚鉢から、をり〳〵泡の消える音がして、硝子から赤い鰭が透いてゐた。

彼は茫然、團扇を眺めてゐた。それは藍絞りの意氣な團扇で囊物屋の御中元であつた。彼はふと寢顏を見てみた。眼から下は搔卷の襟にかくれて、濃い眉毛と、不二額が出てゐた。彼は團扇で、あふぐと、嵐が雲を走らせるやうに、額の亂れ毛が飛びちつた。時には其れが面白かつた。時には鰻屋のやうに、ばた〳〵團扇であふひでみた。すると天鵞絨の襟の中から、くすつと笑ひ聲がして、眉毛に笑の波が傳はつた。彼は占めたと思つた。もう御機嫌は直つたのであつた。それから彼は團扇の模樣を見返しながら昨夜のことを考へだした。夜中のことも、今朝のことも考へてみた。さうして一時の迷とは思ひながら、これまで散々、世話になつた人を斯んなに泣かすのは惡いことゝは思つても、心の底には昨夜の嬉しさが殘つてゐた。

「どうしました。寢られますか。もう何んにも考へずにお寢みなさい。」

と言ひながら彼は搔卷の肩を撫ぜてやつた。

枕許にゐて呉れるのが何より心丈夫であつた。昨夜の相手から彼を奪い返したのであつた。彼はまた彼女の物になつてしまつた。あれほど手荒いことをしたのに斯うして呉れようとは思ひ掛けないことであつた。枕紙を濡したのは旣う口惜涙ではなかつた。それは嬉し涙に他ならなかつた。

「まだ見棄られはしない……」

と氣が付くと初めて胸が透いてきた。心は段々、靜まつた。さうして彼の居て呉れることゝ、優しい言葉とが彼女を安らかに眠りに連れていつた。

ふと耳許て騒しい音がした。和歌子は呼ばれたやうな氣がして目を醒ますと、お德の脂ぎつた顔が鼻先に突き出してゐた。

「髪結さんが參りました。お結ひになりますか。」

「寢てゐると言つてお呉れ。暑さあたりて臥せつてをりますから何づれ此方から申し上げますつて…………好いかい。」

と和歌子は答へて欠伸を嚙みしめた。目はもう悉皆、醒めてしまつた。ぐつすり寢込んだので頭痛も取れたが、何處となく身體が、がつかりしてしまつた。ふと四邊を見廻はすと、彼の姿が見えなかつた。また人を寢こかしにしてしまつたかと思ふと、胸には早鐘がつき出した。それは心もとない驚きであつた。けれども耳を澄ますと階下の書齋て彼の話聲がしてゐた。相手は後期印象派の松田さんに相違ない。昨夜、袂から出た手紙の封筒は松田さんの筆つきてあつた。さうして見れば松田さんも共謀に相違ない。二人は頻りに聲を秘めてゐた。いつたい何の話をしてゐるのてあらう。きつと昨夜の話てもしてゐるのか。かう思ふと急に頭が重くなつて御腹の蟲が復た角を出してきた。何うしても内所話が聽きたかつた。

到頭、床の上に起き上つてしまつた。

「止さう、止さう。惡い事を聞いてまた氣を揉むと可けないから……」

と彼女は諦めて、重い頭を枕に着け直した。けれども話し聲は聞えないほど秘そりしてしまつた。階下からは何處となく秘密の香がしてきた。和歌子は幾ら諦めようとしても女の物見たさが募つてきて、疲れた身體にも力が湧いてきた。彼女はまた身體を起した。蒲團に手を突いて立ち上つた途端に前髪から、ばたりと櫛がおちた。どうやら惡い辻占らしかつた。それから伊達卷のまゝで一足踏みだすと、頭がぐらぐらして目が廻はりさうてあつた。

和歌子は忍び足で階子を降りて往つた。自分の家で誰に遠慮もない筈であつたが、斯んな、あられもない姿を見せたくはなかつた。彼女は階子際の暗闇を通りぬけ、化粧部屋のなかに這入ると窓際の姿見に、不仕だらな樣子が映りだした。髪はいぎたなく寢亂れて眼は腫れてゐた。見れば見るほど宿場女郎の寢起姿のやうで和歌子は、ふと恥かしかつた。やがて彼女は書齋の隣座敷へ這入つて往つた。

話は、かなりはづんでゐた。けれども其れは藝術の話であつた。さうして今に昨夜の話も出るに違ないと胸を躍らしながら聞いてゐた。もう斯うなつては事の樣子が悉しく知りたかつた。

それは物靜かな奥座敷であつた。楓や松の梢が差し交はした樹蔭から、縁側にばらばら斑のやうな西日がさして、巻き上げた簾垂の裾が微かな夕風に搖らぐ。書間の岐阜提灯が興ざめた顏をしてゐた。床の間には鈴蟲と松蟲の籠が並べてあつた。

話聲は欄間の透彫から這入つてきた。和歌子は胸を躍らせながら、御局樣の閨を覗ふ奥女中のやうに顏を響めて耳を澄ましてゐた。襖の裾には立聞姿が長く映つてゐた。

二

蒸暑い日が續いた。

和歌子の枕許には焦がすやうな日脚が迫まつて、亂れ髪が臭くなつてしまつた。蒼蠅は葭戸の棧から飛んできて汗ばんだ顔や手先に集つて、昔、淫蕩な女王の死骸を嚙み盡した蚪蝪の群に似てゐた。いくら團扇で追つても今は根氣がなくなつてしまつた。窓に載せて呉れた小さい泥鉢から、朝顏が咲いてゐた。螢の丸籠も晝間は光らなかつた。階下の緣側からは風鈴の音が聞えてゐた。

和歌子は三日たつても起られなかつた。頭の痛むことだけは漸つと癒つたが、あの袂から手紙を見付けた晩、口惜まぎれに書齋へ往つて書棚を倒したり、厚い洋書を引き裂いたし、剩さへ物指で脊中を打つた天罰か、手足の節々が痛みぬいて到底も身體が動かせなかつた。ちよつと笑つてさへ胸が痛かつた。

どうしてあんな手荒い眞似が出來たらう。なんぼ腹立紛ぎれとは言ひながら、女だてらに物指を揮り上げたのは、舞臺に出てくる遣手婆が華魁を長煙管で打擲するやうであつた。その事を考へると蟲ずが走るほど嫌やな心持になつてしまつた。

「いくら燒餅を燒くたつて餘んまりね。ほんとに堪忍して下さいな。女のくせに克くあんな酷い眞似が出來たものね。考へ出すと貴方に濟まないわ。まあ、氣狂の仕業だと思つて堪忍して下さいよ。」

「いゝえ、皆んな僕が惡るかつたのです。貴方に打たれるだけの罪があつたには違ありませんよ。だから僕は何んとも思つちや居ません。却つて僕のせゐで此んなに臥かしたのですもの……お氣の毒だと

思つてゐますよ。」

つまり彼は優しかつた。けれども優しいだけに何んとなく油斷が出來なかつた。併し優しい言葉は彼女の涙を誘つた。彼女は泣き顔を掻卷の襟に埋めながら、

「そんな氣休めを言つて嬉しがらせるのでせう。ちやんと知つてゐてよ。貴方の身體は玆に居ても、心は彼處(あつち)へ飛んでゐるわ。白狀をしなさい。」

と嫌味を言ふ時には涙ぐんでゐた。こんな嫌味を言へば猶さら優しい言葉を掛けて吳れるに違ないと思ひ込んで、さも悲しげに言つてみた。すると彼は其んな事とは氣が着かず心から優しい言葉をかけて吳れた。彼女には其れが嬉しかつた。彼が側に居て吳れゝば嫌やな事ゝ思ひ出さなかつたが、御客樣でも來て姿が見えなくなると、廣い〳〵野原の夕闇に置き去られた氣がしてならなかつた。さういふ時には心の底が冷え〳〵してゐた。

ほんとに油斷も隙も無かつた。藝者といふ商賣人(くらうと)が出てきて、和歌子が大事にしてゐた寶物(たからもの)を攫つていつた。やつぱし見棄られてしまつた。あんなに優しかつた人に欺まされようとは何うして思はれやう。甘い蜜は刺(とげ)ある蜂から出るやうに、口前の甘い人の心には、きつと眞靑な「嘘」が隱れてゐた。ほんとに相手は藝者てあつた。何家の誰れか訊(き)いては見たいが、訊けば聞くほど苦勞の種だと思つて然(さ)んな話は、なるたけ避けてゐた。けれども心の底で思はないことは片時もなかつた。

あんな子供らしい人に狂言を喋かしたのもあの藝者に違ない。なにもかも、商賣人(くらうと)の入知惠に違ない。どうして彼に藝者が思ひ切れようか。あの商賣人は男の心を引き付ける言葉使ひや、物越を持つて

ゐた。男の心を誘ふ嬌態さへ見せて、踊や唄も知つてゐた。男の目を迷はす派手な着物も着てゐるし、媚めかしい左褄を取つてゐた。女の身で恥しい大口も平氣で言ふとやら。あの人達は男を迷はす稽古を積んでゐた。何うして堅氣の和歌子が相手にならうか。

「どうしたつて叶やしないわ。妾のやうなお婆さんが……見限かぎられるのが尤には違ない……ほんとに既う見棄られてしまつた……」

と和歌子は思ひだしては掻卷の襟に泣顔を埋めてゐた。枕紙が濡れて心持の惡いほどであつた。ふと寢返りを打つと床の間に立て掛けた二面の琴が目に就いた。すつかり埃に塗みれてゐた。唯だ昔の記念に立てかけて置くのであつた。和歌子も琴の道にかけては奥許しを取つたほどであつたが、今はすつかり忘れてしまつた。また茶の湯、生花も知つてゐた。そんな野暮な遊びでは若い男の心を繋ぐことは出來なかつた。

　それに彼女は三十にも手が届きさうであつた。そのせゐで何れほど苦勞をしたらう。やがて見棄てられるとは兼ねて知つてゐたが、是れほど早いとは夢にも思はなかつた。それが淺ましい自惚れであつた。恥しながら年より派才な着物を着てゐた。三越や伊勢丹に通つて流行に遲れまいと勉めてゐた。また薄化粧もやつてみた。また年甲斐のない娘言葉も使つてみた。けれども見返られてしまつた。見棄られるのが道理で見棄られないのが不思議であつた。

　派手な着物をきて薄化粧をして見ると、何んとなく若々しい心持が淋しい胸に甦つてきた。いつか陽氣な心持が湧き返つて、あの人と一緒に暮らしてゐても別に可笑しいとも思はなかつた。さういふ心の

隙に惡魔がやつてきて、彼を奪つてしまつた。見棄てられたのも彼女の過ちに違ないと思ふと、手を滑べらして大切な御皿を壞はした小間使のやうに、破片を手にして泣くよりほかは無つた。

「妾のやうなお婆さんを……そりや無理に違ないわ。でも些しは妾の境遇を察して下さいな。若し貴方に見棄てられたら本當に獨ぼつちになつてしまふわ。御覽なさい。貴方のせゐで世間から見放されたぢやありませんか。兄だつて妹だつて來ちや呉れないでせう。妾だつて往き處ないと思ふと、どんなに淋しいか知れませんよ。些しは妾の心持を察してねえ……」

と彼女は涙に泅びながら、男の顏を見詰めてゐた。

男の顏は曇つてきた。それこそ男の胸に何物か殘つてゐる標だと彼女は嬉しく思ひながら、故さら悲しい顏付をしてゐた。さうして優しい言葉を聞けば、せめて胸を撫ぜ下ろしてゐた。ときには華魁のやうに空涙を零ぼしてみた。そのためには何時も悲しいことを考へるのが必要であつた。心は何時か昔の悲しさに走つて往つた。

「年甲斐もない恥曝しだ。克くそんな事が言へたものだ。今に見棄てられるに決まつてゐらあ。何處の馬の骨だか解らない青書生などと……お前も餘つぽど業曝しだな。俺りや、そんな女と兄妹になつてゐたくない。今日から血筋の緣を切つてやる……」

と昔氣質の兄が、青筋立てゝ呶鳴散らした閻魔顏が目に浮んできた。

「まあ、姉さん、何のことです。あんまり外聞が善くないわ。後生だから切れて下さいよ。そんな事が世間へ聞えると妾の肩身が狹まいから……」

貞淑の評判を鼻に掛けてゐた妹は年子に乳を含ませながら斯う繰り返してゐた。それきり往來も絶えてしまつた。

兄妹に見棄られ、親類に見限られゝば見限られるほど、和歌子は彼を見棄てることが出來なかつた。彼と一緒に居ることが何よりの慰めてあつた。また誇りでもあつた。却つて面當てに彼を引きとつて、仲の好い處を見せつけ度かつた。さうして生涯遊んでゐても、氣樂に暮らせるほどの財産が何より便りてあつた。さうして彼も思ひやりの深い人だし、あれほど恩義を掛けてやつたからには、見棄られることはあるまいと思ひ決めてゐた。

けれども藝者に見返られてしまつた。若しや、すつかり見棄られたら何うして親類に顔向けが出來よう。「ざまを見やがれ」といふ、はしたない顔付が目に浮んできた。どうしても藝者の手から彼を取り返すことが、彼女に取つては、自分を護る唯つた一つの道てあつた。お金を出して無理に切り放さうか。けれども何うして心と心を放すことが出來ようか。

「藝者なんか思つちやゐませんよ。あれは一寸とした心の迷ひてす……もう大丈夫てす……」と彼は眞顔になつて言つてゐた。それは一時の氣休めてはなからうか。我から藝者と手を切つて呉れと言ひだすのは、あんまり燒餠深く邪推深いやうて恥しかつた。和歌子は言ひ出しかねて切なかつた。昔の夢が克く胸を音づれた。

彼女が十六のとき、亜米利加歸りの青年に嫁いだ。その人は熱しかゝつた彼女の身體を啄むと、鴉が果物の種子を吐きだすように、彼女を見棄てしまつた。その人は今、大連あたりて賤業婦の親分をして

ゐるとか。いかほど娘氣の考無しとは言ひながら、あんな人に處女の身體を捧げたのが、生涯の旣相であつた。時には手酷く打たれたこともあつた。それも本當に十六の娘盛りて、世間の眞相には、見知らぬ國の旅人であつた。さうして荷物のやうに送られて、荷物のやうに歸つてきた。

彼女は樂しみを味つてきた。けれども戀は知らなかつた。それから復た或る男のそばへ荷物のやうに送られてしまつた。そのせゐて兄は大そうな拔擢を受けてしまつた。此度は姑や小姑に意地められて、涙ながら歸つてきた。すると世間の人達は彼女を指して我儘者とか、變はり者と言ひ囃やした。彼女は何うして然う言はれるのか解らなかつた。斯う世間から意地められると、漸つと物心がついてきた。それも遲蒔であつた。もう娘ではなかつた。兄が右へ往けと言つても彼女は右へ往かなかつた。却つて右と言へば左へ往くほど捻ねくれてしまつた。さうして人の言葉に逆らうのが何より面白くなつてきた。かうして彼女は長い間の獨身生活を味つてきたのであつた。

「妾ほど詰らないものは有りやしない。娘の時分にや何んにも知らないから、皆んなの玩具にされてしまつた。女は出足が肝心よ。妾なんかは閾を跨ぎそくなつたから生涯浮ぶ瀨が有りませんわ。妾は皆んな兄さんの御爲めごかしに使はれて一生を臺無しにしちやつたものですもの……今から考へると本當に口惜しくつて仕樣が無いわ……」

と大そう兄を怨んでゐた。さうして八年ほどの長い年月が、夕風のやうに、彼女の頰を撫ぜながら吹いて往つた。心の中は何時も渴いてゐた。さうして指先は何時も溫いものが握りたかつた。

去年の夏であつた。和歌子は珍らしく旅に出た。それは八年間の氣晴してあつた。さうして濱邊に近

い夏座敷て、蟬の鳴聲を聞きながら晝寢をしてゐた。隣座敷に居たのは彼てあつた。旅の徒然は二人を紹介して吳れた。さうして何時か馴染ませてしまつた。そのうへ情愛さへ教へて吳れた。

　彼女は初めて戀をした。それは生れて初ての事てあつた。ほんとに二人は仲の好い姉と弟てあつた。彼女は姉さんらしい心持て、いろ〳〵な世話をしてやつた。着物のことも、學校の事も目をかけて、彼の行末ばかりが便りてあつた。さうして言葉付さへ姉弟らしかつた。彼は姉さんのやうに取扱つて兎かく遠慮勝ちてあつた。それが彼女には物足りなかつたが、また控目がちなことが嬉しくないてもなかつた。ほんとに二人は戀人と言ふより仲の好い兄妹てあつた。近所の人達さへ然う思つてゐた。初めは近所の人に見られて極まりの惡い思ひもしたが、今は何時か姉弟らしい氣がして、さほど恥かしくもなくなつてしまつた。

　和歌子が床のなかて泌々考へてゐたのは斯ういふ事てあつた。昔のこと、今のこと、行末のことが、巴のやうに入り亂れて、心細さが身にしみた。

「いくら考へたつて仕方がありやしない。考へれば考へるほど胸が塞がるわ。いつそ一と思ひに起きてしまふ……」

と彼女は思ひきつて床を離れてしまつた。それは四日目の朝てあつた。

　彼女は暫く窓際に佇んてゐた。それは彼の歸りを待ち暮したあの窓てあつた。あれから、もう四日も立つてしまつた。

もう眞夏であつた。入道雲の湧き立つ青空を見てさへ目が廻るほど熱苦しいのに、朝風さへ吹かなかつた。何處かの蒸風呂へ這入つたやうて、身體の遣り場がなかつた。疲れた身體が汗ばんで足の裏が妙に火照りだした。

ふと向ふを見ると、いぼぢり卷きにした穢苦しい母親が、娘の手を取つて何にやら呟きながら、いそいそ、やつてきた。その娘は御向ふの小間使で大そう素直な辛抱者であつたが、流石に奥さんの矢釜敷さには我慢が出來なくなつて逃げだしたものよしい。小間使は目を泣き腫らして、さも悲しげに、俯向きながら歩いてゐた。あの母親は世間の辛らい事、何處も同じ人情の薄いことを說き聞かせて、辛抱を勸めてゐるに違ない。小間使は何やら肯くと、母親は青ざめた黑繻子の蝙蝠をつぼめた。さうして怖る〳〵裏口から這入つてゐた。小間使は黑板塀の濃やかな樹蔭に悄然（しよんぼり）、立つてゐた。

年老いた親と娘、——それは果敢ない女の推移（うつりかはり）であつた。和歌子は一目みると、自分の行末が、まざまざと目に浮んできた。

直ぐに裏門が開くと、母親の笑顔が見えて、何やら言ひながら手招きをした。小間使は、いそいそ和歌這入つていつた。御詫は叶つたらしい。

子は妙に涙ぐんでしまつた。

「どうして此んなに涙もろいのだらう。一寸しても悲しくつて仕樣がありやしない。あんまり悲しいこと許り思ひ續けたせゐかも知れないわ……」

と獨言を云ひながら彼女は窓際を、退（ど）いてしまつた。

身體には疲れが殘つてゐた。足許がよろ〳〵して覺束ない足取りてあつた。あの晩、腹立まぎれに力業をしたせゐて、まだ背節が痛かつた。さうして此の熱いのに四日も床に就いてゐたので、身體中が粘ばついて、妙に脊中が、むづ痒いかつた。それに透油が腐つて朝風が吹き渡ると、鼻持のならない香がしてきた。もう爪先には眞黑な垢が溜まつてゐた。生れつき綺麗好きな和歌子は朝湯を立てゝ髮さへ洗つてしまつた。おろし立ての單衣物に着かへると心持が凊々して、やつと人らしい氣になつてきた。和歌子は姿見の前に立つてゐた。それは四日目ぶりて、まぢ〳〵顏を見たのてあつた。姿見には面やつれが映つてゐた。めつきり頰がこけて、また眼瞼が腫れてゐた。

ふと思ひ出が胸を掠めた。

やつぱし朝のことてあつた。和歌子が鏡を眺めてゐると、いつの間にか、彼がやつてきて、さも思ひだしたやうに斯ういつた。

「いつたい男といふものは女の輪廓に惚れますね。つまり女の本質に惚れないて背景に惚れるのてす。女優だつて藝者だつて、女と言ふから見れば素人と變りますまい。女といふ點ばかりから言へば素人の方が優つてゐるに違ありません。男は藝者たり、女優たる處に惚れるのてすよ。素人に惚れる時もやつぱり其の具合かも知れません。物好きなものてすね。」

「それぢやどうして妾が好きなの……言つて頂戴な……」

と和歌子は若々しい聲音に聞いてみた。男は唯だ、にや〳〵笑つてゐた。

「妾が出戻だものだから……きつと、そんな處が氣に入つたのだわ。」

と考へると、何となく嫌やな氣がした。

また斯ういふ事もあつた。彼は女の名に大そう興味を持つてゐたから、何かの折にふれて、

「お春とかお花とか若々しい名を持つてる女がありますね。その持主が婆さんになつて、死にかゝつて居ながらお花とかお春といふ名を持つてるのは悲慘な滑稽ですね。」

と言ひながら、和歌子の顏を見て、惡いことを言つたといふ風に顏を背向けてしまつた。彼女には歌和子といふ名が附いてゐた。お婆さんになつても、此の美しい名は殘つてゐるに違ない。ふど興ざめた心持が和歌子の胸を捉へた。

斯んなことを考へながら、和歌子は身粧をしてしまつた。それから姿見に布をおろしてしまつた。姿見の顏に自分ながら、愛想盡かしがしたかつた。さうして鏡臺の抽斗から派手なリボンを取りだして、洗ひ髮の裾にかけておいた。それから臺所の開きをあけると下女の姿が見えなかつたので、

「お徳、お徳は居ないのかい。」

と呼んでみた。すると、立話の聲がやんで、

「何御用です……」

とお徳の赤ら顏が水口の格子から現はれた。

「髮結さんの處へ往つて明日來て下さいと言つておいて……先日は濟みませんでしたつて……好い

かい。頼んだよ。」

と和歌子は言ひ棄てゝ厠に這入つた。鉢前の朝顔が凋れてゐたので、手を洗つた殘り水を手杓の尖て掛けてやつた。手拭掛には毒々しく大い蚊が止まつてゐた。和歌子は手をふくのが薄氣味惡かつた。

それから久しぶりて書齋を音づれてみた。彼は獨りぼつちて洋書を讀んでゐたが、和歌子の姿を見掛けると、驚いた目を見張つて、

「おや、もう起きたのてすか。別に何んともありませんか。輕はずみをすると往けませんよ。」

と笑つてゐた。

「もう大丈夫よ。朝湯へ這入つて髮を洗つたのてすよ。もう何んともありませんわ。」

と言ひながら和歌子は袂から小さい半巾を取りだして濡れ髮の雫を拭いた。それから長椅子に腰をおろした。四日前の晩、口惜紛ぎれにした仕業が胸に浮んだ。彼がお通夜に往くと言つて出かけた後て、何氣なしに平生着を疊むと、袂から手紙が出てゝきた。封筒は松田さんの手つきてあつたが、中は媚めかしい女文字て嫌曳の知らせてあつた。

彼女は何れほど口惜しかつたらう。嫉ましかつたらう。直ぐさま書齋へ驅けつけて、書棚から洋書を放りだした。厚い洋書を引裂いたり筆立を散かしてしまつた。それから机の抽斗や戶棚の中を搜したが、他の手紙も女の寫眞も見つからなかつた。ほつと胸を撫ぜ下ろして部屋の中を見廻はすと机に置いたモリエールの胸像が笑つてゐた。彼女は其の胸像を手にして力一杯に叩きつけたがブロンズは割れなかつた。今朝も其の胸像は書棚の上て相變らず皮肉な顏をしてゐた。彼女は嫌やな心持がした。さういふ事

を思ひだすと、悔恨の苦味が唇に湧いてきた。

やがて二人は樂しげに話してゐた。やつぱり戀人同士の差し向ひて、あれほど喧嘩したとは思はれなかつた。ふと言葉の無い沈默が續いた。

「このリボンは似合つたでせう……」

と和歌子は髪の裾から、わざ〳〵リボンを取つてみせたが、男は振り向きもしなかつた。彼の瞳は和歌子の裾に注がれてゐた。

「さうです。隨分、派手ですね。」

と彼は氣の無い返事をしながら、瞳をそらした。それが本當に物足りなかつた。

彼の手足には爪痕が殘つてゐた。腕には引掻いた痕や、蚯蚓腫れがまだ痛さうてあつた。和歌子は、其れを見ると手荒い仕業が思ひ出されて、物指て男の脊中を打つたことが、心を責めてきた。

「ほんとに堪忍して下さいな。いくら口惜し紛ぎれだと言つても手を引掻いたり、物指て脊中を打つたりして濟みませんね。燒餅の燒き過ぎだと思つて堪忍して下さいな。」

「なあに皆んな僕が惡かつたのです。僕の方から勘辨して下さいと言ひたい位ですよ。」

と彼は、さも後悔したらしく言つたが、

「やあ、松田がきた……」

と口走つた。

ほんとに松田さんがやつてきた。垣根越しに妙な姿が透いて見えた。天鵞絨の服をつけ、長い髮を帽

子の縁から垂らして、さも後期印象派の畫家らしい足取りて歩いてきた。

「お德は髮結さんの處へ往きましたよ。」

「それぢや迎ひに出よう……」

と彼は椅子を離れた。格子が、がらりと開いて靴音が近いた。

和歌子は松田さんに逢ひたくはなかつた。長椅子から立ち上つた途端に、裕衣の裾が日向に飜へつた。褄先きが赤く汚がれてゐた。

それは恥しい女の醜相てあつた。

彼女は、はつと思つた。もう取りつく島がなかつた。悲しみは心を締めつけてきた。

和歌子は涙ぐんてしまつた。

（完）　（七月十八日）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區尾張町	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
京都市七條停車場前	三共社

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號（本年度に限り三倍）春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十册（本年度十六册）分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金參圓七拾五錢（本年度は金四圓）外國は金五圓貳拾五錢（本年度は金五圓六十錢）拂込まるべし

送金注意

一 誌代郵稅は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし

一 郵便爲替にて御送金の場合は本鄉西片町十番地中央公論社と指定し拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取の虞なし

一 振替貯金口座は東京三十四番なり

一 郵券代用必ず一割增の事

一 集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委託料及送達料共）

一 受領證請求は必ず返信料を要す

大正三年七月廿九日印刷納本
大正三年八月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話(長)下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す